

ハドラー子育て日記
コーセルテル編

ウジヨー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宿敵元勇者アバンの元での料理修業を卒業した かつての魔王ハドラー。

さらなるレベルアップのために踏み込んだ地は かつて世界を続べた竜の都コーセルテル。

己の使命のため まだ見ぬ竜の子のため 宿敵を超えるため

そして何よりかつて味わった己の無力さが許せぬため 新たな苦闘の日々に身を投じる・・・

この作品は以前投稿した 「ハドラー子育て日記」の続編です。

ディアさん作「魔軍司令親衛隊隊長の恋愛！」と黒太陽さん作「東方大魔王伝」との

コラが要素を含みます。

目次

新天地 対するはコーセルテルの竜術士

マシエル家の台所 1

おやすみの一時 15

マシエル家の修業風景 洗濯も戦場だ

20

武術訓練!?! 前編 31

武術訓練!?! 中編 36

武術訓練!?! 後編 41

ハドラーの……??の巻 パート1

46

ハドラーの……??の巻 パート2

50

ハドラーの……??の巻 パート3

57

ハドラーの……??の巻 パート4

62

ハドラーの……??の巻 パート5

67

ハドラーの……??の巻 パート6 エプロ

ンをつけた『竜』!の巻 75

ハドラーの……??の巻 パート7

81

ハドラーの……??の巻 パート8

85

木竜家のお茶会	93	地竜家の昼食会	前編	189
光竜家のお茶会	101	地竜家の昼食会	後編	198
地獄の狭間からの誕生	110	炎の中から		208
魔性の片鱗	121	新たな挑戦		215
補佐竜のはじまり	125	火竜家への出稽古	前編	221
風竜家勢ぞろい		火竜家への出稽古	後編	230
マシエルの兄妹たち	135	水竜家のお茶会	前編	239
ハドラー	144	水竜家のお茶会	後編	244
暗竜家のお茶会	151	補佐竜の正装		253
暗竜家のお茶会	157	ハドラーが生んだもの		261
竜の夢	165	ジゼル的目標		269
必要は成長の教師	172	ハドラーの特訓の巻		275
ジゼルお休み中・・・	182	ちよつと不思議な書庫		281

358	戦いの歴史 チームワークの勝利	352	伝えるのは父の魂!!の巻	293
	いっぱいの水	343	父となった日	300
	希望への前進!!?の巻	335	まよいみち ジゼルとびこむ みずのお	308
	元魔王のよろこび	328	と	317
	太陽と王 後編	323	ぬのいちまいで すぐにわすれる	
	太陽と王 前編			

468	ハドラーの・・・??の巻	450	それぞれの太陽	368
	地竜家のターン	439	自慢の・・・	374
	父と娘の戦い??の巻	427	ぬくもり	378
	夢物語	422	お茶会にむけて	388
	幼竜のお茶会のその後	414	幼竜のお茶会	402
	賢者への道	410	兵どもが夢の跡	410

(中)

く 目指すところ	目指す未来	477
く ある日の夏模様		487
そだてるもの		501
めぐる名前		509
く カータと絵本日記		520
く お手紙でつながるもの		531
竜とともに生きること		541
地竜術士の憂鬱		555
竜の都と竜王竜術士①		568

新天地 対するはコーセルテルの竜術士

ハドラー子育て日記 コーセルテル編

旅の扉をくぐりたどりついた地 その名は「コーセルテル」

オレがこの地に着いたとき出迎えた者たちから まず「竜術士」と「竜」について説明を受けた。

竜術士とは子竜を預かり 竜の力を引き出す術を使うことで力の扱いを学ばせるといふもので

竜の中では最高の英才教育であり 主な仕事は弱く未熟な子竜の保護者であることから

「子守り術士」とも呼ばれる

なるほどオレが聖母竜から受け継いだ使命に似ている 竜の神が修業の地として勧めるわけだ。

竜には火・水・地・風・木・光・暗の7種が存在し

その属性ごとに担当する竜術士が一人ずつと竜術士によつてはその見習い7種7竜を預かる竜術士がいる

この地にいるのは基本的に子竜であり 一人前の成竜はそれぞれの属性ごとの里にいる。

・・・・といったことを竜術士の一人が語った

オレが知る竜・ドラゴンとは印象がずいぶん違うな

そしてどうやらオレのことは竜の神からある程度説明があつたようで いくつかの条件を呑めば

ここで竜術士のもと 子守りの修業ができるということだつた。

その条件は・・・

・ ・ ・ コーセルテルのことを口外しない

・ ・ ・ 竜や竜術士をコーセルテルから外に出さない

・ ・ ・ コーセルテルの住人に危害を加えない

・ ・ ・ 他者をコーセルテルに連れてこない

等々といったものだつた。

それについてはオレに異存はなく・・・

「わかつた それら条件全て呑もう よろしく頼む

オレの名はハドラー 好きに呼んでくれ 何か聞きたいことはあるか？」

「ええと、ボクは風竜術士のミリユウ。ハドラーさん、その格好はどうしたんですか

？」

こやつはオレをみてからずっと笑ってた眼鏡の男か　なかなか強い魔法力を持つて
いるな

この中でもかなり高い方だ

しかしオレの格好だと・・・　今のオレの装備は

Eピンクのエプロン

Eさんかくきん

「そういえば調理の片付けの直後だったからそのままだったか

後で洗濯をしなければならんな　とりあえず次の調理ではさつき受け取った黒いエ

プロンを使うか」

とりあえず三角巾をはずしエプロンを脱いだ　布の服の姿となったところで声をか

けた

「調理服姿で失礼した　どうした　まだ何かおかしいか？」

「俺は木竜術士のカディオだ　失礼を承知で聞きたいのだが　あんたは魔族？それとも

竜族？

精霊のようにも感じるのが・・・　差し支えなければいいのだが」

ほう　こやつもなかなかの魔法力を感じる

「そうか三角巾をとったからこのとがった耳も見えたのか　それにオレの魔法力の質も感じ取ったようだ」

「おそらく術者としてもかなりの使い手だろう」

「オレは生まれは魔族だ　年齢は360ぐらいか　わけあって何度か体を失ってな」

「今はかつての体だったものの一部と人間の作ったアイテムの破片を聖母竜の力でつなぎあわせている」

「ああそれで　同化術のような感じを受けるんですね」

「ボクは竜術士のマシエルといいます」

「ほう、線は細く若いがいいつも強い魔法力だな」

「竜の属性を言わなかったが　こいつが7種7竜を預かる竜術士か？」

「その同化術がどういったものかは知らんが　聖母竜は融合という形で今はオレの中にいる」

「あ、あたし火竜術士のアグリナ　ねえねえハドラーさん　本当に竜術士になりてきたんじゃないの？」

「すごい強い火の術資質を感じるんだけど」

「おそらく一番若いだろう娘だ　なるほどこの中でも一際熱さを感じさせる」

「そうね水の術資質も感じるわ　それに腕も立つようだし」

あ、失礼 私は水竜術士のエレというわ よろしくおねがいますね」

この術士は物腰が戦士の訓練を受けたものだな レベルもそこそのものだろう
〔はじめまして 私は先代暗竜術士のメリア 当代の暗竜術士は幼竜の手が離せないの
で

後で紹介いたします それはさておき、

あなたからは暗竜の術資質も感じます これは大変珍しいことなのです〕

ふむ 外見からみても 発言の影響力からみても竜術士の中でも一番の古株だろう。

どうでもいいが竜術士の着る服の色が属性のイメージそのままだな

流石にマシエルの服は七色ではないが

〔私は光竜術士のモーリンともうします あなたからは光の術資質も感じます。

あなたの修業を心より歓迎いたします。

何かご相談があればいつでもくださいね 私は手芸が趣味ですからお裁縫などでお力
になれます〕

・・・会ったことはないが ダイの母親はおそらくこういう人物だったのだろう
と思わせるような術士だな

〔だが月や木の術資質は感じない おそらく彼の複雑な状態によるものだろう〕

〔カディオ 地の資質も感じないぞ それに竜の神さまのお使いなんだ

俺達の常識がそのまま当てはまらなくても不思議じゃないさ。

おおっと 自己紹介が遅くなって悪かった

俺は地竜術士のランバルス これからよろしく

コーセルテルに住む竜術士が全員揃うのは寄り合いぐらいだが

家どうしの付き合いは結構あるんだ そんなときは俺の自慢の子竜たちを紹介するぞ」

言動は親しげで飄々としているが オレを一番注視しているな

術士というより冒険者や盗賊のような注意力だ

それにおそらくこの竜術士の中で一番のつわものだろう 長身で体格もある上にか

なりの実戦経験者だな

それに知性も感じる オレの知る人間では外見以外は アバンに近いだろうな

「竜の神がオレをどう紹介したのかは知らんが オレはここに子守りの修業にきたつもりだ

オレと融合した聖母竜の使命『竜の騎士の保護者』として子供の世話ができないのは致命的なのでな

少し子育ての経験があるが己のレベル不足を実感したのだ このとおり料理の修業はやったのだが

それだけではどうにもならないのは 貴様らの方がわかっているはずだろう」

「それは本当によくわかります。

ハドラーさん あらかじめ相談していたのですが まずは僕の家で色々手伝ってもらえませんか？

その中でいっしょに勉強していきましよう

僕の子竜たちは7人もいて みんなとっても可愛いんですが色々大変なこともあります

お手伝いしてもらおうと とっても助かりますし・・・いかがですか？」

やはりこのマシエルが7種7竜を預かる竜術士か

見た目はこの中でもかなり若い方だろうが只者ではないのだろう

「いいだろう 今のオレは力仕事と料理しかできん未熟者だ

実力者に従うのは当然のことだ 宜しく頼む」

「ええと よろしくおねがいます」

そしてオレのコーセルテルでの子守り修業がはじまった。

マシエル家の台所

オレはマシエルの家で住み込み修業をすることになった

そして今オレは 家で料理を手伝っている

折角の機会なのでオレの力を見せてやろうと思ったが今回はオレの歓迎会と
ことで手伝い程度となった

まあいい この家での台所の勝手を知りマシエルの技術を盗むとしよう

しかし7種7竜の人の姿をした子竜を世話していると聞いていたが・・・

【・・・】

無言でマシエルの手伝いをしている暗竜・ナータ 黒い服に黒い羽根、竜というよりどこか魔族に似ている

台所のどこに何があるのかを完全に把握しマシエルの行動の先をよんで動く気のまま
わるやつだが・・・

何よりオレへの警戒を隠そうともしない しかもマシエルのもとにいる7竜の中
でも随一ともいえる力を感じる。

マシエルともっとも付き合いが長い一番竜と聞いている 子竜の中でも年長であり

これは当然といえる

「マシエル このお鍋を弱火であたためるの？」

「そうだよ 沸騰させた後は弱めでじっくりとね 疲れたらすぐに言うんだよ」

汁物が入った鍋の側面を支えるように持つ火竜・ハータ 赤い服を着て火の力を扱うのが得意ときく

どうやらマシエルではなく自分の火竜術のみで鍋をあたためるつもりのようなだ
なかなか手慣れているようだ

鍋の煮込み具合から見るに最適な温度の維持にムラが小さい
火や熱の力はただ強くするよりもコントロールをする方が難しい

どうやら竜術士のもとでの修業が最高の英才教育というのは伊達ではないようだ
《ハドラーさん お水はこれを使ってね 水竜術でちよつとおいしくなってるから

》

ポットいっぱいに入った水を持ってきた水竜・マータ 青い服に青い髪とやはり水
イメージさせるものだ

オレのエプロンに一番反応していたが こいつが着ているエプロンも手縫いのいい
仕事のものだ

水仕事を中心に台所でよく働いていたようだがいつの間ポットの水まで用意して

いたのか

「・・・ほう　いうだけはあるな」

味見をしてみたが水竜術とはなかなかのものだな

オレの知る呪文には水に関するものはあまり多くない上　これは例がない

この術はオレも学びたいぐらいだ

「こらサーター！　つまみぐいはダメでしょー」

笑いながら叱られている風竜・サーター　あの調子では叱られ慣れている上反省もしてないだろう

子竜とはいえなかなかのスピードだったな、しかしおそらく台所の状況をろくにたしかめずに

テーブルの上に手をのばしていた　そこを止められて結局つまみぐいは成功していない

まあ　あれではすぐにバレるだろう　だが・・・

「サーターが叱られているうちなら　成功すると思っただか　ターター？」

オレがマシエルに聞こえない程度声をだすとテーブルの死角でビクツとした気配がした

そして顔をだした木竜・ターター　すでにその手にはさきほどオレがつくったばかりの

団子がある

「マシエルの意識は完全にサータに向いている上にその気配の消しかたならまず気付かれんだろう

そして数が十分にあるその団子ならひとつ減ったところで多分わからんだろうな」

タータは頭が回るようだな 気配を消したのは童術かもしれないがこの知恵は経験によるところだろう

「その団子はくれてやる 味の感想を言ってみろ」

オレが促すとタータは素直に団子を食べて言った

へあ、ちゃんとおいしい これならみんなよろこぶよ」

笑顔で答えるタータの言葉に正直安堵した

アバンの元で使っていた材料とは微妙に違う気がしていたが 調理の微調整はうまくいったようだな

へそうだ このお茶 木竜家からもらったの 変わった味がするから面白いよ

あと一人分しかないから ハドラーさんにあげるね じゃあ戻るね」

ほう 茶葉か この地で特別製のものに早くもめぐりあうとはな

アバンのやつも茶については色々とこだわっていた

正直オレにはあまり興味がなかったがやつも知らない茶葉ともなればその味が気に

なるところだ

茶葉を渡すときのあの含みのある笑顔　かつてよく見たものに似て気になるが邪悪さはない

それも含め　飲むのが楽しみだ

タータが出て行ったのと入れ違いに入ってきたのが

《もう　向こうは片付いたから料理持つてくよ》

地竜・アータと

（わあ　おいしそう　こっちはぼくが運ぶよ）

光竜・カータだった

アータはさっきタータが出て行ったほうを見て苦笑している　おそらくつまみぐいに気付いているのだろう

カータは料理の乗った大皿をゆつくりと　アータは複数の皿が乗った大き目の盆を苦もなく運んでいた

「ほう　アータよ　その盆はオレが運ぶつもりだったが　問題なさそうだな」

《地竜は重さを感じないからこのくらいはもてるんです》

竜の特性ということか　そういえば火竜ハータも熱いはずの鍋などを問題なく触れていた

この家の照明にはカータの竜術を使っていたようだったしその笑顔には自然と『光』を発していた

おそらく属性ごとにこういったものが色々あるのだろう

オレの知る魔物などにもそういったものが多くあった 勿論オレ自身にも・・・
どうやら退屈しない修業になりそうだ

「まずは マシエルの料理の味を見るところしよう」

マシエルのあの動き かなりの量を素早くつくりながらも油断のない仕事だった
それでいて子竜ごとの好みに合わせそれぞれ工夫もしているというではないか
盗める技術はやはり多そうだ

／＼／＼いただきます／＼

食卓に響く声に混ざりながらそんなことを考えていた・・・

・・・肝心のマシエルの料理の味は大したものだった 食卓で子竜たちの笑顔が絶えることは無いほどに

・・・もつともオレの料理も捨てたものではないようだったかな

ハドラーはレベルがあがった

ちからが2あがった

すばやさが3あがった
たいりよくが1あがった
かしこさが3あがった
うんのよさが3あがった
さいだいHPが2あがった
さいだいMPが3あがった

おやすみの一時

／おやすみなさーいっ／

「おやすみ みんな」

「ああ、おやすみ」

子竜たちが寝る時間になり各々部屋に戻っていく

「ハドラーさんも お疲れ様でした 部屋を用意しますので朝までゆっくり休んでください」

「オレは人間ほど睡眠を必要とせん 休息も必要ないが そうだな時間があるなら

食事のときに話題となった 竜王竜術士とやらに会ってみるか 地下にいるのだから

う 会えるか？」

「ああ 地下の竜王竜術士の幽霊さんですね 地下の術部屋に住んでますから声をかければ会えますけれど

あの、ご案内しましょうか？」

「そうだな 変なところに入り込んでも面倒になるだろう 頼むでしょう」

『どんな人物でしょうね』

さて 幽霊というからには既に死んだ身 元人間で会話が成り立つようなら かなりの人物だろう

怪物化せずにそれができるのは人間ではかなり稀な例だがオレも聞いたことがある つまらぬ相手なら挨拶だけして この家の書物でも読み漁ればいい

『そうですね ここでの目的である子守り修業には実戦だけでなく知識も必要ですか
ら』

マシエルの案内で地下を下りると妙な気配のする部屋に入った

そこは地下でありながら花に満ち溢れ中心には大きく丸い寢床のようなものがある
これが術部屋か、たしかに呪文の契約や訓練を行う部屋のような雰囲気を感じる

〔………ここです 元は墓所なんですけどね 今呼んできます〕

「はい こんばんはマシエルちゃん

そして はじめまして 私は竜王の竜術士フェルリと申します 元……ですけどね、
「挨拶が遅れたな オレの名は魔王ハドラー 元……だがな 今は竜の保護者見習いと
いったところか」

名乗ったフェルリに合わせオレもかつての素性を明かした 別に隠してはおらんし
な

「いっしょにいる 竜さんのお名前も聞かせていただけるとかしたら、」

「ほう わかるか オレに融合しているこいつは・・・」

『私は聖母竜マザードラゴン 竜の騎士の生と死を司る神の使い 元・・・ですが』

今はこのハドラーとともに竜の騎士を見守っています』

「ご丁寧ありがとうございます 同化術かしら？ 常にいっしょなのは珍しいですね、」

オレが通訳をする前に返事があつた どうやら聖母竜と直接会話ができるようだな

「それでは フェルリさん僕は部屋に戻りますね おやすみなさい みなさん」

「ああ 案内 礼を言おう」

『ありがとうございます おやすみなさい』

「おやすみなさい マシエルちゃん、」

マシエルを見送ったあとオレ達はこのコーセルテルについて色々話を聞いた

コーセルテルというのはその地に眠る月の精霊（コーセルテル）からついた名前らしい。

長い歴史がある竜の都のある国と聞いていたがその規模は思ったよりもはるかに小さく

大樹海と山と谷により外界から遮断された土地の中に少数の竜と獣人と人間が住ん

でいる。

現在オレが世話になっているマシエルはコーセルテル一番の竜術士（本人は否定しているが）とよばれ

かつての竜都でも7種7竜を預かる竜術士はいなかったようだ

この土地では竜術士とその見習い以外の人間は住めず

現在魔族は住んでいないらしい。（過去魔族の幽霊やハーフはいたらしい）

と、ここまではオレにとっても有益な話だったわけだが・・・

‘心残りはなくなっただけど楽しみができちゃったの　マシエルちゃんの子竜ちゃんたちがかかわいすぎて、’

『わかります！　私も手元で成長するダイを見ていたら　遠くから見守って

生と死だけに関わるなんてできなくなってしまうました』

すっかり聖母竜とフェルリが意気投合してしまいオレは会話に参加しなくなっただ

これはこのまま夜を明かしそうだな・・・

まあ聖母竜がこの地でオレ以外と直接会話できる相手がいるのは貴重かもしれないし

こやつは3000年前の竜都の時代の竜術士とのこと　おそらく竜の神に導かれた

この地は

オレの知る『地上』とは 別の『地上』のようだ 得られる知識は貴重そのものだろう。

・・・この会話にはつきあいきれんが ・・・まあよいか。

マシエル家の修業風景 洗濯も戦場だ

モオ〜

早朝 マシエルと朝食の準備をしていたところ 外から牛の鳴き声らしきものが聞
こえ、

「おはようございます いつも早いですね」
マシエルがなべのようなものと ミルク缶を持ち外に出て何者かと会話をはじめた

「おはようございます マシエルさん ほいつ 今日の新鮮なミルク
へはおお おはようございます 頼みたいんだよお これ もうぬるくなりだしたんでのお」

「はい ちょうど用意しますよ はいどうぞ
いつもおいしいミルクをとどけてもらってありがとうございます」

「最近では保冷石の持ちも長くなってきたよお あの子竜ちゃんも腕をあげたんだねえ
そいじゃ また3日したら来るでなあ〜」

「気をつけて〜」
「どうやら物々交換でミルクを得たようだな」

「いつもあんな感じで食料を得ているのか？」

「そうですねよ 僕たち竜術士はそれぞれの家の得意分野で作ったもので

コーセルテルに貢献するのが仕事なんです

そしてそれが子竜たちの勉強になるんですよ」

なるほど理想的な環境だな おそらく自然にできたものではなくそうなるように作られたのだろう

まあそれはさておき朝食の支度をつづけるか・・・

「たしか、アータが生野菜、マータはトマト、タータが目玉焼き、カータがミルクが嫌いだったか？」

『カータがきらいなのは「ぬるい」ミルクでしょう』

「カータはぬるめだと嫌がるだけですから ちよつとだけ手を加えますよ」

ほう やるな聖母竜 よく憶えていたな

『フェルリとのおはなしにありましたから』

そうだったか あのおしやべりも役にたっていたのか 馬鹿にできんな

「では オレは野菜に手を加えておくか・・・」

・・・朝食も終わり それぞれのベッドの枕とシーツ、服を洗濯するのだが・・・

「ハドラーさん 洗濯の経験は？」

「そういえば調理用のエプロンぐらいだな」

洗濯を自分でやるなど かつてのオレなら正直考えたこともなかったからな 部下に任せるものだった

『アバンの元で修業していたときも人任せでしたからね』

「だがこれからは 学ぶ必要があるだろう」

そもそもその為にこのコーセルテルにきたのだ

「では いっしょにやりながら覚えましょう 大丈夫です すぐに慣れますよ

それに最初にお願ひするのは 僕の服とかですから少しぐらい失敗しても気にしないでいいですし」

《ハドラーさん 私達も手伝うよ》

「マータ 最初は竜術を使わないでやってもらおうだよ ハドラーさん洗濯ははじめてみたいだし」

水がはいったタライに 預かった布の服をいれ マシエルの指示を受けながら洗濯を開始した

水や力加減を変え洗っていくことで服の汚れが落ちていくのは意外と面白いが

『なかなかとれない汚れもありますね』

「これは調理中の汚れか たしかにこれは厄介だな

ぬうううっ」

つい力はいってしまいそうになったところで

「ハドラーさん すこし待ってください マータ今度は力を貸してね」
《はい》

ポウ パワアアア

タライの水に水竜・マータと手をつないだマシエルが何やら魔法を使っているようだが……

「ふう、ハドラーさん もう一度洗ってみてください 力はいれずに揉むような感じでお願ひします」

タライの水に魔法がかけられたのはわかるが さてどうなるか……

服の汚れをとるべく揉んでみると 明らかに汚れが水にとけこんでいく。

「ほう、これは大したものだ」

『便利ですネ 見たところマータは消耗していないようですし』

マータが誇らしげな顔をしている どうやらただ力を貸しているだけではないようだな

「汚れによつては 水温を上げるだけでも ずいぶん違うんですよ そのときはハー

タの力を貸してね」

「うん まかせて」

火竜・ハータも 返事に自信を感じる。

なるほどこういったことがそれぞれの修業になるなら上達が早いわけだ

「水温を上げるだけなら 今のオレにもすぐできるぞ」

水に手をいれ 呪文を唱える 制御が難しいが・・・

「ギラ」

ジュワツ

／／おー／／

子竜達の歓声があがる

『ちよつといい気分ですな』

勝手にオレの感情をよまんでいい

「すごいですねハドラーさん 一瞬で熱湯に。でもこれって熱すぎませんか？」

マシエルが心配そうな声を出す

「オレはこの程度ならどうということはない」

気にせず 洗濯を再開する、たしかに熱湯だと汚れのおちかたが違う これは使える

な

「ハータ以外は火傷しちゃうから 気をつけてね」

『子竜の心配が先のようにですね、まあ当然でしょうが』

たしかに少々熱すぎたか オレは平気だが子竜にとつては危ないのかもしれない
使いだころに気をつけねばならんか

「では ハドラーさん 洗うのはそれで十分なので それをギュツと絞って
干したら終わりです。」

今度は力をいれて水分をしっかり出してくださいね」

「そうか」

ギュウツ!!! ブチチツツ!!!!

「しまった!?!」

力をいれすぎたか 明らかに布がちぎれる音がした

ギツ!! じりっ・・・

暗竜・ナータがオレに にらみをきかせ にじり寄ってくる

まあ今回は明らかにオレに非があるが・・・

「すまん どうも力をいれすぎた 破れてしまったか」

所詮は布の服の防御力 オレとしたことが加減を誤った

「いえ 今のは僕の言い方が悪いですから。」

そうですね ハドラーさん僕なんかよりずっと体も大きくてたくましいから力も強いですよね」

「どうやら氣を使わせてしまったようだな

「すまん だがこれはどうしたものか・・・」

「しぼった服を広げてみたが まつぶたつになるように引き裂いていた、分離まではしていないが・・・」

「大丈夫ですよ これぐらいなら洗濯の後でつくろいますから」

「つくろい？」

『直せるんでしょうか？』

「ええ ハドラーさん つくろいものも練習しますか？」

「僕も以前は苦手でしたが やっているうちにできるようになりますよ」

「そうだな 経験値が稼げることなら何でもやるぞ」

「ナータのにらみが敵意しか感じなかったものから あきらめたようなものに変わった

「ハドラーさん この調子でこのシートもお願いしていいですか

「僕達はもうひとつのタライで他の服と枕の洗濯をしますから」

「わかった 今度は氣をつけよう」

同じミスはおかさん シーツは先の布の服より柔らかく大きいが目立つ汚れはない
ここは慎重さで・・・

そしてオレが洗濯をしている間に マシエルと子竜達はカラのタライを囲み・・・
〔じゃあ 今回はみんな水竜術をやってみるよ〕

／＼／＼／＼

ほうマータ以外も水竜術が使えるのか

〔マータ みんなに水竜の力 貸してあげてね〕

《うん》

〔みんながいつも使う自分の竜術と同じ感覚で このタライを水でいっぱいにするんだ
よ。〕

マータはみんなに力を貸すことに集中してね〕

《うん》

力のもとにはマータが担当し それをほかの子竜が行使するということが
マシエルが術を使うのと同様だな

・・・子竜達の術はあまり順調にいつていないようだが オレも洗濯の手をとめては
いない

一枚目が終わったところでもまだタライに水が溜まっていないために手が空いていた

マシエルがやってきた

「どうですかハドラーさん」

「これでどうだ」

今度は力加減に気をつけ シーツをしぼりマシエルに手渡した

「これは ハータのですね」

どれも同じシーツに見えるが誰のものかわかるのか!?

そしてシーツを見るマシエルの目が、変わった あれは先ほどの 布の服を見る目とは明らかに違う……

「ハドラーさん 少し言いにくいんですが 汗染みがまだ残っています

少しこの水に手を加えますから ちょっととシーツを水に漬けて時間をおいてからもう一度もみ洗いしてもらえますか」

「わかった」

『やはり子竜のものだと仕事への真剣さ こだわりが違いますね

子竜のこととなると意外と過激なことまでやるとフェルリから聞いています』

そうだったのか まあこれくらい厳しい目があった方が修業になるから好都合だが
へやった ちょっとでできた!」

「ほくも!」

木竜・タータと火竜・ハータの歓声があがる

どうやら結果が出ているらしい

〔すごいよ タータ！ ハータ!!〕

ああ、サータ焦っちゃ だめだよ

そうだ 今度は同調術の要領でみんなで一度にやってみようか

マシエルが喜びながら子竜たちのところへとんでいった

子竜達はお互いに刺激しあい 時に協力し その成果がすぐにわかる

なるほど英才教育になるわけだ 成長が速くもなるだろう

子竜たちを見ていると あのアバンの使徒どもを思い出した

あやつらの驚異的な成長の速さに屈し 地を舐めたあの頃も・・・な

『ハドラー・・・』

「フフ・・・ そう思うとオレにも張り合いがでる

あやつらに負けておれんからな」

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

今日一番の歓声をあげる子竜たちを見てつぶやいたオレの口がニヤつくのがわかる・・・

ハドラーはレベルがあがった
ちからが1あがった
すばやさが2あがった
たいりよくが1あがった
かしこさが2あがった
うんのよさが1あがった
さいだいHPが3あがった
さいだいMPが1あがった

武術訓練!? ～前編～

「なかなかいい岩だな これなら大ききもちょうどよい」

子竜たちが寝静まった闇の時間

オレは世が世ならりっぱな『うごくせきぞう』にしてやるほどの良質の岩をマシエル家の

近くで見つけ出した

ジャキツ! ズバツ!!!

地獄の爪で目当ての岩をまっふたつにした

「・・・オレの地獄の爪（ヘルズクロー）は今宵も冴えておる」

ゴリッ ゴリ・・・

そして二つになった岩を地獄の爪で思い通りに加工していく
かつて戦ったヒュンケルの鎧に比べれば岩など豆腐と大差ない 大した時間もか
らず目当てのものができた

爆弾岩を一回り小さくした程度の大ききになったものが2つ

『これで完成ですか ハドラー?』

「二つとも試しに使ってみる。それで成果があれば完成だ」

結果がでなければ意味がない

『私には、よくわからないのですが・・・』

「アータならともかく、ナータやサータの「弁当箱」にはいささか重過ぎるのでは?」
たしかに今宵の外出は、夕食どきに頼まれた明日の剣術修業用の弁当を用意するた
めと言ったが・・・

「心配するな、これはオレが直接運ぶ」

それにアバンがつくっていたようなものをそのまま再現するわけではない」

たしかに、アバンが用意していたような体力回復効果もあり満腹感も満たせるあの
「おべんとう」が

つくればベストだが今のマシエル家には材料が揃っておらん
間に合わせの材料でつくって昼までにもたなければ意味がない
そこでこれを作ったわけだが、さて、やるか・・・

「では、ハドラーさん、ナータとサータをどうかよろしくお願いします

二人ともちゃんとエレさん達の言う事聞くんだよ

くれぐれも危ないことしちやダメだよ」

「おいおい武術訓練にならんぞ それにオレは簡単な回復魔法なら使える 心配無用だ」

「ええ!? それってかえって心配なんですけど!」

【マシエル・・・ できるだけ気をつけるが・・・】

ため息まじりのナータ

〈前もあつたよね こんなやりとり〉

どうやらいつもこんな調子のようにだ 見送る子竜たちも苦笑している

「がんばるんだよー」

＼いってらっしやーいっ／

(いってきまーす)

見送りの者たちの声を背に受け手を振り応える風竜・サータと

寡黙だが意外にもやる気を感じる暗竜・ナータとともに

オレは例の弁当を小脇に抱え武術訓練に向かった

この平和なコーセルテルだが武術訓練というものがあるとは興味深い

それが戦を想定したものか自己の心身の鍛錬の為のものかは知らんが 一見の価値はあるだろう

『ホイミが必要ないといいですが』

おまえも過保護だな　・・・まあオレは回復呪文はあまり得意ではないがな

そんなことを考えながらも森を歩いていると　すこし拓けたようなところに見慣れぬ子竜たちと竜術士・エレ　そして・・・

「俺は万年雪の精霊カシ　あんたがあの子守り竜術士のところにいる見習いだな」

「いかにもそうだが」

雪の精霊と名乗ったな　なかなか強い力を持っているようだな

オレの知る精霊は力よりも特殊な能力に特化したものが多いイメージだったがこやつは違うようだな

「あの子守り術士の見習いになるようなやつだから一見弱そうなやつかと思つていたが

あんたいかにも強そうじゃないか」

カシの目に好戦的な光が宿る　かつては見慣れていた戦士の目だ

「なあ　こいつらの訓練の前に　俺と手合わせしねえか？」

このオレに訓練用の木剣の柄を向けるカシ　その目の輝きに感化されたのかオレの血が騒ぐ　自然と剣を手に取つた

「こいつら二人とも　なに勝手に　はじめようとしてるの」

・ ・ ・やるのはいいけど私が審判をとめるから ちゃんと従ってよ」

エレがそういういながら オレとカシの間に立つ 子竜たちはやや遠巻きに見ている
まだオレは名乗ってもいないがどうやらこの一戦に興味があるようだ

「オレの名はハドラー ・ ・ ・さてはじめるか」

オレの前で剣を構えるカシ どうやらオレはつくづく剣と縁があるようだな
かつてオレを熱くさせた ロカ、ヒュンケル、ダイ、 balan、そしてアバン やつら
から刻まれた剣傷は常にオレを強くさせた

オレがかつて最期に挑んだ闘いに選んだ武器もまた剣だった ・ ・ ・

「いざ 勝負!!」

「はじめっ」パン

ガン!!!

・ ・ ・パシッ!カラン ・ ・ ・

双方の剣が折れたか ならば!!!

「そこまでつつ!!」パン

武術訓練!?! 中編

「そこまでつつ!!」パン

久しぶりに闘気を高めようとしたがそこで審判エレの制止の合図がでる

「はい 双方武器破壊で戦闘不能 引き分け」

「引き分けか まあいいだろう」

「………フウ まあいいか」

剣の形をしているがあくまで訓練用の木製 ひのきの棒程度 あの衝撃なら折れて当然だったな

『ムキになりすぎですよ』

「久しぶりに 上には上がいることを教えてやりたかったのだがな」

「このように力を振るうのは久しぶりだったからな」

「この分野ならオレが遅れをとることもないかと思っていたがやはりこの地は面白い

「ハドラーさん 子竜たちを紹介します まず年長組から はい自己紹介」

《じゃあぼくから ぼくは水竜家の一番竜 エレの補佐竜のリリック よろしくお

願いますハドラーさん》

〈ぼくは木竜家の二番竜 カダイオの補佐竜のロイ はじめましてハドラーさん〉
「ほう さっきの折れた木剣をキヤツチしていたのがリリックで

破片が当たらないようにさりげなく他の子竜たちを誘導していたのがロイだな
流石年長組といったところか」

《えっ! 気付いてたんですか!?!》

〈すぐくかつこよかつたですよ リリックさん!〉

ホウ

〈剣が飛んだりするのはよくありますから 流石にあんな風に折れることまでは予想できなかつたけど〉

もう一人いるおそらくロイと同じくらいの年代だろう木竜の娘が 誇らしげな顔を
している なるほど

【・・・なにを笑っている?】

「気にするなナータ」

「じゃあ次は年少組 ナータとサータ以外は初顔合わせのはずよね?」

〈はじめまして 私っ 光竜術士モーリンの一番竜 補佐竜でマリエルですっ〉

先ほどまで リリックを憧れのまなざしで見ていた 子竜だな

あまりにもまつすぐだったな・・・

《ぼくは地竜家二番竜の ロービィです ランバルス師匠からハドラーさんのことは聞いてました》

お話どうりすごいですね》

ランバルスというとのあの雰囲気がアバンに似た男か やはり力を値踏みされていたか

ナータに似た子竜 おそらく暗竜がロービィにくつつくように寄り添っている

【ロービィ さつきはありがとう やっぱりロービィ・・・かっこいい】

ほう 暗竜も笑うのだな

そういえば オレの木剣が折れたときにロービィが動いていたようだが とつさにかばったのだろう

・・・当たってないだろうが

〈あの二人はいつも熱いなあ〉

〔あの関係はあこがれます〕

ロービィが茹で上がっているが 周りの反応からどうやらいつものことのようにだ

（おれは 風竜家の三番竜グレイス ハドラーさん さつきのすごかったよなー

嵐と台風がぶつかって竜巻がおきたみたいなかんじで

おれにもあんなことができるようになるかなー？）

例えがいかにも風竜だな 強さへの純粹な憧れを向けてくる オレがよく知る目を
している

「あとは見学組もこの際紹介しとく？」

「私は木竜家カディオの一番竜で補佐竜のノイ」

「また『補佐竜』か マシエル家は全員補佐竜だったようだが： 他の家では違うの
か？」

（簡単にいうと 竜術士の手助けをするその家の年長者の竜です

木竜家には私とロイが同時に卵で預けられ私が先に孵ったので 私が一番竜で二人
とも補佐竜なんです）

そういえばマシエルの子竜は皆同じぐらいの年恰好だったな

同時期に一度に預かったということか？

『今度フェルリにくわしいこと聞いてみますよ』

「わたし・・・ 先代暗竜家メリア母さんの二番竜エリーゼ ロービイにおべんとうもつ
てきた・・・」

やはり暗竜か こやつもナータと同じくらしいの力を秘めているのだろうか

アバンやダイで散々思い知らされたが やはり見た目で強さは はかりづらいな

「これで自己紹介も終わりね カシは・・・」

「俺はいい また時間があるときに個人的にじっくり話すさ それより訓練を開始しよう

俺たちのせいで ずいぶん遅れちまったからな」

「そうですね ハドラーさんも稽古つけてくれますか？」

「いや オレのは戦場で磨いた侵略者の武力だ 子竜に伝えるようなものではない」

「・・・わかったわ じゃあ訓練をはじめましょう」

侵略者という言葉に反応したのかエレの声に冷たいものが混じったな 正直なやつだ まあいい

訓練を開始した子竜を見ながら腰を落ち着けた

弁当を手にし ちょうど持て余していた熱を発散させるように呪文を唱えた

「ギラ」

これでよし と

《たのしみですな》

「・・・ムウ 今オレは 聖母竜の言葉で 何を考えたか

『ナータとサータの喜ぶ顔ですか』

「・・・こやつ・・・まさかフェルリやバランにこんなことまで話さんだろうな・・・」

武術訓練!?

〈後編〉

日がちょうど一番高くなったあたりで 訓練に一区切りつけたようだ

「頃合だな」

(ハドラーさん おひるごはんだよー)

サータとナータがやってくるのを確認し 弁当をあけた・・・

(おおー)

サータが声をあげて蒸気の中をのぞきこむ

(これ中身 パンだったの!?)

「・・・この石の玉は 石釜だったのか」

「そうだ これなら焼きたてのパンをそのまま食える まあこれを持ち運べる力と

その場で熱を伝えつつけることができねば意味はないがな」

オレの呪文は標的を攻撃しつつけることが可能だ 火力の調節が一番の難題だった

が

試作のときよりも上出来のようだ

(だったらハータがいれば火竜術でこれ使えるね)

【持ち運ぶのにアータの地竜術も必要だろう・・・】

やるな子竜ども・・・

『将来が楽しみですな』

「それより さあ 食ってみるがいい」

石釜からパンをとりだしナータとサータに渡す

(あちちち!!)

【・・・！！】

どうやら熱すぎたようだ そこまでは気付かなかったな ナータも少々持て余し気味だな

＼いただきまーす／

まもなく子竜たちが食べ始めた

他の子竜たちもそれぞれ食事をしている

リリックとマリエルはおかずを交換しているようだ あれは興味深いな

グレイスも交換しながら 他の弁当を食べてまわっているようだ

ロービィとエリーゼは完全に二人の世界だな・・・ あれはマシエル家にはない世界

だな

(おお おいしい！)

サータが喜びの声をあげ パンをがつついている

ナータも表情がよめないが黙々と食っている・・・好感触か？

『・・・もくもくと もぐもぐ・・・』

.....

(あれ？ ハドラーさんは たべないの)

「・・・あ そういえばオレの分はつくってなかった」

『・・・気付きませんでしたね・・・』

【何やってるんだ・・・】

まあオレは食わなくてもあまり問題はないのだが・・・

「なら オレの食うか オレ精霊だから別に弁当 必要ないって言ってるんだが

いつもばーさんが用意するんだ」

「カシちゃん！フルーおばあさんの真心に失礼よ！

それにこの人さっきのこわい魔族の人よ！ すごい強そうだよ」

「『強そう』じゃなくて『強い』んだよシイ それに俺がいるんだ こわいことなんか

ねえよ」

小さな精霊を肩にのせたカシが やってきた シイというのが肩に乗っている精霊

の名前だろうか

「よいのか？」

「ああ まあそつちのパンと違って よく冷えてるがな 食ってみなよ

ばーさんの飯はその子竜どもに好評だぞ」

別段腹は減っていないが 他人の料理は気になるところだ

それにフルーの名はマシエルの食卓でも話題にあがるほどだ これは食う価値がある！

「食いながらでいいから再戦のことを含めて色々話たいことがあるんだが」

その後・・・ 訓練が再開するまでカシたちを交え色々話をした

「うわーん なにこのパン!？」

「そのパンはタータの薬草がはいっていてな。

栄養は申し分ないが常温以下だとかなりエグイ味になるのだ」

「じゃあわけてもらおうときに 止めてよー」

「止めるヒマがなかったものでな クッククック」

(うわー ハドラーさん 悪い笑顔)

どうせなら 常温以下のパンを食べた反応も見たかったからな

「うわーん カシちゃん やっぱりあの魔族の人怖いよお」

「いちいち泣くなシイ」

あの小さな精霊シイが泣くたびにそのまわりに雪がふっている オレの精霊のイメージはこつちだな

そんな一幕を交えながら昼休みを過ごした

「再戦はヒマさえあればいつでもかかってこい」

と言ったらカシが

「あまりに 話がうまくいきすぎて かえってやる気がそがれたぜ・・・」

と答えたのが印象的だったな

ハドラーの・・・の巻 パート1

今晚の夕飯はこのオレがひとりで行うことになった

『はじめてですね いつもは術の練習も兼ねてマシエルが主導になってやるのに
あなたに全て任せるなんて』

「そのマシエルが補佐竜を全員連れて外出中だからな

竜術士のあつまりらしいが これは好機だ

あのマシエルが子竜が食べる食事をオレに任せただ

このオレの真の実力を見せる時がきたようだな」

『それは楽しみですね できることなら私も一度食べてみたいですが』

材料は揃っている・・・

「パン!!!

食卓の主食!!

子竜たちの術練習のためにかまどを使わずに焼いたもので
子竜ごとにパンの焼き加減に個性がでているのが興味深い
いちばんマシなのが火竜ハータが焼いたものだろう」

「野菜!!」

獣人ニアキス族や木竜術士たちの手によりつくられたものである!!

子竜たちの健康を支える上で欠かせないが調理次第で味が大きく変わるため

子竜の好き嫌いが別れるため注意が必要だ!!」

『アータは生野菜が苦手でしたね』

「卵!!!」

底知れぬパワーを秘める子竜たちにとって貴重なタンパク源である

ニワトリの調子でもよかったのか今日はずいぶんど多い

明日の分もあるとはいえ 使いがいがあな!!」

『デザートもつくりましょう 子竜たちはみんなお菓子が大好きですから』

「ミルク!!!」

飲んでよし 調味料によしと 便利なうえに発酵させれば更に可能性が広がる食材

である

料理に幅をつけるにはこれが使えるのは大きく

その気になれば食卓を純白に染める!!」

『さつきの卵とあわせてプリンがつくれますね』

「菓草!!!」

野菜よりも栄養の補給にむいているが、その分味にクセが強く量が過ぎれば毒にもなる

タータや木竜家の協力で驚くほどに多種多様なものがそろっていて

いかなる人間の王宮の厨房であろうとその多彩さにはたちうちできないだろう」

『あのアバンは特に薬草の扱いがうまかったですね』

・・・フン　こやつめ　オレのプライドをくすぐるのがうまくなったな

「砂糖!!!」

子竜を魅了する甘味のもと　菓子に限らずその用途は多岐にわたるが

摂取が過ぎればまずいのは竜も例外ではない!!」

『マシエルも甘やかし放題というわけではないのですね』

「塩!!!」

植物由来の砂糖はともかく　海から離れたこのコーセルテルでこれほど使えるとは

これも竜術のなせるわざか

生物には欠かせない要素であり　食材の味を引き出す重要なものだ

フフフツ　これらを組み合わせ食卓を彩るとしよう」

『あなたは力押しが好きなのイメージですが　意外とこういうのも楽しそうにやります

ね』

「かつてのオレが魔王や魔軍司令の地位にこだわったのは個性ある軍団を統括し

指揮するのが面白かったのもあったからな

まあアクが強すぎて難儀していたが・・・

味と栄養のバランスをとる連携の妙、料理で味わえるとは考えたこともなかったが
な・・・」

さて・・・はじめるか

見ている！ 我が全霊をあげても・・・

必ずやマシエルの子竜どもを満足させ完食させてやるわ!!

ハドラーの・・・の巻 パート2

夕食の用意がひと段落したがやはり卵がまだかなりあるな

「とりあえず 明日の分は別にとっておくとして・・・」

あの石釜を使って大きな焼きプリンでもこしらえるのも一興か・・・」
『子竜たちも喜びそうですね・・・』

ハドラー 私は少しひっこんでいます 何やら呼ばれるような
引つ張られる力を感じます・・・

私が抜けてはあなたも困るのですから 離さないでくださいよ』
オレにどうしろと・・・ まあいい

卵を割りいれプリン液をつくりはじめ・・・
最後の卵を手にとったところで・・・

ゴゴゴ ドドド!!!

いきなり地震が!?

いかん! 手から卵が落ちる!?

手の中の卵を落としそうになり握る手に力を込めた

だが割っては意味がない 地震が続く中 手の中の卵に全神経を集中した

・・・

揺れがおさまったようだな・・・

掌中の卵は割れることなくしのげたようだ

ほかの料理も無事のように やれやれ・・・

「さて つづけるか」

コンコン

ム、最後の卵を割ろうとテーブルの角に軽くあてたが殻にヒビがはいらない

軽すぎたか・・・

コンコン!

音がでるだけで割れる気配がない

さつきまで割るまいとおもっていた卵が今度は割れないとは妙な感じだ

カンカン!

ぬう 割れんな・・・

この調子ならさつきもそれほど気にしなくても割れなかったのでは？

ガンガン!!

バ バカなつ

こんなニワトリの卵が・・・ これまでの卵は難なく割れたのに
このオレの力を凌ごうというのか・・・!!?

ガンガンガン!!! ピシィ・・・

ヒビがはいったな・・・ テーブルに・・・

アストロン（鋼鉄変化呪文）でも使ってるのかこの卵は!?

・・・どうやらこのオレを本気にさせたようだな

以前オレが作った携帯用石釜に向けて卵を振りかぶったところで・・・

ザワ・・・!?

外からとんでもない魔力を感じた!!

「これは オレ以上 バーン級か!？」

そう遠くないな 少なくともコーセルテル内だろう しかもそれが二つだと!?

もしや聖母竜が警戒し マシエルが子竜たちを全員連れ

竜術士達が集まったのもこれが原因か？

オレが外に出るよりもはやく それは収まり 外を見てもさほど異常は・・・

!!! いや月の輝きが違う!?

二つあった異常な魔力が月で重なり合い 再び別れた・・・ように感じたが

何だったんだ今のは？

様子を見に行こうとしたが マシエル達はその月の方角から帰ってきた
詳しい話が聞ければいいが・・・

・・・・・・

マシエル達の話聞いたところ・・・

あの膨大な魔力はこの地に宿る眠る月の精霊と

その半身旅の月の再会したことによるものだそうだ

「あれほどの魔力を出しながら大した天変地異がなかったのは

お前たちが抑えこんだということか？」

「いえ そんな・・・ それよりハドラーさん

なんで卵を握りしめて 外で待ってたんですか？」

「ああ これは焼きプリンをつくっていたところだな・・・

ああそうだ この卵なんだが異常に硬くてな

コーセルテルにはこんなものを産むニワトリがいるのか？」

「あの ハドラーさん この卵・・・ 竜の卵ですよ!」

／＼ええっ!!／＼

子竜たちからも驚きの声上がる

「ほう 意外だな ここは竜が竜の卵も 食うのか？」

「そんなわけないでしょう!! なんだあの卵の中に!？」

しかもこの小ささは生みたてサイズですよ！」

「そうなのか? 他の卵の中に普通にまぎっていたのだが」

「まさか僕の子竜の卵ちゃん!？」

(あのマシエル・・・)

「ええっ!! サータが生んだ卵ちゃんなの?!」

混乱しすぎだろマシエル、メダパニ(精神混乱呪文)でもかかったのか・・・

そもそもサータは男だろ・・・

それにお前の子竜はどいつもこいつもまだダイよりもちいさい子竜だろうか

たしか生後三年程度ではなかったか

(そうじゃなくて この卵ちゃん ハドラーさんと同じにおいがするよ)

「それはオレが握りしめていたからだろう

あの地震が起きたときからずっと手にしたままだからな」

(でも風竜は一度覚えた風は忘れないよ ハドラーさんと同じ空気だよ)

「なんだと・・・?」

いくらオレでも禁呪法も使わずに命を生み出したりはできんぞ・・・

いや、まて竜・・・の、卵？

おい・・・聖母竜

『・・・ええ 聞こえています・・・』

どうした？ やけに声が小さいようだが

『あの月の精霊に呼ばれた時に一瞬すごい力を得たのですが

引つ張られまいとがんばっている間に逆にものすごく消耗したようです・・・

どうやらそのときに私の力の一部が あなたが割らないように注意して

握りしめていた卵に乗り移ったのではないのでしょうか？

まあ今の私に紋章の力はないですから竜の騎士ではないはずですよ』

「そうか わかった」

「ハドラーさん？」

「どうやら オレに同化している聖母竜が生んだ卵のようだ

どうも もてあますほどの強力な力が急に湧いたせいらしいが

オレの体を通してニワトリの卵に力が入ったのだろう

卵からオレの気配がするのはそのせいだな」

（じゃあハドラーさんがお父さんで その聖母竜さんがお母さんなんだね）

その解釈はあっているのか？

そういえば あの地震が起きた時 持っていた卵が割れないように注意して握り
オレの中で聖母竜がその力を急激に高めていた状態は

かつてオレが禁呪法で核をもとに子をつくっていたのと近いともいえる

「さて まあ飯にするか 料理はできている

だがこの卵はどうするか さつき割ろうとして散々試したが中身があるなら大丈夫
なのか？」

「竜の卵は頑丈ですから この星を貫通して太陽に入っても割れないほどですよ」

「なんだその馬鹿げた強度は・・・ オリハルコン以上じゃないのか？」

『それなら安心ですね』

「そもそもそれを子竜に割れるのか？」

「卵の殻を割るのは親竜か竜術士の助けが必要なんですよ

それと卵を成長させるのは親竜にしかできないことなんです

それから・・・ いえここから先は食事の後にしましょうか

子竜たちがおなかを空かせてますから」

ハドラーの・・・??の巻 パート3

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼

食事も終わり 竜の卵についてマシエルと子竜たちとフェルリも交え地下の術部屋で相談をはじめた

『私もいますよ』

「さて ではこの卵だが・・・」

「この卵ちゃん火竜みたいだね」

火竜のハータが言うのだからそうなのだろうと思ったが

「えっ?! 光の力がちよつとするよ 光竜の卵ちゃんじゃないの?!」

意外にも光竜のカータが異議を唱えた

「ということは 双子か そういえばたまに卵の中にも二つ黄身が入っていることがあるな」

「竜にもごくまれに双子の例もあるそうですが、でも多分違います」

マシエルが卵を手に取り何かを感じとろうしている

「・・・暗の力も僅かに感じる」

卵をのぞきこむ暗竜ナータも感じ取ったようだ

《そんな！星の力と天の力の両方を持つている竜だなんて!?

まさか絶滅したはずの月竜?! ちよつとぼくも卵ちゃん抱かせて!》

ナータの言葉に地竜アータが大きく反応し卵を受け取ったが・・・

《地の力は感じない・・・かな?

それともまだ力が感じ取れないほど小さいのか やつぱり月竜じゃないのかな?》

その後水竜のマータや木竜のタータ 風竜のサータも試しに抱いてみたがわずかに

属性の力は感じ取れたのは結局

風と水、暗 光 そして火の五種類のようだ

う、子竜ちゃんたちでも感じとれないってことはおそらく月竜ということはないでしょう

私も月竜には会ったことないけど 多分火竜の変種じゃないかしら?

生まれてみてからじゃないとはつきりとしたことはいえないけど

ごめんなさいね、

「気にするな それよりこやつをどうするかだが」

オレが卵を手でいじりながら本題に入る

(えっ ハドラーさんが育てるんじゃないの?)

「竜の卵を成長させるのは 生みの親にしかできないことですから

けど そこから先はどうしましょうか？」

「火竜ならアグリナかな」

《複数の属性を持っている竜ならマシエルが育てほうがいいんじゃないの》

【マシエルにはもう子竜を預かるのは無理だ】

〈複数の属性なら木竜術士さんもだよ〉

『私としてはずっと手元で育てたいのですが』

‘ 聖母竜さん・・・ ’

「それは無理だ 最初にコーセルテルに来た時に竜をコーセルテルから出さないと約束した

修行に区切りをつけたらオレはここを出るのだ」

・・・まあ竜の保護者として人手はあったほうがいいが

「ハドラーさん もしあなたたちとその卵ちゃんやんが望むならいつしよに暮らせるようにボクは火竜の里の族長さんにかかけあいますよ」

【マシエル・・・！】

「大丈夫だよナータ 心配いらなから」

「ねえねえ 火竜のことならアグリナにもこのこと知らせようよ」

「そうだねハータ

後で手紙をだしておくよ 最近ヤチを迎えたばかりだから大変だろうけど

ひよつとしたらこの卵ちゃんを預かることもあるかもしれないし」

続きはまた明日 アグリナも交えておこなうとして 夜も更けてきたことから会議を終了した

ちなみに卵が一個たりないまま作った焼きプリンは会議中に子竜たちが食べた

予定より甘みが強く柔らかい仕上がりとなったがかえってそこが好評だった・・・
ぬうう

ハドラーはレベルがあがった

ちからが2あがった

すばやさが2あがった

たいりよくが3あがった

かしこさが2あがった

うんのよさが3あがった

さいだいHPが1あがった

さいだいMPが1あがった

ハドラーの・・・の巻 パート4

日が変わり 朝食の準備のために外で作業をしていたところ・・・

「おーいつ ハドラーさん」

火竜術士アグリナが子竜を抱えやってきた

あの子竜は初見だ マシエルの子竜たちよりも小さいな

「どうした朝早くから こんなところに子竜まで連れて」

「ハドラーさんおめでとうございますっ マシエルから手紙がきてすぐにお祝い言いにきちやいましたっ」

「祝い？ なんのことだ？」

まるで見当がつかんが、マシエルに関する何か？

「ハドラーさんに子供が生まれたんでしょ

だからお祝いにきました

あ この子うちの 一番竜のヤチっていいいます」

＼おめでとー／

オレはズボンのポケットにいていた例の卵をにぎりしめ・・・

『・・・あ あの?』

「おお じゃあ また竜術士の後輩ができるのね!

ん?なんで竜術士?」

「安心しろ 聖母竜 竜の保護者としての使命は忘れておらん

ただ このコーセルテルでやりたいことが増えただけだ」

バタン!

「今何か 不穏な企みが聞こえたようだが

卵のことだけならともかく妙なことを言つてマシエルに負担をかけるな!」

さつきまで寝ていたはずのナータが いきなりあらわれた

「勘違いするな ナータ オレはこいつをより強くしたいだけだ

そのためには竜術士のやりかたが一番だと思つたからそういう表現を使つただけだ

家事と同様 手伝いの中でその技術を勝手に盗むだけだ」

『あなたは・・・』

キッ

【それが問題なんだろうが!大体・・・!】

ナータが珍しくヒートアップしたところで 騒ぎに気付いたのかマシエルと他の子

竜も家からでてきた

「いらつしやいアグリナ もう手紙にきづいてくれたんだね

ハドラーさんどうしたんですか？」

「なに この卵をオレの手元で おまえ達の子育てを参考に育てようと決心してな」

「そうですか！」

それじゃ 火竜の里にそうお手紙しますね」

「あたしも手紙だすわ！」

この卵ちゃんもきつとよろこぶわ ねえヤチ」

／うん／

／／

「ム やはり マシエルやヤチの言葉に伝えるかのようにこの卵から何か意志を感じた
な」

『あなたに伝えてるのですよ この子は』

「ハドラーさん 卵ちゃんが竜術士にと望めば卵ちゃんの心が聞きとれるんです

ハドラーさんならお父さんとしても竜術士としても立派に育てられますよ！」

マシエルがオレを激励するように力強く言ってくる

ナータはマシエルの熱意を感じたのか諦めたような顔に変わりため息をついていた

「アグリナよ 礼をいうぞ 貴様に預けても こやつはさぞ優秀な竜に育つであろう

な

「いやあ〜」

それからというもの オレは卵を常に懐におさめるようになった

まだ大した力は感じないが時折 卵から何か感情のようなものを感じることもあつた・・・

そして火竜の里から返事の使者がやってきたときオレは新たな一歩を踏み出すことになる

ハドラーの・・・??の巻 パート5

卵が生まれてから早一週間がたった 卵自体には特に変わりがなく オレは日々家事の合間を見ては

マシエル家の本を読みあさり竜術の研究をしていた

そんな中 アグリナと共にやってきた竜が状況を変えた

「まさかこんなに早く またコーセルテルに来ることになるなんてな」

「そうね でもあんたも立派そうになって元気でやってきて

ヤチも喜んでるし よかったじゃない」

「あのなあ おまえとマシエルさんの二人からきた手紙が

両方とも要領をえなくて里が混乱したんだぞ

それで先代補佐竜の俺が詳しく状況を見聞きしたうえで 竜術士である

お前の意見を尊重するようにということで来たんだ」

「大丈夫 ハドラーさんに直接会って話をすれば すぐわかるわよ

ホラ！ あそこでみんな待ってるよ」

かなり離れたところから会話がまる聞こえでやってきたのは

アグリナと見慣れない竜、おそらく火竜なのだろうが
身長といい 充実さを感じる力といい どうも子竜たちとは雰囲気が違う気がする
な

「こんにちははみんな ハドラーさん紹介しますね

こいつは火竜の里からの使いで」

「先代火竜家補佐竜のメオです

ええと あなたが竜の神さまの使いのハドラーさんですか？」

「いかにもそうだが」

「マシエルさんとアグリナから里にきた手紙によると

ハドラーさんが火竜の卵を生みだして 自分でその子竜を育てる上で

竜術も使いたいから許可してほしいということだったんですが・・・

ハドラーさんはどう見ても男性ですし コーセルテルには火竜は

男しかいないはずなんで

どういふことなのか説明してもらいたいのですが・・・」

火竜メオに卵を生んだ経緯を説明し オレの意志を伝えた

「・・・これは里が混乱するはずだ・・・」

ハドラーさん 一応お話はわかりましたが その卵を見せてもらえますか？」

「ああ いいだろう」

オレは懐から卵をだし メオにあずけた

「たしかに 火竜の卵だな・・・」

あの ハドラーさん 手紙によると生まれたのが一週間前なんですよね

それからこの卵はずっとハドラーさんが抱いてて大きさはこのままなんですか？」

「?そうだが」

へたまに私たちも抱かせてもらうけど いつもハドラーさんの懐にいるよね

「あの非常に言いにくいんですが 火竜の成長速度の速さから考えて一週間も親元にいて

まったく成長しないのは考えにくいんですけど・・・本当に生みの親なんですか？」

「え!? そうなの?!」

お前が一番驚くのか 火竜術士アグリナ

「アグリナ! おまえはもう一人前の火竜術士なんだぞ!

火竜のことなんだし まっさきに気付けよ!!」

「ちよつと ど忘れしてただけよ!

それに生まれたての卵はみたことないんだもん!

ヤチはすぐ生まれちゃったから卵自体あんまり触ったこともないんだからね!!」

「そういう問題じゃないだろ! 大体おまえは!!」

アグリナとメオが本題そっちのけでケンカをはじめたがそれはさておいて・・・

「証拠か 難しいかもしれない・・・」

(そんなことないよ 卵ちゃんの空気はたしかにハドラーさんとにってるし!)

「それは風竜にしかわからない感覚だから火竜の里が納得するにはちよつと弱いんだよ」

ケンカを中断しメオはサータに困ったように答えた

「ハドラーさんがせめて女性の火竜だったりすればいいんだが・・・」

子供は母親と同じ種族で生まれるから 母親が竜なら子は必ず竜になるからな

ハドラーさん自身は竜じゃないみたいだし

里は基本的に竜じゃない部外者を 信用してないみたいなんだ

竜の神さまの使いだからできるだけ要望はかなえようとの意見もあつて

里でも混乱してるんだよ それでオレが直接会いにきたんだが」

アグリナや子竜たちはメオの言葉に まったく納得できない様子だ

『私が直接話せばいいのですが・・・』

・・・ハドラー私にひとつ考えがあるのですが』

なんだ聖母竜？

『あなたも知っているはずの 竜に変身する呪文を使うのです

そうすれば 少しは事態が好転するかもしれません』

竜に変身・・・ ドラゴラム（火竜変化呪文）か!?

古より伝わる幻の攻撃呪文だな

だがオレはかつて更なる力を求めようとそれを研究したが呪文の契約ができなかつた

その上 アバンが使えるようになったときには本当に悔しい思いをしたものだ

『いえ 今のあなたは竜の保護者として生まれ変わりレベルアップしてきました

今なら できるかもしれせん

・・・アバンに遅れをとったままでいたくはないでしょう』

メオに対しアグリナだけでなくサータやマシエル、そして他の子竜たちまでが

この卵とオレについて熱く語っていた

卵が生まれてから いやオレがコーセルテルに来てから まだ大してたっておらんの

よくもあれだけしゃべることがあるものだな

よくみればあのナータまで口数は少ないが加わっている

『さあハドラー呪文の契約の儀式を』

そうだな

「魔方阵を描き呪文継承の儀式をはじめた・・・」

「・・・竜の神よ！今こそ我に古の呪文を与えたまえ!!」

大いなる竜の力 たくわえし その力強き御言葉は・・・!!

ドラゴラム!!!」

以前はこれで何もおきなかったが・・・

／　／　　ボワツ!!!　　—／／

「メオ！ なにつ？あれ

!!?」

ハドラーさんが炎に包まれた!?!」

「俺にもわかんねえ！

けど

これは普通の炎じゃない!!

竜術の炎とも何か違う!!」

ハドラーよ・・・

「この声！ あの竜の神さまのものだ!!」

「ぼくにも聞こえた

ハドラーさんに話しかけてるんだ!!」

「この声が竜の神だと!?!」

ということとはこれは呪文継承の試練か?!

そなたはじゅうぶんにつよい

さらなる竜の力を欲する汝の心の根源を見せよ・・・!

子の為か 使命の為か・・・!!?

・・・強さというのは空しいものだ いくら上げても上には上がいる

だが!! オレはあの男の腕の中で燃え尽きたあのとき!知ったのだ!!

あの充実感・・・

全てを捨てて全身全霊で力を求め高めなければ得られなかったものだ 悔いは・・・ない!!

そして 戦場がかわった今 新たな力が必要になった

無力なままにいることは・・・だれより このオレが自分自身を許せんのだ!!

認めよう ハドラー

われら神々が失ったその尽きることなき覇気を・・・

そしてかの呪文とともに改めて使命を託そう

カアアツ

バアツ!!

〔ハドラーさんのまわりの炎が消えて 体が光輝いてる!〕

ハドラーはレベルがあがった

ちからが2あがった

すばやさぎ1あがった

たいりよくが2あがった

かしこさが2あがった

うんのよさが1あがった

さいだいHPが3あがった

さいだいMPが4あがった

ドラゴラムをおぼえた

ハドラーの・・・??? パート6 エプロンをつけた『竜』! の巻

「・・・ド・ラ・ゴ・ラ・ム!!」

ゴアアアア!!

ドドオオオン!!!

呪文が発動しオレの体は最強の力を持つ巨大な竜の姿になった・・・が

「ハ・ハドラーさん・・・なんですか?」

マシエルの言葉に応えたのは

『私は聖母竜マザードラゴン 竜の騎士の生と死を司る神の使い』

「神々しいって こういうことなのか・・・」

つぶやくメオの声が聞こえるが どうやら体の主導権を聖母竜に奪われているよう
だ

聞いておらんぞ・・・

『すみません まさかこんなことになるとは

あなたをだますようなかたちになったのは 申し訳ありません

ですが当初の目的を果たせそうです

．．．メオ 私の卵をこちらに』

「ハ、ハイ！」

卵をうけとった聖母竜がそのまま抱きかかえると 卵に光が集まり

人にとつての手のひらサイズから竜にとつての手のひらサイズに成長した

『ご覧のとおり この卵ちゃんは紛れもなく私と ハドラーの子竜です』

「わかりました 火竜の里には俺が責任を持つてこの旨をつたえます」

メオも納得したようだ こいつがこれほど役にたつときがくるとはな．．．

『あ、折角ですからこの機会にハドラーの手料理 食べてみたいです』

「すみません 今はハドラーさんがつくってくれた料理が 何もありません」

『それは残念です．．．』

《水晶のおひめさまもそうだけど すごいのに普通のおねえさんみたいだ．．．》

アータよ いたいことはよくわかるぞ．．．

やれやれ．．． 聖母竜よ それはまたの機会しておけ

『わかりました

私がこの姿でいられる時間はもう残されておりません

みなさん これからも私の娘と ハドラーをよろしく願います

私はハドラーとともに いつも見守っています』

シユウウウ・・・

「戻った・・・か」

オレは元の姿に戻り 体の自由も取り戻し 腕の中には例の卵があった
今ではひと抱えほどの大きさだな

『もちろん私はあなたの中にいますよ』

そのようだな

殻越しに卵の中の様子が感じやすくなった気がする
感触的には卵の中に子竜の姿はなさそうだが・・・

／／

どうやらちゃんと中にはいるようだな

しかし あのドラゴラムで魔法力がほぼ尽きてしまったか

これほど消耗したのは久しぶりだ

・・・久しぶりに今日はゆっくり寝るか

へハドラーさん 聖母竜さんが娘って言ってたから この卵ちゃん女の子なのよね

ついに私たちに妹ちゃんがでるわ

「そうか タータやマータには特に面倒をかけるかもしれんな」

《私たちの後でコーセルテルに来た子竜はみんな男の子ばかりだったもんね
妹って はじめてだから嬉しいもん
まっかせてー!》

〔そっか 光竜家のレオノラは人間の赤ちゃんだから

たしかに子竜の妹はまだいないね〕

子竜たちはこの卵に 目を輝かせながらテンションを上げていた

まだ生まれたわけでもないうちからそんなにハイテンションでどうするのだ

．．．

．．．．．

メオやアグリナらもまじえ茶会をした後

〔ハドラーさん 俺はこれから里に戻ってこの一件を報告します

これでも族長候補ですし 竜の神さまと聖母竜さん マシエルさんの

お墨付きもあるから絶対大丈夫ですよ〕

〔面倒をかけるなメオ〕

〔メオ! あたしを数にいいてないでしょ〕

〔おまえはお墨付きとか言うまえに自分の仕事をしっかりしろよ!〕

一人前の竜術士として ヤチのことを任せてるんだからな」

／＼アグリナやさしいよ／

「やれやれ」

好戦的な火竜に劣らぬ鼻っ柱のアグリナがヤチを抱えたまま

また一戦は始めるのかと思っただが

「そうだ ハドラーさん！」

卵ちゃんに着せる服を作るなら家に帰ったあとにグイ族にお願いしておきましょうか？」

アグリナがふと思いついたのか 思わぬ提案がでた

「ム、そうか あの克蘭ガ山の山頂付近に住んでる獣人が服屋だったな

折角だからオレも同行するでしょう。

機織や裁縫はまだわからんことだからな 参考になることがさぞ多かろう」

里の中央にそびえる克蘭ガ山を見上げ アグリナ達に同行を申し出た

たしか火竜家もあの山にあるのだったな

(火竜だけの案内でちゃんと辿りつけるのか?)

《大丈夫だよ アグリナはウチとの往復に慣れてるから・・・多分》

サータの心配半分からかい半分な台詞をアータがフォローしたがその眩きが気にな

るぞ

そもそもコーセルテル内ならどこからでも見える山に向かうだけなら
方向音痴の火竜といえど迷いようがなからう

それに見える場所ならルーラ（瞬間移動呪文）ひとつで行ける

『今のあなたは 先ほどのドラゴラムで魔法力が尽きてますが』

・・・そうだったな まあいい 歩いても問題ない

「じゃあ いきましようハドラーさん」

／／いってらっしやーい／／

ハドラーの・・・??の巻 パート7

やたらと脇道にそれようとするアグリナを注意しつつもどうにか克蘭ガ山に辿りつき

グイ族の工房へ入り 村長を紹介された すずめ色の翼と耳以外は普通の人間に見える女だ

。お話はわかりました ではすぐにとりかかります。

あの 卵ちゃんのお名前はもう考えてますか？

産着に刺繍で名前をいれられますよ

「名前か・・・」

『私にひとつ腹案があるのですが ジゼ というのはどうでしょうか？』

・・・わるくないが 一文字加えて ジゼル というのはどうだ？

『いい名前ですね』

あなたが魔王だったときの片腕だった子のバルトスから一文字とつたのですね
もう一人 オレの子には珍しい女タイプの親衛騎団・女王アルピナスからもな

／／／

『これから補佐竜となる子に あなたの腹心の名前を．．． いい名前ですね

この子も喜んでいるようです』

これできまりだ。

たしか命名の儀式を竜術士が竜人化術を込めて行うことでより高い効果があるの
だったな

魔法力が回復したらやってみるか

「こやつの名はジゼルだ」

。 ジゼルちゃんですね 女の子ですか？。

「そうだ よろしくたのむ」

（わかりました 明日のお昼頃には出来上がると思いますが 火竜家にお持ちしまし
うか？）

「いや できれば完成まで過程を見せてもらいたいのだが」

。 いいですよ では椅子をお持ちしますね。

「すまん 邪魔をして

オレは仕立てや裁縫はまったく知識がないのでな

この機会を生かしコーセルテル随一と呼ばれる職人の仕事を見ておきたくてな」

。 まあ うれしいお言葉です どうぞみていってください

色やデザイン好みなどがあつたら言つて下さいね。

「うむ 今回は一般的な火竜の衣装でよい」

『見ただけでできるようになるんですか』

さあな 今のオレはエプロンを直すことすらできんからな まずは見てみねばな

オレは用意された椅子に座り 卵を抱いたままグイ族の仕事を観察した

型紙をもとに赤い布を裁断 縫製と 思ったほどのスピードはなかったが

迷いがなく流れるような動き 手入れの行き届いた道具と熟練の技術

それに服を仕立てている村長、いやほかの機織などをしているグイ族らも常に笑顔だった

まさに天職として仕事を楽しんでるのだろう

『ただ器用なだけではないのですね』

やはり一朝一夕で再現できるようなものではないか・・・

まったくこの修業はいつ終わるのか

『これも子育て修業の一環なんですか?』

「衣・食・住 どの分野も 子を守り育てるためにはある程度の知識や技術は必要だろう」

。 ハドラーさん勉強熱心ですね。

その卵ちゃんも幸せでしょう　はいお茶をどうぞ。

湯呑みをうけとり　のんだ茶は　なかなかうまかった

．．．しかし『幸せ』か．．．

考えたことのないものだな

『はずかしながら　私もありませんね』

まあ『よろこび』ならわかるのだが．．．

『お互いベストを尽くしましょう』

．．．お前も随分と地上に感化されてきたな

湯呑みを返し再び村長の仕事に目を移した

先ほど決めたばかりの名前を服に刺繍しているようだ

「ジゼルか．．．」

．．．茶で僅かにあつたまつた手を通して　抱いていた卵は

熱くもなく冷たくもなく　かといってぬるいとも違う．．．感、触．．．

．．．

．．．．．

．．．．．ZZZZ

ハドラーの・・・??の巻 パート8

ハドラーはめをさました

「・・・しまった オレとすることが まさか寝てしまうとは」

『ジゼルのおかげでしょうか』

あのドラゴラムで魔法力が尽きていたとはいえ

こんな卵ひとつにオレが不覚をとったというのか

ナータは卵の時から術が使えたらしいが・・・

ジゼルはすでにラリホー（催眠呪文）を使えるということか・・・?!

「流石オレの子！」

『いえ そういう意味ではなく 大体あなたくらいのレベルでは効きにくいでしょう』

なんだ違うのか まあよい

それよりオレが寝ている間 何かあったか そもそもどれほど寝ていたのだ？

『さあ・・・ あなたが寝ている間は私も寝ていたようなので』

・・・やはり役にたたんごやつ 今回はオレに非があるが

しかし、オレと卵を包むようにつけられた毛布があるということは・・・

寝ている間にだれかに近づかれた上にまったく気付かなかったということか

まあオリハルコンより頑強そうな殻に守られていることやつは問題ないだろうが

。おはようございます ハドラーさん。

産着を頼んだグイ族の村長があいさつをしてきた

あいさつを返し外を見ると夜明けだった 一泊してしまったようだな

。マシエルさんには連絡してありますよ

どうぞ アグリナさんからいただいたパンです。

「いただきます」

パンと茶をうけとり 食した

なかなかいい出来だな パン作りで竜術の練習をしていると聞いていたが

アグリナの子竜ヤチは卵から孵って間もない幼竜だったはずだ

それでもこれほど出来るとは 竜とは大したものだな

『竜術士によるところも大きいでしょうね』

「馳走になった 今度はオレから差し入れしよう」

。まあ楽しみです

卵ちゃんの産着はもうできています

マシエルさんの家まで空から送りましょうか？。

「休んで魔法力は回復した 自分で飛んで帰れる

それよりもこの仕事は非常に参考になった

また仕事を頼むときは邪魔をすることになるう

何か望みがあれば言うがいい」

。・・・そうですね いつもは地竜家に頼むのですが

今度 力仕事をお願いしてもいいですか？。

「任せろ」

『あなたの得意分野ですね』

。では これを卵ちゃんに。

村長から受け取った産着を・・・ どう卵に着せればいいんだ？

『・・・さあ・・・』

「そもそも卵はどこが頭にあたるかもわからん」

ああでもない こうでもない卵に服を着せようとこねくりまわしていると村長が

見かねたのか

。このとがったほうを 上にして こう包むように・・・。

との助言をもとに どうにか服を着せることができた

まるで海苔巻きおにぎりのようになったな

『たしかにそのようにも見えますね　これで　いつこの卵が孵っても大丈夫ですネ』
「世話になった　また面倒をかけるだろうが　これからもよろしく頼む」

。はい　またいつでもいらしてくださいね。

グイ族の工房を後にし　山を下り火竜家におもむいた

「あ　おはようございます　ハドラーさん」

／＼おはよー／

アグリナらに挨拶を交わし　諸々の礼を述べた後　目的を伝えた

「この卵に命名の術を施したい　基本竜術の本を貸してくれ」

「わかったわ　でもそういうことならマシエルの家でやりましょう

あっちにも基本竜術の本あるし

それで　術のあとで皆でお祝いしましょう！」

「祝いだと？」

「そうですよ　卵ちゃんの名前のお披露目と新しい竜術士の誕生に」

「別にオレはこのコーセルテルの正式な竜術士になるわけではないのだがな」

『前にも同じようなことを言われましたね』

「こういったお祝いごとによく気付いてくれますね』

「ではお前も　連れて行ってやろう　すぐに出発できるか？」

「大丈夫です ヤチもいいよね？」

／うん／

「では行くぞ ルーラ（瞬間移動呪文）!!!」

ドンッ

ギューーンッ

ドオオオン!!

マシエルの家についた 卵も無事だ

「・・・びっくりしたあ!!! だっていきなり飛んじやうだもん!!

しかも一瞬でマシエルの家についちやってるし!？」

／わーい／

抱いていたヤチを抱きしめなおし驚きを隠そうとしないアグリナはさておき

「おはようございます ハドラーさん 卵ちゃんの服できたんですね

とつてもお似合いですよ」

「ああ おはよう 帰って早速で悪いが基本竜術の本を貸してもらえんか

一度本に目を通してあるが 命名の術を使う前に確認しておきたくてな」

《用意してますよハドラーさん どうぞ！ このページです》

「すごい！ さすがアータね」

「ああ 助かる」

『頼もしいですね この卵ちゃんもこんなお利口に育ってくれるでしょうか』

さあな オレは早速本に目を通し 術を確認した

そして・・・

「オレは竜の保護者ハドラー

お前を守り育てる者として

お前に名付ける——

お前の名は

ジゼル」

ポウ・・・

／＼わ——————！！／／

術の完成とともに子竜たちの歓声に包まれた

「無事に術は成功しましたね これでいつ孵っても大丈夫です」

マシエルの祝福をうけ この海苔巻きおにぎりも喜んでいるようだ

『卵ちゃん ジゼルでしょう』

折角名付けたのだからこれからはしっかり呼んであげてくださいね』

「ハドラーさん

火竜の卵は成長が速いからすぐに孵っちやうかもしれないから気をつけてね」

「そういえばハータもうちに来てすぐに孵ったね

でも卵によって孵る時期はずいぶん違うから気を張りすぎないようにもしてください
い

ジゼルちゃんも最初に見るのが疲れた顔のハドラーさんよりも

元気で喜んでる顔の方がいいと思います」

「ヤチも ジゼルが孵ったらお兄ちゃんになるのね がんばらないとね！」

／うん！／

だ
笑顔に囲まれどうにも居心地がよくない気もするがあくまで主役はこの卵 ジゼル

『そういえば そうですね それにあなたも笑顔ですよ』
なにっ!?

とつさに卵を持っていない手で顔をおさえた

『ふふっ 間違いないようですね』

・・・しまった やられたか

ハドラーは命名の術をおぼえた

木竜家のお茶会

ドン

木竜家の家の前に無事着地した

さらしで胴に服ごと巻きつけた卵のジゼルにも異常はない

さらしは慣れが必要だが使ってみればなかなか便利なものだな

卵を固定する際に 胸に抱く 腹に抱える 背中に背負う、

と自由に変えることができるのがいい

地獄の鎖（ヘルズ・チェーン）で巻ければもつと便利だったが 卵はともかく

折角用意した産着がズタズタになりそうで使えぬ。

先ほどのトベルーラ（飛翔呪文）に驚いたのか目的の人物がやってきた。

「出前だ 木竜術士、たしかカディオだったか」

「ハドラーさんでしたか わざわざありがとうございます

例の卵 まだ孵ってないみたいですね」

「ああ ずつとこんな調子だ それよりこれが頼まれていた菓子だ」

「ああ その大きい石の玉が武術訓練で活躍したという石釜ですか」

「そうだ 木竜家から提供のリンゴを使った菓子ということだったからな

こいつは石焼釜アツプルパイだ このままオレが持つていこう 案内してくれ」

「成る程 アツプルパイでしたか

あ こちらです いっしょにお茶いかがですか？

うちの子を紹介しますよ」

「・・・まあよかろう パイの出来が気になる 邪魔するでしょう」

大きめのテーブルがある部屋に通された

ひとまず石釜を置いたが 補佐竜のロイとノイの様子を見るに茶の準備中のようだ

な

早く来すぎたか・・・ それに急に一人増えれば面倒もふえるだろう

だがオレのパイは冷まさずに熱いうちに食わすために釜ごと運んだのだ

「湯が沸いていないな その水瓶ごと貸してみろ」

ロイが持つていた水瓶をうけとり・・・

「ギラ（閃熱呪文）」

・・・ポコポコ

魔法力の集中にも随分慣れたものだ 水を静かに沸かすことに成功した

へありがとうございます もうお湯が沸いたんですね

火竜術はこういうとき便利ですね

あれ？ でもまだ卵ちゃんですよね 竜術使えるんですか？

「今のは竜術というより魔術だ まあオレにも細かい理屈はわからぬこともあるが

これはほとんどオレの自力だ」

ロイの質問に適当に答え 茶の準備をロイらに任せ

オレは石釜をあげアップルパイをとりだした

「・・・ウム 上出来の焼け具合だな 後は適当に切り分けておいてくれ」

・・・釜に僅かに残っていたパイの欠片を味見した

まあ こんなものか 小麦粉の質次第でまだ完成度はあげられるだろうが・・・

へハドラーさん こちらのお席にどうぞ

席を用意され 座ると茶と例のパイをだされた

・・・ウム やはりここの茶はなかなかのものだな

流石 木竜家 コーセルテルで茶葉の出所はおそらくここだろう

次は この茶に合わせた味に仕上げるのも一興だろうが

何の茶が出るか特定が難しいか

／＼いただきまーす／

茶を飲みながら木竜家の子竜たちを紹介された

ロイとノイは武術訓練で面識があるが　もう三人子竜がいるのか

〈美味しいねこのアップルパイ　リンゴの味も香りもそのままよりもずっとおいしい

流石マシエルさんね〉

四番竜カラナの感想に気を良くしつつも　ひとつ訂正した

「いや　これはオレがつくった　まあ材料を用意したのはマシエルだが」

『あなたのお菓子作りも磨きがかかってきましたね』

〈ハドラーさんがつくったんですか?!

すごいです！　ハドラーさん何でもできるんですね!〉

卓を囲む子竜たちの賛辞に気分を良くしていると

／／／

「どうしたジゼル?」

殻ごしにジゼルの感情の起伏を感じた

もつともその中身まではわからんがな

〈ハドラーさん　ジゼルちゃんがしゃべったんですか?〉

「いや　直接声が聞こえるわけではない　ただ　何となく感じただけだ」

ジゼルは時折こういった反応を示すが

オレの呼びかけ以外では　その傾向がよくわからん

『まあ あなたでは難しいでしょうね

．．．まあ私にもわかりませんが』

役に立たんな．．． まあ たとえこの卵が口が利けてもわからぬことだらけだろう
が

／／／

へカラナやロットたちの卵ちゃんだったのを 思い出すね

いちばんちっちゃいロットでも もう3年くらい前だっけ？

三番竜キーニの言葉に この中で唯一の幼竜 五番竜のロットが首をかしげる

／わかんない でもおいしいー／

〔うちに来た子は みんな卵の状態できたんだよなあ．．．

最初にノイとロイがいきなり二人同時にきて

あのときは 二人分の名前を考えるのが大変だった．．．

それから キーニ カラナ ロット みんなクルヤが連れてきたんだよな．．．

本当に にぎやかになったんだな．．．．．〕

子竜たちをみつめてつぶやいたカディオが 茶を煽るように飲んだ後

上を向いていた．．． あの日 おそらく涙をこらえているのだろう

『涙．．．ですか そういえば あなたが流したところは見たことないですね

鼻水なら何度も見ましたが』

「……………そういえば、あの時、見られたのはポップだけだったか
しかし、こやつはつまらんことを気にするな」

じー…

キーニがオレを……いやジゼルの方をじつと見ている

「どうした、キーニ？ この卵がそれほど気になるか？」

「ええっ！ いや、いや、そういうわけじゃ!?」

見るからに動揺しているキーニをフォローするかのようによい

「ハドラーさん、卵ちゃんをあたしたちで抱っこさせてもらえませんか？」

「ああ、よかろう、持っていけ」

さらしを外し、ジゼルの服ごと渡した

受け取ったノイだけでなくキーニやカラナも抱いてみている

マシエルのところの子童たちと同じくやはり直接触ってみたくなるのだろう

「木竜術というのは、便利なものだな」

このリングのように季節外れのものを収獲するだけでなく

本来は育ちそうにないものをつくることさえ可能ときく

ジゼルに術資質があれば習わせたいところだったが……

「どうだ おまえたち ジゼルやこのオレから木竜術の資質は感じぬか？」
マシエル家の木竜タータは感じとれなかったようだが この木竜家ならと僅かに期
待したが……

「へ……うーん」

「直接さわってみても卵ちゃんから木竜の術資質は感じないかな」

「残念ながら あんたからも感じられないな」

「たしか はじめて会ったときにも言った気がするが」

「補佐竜のノイと竜術士のカディオがいうのであれば 間違いないのであろう」

「無念だが仕方あるまい こればかりはどうにもならん」

「竜術を使わなくても畑仕事はできますよ 本来作物を育てるのに竜術はいらないんで
す」

「このリングゴはたしかに術研究の一環でうちの子が竜術で作ったものですが」

「うちの畑では術を使いません」

「なんでもかんでも竜術を使っていたら自分の手でできることがわからなくなってしまう
うと、」

「この子たちに教えていますから」

「成る程 たしかにそうであらう」

『立派なお考えですね さすが竜術士』

「そういうことなら その畑仕事を見せてもらおうか 無論おまえたちの都合のよいときでいい」

「そうですね このおやつのお礼もありますし お茶の後で畑に来て見ますか？」

うちの子たちも来ますから 卵を預けておけば 農具を實際使ってもらうこともできますし」

「そうか では邪魔をするとしよう まあまずは茶を飲むとしよう・・・」

ジゼルを預けたまま 茶をすすった

卵自体はオレにとつて大した重さではないはずだが・・・

『いないと・・・ 軽すぎますか？』

フン、何を馬鹿な・・・

ロイに茶のおかわりを要求した・・・

光竜家のお茶会

オレが洗濯を終え 乾いたばかりの産着をジゼルの卵に着せ マシエルから借りた抱っこひもで胸の前に固定し さらに巻いていると マシエルの子竜たちが

《ハドラーさん そんなに色々つけたら 卵ちゃんが茹だつちやうよ・・・》

コーセルテルは暑さに弱い種族が多いから 夏の精霊が直接入ってこないおかげで

夏でも暑すぎないけど・・・ たまに虫さんがいるけど》

へたしかに ジゼルちゃんがあつそう・・・

ただでさえ干したてホカホカの産着なのに チューリップに包まれてるみたいで

熱が逃げるところがないよ》

『たしかに過重包装のようですね』

マータやタータの指摘に聖母竜が同意するように言う

《ジゼルは火竜だから あつさに強いはずだし それは大丈夫のはずだよ

それより両手を使えるようにするには 卵ちゃんをしつかり固定しないといけないから

これくらいはしようがないんじゃない？」

(でも こんなにガツチリ巻いたらハドラーさんもあついでし 動きにくそうだろ)
 【マシエルも お前たちが卵だったころ 色々工夫していた

マータとタータの卵二つ同時に抱えていたところに比べればこの程度問題ない】
 アータにサータ ナータまで話に加わってくる

「だっこいいなっ」

(ねっ)

ハータとカータのあまえんぼコンビは見るところが違っているがいつのまにか
 マシエルの子童全員が集まってジゼルに注目している

「……フツ オリハルコンより丈夫な殻に守られている以上余計な装備は不要だ
 ろうが

卵が孵ったときのための産着を別に持つ方がわずらわしいからな

たしかに少々の不自由さを感じるがオレほどの者になればっ……」

パタパタパタ

と とりこんだ洗濯物を素早く畳んで見せた

／＼／＼／＼／＼／＼／

「……覧の通りだ

何の問題もない」

『他に見せることないんですか?』

子竜たちの反応は結構いいぞ まあそんなことはいい

「さて 家事はひと段落ついたところで オレはこれから光竜家に行ってくる」

（あ ぼくもいききたーい）

光竜・カータが手を挙げ同行を提案してきた

「オレは構わんが・・・ マシエルの許可を得てこい 日帰りとはいえ

どれほど邪魔するか わからんぞ」

（うん わかったー マシエルー）

たったった・・・

カータがマシエルのところに行ってる間に準備を済ませておく

まあジゼルを巻きつけた後だけに他に必要なもの・・・

『土産はどうしました』

「すでに用意している

フルーの菓子を再現するのは中々骨が折れたがな」

（あ いいなー）

「おまえたちの分はマシエルが用意している 手伝ってきたらどうだ」

オレが言い終わるよりもはやく動きだしたナータに 他の子竜たちもつづいていった。

『みんないい子たちですね ジゼルもこんな風に育ってくれるでしょうか?』

「オレの子ならどいつも命令には忠実だったぞ」

（ハドラーさーん いっしょに行ってもいいってー

あとお菓子もらったー）

「では 行くぞ 案内は任せるぞ カータ」

（はーいっ いってきまーすっ）

「トベルーラ」

ドン！

ギューーン

カータの案内で南下して飛んでいくと山の上に大きな池とその中央に建物が見えてきた

（あれが光竜家だよ ハドラーさん）

「ホウ これが・・・」

バルジの渦のような気の効いたものではなく バルジ塔のようなものしきも感じさせない

マシエルの家や木竜家には大きな木が巻きついていたが、この建物自体には
そういったものがなく、花壇があちこちにおかれた平和そのものな雰囲気を感じさ
せる家だ

陸地からのびている栈橋と家の間に着地するとカータがそのまま家に入ってしまった
「カータ、だれかいるようなら呼んできてくれ、オレは外で待っている」

「うん！ わかったーっ」

間もなくして、カータが家から連れてきたのは、はじめて見る顔ぶれだった

オレが光竜家の関係者で知った顔は、竜術士のモーリンと

武術訓練に参加している補佐竜のマリエルだが・・・

「はじめまして、ようこそハドラーさん。」

ぼくは、光竜術士モーリンの夫であり

今抱っこしてるかわいいかわいいレオノラのお父さんのラスエルと申します

そしてこの子たちが」

「私、モーリンの二番竜のファーリルです」

＼ぼくは、さんばんりゅうで、レオノラのにーにの

セユウルっ／

ラスエルは成竜（おとな）、ファーリルが少年竜、セユウルが幼竜といった年頃のよ

うだ

「ハドラーだ 子守の修業にきている . . . この卵 ジゼルの親だ

これは 手土産だ うけとれ」

持ってきた菓子をフアーリルに渡し ラスエルの抱いているレオノラの顔を見た
父が竜の赤子であるがどうやら人間のようだ

混血の場合 子は母親の種族になると聞いていたので

母親の竜術士モーリンが人間だからだろう

「わー まだちっちゃーい またかわいくなつたねー」

たしかに こうして見ると随分と小さく ジゼルの卵よりも小さいぐらいだ

バルトスが地底魔城にまだ赤子だったヒュンケルを捨ててきたのを思い出した

そういえばダイを天界で育てていたときに たまごから孵つたときはもつと小さ

かったか

「ハドラーさんも レオノラを見てますね やっぱりかわいいですよねーっ

かわいいですよねーっ

かわいいですよねえ~~~~~

『まあ とつてもかわいらしい

ですがダイの赤子時期も負けてませんよ』

「フム、そういえば 目元がああ光竜術士に似ているな

やはり子は黙っていても 親に似るものよな・・・」

!!!

そうですよね ハドラーさん！

エレノアの目元がもう！もう！

ハドラーさんのジゼルちゃんもきつととてもかわいい子が生まれますよ

ああ こんな玄関前でいつまでも 立ち話なんかさせて申し訳ない

今 うちの補佐竜がテラスでお茶会の準備をしますからどうぞあがつてください

うちの子竜たちはお菓子作りが趣味ですから とつてもおいしいですよ

もちろん ハドラーさんのお土産もみんなでいただきましょう」

〔私も お手伝いしました〕

ラスエルに通されたテラスには既に茶の用意ができていた

テラスからは一面に広がる澄んだ池と山々がなかなかの絶景といえる

〔おいしいーっ〕

＼カータにーにの おみやげもお

いしーっ／

カータやセウルの歓声があがる たしかにいうだけのことはある出来だ

オレの菓子も悪くないようだ

〔ハドラーさんのお菓子とつても美味しいです

ところで 今日のご用件は？〕

ああ そういえば まだ何も言っただけでなかったな

「このジゼルだが カータがいうには光竜の力も感じるらしくてな

以前モーリンがオレにも光の術資質があると云ったことも思い出してな

何か術の一つでも覚えようかと思ひ 邪魔した次第だ

・・・まず光竜術はどんなものがあるか聞かせてもらえるか？」

〔えーつとお 光る？〕

／＼光る！！／＼

ほお 魔界で使えば天下がとれるかもしれないな・・・

太陽の光は魔族の宿願ともいえるからな

まあそこまでの規模はのぞめんだろうが 面白いかもしれないな

『大魔王バーンも 魔界に太陽を照らすために地上を消そうとしていましたね』

〔探し物の術があります！ 光が届いてる範囲だけですが 人や物を探せる便利な術で

す！〕

それも 使えそうだな 悪魔の目玉を使役するよりも便利そうだな

子竜たちが次々と光竜術を紹介していく・・・

光竜術士や ラスエルあえて口を出さず子竜たちを見守っている

これも子育ての一環なのだろう

どうやら互いに有意義な時間になりそうだ・・・

／／／

おまえも興味があるか ジゼルよ・・・

その後 子竜たちの力を借りて 日が暮れるまで光竜術を試してみた

光だけを発生させるのは意外と難しかったが

探し物の術は すこしカンをつかめそうだった

太陽の光を自分の目のように意識し『見る』術 魔王時代の経験値が生きているよう

だ・・・

地獄の狭間からの誕生

火竜家への届け物を終え 急ぎの仕事もなくルーラを使わず歩いて帰っていた
抱えている卵は相変わらず孵る様子もない

こんな状態でも卵の中の子竜には抱えている竜術士の感情などが伝わることもある
らしいが……

「今のオレの考えていることも伝わっているのだろうか……」

今のオレの思い……それは……

この卵を割ってみたい……

『なに物騒なこと考えているんですか!?!』

聖母竜には伝わっているな まあいつものことだが……

『大体竜の卵は 星を貫通しても 太陽に放り込んでも無事なほどの強度なんですから
外からではどうやっても割れないはずでしょう

そもそも割れないから竜の卵と気づけたのですから……』

「だからだ聖母竜 あのとぎ割れなかったことがオレの心の中でひっかかっているな

マシエルから聞く限り 卵が孵ったあと殻は 消滅してしまうようだな

チャンスは この状態しかない

オリハルコン以上の強度の物質・・・

オレの今の全力をぶつける甲斐がある」

卵を抱く手にも自然と力が入る

／／／

ほう ジゼルにも伝わったか オレの全力受けてみるか

『だから 駄目ですって！』

そんなことしても折角の産着が駄目になるだけですよ』

「それもそうだな」

さらしを外し 卵を巻くように着せていた産着を脱がせ 地面に置き距離をとった

『待ってください！』

そんなことをしたら卵が割れなくてもどこかに飛んでいってしまうでしょう！』

「なるほど ならば・・・ 地獄の鎖（ヘルズ・チェーン）!!」

オレの左手から伸ばしたヘルズ・チェーンで卵を絡みとり固定し

闘気を高めた

「生まれ変わってからは はじめてだな・・・」

超魔爆炎覇!!」

『何とんでもないことをやろうとしてるんですか!!』

それにその技はあの剣がないとできないのでは?!』

「必死だなおまえも・・・」

覇者の剣はなくとも この地獄の爪（ヘルズ・クロー）に貫けぬものなどないわ」

『貫いては駄目なんです!!』

大体手も足もでない卵にどれだけムキになってるんですか！

大人げないにもほどがありますよ!!!』

「オレがかつて捨て去ったはずの虚栄心や功名心がまだくすぶっているようだな

今こそ完全燃焼させてやろう・・・ この一撃に悔いはのこさん!」

『いえ これはそんな言葉で割り切れない 捨てることなどできない あなた自身

の・・・

死んでも変わらない個性なのでしょう・・・』

高まる鬨気のせいか聖母竜の声が遠ざかっていくようだ

ヘルズ・チェーンもクローもオレの体の一部 この身一つ ぶつけてくれるわ

オレの目にはもうジゼルしか映らなくなった

「うわ……」

超魔爆炎覇!!!」

一心にふみこんだまさにそのとき

パリ……

ヘルズ・チェーンから伝わった手応え まさか今!?

『まったくくださいいハドラー!!! 卵が孵りますす!!!』

わかっている!!!

急遽闘気を押さえ 技は中断したものの すでに踏み出した今

ジゼルに向かう勢いまでは おさえきれない!?

ポウ

バシユツ!

ふわ

ぎゅっ

卵が発光し たしかな熱気を感じた直後 卵の殻は消え去り

かわりにオレの胸元に 卵よりひとまわり大きな幼竜がしがみついていた

どうやらこやつが……

「ジゼル……か ご苦労だったな」

＼ ♡ ／

オレの胸に顔をうずめているため その表情は読めんが……

既に命名したときに竜人化術を込めていたせいか

竜というよりも魔族や人間の幼体に近い姿をしていた。

ダイやヒュンケルの赤子時代と明らかに違うところは 2 頭身の体に大きな足と尾
 なかなかさわり心地のよい髪から突き出た 2 本の角に耳 そして

額や手の甲など体のところどころに見える鱗のような模様といったところか・・・
 この模様は他の幼竜では見られなかったが オレの竜人化術が甘かったのか？

『どうでしょうね？ それよりもすぐにジゼルに服を着せてください』

火竜は寒さに弱いそうですから』

そういえば 産着を着せてなかったな 先ほど畳んでおいた服を手にとりジゼルに
 服を・・・

「おい ジゼル手を離せ オレの胸倉をつかんだままでは服が着せられん」

生意気にも睨りたてながら竜の力か オレにしがみつく握力は意外にもしつかりし
 たものだ

引き剥がそうにも力加減を誤るわけにはいかぬ・・・

ただ腕を通せば着れる服が なぜこんなに厄介なのだ!?

『とりあえずマシエルのところに帰りましょうか』

早く服を着せないとジゼルが風邪をひいてしまうかもしれない』

ぬう たしかにこんなことは経験がない ここでもごまごまごしていてもつまらん

そもそもこういう打開策を覚えるためにこの地にいるのだ まずは帰るか

「ルーラ!!」

ビュワン!

ドーン!!

「あ、おかえりなさいハドラーさん って その子竜は?!」

「ああ 先ほど躰ったジゼルだ すまんが知恵を借りたい

こやつオレにしがみついたまま 手を離そうとせん このままでは服が着せられん」

マシエルに服を預け助力を頼む

オレもいささか経験を積みレベルアップしたつもりだったがまだまだのようだな

「ああ よくわかります 僕の子竜たちもこんな感じで甘えてきて大変でした」

『大変という割には笑顔ですな』

七竜育てた余裕か それともそれほど・・・

まあよい コツが盗むのが先決だ

「甘えんぼしているときは無理にひきはがそうとしないで

まずはジゼルの気をそらしてください」

（おやつがあるよ ジゼル〜）

.....

【たしかにサータには有効だったが ダメか・・・】

サータの声にジゼルは反応を示さず ナータのつぶやきだけが残った

「だっこいいなー」

（ねー じー・・・）

「みつ・・・ みんなはもうジゼルの お兄ちゃん お姉ちゃんだから 甘えんぼはしな

いよね?」

（お兄ちゃんっ）

《お姉ちゃんっ》

『子竜たちも 兄や姉の自覚があるのですね』

たしかにハータたちに今の言葉は有効だったが 今はジゼルだ

〈そうだ! ジゼル〜 このおやつハドラーさんの手作りよ〉

ピクッ

ジゼルの耳が動いた! だがまだ手が緩むほどではない

《ハドラーさんの名前に反応したのかな?》

アータの言葉に一理あるかもしれん ならば・・・

「このオレの爪を今度こそくわつてみるか？」

オレはかつてダイにくらわせたこの爪を ジゼルの顔の近くにちらつかせた

パクッ

《あつ ジゼルが顔見せてくれた かわい〜》

ジゼルがオレの指に噛みついたことで ようやく顔が見えたな

『あなたに似ず かわいいですね〜』

まあ たしかにオレには似とらんが・・・

今はそれどころではない くわえられたままの指を少しずつオレの体から離すように動かすと・・・

＼　　＼　　／

ジゼルもオレの手を追うように顔を動かし そしてついにオレの体から手を離した

！

「今だマシエル!!」

〔はい!!!〕

バツ

オレの声にジゼルが一瞬動きを止め マシエルはその一瞬でジゼルに例の産着を着せた

なんとというスピードだ!?

術を使った様子はなかったが このオレの目にもとまらぬほどだった

ジゼルは産着を着て何もなかったかのようにオレの指を捕まえしやぶりついている
 「いい作戦でしたね ハドラーさん

でも外から帰ってすぐに手を洗っていればもつとよかったですね」

いわれてみればたしかに 手を洗っていなかったな

「オレとしたことが つめが甘かったということか」

＼／わゝ ジゼル笑うともつとかわいいゝ♡／／

ジゼルと それを取り囲む子竜たちの笑顔につられるようにマシエルも笑う

『あなたも笑ってますよ ハドラー フッフ』

「クツ・・・ ククツ クククククククツ・・・ ファッハッハッハーッ!!」

ハドラーはレベルがあがった

ちからが3あがった

すばやさが3あがった

たいりよくが1あがった

かしこさが3あがった

うんのよさが1あがった

さいだいHPが5あがった

さいだいMPが2あがった

ジゼルはレベルがあがった

ちからが3あがった

すばやさが2あがった

みのまもりが1あがった

たいりよくが2あがった

かしこさが2あがった

うんのよさが3あがった

さいだいHPが 5ふえた！

さいだいMPが 2ふえた！

1Pの スキルポイントを かくとく！

魔性の片鱗 の巻

ジゼルが卵から孵った日 マシエル達はその祝いをしたいと 言い出した
マシエルの子竜もずいぶん乗り気のようにだ 祝いの歌だの料理だのと用意に余念が
ない

オレも宴の準備を手伝いたかったが

肝心のジゼルがオレの腹に貼り付いたまま離れる気配がなく

無理に引き剥がして 一人にさせるわけにもいかぬ とのことだ

地下の術部屋に フェルリとともに待機となった

「まあ この子がジゼルちゃん！ かわいいです〜!!」

孵りたてホヤホヤで まだおでこや おててに鱗が残ってるのって

この時期だけなのよね〜

そういうものか 別にオレの術が未熟だったわけではなかったようだ

『そうですよね！ 待ちに待って やつと顔が見れたんですけど

もう こんなにかわいいとか！ もう！もう!!』

テンション高すぎるぞ フェルリに聖母竜・・・

しかし オレの腹に話かけられているみたいで妙な気分だ

「そういうえばジゼルちゃんは お花好きかしら？」

この地下は子竜ちゃんたちが竜術で咲かせてくれたお花で いっぱいになっていますから

気に入ってもらえるといいですけど、

この部屋が花だらけなのは見ればわかるが

花畑が地下に広がっていたのか こんな日も差さん地下で怪物化もさせていない花を

咲かせ維持させるとは 竜術の可能性を感じさせるな

ちなみにジゼルはまだオレの指をくわえている

牙をたてるわけでもないので放っているが このままでは手が使えんあぐらをかいだ オレのひざの上から まるで動こうとしないジゼル

／＼♡！／

「これでは 卵のままとあまり変わらんのではないか？」

しいていえば 立ったときにオレが支えんでも 自力で貼り付く分

面倒がひとつ減ったぐらいか」

『あなたは なにをいつてるんですか!!』

‘ そうですねよ! 子竜ちゃんの可愛さに変わるものなんてないんですよ、
 しまった 今のテンションのこやつらに余計なことを言うべきではなかったな
 反撃が厄介で適わん

／♡♡♡!／

こやつは フェルリたちを気にした様子もなく まだ オレの指に吸い付いている
 中々の度胸だな それともよほど腹でも減っているか?

そういえば 生まれたばかりの幼竜は何を食えるのか気になるな

「少し料理を見てくる」

‘ ええっ?! ゆっくりしましょうよ せつかくの マシエルちゃんたちの厚意なんですから、’

「ジゼルはお前に預けていく おいジゼルいい加減離せ」

素早く指を引き抜き ジゼルがそれに気をとられている隙にオレから引き剥がし
 フェルリの元に転がした

ころん ころん ころん・・・ ほてっ

／?! ふ・・・ ふあああん わあああん!／

火がついたように泣き出したジゼルだが それよりも・・・

「ジゼルに羽が生えたっ?!」

‘これは ナータちゃんたち暗竜の翼とおなじ 不安の証のものね

昔の竜にはなかったし 火竜で見るのは はじめてだわ’

だが この羽から感じる微かな禍々しさ・ ・ ・ 竜のものというよりも魔族のものに

近いようだ

やはり 子というのはどこか親に似るものだな・ ・ ・

『ハドラー そんなことで喜んでないで すぐにジゼルを抱いてあげてください!』

「フム まあ試してみるか・ ・ ・」

ジゼルを拾い上げてみると・ ・ ・

ふう・ ・ ・

と 羽は跡形もなく消えた

不安が解消されたということか ピタリと泣きやんだしな

「まだまだジゼルには このオレが知らんことを多く秘めているのだろうな クク

クツ」

‘ええ 子竜ちゃんの魅力はまだまだ これからですよ

ハドラーさんも 楽しそうでなによりです’

補佐竜のはじまり

ジゼルの祝いの宴が終わり 一夜明けた

いまだ眠り続けつつもオレの服の腹部を離さないジゼルだが 朝食の支度がある為
そのまま上からエプロンを装備した

足元が見えにくいがこの勝手をおぼえた台所なら目をつぶっても支障はなからう

ゴン

と思ったそばから 手を洗う際に おそらくジゼルの頭部をぶつけてしまった
『なにやってるんですか!!』

いや スマン・・・ まだハイテンション状態の聖母竜の怒鳴り声が頭に響く
エプロン越しにぶつけた場所をなでた限り異常はなさそうだ

『はやくホイミ（回復呪文）を』

「過保護が過ぎるぞ聖母竜この程度にホイミを使わんで」

「どうしました？ ハドラーさん」

すでに朝食の準備をしていたマシエルがやってきた

「大したことではない ジゼルの頭をここにぶつけてしまつてな

聖母竜が回復魔法を使えとうるさいだけだ

別に異常はない上 ジゼルも声をあげんし必要ないだろう」

ホイミは身体にじかにふれなければ効果はない 余計な手間が増えるだけだ

「ならハドラーさん いたい の いたい の とんでけーっ

はい これで痛みがひくはずです なおるわけではないですけど」

「ほう 今のも竜術か わずかに力を感じたが」

「はい 簡単な術ですし 力をつかわなくてもとんでいった気がしますから

今度からハドラーさんが 使ってあげてくださいいね」

「オレがか?!」

素直にホイミをしておけばよかったか・・・

『私がつかっても効くでしょうか』

次の機会にでもやってみる・・・ やれやれようやく準備をはじめられそうだな・・・

／＼／＼いただきまーす／＼

（あれ？ ハドラーさん おなかどうしたの？ ジゼルはー？）

「ああそういえば そのままだったな」

エプロンを外すと ジゼルはすでに目を覚ましていた

意外とエプロンの中が気に入っていたのだろうか

《ジゼルおはよー 朝ごはんたべよ》

マータがジゼルの口元にトマトをもってきた

「お前 自分が嫌いなものを押し付けてるだけではあるまいな」

《・・・そんなことないよ》

「マータはお姉ちゃんだから おいしく食べてるところを見せればジゼルはきつと食べてくれるよ」

《も もちろん ほらジゼル トマトおいしよー》

パクツ

ニコツ

苦手なはずのトマトをほうばり ジゼルに笑顔を向けるマータ なかなか根性を見せるではないか・・・

それを見たジゼルも 目の前の小皿のサラダに手をのばし トマトを食べてみた

「よい食べっぷりではないか このサラダはオレが調理したものだ

そのようにうまそうに食えば オレも気分がいい」

《モリモリ・・・》

生野菜が苦手なはずのマータも 大皿から積極的にサラダをとって食べている

それにつられるように ジゼルも時間をかけながらも小皿のついていたサラダを完

食した

昨日の宴よりも食がすすんでいるのはよい傾向だろう

『そうですね やはりマシエルの子竜たちがいるのは いい影響があるようですね』
などと考えていると

トントン

家の出入り口側のドアからノック音が聞こえた この気配・・・ 竜だな

「はい どうぞ」

〈おはようございます

マシエルさんからの手紙でハドラーさんの子竜ちゃん・・・ジゼルが孵ったのがわかったから

お祝いもつて来ました

〈あま〜い果物の砂糖漬け

みんなの分もあるから 大きな瓶で持ってきたよ ロイおつかれさま

来客は木竜家の補佐竜ノイとロイだった

しかし 一晩でもう他の家に知れわたっていたのか これは他にも来客がくるか
へカディオの言ったとおり ちょうど朝食が終わる頃合だったみたいだね

へうちは いつもより早めに朝食をすませたとはいえ

こんなにもいいタイミングに合わせるのは流石よね

「ふたりともお疲れ様 朝食すませてるなら ゆっくりできるんでしょ

どうぞ 中にはいつて」

マシエルが二人を家に促しているところで さらに近づいてくる気配があつた これをまた・・・

「おつはよーっつ ジゼル瞬つたつてーっ！ あ！ ノイとロイもお祝い?!」

／おいわい／

アグリナがヤチとパンを抱えてやってきた 朝食が終わつた後に主食パンを持って来るあたり

木竜家とは逆だな まあ昼食に食べばいいことだが

「アグリナとヤチもいらつしやい 二人は朝ごはん食べた?」

「ええと まだ・・・」

／まだー／

「じゃあ 入つて食べていつて まだ朝食かたづけてないし」

「やつた マシエルのごはん!」

／わーい いいにおい／

ほう それが狙いなら こやつ読みの読みも捨てたものでもないな

へあつ あつちから歩いてきてるの ロービィとエリーゼじゃないの？

「あー ホントだ ロービィが持つてるのは本かな」

へあの二人ほんと仲いいねー ここに来るまで手をつないでたかもね〜

やれやれ この調子では 今日是一段とにぎやかになりそうだな

ならば・・・

「ジゼルよ 今日お前に会いにきた者たちに 自分で挨拶しろ」

『ジゼルは卵から孵ったばかりですよ まだしゃべれません』

「自分の足で立って 一礼する それで合格だ」

『それだってまだ・・・』

「歩けとまではいわん だがこやつは このでかい足に太い尻尾の3本で支えるのだから問題なからう」

ジゼルよ やってみせろ」

ロイたちが家に入ってきたのを見計らって ジゼルをオレのひぎの上から床に降りし 離れた

バサッ

ジゼルの背に例の翼が生えた

／＼ええっ ジゼルに暗竜みたいな羽が生えた?!／＼

ぐら・・・

びたん!

みなの驚きの声にジゼルも驚いたのか それとも離れたオレに気をとられたのか
あつさりとバランスを崩し顔面から転んだ

『ジゼル!』

落ち着け聖母竜

「ジゼルよ オレは手を貸さん そして誰にも手はださせん

自らの力で立つてみせろ」

ジゼルは短い手足をバタバタさせているが状況が好転する様子はない

まわりの者どもも 不安そうな顔を向けているが とりあえず手を貸す様子はない

が・・・

・・・ジゼルの動きが段々にぶくなってきたようだ

〔ハドラーさん・・・!?!〕

「ジゼルよ これからお前が オレの補佐竜として生きていくのであれば

まずはオレの横に立つことだ

それから はじまるのだ」

\\!!／

ジゼルがオレの言葉に明らかに反応を示した

そして力を振り絞るようにテーブルの足につかまり 一気に立ち上がった
そしてテーブルからも手を離し アグリナたちに向きなおった

そこではじめてジゼルの顔をしっかりと見れたのか

「うわ ジゼルかわいい♡」

「ほんとうだ この頃から美人さんっているんだねー」

「ローイ なにリリックみたいなこと言ってるの!」

《すごい もう立てるなんて・・・》

【すごい・・・の?】

《そんな例 本でも読んだことないよ》

【それよりその羽だ 聞いてないぞ ハドラー】

「言ってなかったか? ああそういうえば以前見たときいたのはフェルリだけだったか」

「やっぱり変種なのかな?」

だが これで終わりではないのだ

「ジゼル一礼だ」

『みんなに向かって頭を下げますよ』

ペーン

ジゼルが頭を下げた

ベタン!!

二頭身とはいえ 頭がでかすぎたのか・・・ また顔面からこけた

「・・・まあ いいだろう」

ジゼルに声をかけてやると

「ハドラーさん さっきの術かけてあげてください」

マシエルからとんでもない言葉がでた

「うぐぐつ・・・!!」

「ほらジゼルががんばったんだし」

・・・聖母竜出番だぞ!!

『わたしは 役に立ちませんよ』

・・・ちつ こんなときだけ役立たずアピールか

／ハドラーさん ごほうび ごほうび わくわく／

この程度で褒美など・・・ まあよい折角の新しい術だ試してみるか

ジゼルに手をかざし・・・

「い、 いたい の いたい の とんでいけー・・・」

／♡!!／

術がよほど効いたのかジゼルがオレの足にとびついてきた

(すごい もうジャンプまでできるんだ 風竜のおれでも時間かかったのに!)
まあジゼルの成長を促したようなら 今回だけはよしとするか・・・

ジゼルはレベルがあがった

ちからが2あがった

すばやさが3あがった

みのまもりが1あがった

たいりよくが2あがった

かしこさが3あがった

うんのよさが3あがった

さいだいHPが 3ふえた!

さいだいMPが 2ふえた!

1Pの スキルポイントを かくとく!

ジゼルのメイドが スキルアップした!

エプロン系のそうびで守備力+5

風竜家勢ぞろい マシエルの兄妹たち

ヒュウウウ・・・

すどん

「わあ もう大勢いるね

あ、ハドラーさん 風竜家みんなでお祝いにきました」

風竜術士ミリュウが風竜4人 人間1人を連れて飛んできた

『ミリュウとグレイス以外は はじめて見る顔ですね』

「そうか ジゼル 挨拶しろ」

ペコリ

今度は体勢を崩すことはなかった

・・・これでオレにつかまっていなければ文句なかったが

「ええい、離れんか ジゼル」

＼♡／

「すげーっっっ」

ジゼル きのう うまれたのにもう立てんのか!?

ちわっ ふーなだっ よろしくなっ」

「フアナはボクの妹なんです」

ジゼルに最初に挨拶した小娘は 風竜術士ミリュウの妹だったのか

まだ少年竜よりも幼竜に近い背丈だ 容姿もミリュウによく似ている

ミリュウは初対面から笑顔を絶やさんやつだったけど どうやら風竜家そのものが
そういう気風なのだろう

「そしてミリュウさんが僕の兄さんなので 風竜家はみんな僕にとつても兄妹なんです」

マシエルの物言いからすると どうやら風竜家に住んでいた時期もあるようだな
「おっちゃんがじぜるの とーちゃんか？ そっくりだな！」

かわいい方のおんちゃんの家に住んでるんだな

似てるか ジゼルとオレが？

まだオレにつかまり立ちしているジゼルに あの羽は生えていない
少なくとも顔は似ていないようだが・・・

／　　＼
　　＼　　／
　　／　　＼
　　＼　　／

ジゼルの顔を見てみると なにやらジゼルが喜んでるようだ

（においがおんなじですよ ジゼルとハドラーさん

あたしはジエン

師匠の補佐竜だよーっ)

子竜の中では一番大きい風竜が名乗った　そういえばサータも似たようなこと言っていたな

やはり補佐竜は成長が著しいな

(あたしは　ロツ・・・ロツタルク　でも　よぶときはロツティつてよんでねジゼルっ)

『男性名のような女の子ですね』

多分本人も気にしているのだろう

(おれはグレイス　こっちはゼイン)

武術訓練に来ていた少年竜のグレイスと　いっしょにいる幼竜がゼインか

まだジゼルより少し大きい程度だが　やはり立つ姿に安定感があるが・・・

「やはり　そのでかい上に短い足では歩くのが不便そうだな」

「そうですね　やつぱり幼竜の内は速く走ったりは苦手みたいですけど

風竜は飛ぶのが得意ですから　ゼインくんも家の周りなら一人で飛べますよ」

「ほう　それは興味深いな　そうだ　たしかサータが言うにはジゼルには

風の力もあるらしい

「この機会に　ひとつ見てやってくれんか」

(ああ　そういえばたしかに少し力を感じますね

じゃあ ちよつといっしよに遊んでみましようか

フアナ ジェンさん ロツタルクさん グレイスくん ゼインくん

ジゼルさんといっしよに 空を飛んでみようか)

／＼はーいっつ／／

〔サータも いったおいで ジゼルちゃんをよろしくね〕

(おうっ いこうジゼル)

「行つてこい ジゼル」

ジゼルを促し風竜たちの 輪にいれた 渋々といったところなのだろう

やはり背に不安をあらわす羽がでていた

だがいつまでもオレにくつついては強くなれん

今がどれほど弱かろうと 努力次第で 強くなれる可能性があることをマシエルの

子竜たちが

そして何より・・・我が生涯の宿敵アバンの使徒たちが見せてくれたからな

(わー ジゼル 暗竜みたいな羽がある！すごい)

(かつこいいな ししよー おれにもあれ生えないのか?)

〔ゼインくんも元竜になれば立派な羽があるよ〕

元竜、たしか竜本来の巨大な オレがよく知る方の姿だったな

「この竜は生まれた頃から竜人化術をかけられ 人間サイズのままが一般的で元竜になることなく一生を過ごすことも珍しくないとか

・・・といった内容のことをアグリナが自慢げに話しているが すでにマシエルの家で読んだ

基本竜術の本に書いてあった

「あんちゃん ふーなもつ ふーなも羽あんのか？」

ふーなもほしーぞ

「あははっ そーだね あつたら空を飛ぶのも もつと楽しくなりそうだね
さあ それじゃ みんなで飛んでみようか」

／＼／＼のっ／

ブワアア

ヒュウウウウウツ

フワアア・・・

「ほう 風竜たちが 巻き起こす大風か」

「すごい ねえっ あれにあたしが入ったら いっしょに飛べるの？」

「風竜術以外にも空を飛べるものがあるから 練習すればできるよ」

「成竜になったメオも飛んでたね」

《で・・・でも地竜にとつては 飛べなくても 不便はないし

アータは前に飛んだけど》

《あれはとつさだったし すごい怖かったよ・・・》

〈アータすごい 地竜は高いところが苦手で 飛行術も習ってなかったのに〉

アグリナも空を飛んでみたいのか アータ達の言うように

向き不向きの程度はあれ どうやら飛ぶこと自体は可能なのだろう

「ロービィは この大地の上ならどこにだっていっしょに連れて行ってくれるって 約束してくれた

ロービィも・・・すごい ロービィ・・・やさしい ロービィ・・・勇気ある

ロービィ・・・かっこいい！

ぼっ

《が がんばるよ！ エリーゼ!!》

ロービィとエリーゼがまた二人の世界をつくっていた あの空気はマシエル家では
味わえんな

まあ それはいいとして・・・

風竜家の連中の笑顔の中 ジゼルは手足や羽をバタつかせるばかりで不安な様子の

ままだ

『ハドラー!』

「例え墜落しようとして、オレは手を貸す気はない……」

ジゼルのレベルアップの好機を潰すこともなからう

「……だが風竜家総出で作り上げた大風、間近で見る好機でもある

直接手を貸すわけではないが、オレも飛んでみるとしよう

トベルーラ（飛翔呪文）！」

ギョーン

「ほう、これほどの風の力でありながら、バギ（真空呪文）や台風のような破壊を生まん

ぬるい風だ

なるほど、これは面白い、ジゼルが不安になる気持ちかわからん」

＼！　　／
　　！　　／
　　！　　／

ジゼルがオレの声で気付いたのか振り向いて手を振っている

オレはこれ以上近づくと気はない、たとえミリユウ達に招かれようと、やつらから近

づこうとも

距離はとるつもりだ……が……

ミリュウとジエンがジゼルに何か話している　風で声は聞こえず口元もよく見えな
いが

「ジゼルをとりまく風が変わりはじめた　しかもどうやらジゼル自身がコントロー
ルしている?!

ギユイン

ーードン!!

「ぐっ!!」

オレの胸元に風の弾丸が突っ込んできた

無論　その正体はジゼルだ　そのままオレの胸に頬ずりのようなことをしている
背中の中も　もう消えていた

「今のは　お前が自分でやったのか?」

／　　／　　／

ジゼルはオレの質問に答えているつもりなのか　それとも聞いていないのか
変わらずオレにくっついてる

／　　／　　／　　／　　／

「どうやら風竜家の連中の笑顔と歓声から　本当に自力で飛んだようだ
「やれば　できるではないか」

／　　／

ジゼルにも風竜家の笑顔が移ったようだ

ジゼルはレベルがあがった
ちからが1あがった
すばやさが3あがった
みのまもりが2あがった
たいりよくが2あがった
かしこさが1あがった
うんのよさが3あがった
さいだいHPが2ふえた！
さいだいMPが1ふえた！
ジゼルダイブをおぼえた
1Pの スキルポイントを かくとく！
ジゼルのメイドが スキルアップした！
スマイルをおぼえた

ハドラー 新たな楽しみ

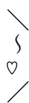
風竜たちとジゼルが 地上に降りてきた頃 水竜家から補佐竜リリック 光竜家から補佐竜マリエルが

ジゼルの祝いにやってきたのを機にささやかながら茶会をはじめた

結局これでコーセルテルの全七竜家から 祝いの使者がきたことになる

「やはり木竜家の持ってきた果物の砂糖漬けはなかなかの出来だな ジゼルの反応も上々だ」

へありがとうございます そう言ってもらえると持ってきた甲斐がありました
カデイオ達も喜びますよ



ジゼルはオレのひぎの上で 夢中で砂糖漬けを手づかみで食べている

砂糖をポロポロこぼしているが オレのエプロンがいい仕事をしている

《ハドラーさん ぼくが持ってきた包みを開けてみてください》

ロービーが地竜家の土産を開けるようにすすめる

『そういえばまだ 中身を見てないですね 知恵の竜と呼ばれる地竜のお祝いの品

「アータが好きな本などでしようかね」

まあ そんなところだろう

（あ やっぱり本だ それも『六代目風竜王（ロツタルク）の冒険記』だ うちにもあるよ！

そのお話おもしろいから おぼえてるもん これより小さいけど）

「ロツタルクというところの風竜と同じ名前だな」

（うっ）

先ほど ロツタルクと名乗った風竜の小娘がうめく

「ええ ロツタルクさんの名前に限らずボクやファナ ジェンさんたちの名前も

歴代の風竜王や風竜術士からとっているんです」

『それで名前の雰囲気と実際の性別にズレを感じる子もいるのですね』

《内容は多分マシエルさんが 持っているのとほとんど同じだろうけど

これは本じゃなくて 紙芝居なんだ 本より大きくて重いから多分地竜家にしかないはずだよ》

成る程 たしかにこの重さと量ではマシエルには いささか負担が大きく 最後ま

で読むのは一苦労だろう

重さを感じないアータでもこのサイズでは手が届かない

結果として体格のある竜術士ランバルスや成長した地竜がいる地竜家にのみ ある品なのだろう

《ハドラーさんなら 問題なく使えるだろうと ランバルス師匠がおすすめたので》
「たしかに この程度の重さはオレにとつてなら問題にならんが」

紙芝居などオレは見たことも聞いたこともないから どう使えばよいのだ?」

「じゃあ 僕がちよつと最初だけやってみせますから ハドラーさんもやってみてください」

そういつて紙芝居をうけとつたマシエルが子竜たちを テーブルを挟んで自分とは逆側に移動させた

『めずらしいですね マシエルが自分から 子竜たちを離すように移動させるのは 読み聞かせなら よく聞こえるように自分のところに集めるのに』

たしかに だがこれは興味深いな・・・

.....

マシエルが紙芝居をはじめた

内容は 大昔 風竜族の王の冒険譚のようだ

子竜向けに脚色されているようだが 史実をもとにし 歴史を身近に感じさせようというものだろうか

『みんな聞き入っているようですね』

マシエルが紙芝居の絵を見せながら 裏から内容を朗読していく

その声は聞くものを警戒させない いつもゆるい声で

時折 紙芝居の裏から子竜たちの様子をうかがっている

おそらく あの紙の裏に内容が書いてあるのだろう なかなか興味深いものだ

だがオレならば・・・ と考えをめぐらそうとした矢先 物語の冒頭部分が終わり

マシエルがオレを手招きした 交代しろということだろう

ジゼルを椅子に座らせマシエルと代わる やはり 紙の裏に内容が書いてある

マシエルから紙芝居を読むときの注意事項を聞き いやいよオレの定番だ

先ほどまでの空気を・・・

変える！

・・・！

・・・！！

・・・！！！！

そして 最後の一枚を読み終えたところで
 ！！！！
 ！！！！

／＼
 パチパチパチパチ！！
 ／＼

(すごい！ マシエルに読んでもらったときと 全然違う!!)

《内容はほとんど同じだよ でも たしかに 全然違った気がする》

マシエルの読み聞かせでは表現されにくかった 部分を強調するように意識したが
 どうやらサータやアータをはじめ 子竜たちにも通じたようだ

〈すごく こわいときなんか もうダメって 何度も思ったもんね〉

「ヤチが泣いちゃったから ハータやカータはがんばったけど

わたしもちよつと ふるえちやったもんね」

〈アグリナさんも？ 実は私も・・・〉

〈それでノイ さつきからずつとロイにつかまってるのね〉

〈え!? いや タータこれは?!〉

魔王として 人間たちに恐怖を与えていた経験が生きたようだな

『なんの経験が生きてくるか わからないものですね』

《風竜王さんと人間のお姫様が結婚するところも すごいドキドキした》

【・・・よかった】

【・・・・・・・・】

《正直ハドラーさんが あのシーンをあんなに熱演するとは思いませんでした》

〔素敵なシーンでしたねリリックさん！ ジゼルもそう思います?〕

オレ自身に結婚歴はないが バランやアバンから馴れ初めやのろけ話のようなものを聞く機会が多く

面白いものだったので 多少影響もあったのだろう

ジゼルも楽しんでいたようだ

『バランも意外とそういうこと 話しますよね まあダイが聞きたがりましたし』

《マシエルさんよりも 師匠が読んでくれた感じに近いみたい

師匠 冒険者をしてたみたいだから 冒険譚に生かせるのかな》

やはりあの地竜術士は冒険者だったか レベルもかなりのものだろう

紙芝居というのものなかなか面白いものだったが

「これならオレでも 作れそうだな」

物語は実話を多少脚色すればいくらでも作れそうな上

絵も少々描ける ヒマを見つけて試みに作ってみるか

（ハドラーさん 紙芝居も作れるのか!? どんな話 どんな話?!）

『ジゼルたちも 期待してますね 私も少し楽しみですが どうします?』

う そうだな やはりはじめて作るものは実体験をもとにしたほうが かきやすいだろ

と その上でこやつらの 興味をひきそうな 「竜」にまつわる冒険譚のような話となる

・ ・ ・ニヤリ

・ ・ 「ドラゴンクエスト」というのはどうだ？」

／／ おおー／／

またひとつ楽しみができたわ

暗竜家のお茶会 前編

ジゼルの祝いが集まった翌日 オレとジゼルは祝い返しのため 暗竜家への道を歩いていた

「お前をこうして 外へ連れて歩くのははじめてだな」

『卵のときは よく連れて出てましたけど』

こうして 殻がない状態で見える景色はいかがです ジゼル』

／＼♡／

ジゼルはオレに顔をこすりつけるばかりで あまり周りを見ているようではないな
自分で歩けばいいのだが・・・

まだ歩ける段階ではない上に まだ自由に飛べん 仕方なく小脇に抱えている
いつそのまま 追っていけば自力で飛べるようになりそうな気もするが

『ダメです』

「わかった わかった ……とところで暗竜家に着いたようだな」

崩れた遺跡の中に 外見上はそう変わらないが 人の気配のする建物がひとつ
これが話に聞いた 暗竜家なのだろう

7種の竜の中で最強の力を持つ暗竜 是非一度来てみたかった家だ

この家にも生まれたばかりの子竜がいるが 生まれてから体がやや弱いとのことで 訪問を見送っていたのだが ジゼルの祝いの返礼と 顔合わせの名分ができたこの機会

「ようやくこれたな 最強の暗竜のみが住む家 なかなか風情のある佇まいではないか」

『崩れかかっているように 見えるのですが ああエリーゼが見えますね

あともう一人』

帽子をかぶった男が一人 人間・・・か？ 魔族のような気配も感じるが

まあオレも あまり人のことはいえんが

「ようこそ暗竜家に ハドラーさん 私は先代暗竜術士メリアの息子でエリーゼたちの兄

郵便屋のウィルフと申します」

「ほう 竜術士ではない人間もいるのだな」

「私はここに住んでるわけではなく 休暇の時だけ帰っているのよ

それより上がってください あ この子がジゼルちゃんですね はじめまして」

「失礼しよう ああこれは手土産の茶葉だ 持っていけ 水出しでも飲めるぞ」

ジゼルを抱えていたのとは逆の腕で持っていた荷物を渡した家に入ると外見とは違い きれいに片付けられたものだった 生きている遺跡やダンジョンではよくあることだがな

中で待っていたのは以前顔を合わせた暗竜術士のメリアと 術服を着た男と腕に抱いている子竜

そして人間の女 ……ム？たしかに外見は人間だが違うな モシヤス（変身呪文）いや

これがおそらく人化術の完成形か

〔いらつしやいませ ハドラーさん こちらが今の暗竜術士の…〕

〔タイム・フランテルです この子が私の一番竜プレアです

卵が孵っていますので 形としては暗竜術士となりますがまだまだこれから修業の身です

ご迷惑も多々おかけするでしょうが どうぞよろしく願います〕

／まあ おれの方が そっちのチビより年上だからな たまーになら相手をして やつてもいい／

タイムにプレアか 新任の竜術士と一番竜の割には アグリナとは髄分様子がちがうな

「……メリア母さんの補佐竜のラルカ……よろしく」

やはり人間ではなく竜だったか これほど姿を人間に似せられるとは中々の術だな
しかし 暗竜が三人か その気になれば世界を滅ぼしかねない力を秘めているそう
だが

それを制御する暗竜術士も 相当の手馴れということか

「オレはハドラー こやつがジゼル 後オレの中に聖母竜というやつがいる よろしく
頼む」

『多分聞こえてないでしょうが 聖母竜です どうぞよろしくおねがいます』

ペコリ ニコッ

ジゼルも一礼し笑顔を見せた

「ほう出来るようになったな」

ニコニコ

ジゼルがオレにも笑顔を向けているが それはさておき

「ご丁寧ありがとうございます ハドラーさん達もこちらの席にどうぞ

今 お茶をお出します 折角ですからハドラーさんのお土産のお茶をだしますね
ラルカ お願いね」

コク

ラルカが淹れた茶は冷たく 外の夏の暑さとは正反対だ

「この冷えた茶も竜術によるものか？」

「ええ 暗竜術だけでも 物を冷やしたりはできますから」

「やはり 竜術というのは便利なものだな たしかジゼルにも暗の力があると聞いてい
る

いずれば 学ばせてみるか・・・」

まだ額に生まれたての証である 鱗の模様が残るジゼルの潜在能力に 何ともいえ
ん感情が湧く

「おいしいですね このお茶 私はコーセルテルの外で働いてますけど はじめて飲む
味です

コーセルテルで作ったんですか？」

「ああ 大した量が採取できなかつたのだが マシエル達が竜術で増やし煎じたおかげ
で

このとおり 水でも十分な味がでる これをジゼルの祝い返しに各家に配ろうと
思っている」

「それは喜ばれるでしょうね コーセルテルは暑すぎる日がないとはいえ

それでも夏場は参っている子竜もいますから 冷たい水ですぐに飲めるお茶はあり

がたいですよ」

【お茶葉がどこで採れるのか知りたい・・・】

なかなか好評だな　これは気分がいい　もつとも　ほぼマシエルたちの手柄だが・・・
『アバンにも感謝しないと・・・』

いや　それはいい

茶を飲みながら　和やかな時が過ぎる中・・・

〔そうだ　ハドラーさん　エリーゼから聞いたんですが　紙芝居を作るそうですね

どんな内容か聞いてもいいですか？〕

ウイルフの一言で　ここに最初の紙芝居が形になりはじめた・・・

暗竜家のお茶会 後編

ジゼルをラルカ達他の暗竜に任せ 別室に移動させ
メリアたちと紙芝居の内容の打ち合わせをはじめた

「オレの構想ではまず・・・」

- ・ 一人の魔族が力を求め躍起になる
- ・ 地道な修業の日々の中 年齢による伸び悩みを意識する
- ・ 力の象徴である『竜』の力を研究
- ・ 竜の騎士の存在を知る
- ・ 竜化術（ドラゴラム）を習得しようとするが失敗するも

火炎系呪文（メラ）などの攻撃呪文や飛翔呪文（トベルーラ）など魔法力に磨きをかける

- ・ 禁呪を習得し仮初の命を生み出すことに成功
- ・ また自らの邪悪な意志で怪物を配下にすることができるようになる
- ・ 直接 竜を配下にする
- ・ 魔王を名乗り世界征服に乗り出す

「・・・といったところだ」

これがオレの過去話であることはあえて明言を避けたが

魔王を名乗るまでの約300年程のレベル上げの過程の中から竜に関するものを中心に多少脚色した

「なるほど コーセルテルではまず見かけないダークヒーロー物ですね

ぼくは結構好きだな」

ウィルフが童心に戻ったのか一人称が変わっていた 手ごたえはあったようだな
「人間社会では子供向けでも人気がありそうな題材ですね 私も面白いと思います」

タイムも興味を示したが

「・・・世界征服というのは ムリがありませんか？

伸び悩みを意識するほどの年齢になってまでこんなバカな夢を・・・」

メリアが難色を示していた

「いや オレも魔族に生まれた身だ この気持ちはわかる

貪欲に力を求め 世界征服の野望に燃える この魔族にとって命をかけるに値するものなのだ」

まあ そもそもオレのことなのだから当たり前前なのだが

『あなたみたいの方がいるから竜の騎士が必要になるのですが・・・』

〔・・・ハドラーさん あなたはこの紙芝居をとおして 子竜たちに

いえ ジゼルに何を伝えたいのですか？』

メリアの問いにオレは・・・

「ただ力を求めた者の末路を知り・・・

そしてその上で あやつには強くなつてほしいのだ」

〔末路？ それではこの話はこれで終わりではないのですか？〕

「ああ 少なくともこの魔族が闘いの中で死ぬ瞬間までは かき続けるつもりだ」

オレはこの紙芝居を通じ

オレを・・・ 宿敵たちを・・・ ジゼルの兄妹たちを知り・・・

このオレを超えるほど強くなつてほしいのだ

『逆効果ではないのですか？』

おまえはジゼルを見くびっているのではないか？

・・・オレの子だぞ この程度で怖気づくような者など オレの子には一人もおらん

わ

『私の子でもあるのですよ もちろん私も信じていますよ』

〔昔—— 魔族の若者が一人 壮大でバカげた野望をいだいて魔族の里を飛び出した

わ

そして人間の村で一人の娘と出会ったの

村に色々思うところがあつた娘は ついそのバカな若者について行ってしまった…

このウィルフの父 甲斐性なしの私の連れ合いのことです」

「か…・母さん」

なるほど このウィルフは人間と魔族のハーフか まあ あることだな

「この子は あの人のムチャな冒険話をよろこんでくれるから よくはなしていたわ

はずかしい話ばかりだからあえて お父さんのこととは言えなかつたけど あなた

も…・」

どうやらメリアは気付いたようだな 最後の台詞は周りに聞こえないように囁いた

つもりだろうが

オレの耳には余裕で聞き取れた

『そのとがった大きい耳は便利ですね』

「私も協力します ハドラーさん

ラルカとエリーゼには事情があつて最後まで見れないでしょうが

プレアにも読み聞かせてくださいいね」

「ああ 約束しようメリア 協力に感謝する」

「私も協力させてください。これでも天文学者のはしくれ、著作もいくつかあります。

子供向けも書いたことがありますから少しはお役に立てるか」と

「ぼくも出来る限り、お手伝いします。ぼくも一人の魔人としてこの物語が気になりますから」

帽子をとったウィルフの額には第三の目。そして頭には角があった。

暗竜家にこれほど、心強い協力者ができるとはな・・・

ともあれ、紙芝居の作成にとりかかった。実際に紙芝居に触れたことのあるメリア親子と

子供向けの本を書いたことがあるティムの協力は大きく

一人では気付きそうもない問題点も多く解決し、はじめての紙芝居作りは思いのほか順調に進んだ

・・・

コンコン

「メリア母さん、そろそろ夕飯の準備をはじめよ」

「もうそんな時間だったか」

外をみれば、日も大分傾いていた

「つい熱中してしまいましたね 今日はこのくらいにしておきましょう」

「そうだな まだ序章だが おかげで格好がついた・・・ありがとう」

『あなたのこういうときちゃんとお礼が言えるのは ジゼルも似るといいのですが』
いらんことを・・・ム？

ギユン！ ドーン！

・・・オレの胸にまたジゼルが飛び込んできた

「フン この程度でオレにダメージはあたえられんぞ」

「うわっ ラルカ!!? エリーゼ!!?」

向こうではラルカとエリーゼがウィルフに飛びついていて

「・・・ついジゼルにつられて」

「・・・みんなでクツキーを焼いた プレアもジゼルも手伝った」

／ おっさんにもいっただけやる ／

「ああ ありがとうプレア がんばったんだね」

プレアもタイムのもとに自分で歩いてきた

それを見守るように微笑んでいるメリア・・・どこの家も色々あるのだな

『・・・ハドラー 私もジゼルが手伝ったクッキーを食べてみたいのですが』

・・・ドラゴラムは場所を選ぶからな またの機会にしておけ

とりあえずひとつだけ とっておいたがそもそもあの状態でものが食えるのか？

「では 今回できたところまでをここでお披露目してから 帰るとするか」

／！／

／ まあ 菓子をつまむついでに聞いてやるか

／ わくわくつ

「・・・ロービィも楽しみにしてた ちゃんと聞く」

「ラルカも見ておいで ぼくも手伝ったんだ 楽しんでほしいな」

「おに・・・ ウイルフさんもいっしょに」

「ああ うん それはいいけど 家ではお兄ちゃんでもいいんだよ」

【はいウイルフさん】

ウイルフがわたわたしているが 無視して読み上げた

オレのかつての戦いの日々

ドラゴンクエスト ～序章～ を・・・

ジゼルはレベルがあがった

ちからが1あがった

すばやさが2あがった

みのまもりが1あがった

たいりよくが1あがった

かしこさが3あがった

うんのよさが2あがった

さいだいHPが 2ふえた！

さいだいMPが 3ふえた！

1Pの スキルポイントを かくとく！

ジゼルのドラゴンが スキルアップした！

あまがみをおぼえた

竜の夢

「……ム？」

オレにしがみついたまま寝ているジゼルの額にある 鱗のような模様が消えていった

「まあ おめでとうございます ジゼルちゃんがまたひとつ成長しましたね、

「成長なのかこれは」

『ヤチやプレアたちのようですね

手の甲の模様もなくなって つるつるおててとおでこになりました』

「そろそろ 心言葉でおはなしできるようになりますよ、

「心言葉？ 念話のようなものか？ ヤチたちがやっていたな

そういうばお前もやっているな聖母竜 竜の姿のときと現在では多少違うようだが」

『と、いうことは 私はジゼルと直接話ができるようになるのですか!?!』

「どうでしょう？ ジゼルちゃんが 起きたときに話かけてみては どうでしょう

？、

『……！！ ハドラー 一生のお願いです！ ジゼルが起きたときにドラゴ

ラムを使つてください!』

「竜形態での心言葉を先に試そうというのか?」

・
・
・

「・・・なんだそんなことか 別にかまわんが

おまえたしかダイのときにもそんなことを言つてなかつたか?」

『あのとときは自重してしまいました が 今度は後悔したくないので

あ もう目を覚ましそうです はやく!!』

「仕方ない・・・ すまんがフェルリ ジゼルとともに少し 下がつてくれ

竜化すると 少々でかくなるのでな まあこの地下室ならどうかおさまるはずだ

が」

‘ わかりました ではジゼルちゃんをお預かりします ’

ジゼルを部屋の隅に置きフェルリに任せた

幽霊で実体がないもの 流石は元竜王竜術士 実子と竜王を育てた経験者

頼りになるやつだ

「ではやるぞ
・
・
・ド・ラ・ゴ・ラ・ム!!」

ゴアアアアア

む 呪文は発動したが 抑えられる感触だ!?

そういうえば ここは術部屋 術の練習などのために 力を安定させ暴走させない仕掛けか?!

ズウウン……

『以前よりも身体が小さいですね この地下室にはちょうどよいですが
フェルリ これが本来の私に近い姿です

こうやって直接顔を合わせるのは はじめてですね』

‘ええ 聖母竜さん やっぱりおきれいですね

ジゼルちゃんも 目を覚ましそうです さあ……

／ …… ／

目を覚まし 緩慢なまばたきをするジゼルに聖母竜が顔を向け
フェルリはジゼルの視界に入らないように移動した

『ジゼル…… 私は聖母竜マザードラゴン あなたの母です』

／ ハ ／

『!?’

／ ハドラー様 どこ? ／

ズゴーーーーーン

‘あらあら’

聖母竜がひっくり帰った

こやつを狙いはジゼルの第一声に自分のことを呼んでほしいというものだった
かつて天界でダイを世話したときは バランがやや強引に自己主張して掴み取った
のを

憶えていた いや 次の機会があればと狙い続けていたようだ

「・・・まあ結局はオレの名が呼ばれたわけだが」

オレは別に狙っていたわけではなかったのだが 何か こう・・・

『・・・素直に嬉しいと言っているのですよ』

聖母竜がうらみがましいような声を出していた が・・・

／ おかあさま？ ／

『!!』

どこでそんな言葉を憶えていたのかジゼルのつぶやく声に

聖母竜にまるでライデインを受けたような衝撃が走った

『もう思い残すことはありません・・・!!』

急に満足げになり そのまま昇天しそうになった

「またんか 別に天界に召集されたわけでもないのに行くこうとするな！

お前に行かれては困る」

やれやれ・・・まったくこんなことに一喜一憂しおって

『！ そうですねこの機会にあのジゼルがつくったというお菓子を食してみたいのですがハドラーひとつだけ持って帰ってましたよね!』

ああ あったなそういえば 暗竜家でほぼラルカとエリーゼが作ったものだろうか
たしか その畳んだエプロンといっしょに置いてあったはずだが

「これですね そうだジゼルちゃん お母様に食べさせてあげてみては？」

元竜の姿では食べにくいでしょうから、

コクコク

フェルリに提案にうなずくジゼル 上機嫌だった聖母竜のテンションが更にあがり
大きく口をあけた

＼ こわい・・・ ／

ズウン・・・

聖母竜はたおれた

「・・・まあムリもあるまい いきなり目の前で巨体の竜が口を開ければ多少おびえても・・・」

「ごめんなさい聖母竜さん！ 私が余計なことを言ったばかりに！」

大丈夫ですか？

慌てるフェルリだったがそれに反応も返せずになんか

シユウウウウウ・・・

「聖母竜さん！ 聖母竜さん!!」

／ おかあさま!?

シユウウウ・・・

「心配いらん フェルリにジゼルよ やつはシヨックで少々気落ちしただけだ
その影響でオレの姿に戻ったが 別に消えたわけではない」

／ ハドラ様—!!

姿を取り戻したオレに飛びついてきたジゼル

さらにオレにかみついてきたがまるで痛みはない

たしかにこの程度の歯しか もたないものが

あの尖った牙がズラツと並んだ口をいきなり見れば 実母相手とはいえ

ひるむのは仕方なからう ・・・だからいつまで沈むな聖母竜よ

『・・・いいんですよ 結局 お菓子は食したのですし 味はわかりませんが

ジゼルにも私のことを 呼んでもらえましたし』

／ 元気でた? おかあさま

『ええ あなたのおかげです』

ハドラー様 元気でたつて!

「まあ そもそもお前のせいで沈んでいたのだが・・・」

それよりも会話はできるようだなその状態でも」

『ああ そうですね たしかに』

「よかったですね それと本当にごめんなさい、」

『いいえフェルリ 私こそ 取り乱して心配させたようで申し訳ありません』

「もう気にするな それよりもジゼルが ウトウトしだした」

まだ眠り足りなかったのだろう 夜明けまではまだ時間がある

オレも消耗した魔法力の回復のために休息が必要だ ここで休ませてもらうぞ」

「ええ もちろんどうぞゆつくりお休みください マシエルちゃん起きる時間には

私が起こしますから、」

おやすみなさいフェルリ

「まあ! もう立派なごあいさつが おりこうさんね ジゼルちゃん

はい おやすみなさい、」

笑顔で挨拶をしたジゼルを抱きしめたフェルリを余所に オレは眠りについた

間もなく ジゼルもオレにしがみついてすぐに眠った・・・

必要は成長の教師

朝食を終え ジゼルを伴い地下の術部屋 フェルリの待つ部屋に向かった

『ジゼルはまだ歩くのに不慣れなのですから 下りの階段の時は抱き上げてあげた方がいいのでは?』

「この程度の階段で竜が大事になるはずがなからう

少々の怪我なら」

ゴロ ゴロ ゴロ ゴロ ズデン

言ったそばから足を踏み外したのかジゼルが転げ落ちた

／ ぐすつ ぐすつ ひつく・・・ 〃

「見ろ 問題ない」

『たんこぶができてますよ 回復呪文を使ってください!!』

まあ 放っておいては集中力が乱れるだろうからな 治療だけはしてやるか

「動くなジゼルよ・・・ホイミ（回復呪文）」

／ハドラー様♡ ♡♡／

ジゼルはすぐに泣き止み 治療のため頭に置いた手にしがみついていた

(いまの術すごいですね ジゼルちゃん もうなんともなさそうです)

／ハドラー様すごい♡ もう全然痛くないよ／

「まだ不慣れな回復呪文だな

それよりもこれからはお前の術練習だ」

／私にもできるようになるの?! ハドラー様みたいに?!／

「お前次第だ」

こやつも心言葉とはいえ 言葉を発するようになった

ようやく・・・だな

「まずはどうするのですハドラーさん？」

私にもお手伝いできることがあればいいのですが」

「まずは こやつの潜在能力をはかってみたい

以前風竜家に飛行術を学んだが こやつは火竜 火の力でそれをはかろうと思う」

オレは部屋の床に魔方陣をかき ジゼルに魔法の契約の儀式をさせようとしたのだ

が・・・

「どうしたことだ?! 火竜でありながらメラ（火炎系呪文）の契約ができた?!」

いきなり第一段階でつまづいた・・・

『あの むしろ火竜だから契約できないのでは？』

自分で炎が出せるのですから．．．』
「ムウ．．．言われてみればたしかに

炎の息が吐けるドラゴンがメラを使うほうが珍しいな．．．
ではどうしたものか」

‘ハドラーさん 幼竜でも成竜並の力はもってます

竜術士はその力を成竜以上に引き出すことができ

子竜はその力を術士にあずけて一緒につかうことで力の使いかたをおぼえていくの
です

私は元竜王の竜術士すべての術資質をもっています

ねえジゼルちゃん 私に力をかしてくれない？ まず私が引き出して見せるから、

「ほう 大したものだ 幽霊の状態でも術が使えるのか」

‘ああつ！ うう．．．

‘ごごめんなさい術 使えせんわ．．． また忘れてました．．．

お役にたてません．．．’

しまった フェルリが泣き崩れてしまった せめて術の使い方だけでも聞きたかったが．．．

『大丈夫ですフェルリ 私などまったく役に立ちません』

＼ フェルリ元気だして 炎ぐらいだしてみせるから

＼ だってわたしは ハドラー様の補佐竜だから♡／

「フェルリよ オレは竜術は素人だ 今はお前の助言ほど価値あるものはない」

‘ ありがとうございませす みなさん……

ではハドラーさんにジゼルちゃん 竜術の基礎の力の預けかたですが……

フェルリの指導でまずはオレが術を使うことになった

ダイにマホプラウスで魔法力を高めて呪文の練習をさせていたのを思い出す……

＼ ハドラー様♡ うけとつてくださ♡い♡／

ポウ

ジゼルがオレの胸に飛び込んできて力を預けてきたのを感じた

いきなり使ったこともない火竜術では こやつの力をはかるのは難しいだろう

「ならばオレの得意呪文で試して見るか

メ…… ラ…… ゴー…… マ……!」

ホウ 大したものだ 身体にまるで負担をかけずにフィンガーフレア・ボムズ（五指

爆炎弾）が

使えるとは しかも右手で維持しながら……

「メ…… ラ…… ゴー…… マ……!」

左手でも使えるとはな・・・

メラゾーマ10発分の火力、これはオレの魔法力も合わさっているとでも大魔王バーン級ではないのか

ボオオオオツ

ボオオオオツ

『すごいですね たしかに大魔王バーンのカイザーフェニックスに匹敵するかもしれませんが』

＼ハドラー様かっこいいー！／

「又ウウウウウウツ!!」

ブシユウウウウウ・・・

ブシユウウウウウ・・・

炎を制御し火を消した この手ごたえ やはりこやつ潜在能力 面白い・・・!!

「次は お前が力を使って見せろ」とは言ってみたが メラが使えない以上どうしたものか

＼ハイ♡ メ！ ラ！ ゾー！ マ!! ／

ただオレの真似をしているジゼルに指に火がつく様子はない

「・・・！ そうだジゼル少し待ってろ」

オレは自作の紙芝居を持ってきて 竜の戦闘シーンの絵を見せた

「見ろジゼル この竜を

メラ系呪文は 魔法力をプラス方向にグングン高めたものだ

この絵のように 自分の高めた力を口から吐くようにやってみせろ」

＼ ハイ！ ハドラー様！ ・・・はー！ー！ー！／

と生あたたかそうな息を吐くジゼル・・・

こんなもの そこの猫でも吐けるぞ・・・

「道は長そうだな・・・」

『そうですね 私もプレス系の特技は使えませんし・・・

教えられることもありません』

お前が役に立つとは思っておらんが・・・

などと考えていると フェルリがジゼルに抱きついていた

『・・・どうやらジゼルにだけわかるように 念話をしているようですね』

・・・ム

＼ ！ ・・・ ・・・ !! ・・・ ・・・ !!／

一目でジゼルの力が高まっていくのがわかる

フェルリの助言の成果か 何を言ったのかは知らんが 流星竜王の竜術士だ

！くるか!?

＼ハドラー様

♡♡
!!!
／

ゴオオオオオオオオオオオオ

「ウオオオオツ!？」

ガシイイツ

「又ウン!!」

ジリ・・・ブワアツ!!

ジゼルの口からでた灼熱の炎をなんとか左手で握りつぶしたが

このオレの手が僅かに焦げた だど!？」

『ハドラーに 10の ダメージ! といったところですか

まさかあなたの手が焦げるほどの火力とは驚きですね』

‘ハドラーさん大丈夫ですか?! ごめんなさい まさかこんなことになるなんて、

＼ハドラー様!？」

ドン!

ジゼルがまたオレの胸に飛び込んできた また速度が上がってきたな

「下らん心配するな 魔炎気を操るこのオレがあ程度の炎でどうにかなるものか

精々皮一枚といったところだ」

＼ハドラー様!?あの呪文を！ さっきわたしに使ったあの呪文を 今度はわたしが

！／
「ほう それは面白いかもしれんな」

再びジゼルの呪文の契約を試してみた

今度は成功 回復呪文の方が相性がいいのか

＼ハドラー様 おてて おてて

．．．ホイミ！！／
ペアアーツ

呪文も発動し 火傷がみるみる回復していく もともと大したダメージではなかったが

すぐに完治した

『お見事ですジゼル！』

‘ すごいわ！ ジゼルちゃん！！’

．．．．．／

聖母竜たちの賛辞が聞こえていないのかオレの手をじっと見ているジゼル
「上出来だ」

回復したことをわからせるために その手でジゼルの頭をつかんでみせる

＼ハドラー様♡♡♡♡／

尻尾を振りながらも蕩けそうな顔していたジゼルだったが

ばたん

ジゼルはたおれてしまった

『ジゼル!?!』

‘ジゼルちゃん?!’

「・・・心配いらん 魔法力が尽きただけ 慣れない力を使いきったのだ 当然だろう」

‘ああ なるほど “卵がえり” ですな疲れすぎると卵の中にいた頃のように眠り続ける 幼竜特有の

これなら明日の朝には普通に目を覚ましますよ だから安心して聖母竜さん、
「今は眠るがよい そして目が覚めたときにはお前はまた一つ強くなっている」

ジゼルはレベルがあがった

ちからが2あがった

すばやさが3あがった

みのまもりが2あがった

たいりよくが1あがった

かしこさが3あがった

うんのをさが3あがった

さいだいHPが 2ふえた！

さいだいMPが 5ふえた！

しゃくねつをおぼえた！

1Pの スキルポイントを かくとく！

ジゼルのじゅもんが スキルアップした！

ホイミをおぼえた！

ジゼルお休み中・・・

術練習の疲労から「卵がえり」となったジゼルをフェルリに任せ一階に戻ると
タライを抱えたマシエルとマータがいた

「ハドラーさんお疲れ様です はじめての術練習どうでしたか

ジゼルは？」

「ああ 術練習は上出来だった

ジゼルは魔法力を使い果たしようでな

オレにしがみつくこともなく 術部屋で寝たから フェルリに任せてある」

「なるほど 卵がえりですね

そういえば いつも 寝ているときでもジゼルがいつしよでしたから

ハドラーさんが一人でいるの久しぶりですね」

「そういえば そうだったな」

『もうジゼルが生まれるより前のことが思い出せないほどですね』

それはおまえだけだ

「それではハドラーさん お洗濯お願いできますか？」

今日はいいい天気ですし今日のお留守番当番はマータですから
いっぱいやろうと思って」

他の子竜達は食後に外出したようだな

《ねえマシエル 私達が幼竜のときに着てた服もみんなとつてあるんでしょ
あれもキレイに洗ってジゼルに着てもらおうよ》

「そうだね ヤチにあげようかとも思ってたけどハータの服ならたしか・・・」

《ううん ハータの・・・火竜の服だけじゃなくて みんなの

折角七竜分もあるんだもん 女の子なんだからオシヤレにできるよ》

「なるほど じゃあ今日は めいっぱい洗濯しようか

じゃあハドラーさん マータとこの洗濯物お願いしますね

僕はみんなの古着を持って来ますから」

「ああ 助かる」

『本当ありがたいですね 色んな服を着たジゼル・・・ 楽しみです』

「さてマータ お前には礼を言わねばな」

《気にしないでハドラーさん

ジゼルが起きたら タータと二人で色んなお着替えさせるの楽しみなんだから

ジゼル可愛いから 今から楽しみ〜》

「聖母竜と同じようなことを言っているな．．．」

『多分フェルリも同じようなことを言いますよ』

《そうだ！ いっそのこと他の家の女の子にも声をかけてジゼルをモデルにベストドレッサーコンテストをやっても面白いかも》

「まあ それは好きにすればいいが．．．」

洗濯用の水を用意してくれ タライがまだ空だ」

《あ はーい》

じゃぶ じゃぶ じゃぶ．．．

「水がどんどん濁っていくな

さほど汚れていたようには見えなかったが．．．」

『これを見ると お洗濯って大事なんですね』

「マータ オレは洗ったものを 干してくる

この汚れた水を また使えるようにしておいてくれ」

《はーい》

洗濯は思いのほか はかどった なぜか今日はいつもより体が軽い

『ジゼルの卵が生まれてからはずっといっしょですよですからね

これほど離れているのは はじめてでしょう』

「このオレがああの程度の重さに 負担を感じていたわけがあるまい・・・
今干している洗濯物全とと ジゼル一人そう変わるものではないぞ」

「いやいや 子どももつてのは あれで重たいもんなんだ 久しぶりハドラーさん」

「地竜術士ランバルス・・・」

「しばらく見ないうちに もうすっかり竜術士だな」

「オレがか？」

「ああ あんたいつもそれだけ子竜を大事にしてるってことだろ？」

できてるじゃないか」

「・・・・・・・・」

『あなたがランバルスがアバンに似ているというのが わかる気がします』

「・・・何の用だランバルス マシエルなら家の中にいる」

「いや今回はあんたに用があつてな

地竜家の昼食会にあんたとジゼル アータを招待したくてな これが招待状だ」

「・・・・・・・・明日か明後日の可能な日だと？」

「ああ 実はロービイがエリーゼから例の紙芝居のことを聞いたらしくてな

ロービイだけじゃなく それを又聞きしたうちのほかの子たちも是非直接見たいと

それで地竜家全員でここにお邪魔するよりも うちに招いた方がいいだろうと

うちの補佐竜がいいだしてな・・・

そつちにも事情があるだろうから 都合のいい日を指定してほしいと

それ以外の日がよければ応相談ってわけだ」

「わかった どうせ近々 ジゼルの祝いの返礼で行く予定ではあったからな・・・

明後日がいいだろう・・・フム、今時間はあるかランバルス？」

「ああ うちの子竜はみんな頭がいい上 補佐竜は俺よりもはるかにしつかりしてるから
ら

おかげで俺は気楽に一人で出歩けるんだよな」

『流石「知恵の竜」ですね』

「うらやましいことだ なら都合がいい

紙芝居の新作をジゼルが卵がえりしている 今日の内にかいておきたい

明後日の昼食会が初披露にちようどよいし 協力しろ」

「そいつは面白そうだな いいぞ その話乗った！」

洗濯が終わったらだろ？ 俺が干しとくからとつとやってしまおう」

「ああ では頼む 洗濯が終わればマシエルに言って 紙芝居の作業に移るとしよう」

.....

これは思いがけない援軍だった

ランバルスは新作の内容的にちょうどいい協力者だ

知恵の竜の竜術士だけあって読書量も多い知恵者であり

また子竜向けに物語を脚色・演出する作業も手馴れたものだった

何より今回の主役はオレが聞いた話をもとに作りあげた人物像だったせいで前作よりも

動かしにくい上に オレよりもランバルスに近いやつだったからだ

・・・そして俺の構想をもとに新作はほぼできあがった

明日仕上げれば 明後日の昼食会にちょうど間に合うだろう・・・

「おかげで どうにか形になった ありがとう」

「俺も面白かったよ また機会があれば手伝わせてくれ

これは竜術士にとってもいい気分転換になりそうだ

俺に限らず 他の竜術士も誘ってみたらどうだ？」

「たしかに前作も暗竜家の助力がなければ完成は難しかった上

最初の構想よりもいいものが生まれたのも確かだが・・・

・・・まあ気が向けばな」

「くすっ 私でもよろしければいつでもお手伝いしますよ

ハドラーさんの紙芝居　私も楽しみですから、

「フェルリには卵がえり中のジゼルを見てくれるだけで十分助かっている」

『そうですよ　こうやって作業をジゼルのそばでやっていても

ハドラーは集中しているとまるで気にも留めませんから』

フェルリのもとで安らかな寝息をたてているジゼル

・・・オレにしがみついて寝ているときよりも気持ちよさそうに見えるな

『まあそもそもあなたにしがみついている時はほとんど顔が見えませんが

「あんたも意外と・・・」

おっと　流石にこれ以上遅くなるとうちの補佐竜が色々と言ってくるんでな帰ると

するよ

内容は内緒にしとくんで　明後日のお披露目　みんな楽しんでるよ

じゃあ　またな」

「ああ　さらばだ」

‘お気をつけて、

／・・・zzz／

ジゼルが寝ている内に完成させた方がよさそうだな・・・

地竜家の昼食会 前編

今日は地竜家の昼食会に招かれる日 朝食を終え片付けも済ませ

「さて では行くぞ アータ ジゼル 用意はいいな」

＼ はい！ハドラー様♡ ／

ジゼルはいつもの火竜の赤い服ではなくアータの古着 地竜の服を着て頭にも地竜の頭巾をしていた

ただしアータがいつも着けている地竜の牙かざりは石製の為今のジゼルには少々重過ぎるからと代わりにマータのスカーフを着けている

深い緑の色服に薄いピンク色のスカーフの組み合わせは実際見てみれば意外と悪くない

『いつもと違う服もいいですね こうやって色々な服を着たジゼルを見るのも楽しいです』

《はい 道案内は任せてください あ 地竜家へのお土産ほくが持ちますよ》
「ではこのケーキを任せた 崩さぬよう両手で持てよ」

これで片手が空いたな 紙芝居はアータには持ちにくいだろうからな

ハドラー様 私も持ちます！

「お前は 地竜家まで歩くことに注力しろ

言っておくが 例え倒れようと オレは一切手を貸さん

アータお前も手を貸すな もっともケーキで手が塞がって貸せないだろうがな」

『あなた そこまで計算して?!』

いや偶然だ

『・・・そうですか

まあ昨日 ジゼルが目を覚ましてからは一日歩く訓練をしましたから大丈夫とは思いますが』

「地竜家は マシエル家からもっとも近いと聞く

この程度歩けなければ 格闘の修業がはじめられん

まず足腰の鍛錬の基礎は 自分の足で歩くことからだ」

《ジゼルは格闘の訓練もするの!?! エレさんの武術訓練じゃなくて?》

「いずれはあの訓練にも参加させるが その前にオレが直々に稽古をつけてやる」

ハドラー様が直接♡! /

《よろこぶんだ・・・》

「それも まずは地竜家の往復ができてからだ」

《じゃあ、いつてきまーす》

・・・地竜 マシエルの家にあつた本によると

その身体は頑健にして重さを操る能力により幼竜の頃より

どんな重い物でも持つことができ、その術は大地を割り、揺らすこともできるとい
う

オレの知る力の象徴の竜のイメージにもっとも近い種族と言える

さらに磁極がわかるから、道に迷うこともなく、土に埋まっているものがわかる

という便利な術も使いこなし、知恵の竜と呼ばれるほど知識欲があり頭を使える

それでいて空も飛べるはずなのに、弱点が高いところというのは、なかなか興味深
い……

アータはその例に漏れず、マシエルの七竜の中でも一番思慮深い性格だ

実際、迷うはずもないのに、ジゼルに合わせてか、歩みは速いものではない

「アータ、ペースを上げてもいいぞ」

《すみませんハドラーさん、ケーキを崩さないようにちよつと慎重になりました

ケーキには保冷石が備えてあるから、夏場でもすぐには傷まないと思つてましたし》

「なるほど」

／ はーい！ ／

『すでに答えを用意してたかのようなですね』

本当に賢い子ですね』

「ジゼル いいと思うことは 周りからどんどん学べ

経験を積み レベルアップをはかるのに今ほど最良のときはない」

／ はい！ハドラー様 ／

などと言っている内にどうやら 地竜家が見えたようだ 本当に近かったな
丘の上に巨大な岩で出来た遺跡がある

《この階段を上がった丘の上に地竜家があります》

「階段かちようどいい・・・」

ジゼルこの階段も自力で上がってこい 術は使用してもかまわん

オレ達は先に上がって しばらくは待つてやる」

《ええ!! この階段結構段差ありますよ!》

歩き始めたばかりのジゼルじゃあ一段ずつ上がるのも大変ですよ

それに風竜のサータでも一人で飛べるようになったのは》

「できるな? ジゼル」

／ はい! ハドラー様! ／

「いくぞアータ 手は貸すなよ」

オレはアータの返事を待たず 汚れるであろうジゼルのスカーフだけを外して預かり

階段を上がりはじめた

アータはジゼルを気にしながらもオレに追いついてきた

《ハドラーさん！ どうして？》

「アータよ たしかにオレがジゼルを小脇に抱えて行けばすむが

思いのほか地竜家が近かったのだな 折角の初の外歩き何事もないのもつまらんだ

心配いらん たとえ上れ切れなくとも困難に挑戦したことは経験になる

上でゆっくり待つておればいい」

といつている内に階段を上り終え ジゼルからは見えない位置で待つていた

アータは落ち着かない様子だがとりあえずは待つてみるようだ

・・・しばらく待つていると

《大変ですハドラーさん！

階段を上がつていたはずのジゼルの気配が消えました！

ひよつとして いきなり転げ落ちたのかも?!》

どうやら地竜術で階段の様子を探つていたようだ

『ジゼル!?!』

だがオレもジゼルの気配はとらえていた

《うわあ!!?!》

＼ ハドラー様くくく♡ ／

階段の上り口に駆け寄るアータの目の前を一気に飛び抜けジゼルがオレに抱きつき
頬ずりしてきた

＼ ハドラー様♡ ハドラー様くくく♡ ／

ジゼルをよく見れば服は結構汚れていた

どうやらしばらくは階段をよじ登り途中から一気に飛んできたのだろう

ジゼルを引き剥がし 頭巾をとり服をはらった

幸い地竜の服は汚れが目立ちにくく その上に綺麗なスカーフをつければまずわからんだろう

『外しておいてよかったですね』

顔は丁寧に拭いてやった どうやら怪我はないようだな

「おお 来たなハドラー まったよ

みんな! きたぞー!

ちやうど外に出ていたランバルスがオレたちに気付いて家の中に声をかけていた

そういえば こやつだけオレを呼び捨てにするようになったな

『気さくな人ですね』

「ん？どうしたんだその顔どこかで転んだかい」

？何のことだ ジゼルの顔はもう汚れていないが・・・

《ハドラーさん さつきジゼルが頬ずりしたときに顔が汚れてる・・・》

オレの方か！ 完全に失念していたな・・・

顔を拭いていると 家から子竜たちがでてきた

やはりロービイもいるな みなアータと同じような服を着ている 皆地竜家の子竜
だろう

キビツ

《いらつしやいませハドラーさん ジゼル アータ

私は地竜家補佐竜のユイシイ 地竜家一同 みなさんをお待ちしていました

どうぞ楽しんでいってください

ランバルス師匠（せんせい）とロービイ以外は

ハドラーさんとジゼルとは初対面ですから 簡単に自己紹介を》

『可愛らしいお嬢さんですね キビツとして いかにも補佐竜という貫禄もあります』

《ぼくは 三番竜のリドです アータよりちよつとだけ年上です》

＼ 四番竜のクレットです おいぬかれたけどアータとおないどしです
 『地竜家は 一・四番竜が女の子で 二・三番竜が男の子なんですな』

そういうええちようど半々だな

「オレはハドラー このジゼルの父だ コーセルテルには子守りの修業にきた」

＼ ハドラー様の補佐竜のジゼルです 今日はお招きありがとうございます

／
 笑顔で挨拶をしたジゼル

「上出来だ」

いつのまにか立派な挨拶ができるようになっていたジゼルの頭に つい手が伸び
 その頭をなでた

＼ !! くく♡ ♡ フェルリありがとう・・・
 どうやらフェルリの入れ知恵だったようだ まあいい

《ユイシイ これハドラーさんからお土産 ケーキだつて》

《わざわざありがとうございます どうぞ家の中に入れてください》

ユイシイに招かれ家に入った 石造りの丈夫な家だ

地下には歴代の地竜術士が集めた本が収蔵された書庫があるそうだ

地下何十階もある竜術でつくられた叡智のダンジョン なかなか興味深い

機会があれば探索したいものだ

地竜家の昼食会 後編

昼食にはまだ早い時間だったこともあり 早速紙芝居の読み聞かせをはじめた
まずは最初の魔王編から

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「さらなる力を求める魔族の男が真っ先に目をつけたのは

まさに『最強の力』を象徴とした存在『竜』だった」

地竜たちのはじつと オレの声を聞き 真剣に紙芝居を見ている

反応は上々といったところだろう

「そして男は知る『竜の騎士』の存在を！

それは神が世界のバランスを乱す存在を正す者として生み出した究極の戦士!!

竜の戦闘力 魔族の魔力 人の心を持ち

永久不滅のオリハルコンで作られた地上最強の剣を使いこなし

その額には累代の竜の騎士の戦いの経験が刻まれた竜の紋章が輝くという

まさに究極の戦闘生物・・・!!」

地竜たちの息を飲む気配を感じる

「その男にとつては 伝説に過ぎないその存在が自らの理想に重なるものを感じた
そしてそれは自分の生き方に大きく関わっていくことになる・・・」

・・・

・・・

・・・

「・・・つづく!!」

／ 　　／ 　　ふろろろ・・・

パチパチパチ!!!

皆がいつせいに息をついたあと 拍手がおこる

この瞬間はなかなか気分がいい

時間は ちょうど昼食の頃合になった

「実はこのつづきが そのランバルスの協力で最近出来上がってな

昼食の後にも初披露するつもりだ」

／ 　　／ 　　おおろろ

／ ハドラー様 それはわたしも知らない どんなのなんですか? 　　／

「フム 詳しいことはまだ明かせませんが・・・

今回は魔王の生い立ちであったが、次はその宿敵となる勇者の話だ」

・・・昼食中の話題はもっぱら紙芝居のことだった

先の紙芝居の感想や考察 次の内容の予想 勇者の正体などだ

《まるで伝記みたいだったな》

ロツタルクの冒険記みたいに実際にいた人のお話なのかな？

ユイシイ知ってる？》

《いえ 私も知らないわ

私が読んだことのない本に載ってるかもしれないけど・・・》

ロービイが中々鋭いことを言っている

・・・昼食はなかなか旨い ジゼルもよく食べている

質素で素朴な雰囲気だが手が込んでおり

特にメインを張る卵料理はなかなか興味深い味わいだった

卵の味や風味の生かし方にこだわりを感じる

《ねえねえ 次のお話の勇者さんって どんな人だと思う？

ぼくは地竜の守長とかだと思うな》

《そうだね 魔王さんも竜のことを色々調べてみたいだから

食事を終え テーブルの上も片付いたところで いよいよだな

・・・カールでの料理修業中に当人たちから聞いた話をもとに

ランバルスと共にかなり脚色・解釈を加えてはいるが

我が生涯の宿敵・・・

勇者アバンの物語をはじめるとしよう

「世界最強の騎士団をかかえる王国

その郊外に住む貴族 竜学者の家系に生まれた人間の青年は

あるとき 家に代々伝わる古文書でありながら父にも気付かなかった暗号に気付いてしまった」

《勇者さんは人間なのかな》

《・・・竜学者ということは師匠（せんせい）の亡くなられた奥さんのような方かしら》

子竜たちの呟くような声が聞こえる

竜学者というのはランバルスの提案による子竜向けのアレンジだったがそういう事情もあつたのか

「難解な暗号を解いていくと・・・

それは 幻の攻撃呪文の契約に関するものだった

資質がなければ呪文の契約はできないが 幸か不幸か青年にはその資質があつた

苦勞の未解いた暗号 その結果判明した呪文の契約

その契約に成功した青年にとって 研究の完成としてその呪文を唱えた」

・・・ッ

「ド・ラ・ゴ・ラ・ム!!」

ゴクリ

と子竜たちのノドがなる音が聞こえた

「人間の青年は巨大な火竜へと姿を変えた

皮膚は鉄よりも硬く その力はあるとあらゆる怪物よりも強く 口からは強力な炎

を吐く竜に・・・

その呪文は並みの攻撃呪文の何倍も魔法力を消費するもの

青年は呪文の発動のみにその魔法力を使いきり そして意識を失った・・・

・・・

その青年が目を覚ましたときに目にしたものは見慣れた景色が変わり果てたもの
だった

幸いにも郊外で周囲に民家もなく 身内の必死の消火活動もあり人的被害こそな
かったが

竜の力は岩を砕き 林を焦土と化していた・・・

その後青年は一人 家が管理する森の中に住み自己の鍛錬に励むようになった
学者としてさらに幅広く知識を深めるとともに

その知識を生かして武芸の鍛錬に呪文の研究と文武を追求していった
ドラゴラムという強力な力がもたらしたものは ただの破壊であった
そしてそれを制御できなかつた自分・・・

『正義なき力が無力であるのと同時に 力なき正義もまた無力』

竜学者に伝わる家訓の意味に 氣付きはじめていた・・・」

皮肉なものだ オレは竜の力を得ることができなかつたから腕を磨いたが
アバンは竜の力を得たがゆえに腕を磨いたのだからな・・・

子竜たちのテンションが明らかに低いが 皆真剣な顔だ・・・

声ひとつないが 子竜たちの頭の中はフル回転しているのだろう

ランバルスもそんな子竜たちを真剣に見ている 紙芝居作成中は

〔小さい子竜には少々難しいか〕

などと言っていたがどうやら収穫はあつたようだな

ジゼルにとつてもそうであればいいが まあ今すぐ成果がなくともいい

これから何度も機会はあるのだからな

その後の内容は・・・

・世界中に恐怖をふりまく存在魔王があらわれ戦いの時代がおとずれる
 ・青年は森の中で凶暴化した怪物に襲われていた自国の王女を助け その推薦により騎士になる

・修業により得た力を隠しダテメガネをかけ 騎士団の公務をぬけだし 知恵を生かすことを選ぶ

・騎士として敬愛する主君に仕え 気のいい友ができ 知識と知恵が国のため人のためになることにかつてない充足感を感じる

・森での王女との出会いから三年後 ついに魔王の侵略の手がその王女にのびようとしていた・・・

つづく!!

／＼ パチパチパチパチ!! ハドラーさん ありがとうございました／

紙芝居を終え 拍手がおこる

／ ハドラー様 おつかれさまです /

「いいところで区切ったな これはまた次が楽しみだ」

最前席から飛んできたジゼルの後から声をかけてきたランバルスに礼を言った

「おかげで 第二話も無事完成できた ありがとう」

そしてランバルスの隣にいたユイシイが

《ありがとうございました。そしてお疲れ様でした。ハドラーさん

この後はみんなでお茶にしようと思います

ハドラーさんが用意してくださいましたお菓子もいただきます

どうぞ。ごゆっくりしていつてくださいなね》

「ああ。馳走になろう」

オレが用意したプリンケーキは地竜家には随分と好評だった

昼食の卵料理に続いて卵が続くのはどうかとも思ったが、どうやら卵が好きなよう

だな

特に意外にもランバルスに受けがよかったようだ

「へえ、こりやうまい!!。これもあんたがつくったのかよ

すごいな。オレなんか台所に立つなとか言われてんのに」

キビッ

《私がいるんですから。任せてくれればいいんです!。

それよりハドラーさん。私料理のレシピを集めて本にしているのですが

是非このケーキのつくりかたを教えてくださいませんか?》

ユイシイの申し出にオレは興味をひかれた

「そのレシピ本をオレに一冊都合をつければ教えてやるぞ」

《はい それは勿論 お菓子編はもう写本がありますから持つて来ますね

つづきはまた今度用意しますから》

「では書くものは何か・・・」

《この紙をどうぞハドラーさん》

《ぼく筆記用具持ってます これ使ってください》

リドとロービーがすぐに用意した 手際がいいな流石知恵の竜

オレがレシピを書いている最中 地竜たちの話声が聞こえてくる

内容はやはりさっきの紙芝居についてだ

／ おもしろかったね／ ハドラーさんの声 たまにいきなりこわいけど／

／ ハドラー様の声最高よ 特にあのシーンが・・・／

・・・クレットとリドの感想は内容とは少し違うようだが

地竜家の食卓はずいぶんとにぎわっている これは次回作の製作がはかどりそうだ

炎の中から

／　ウフ♡　ウフフフ！　ハドラーさま♡　／

今朝からジゼルが妙に熱く　ハイテンションだ

「体温が異常に高いな　火竜特有の体質か？」

『病気かもしれないません　フェルリどうなんですか?!』

‘これは術暴走ですが　成長期の子竜は時々力を暴走することがあるんです

体は心配ないですが　竜術で力を抑えてあげてください

おそらく今日一日でおさまるでしょうから　それまでがんばってください、

「ちようどフェルリがいる地下の術部屋でよかつたな

ではこのオレが火の力をおさえてやろう」

『マシエルに知らせなくてよいのですか?!』

「この術部屋であれば魔法力はある程度　自然と抑制されるからな

ジゼルはここから出さん方がよかろう

それにオレが目を離している内にここが火の海になるかもしれない」

『それは大変ですね　ここはそもそもフェルリの眠る墓地

『そのような事態は避けなければ・・・』

『私しかないんですもの それはあまり気にしないで』

『ジゼルちゃんのことを第一に考えてあげてくださいね』

『子竜ちゃんたちが咲かせてくれた このお花畑が燃えちやつたら悲しいですけど、』

『ああ そういえばこの術部屋を越えて地下に広がる花は マシエルの子竜達が』

『連係術で咲かせたものだ』と聞いたことがある

『オレに任せておけ 花びらひとつ燃やさずにおさめてみせる』

『ハドラーさん・・・』

『・・・あなた 大丈夫なんですか？』

『ジゼルの炎をおさえる竜術なんて使ったことないはず・・・』

『オレは閃熱と爆裂の呪文をきわめ 地獄の炎を使う男だぞ』

『こんな子竜の力程度におくれをとるわけがない』

『ジゼルを抱き上げ早速術を・・・』

／ きゃっ きゃっ ハドラーさま♡

『え〜い おとなしくせんかジゼル 集中できん』

『火竜ですから熱が高くなるとハイになるんです』

プスプス・・・

「い いかん！ 服が燃えはじめている！」
とつさに ジゼルを掲げたところで

ゴオオオ

ジゼルが炎に包まれた

「ゲエツ!？」

炎の中 笑顔ではしゃぐジゼル どうやら着ている服が燃えただけのようだが
ジゼル本人も更に熱くなってきている

「・・・だがかえって好都合だ 竜術を使うならより密着した方が使いやすい」

その最たるものがマシエルが使える同化の術――

流石に同化はできないが オレはジゼルを抱きしめ魔法力を

／
!!!? / !!!!!
♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡

「・・・クウツ いかんジゼルがますます熱くなってきた!」

この熱量はベギラゴン級!?

くっ このオレに炎でダメージを与えるだ!!

ジゼルに直接触れていたオレの着ている布の服も上半身部分が燃え出してきた

「ぐぐぐつ・・・!! まだ体温が上がるだ!？」

『・・・私まで熱くなってきました・・・でも耐えてみせます!』

「……ジゼルが熱くなったのは術暴走のせいだけではなくなってきましたね、

久しぶりに魔炎気まで使い、どうにか周囲に引火するのは防ぎきり

騒ぎに気付いたマシエル達がかつけ、ことなきを得た

今は子竜たちの同調術でジゼルは平熱より少々高い程度の熱で落ち着き

オレの腕の中にいる、まだハイテンションではあるが……

ジゼルが着ていた寝巻きは全焼し、オレの服も上半身は完全に燃えたが

床に広がる花は死守できた

「ハータは熱を調節する火竜術が得意なようだな」

「熱の調節ができないと、お料理がお手伝いできないし」

ガラス細工もこわれちゃうもん、それにマータたちは暑いのが苦手だし」

「なるほど、やはり日常で必要な術ほど経験を積み磨きがかかるのだな

その術、是非とも盗みたいものだ」

「ハドラーさん、ぼくの子竜達に変な言葉教えないでください！」

肝心な子守り術士であるマシエルがこれほど過保護でありながら

子竜達の成長が著しいのは、やはりこのあたりにあるのだろうか

〈ジゼル、この寝巻きを着て、私のおさがりだけ〉

「ああ 助かるタータ」

《あー いいな 私もジゼルにおさがり着てほしい》

「マータとナータの水と暗の力で冷気の維持ができているのだろう

オレもジゼルも感謝している」

術部屋が暑くなつてしまつては花畑が燃えなくとも 枯れかねんからな

ジゼルに服を着せながら ふと かつて天界でダイの世話をしていた頃を思い出した

成長痛や持て余した竜鬮気で泣いていたダイに右往左往していたことを・・・

オレはあの頃からレベルアップできているのだろうか？

・・・いやオレは そのためにここにいるのだ

あのときの悔しきは 無力感は！ このオレのレベルアップでしか晴らせんのだ！！

まずはハータの熱調節の術を盗む好機を生かすべきだ

ジゼルが作ったこの好機をな・・・

ハドラーはレベルがあがった

ちからが2あがった

すばやさも2あがった

たいりよくが3あがった

かしこさが3あがった

うんのよさが1あがった

さいだいHPが1あがった

さいだいMPが5あがった

ジゼルはレベルがあがった

ちからが1あがった

すばやさぎ2あがった

みのまもりが3あがった

たいりよくが2あがった

かしこさが2あがった

うんのよさが3あがった

さいだいHPが2ふえた

さいだいMPが5ふえた

1Pのスキルポイントをかくとく

ジゼルのかくとうがスキルアップした

まわしげりをおぼえた

新たな挑戦

ジゼルの術暴走による熱も下がり オレも一眠りし そして夜があげた

「ジゼルの熱も完全に下がった オレの魔法力も回復した

ならば早速 熱調節の術練習をするぞ」

『ジゼルはまだ眠って・・・ あ、起きましたね』

／ ハドラー様 おはようございます♡ ／

「ああ おはよう 早速だがジゼルよ 朝食の準備だ お前の力を借りるぞ」

(なるほど術練習というのは そのことですか)

「ああ まずは朝食の支度で実践していくつもりだ マシエルやハータといった手本も

あるしな」

日々の生活の中で術を使うことで経験を重ね レベルアップをはかるコーセルテル
流

昨日のこともある 今のオレとジゼルにもっとも必要なものだ

1階で朝食の支度をはじめようとしているマシエルに 術練習を兼ねた調理助手を
申し出た

「僕は助かりますけど ジゼルは疲れてるんじゃないあ……」

ハドラーさんはハータの力を借りた方がいいと思いますけど 術道具もありますし」

「……マシエルぼくからもおねがい ジゼルにやらせてあげて
 ハドラー様のお役にたきたい！やらせてマシエル！」

ムリしないように ぼくもいっしょにお手伝いするから」

「ハータ……」

わかった じゃあハータはジゼルといっしょにハドラーさんのお手伝いをしてね

僕の方は術道具を使うから しっかりお兄ちゃんするんだよ

ハドラーさん よろしくお願いします

火竜術については ハータはがんばりやさんだから 頼りになりますよ」

「ああ ハータよ よろしくたのむ」

「うん！ がんばろうねジゼル」

／ よろしく ハータに様 ／

「……ジゼル おにいちちゃんって呼んでほしいな」

／ うん ハータおにいちちゃん ／

『ジゼルもハータもはりきってますね 微笑ましい』

はりきってもらわねば困るからな……

「いや お前にもやらせるから その時は離せ」

ポウ・・・

ハータと立ち位置を代え ジゼルを借りナベに直接手をあて術を使う
ほう ハータが手をあてていた部分以外も 均等に加熱してある いい仕事だ
ナベを熱するだけならメラ系よりもギラ系の要領だな

ぐっ・・・ くっ くっ くっ・・・

「いかなな 煮えすぎる

やはりただ火力を上げるより 弱く持続させる方が難しいな」

集中し 魔法力をコントロールする ジゼルからの借り物の力のせいかな ハータ程
うまくいかな

だがオレはジゼルに手本を見せねばならん もっと集中せねば・・・
・・・ぶく ぶく ギイイ ぶく・・・

「ハドラーさん！ おナベ！ おナベがゆがんでるよ!!」
「ム!？」

いかなな 術に集中しすぎて 手に無駄に力が入っていたか
意外と難しいぞこれは・・・」

「おナベを曲げちゃうのは ハドラーさんだけだとおもうけど・・・」

ナベの歪みを直し 具材をいれ 再び術を使う

具材に火がとおり切るまでに 2度ほどナベが歪んだが スープはこぼさなかった
「後で ナベをまた直さねばならんな 力ずくで直すのはわけないが

何度もすると金属疲労で脆くなる もっと丈夫なナベはないのか？」

「うちの鉄のおナベは先代の火竜術士のイフロフさんが作ってくれたものだから他に
は・・・

あ そうだ たしかメオが作った陶器はすごい頑丈だから おナベもあつたら・・・
うちにはないけど アグリナなら知ってるかも！」

「土鍋か・・・ ちようど火竜家に行くつもりだったから丁度よいか

ふむ マシエルの方はもう少しかかりそうだな

ジゼルよ 今度はお前が直接やってみろ

マシエルの料理が終わるまで 冷めすぎない程度に保温するのだ」

オレは術を止め ジゼルの抱きかかえナベに手をあてさせる

火竜は火傷をしないとはいえ やはり専用のエプロンがあつた方がいいな・・・

／ んー／

『ジゼルがんばって』

「ジゼル 火の力をまずは手に集中させて 強すぎても ぼくがおさえるから大丈夫

だよ」

・・・どうやら術がうまくいってないようだ

まあ最初からうまくいけば苦労はないが、これならナベにフタをした方がよっぽど保温になる

術は成功しなかったが、意外に早くマシエルの方は料理が完成したので問題なかった

＼ ハドラーさまあゝ・・・ ／

ムウ・・・ やはり火竜家で火竜術のことを基礎から身につけた方がよさそうだな
マシエルもアグリナも各竜術士のもつとで、竜術を学んだと聞いた

独学と実践だけではレベルアップが、はかどらん・・・土鍋の件もある
手土産を用意しておくか

まったくですよ

おそらく……」

先にグイ族の村でジゼルの術暴走で燃えた分の服と改めて裁縫の手ほどきを依頼した

「また紙芝居を頼まれたねハドラーさん」

／ ハドラー様の紙芝居はステキだから♡ ／
 娯楽に飢えているのかここは？

まあジゼルの修業後に 火竜家とまとめてやればいいだけだ

『持つてきてますからね 紙芝居』

「新作はまだ完成しておらんがな それよりも火竜家に着いたぞ」

アグリナ達が外で出迎えていた

「みんないらつしやい！ プレアから紙芝居のことを聞いてからずっと楽しみにしてたんだから！」

「アグリナもヤチも知ってたんだ」

／ プレアは自慢ばかりで おはなしはしらなく／

「それはいいが 先に術の指導を頼むぞ

子供の成長は速い！ 速すぎる!!

オレはそのことを身をもって知っているのだ

あの程度の術暴走でオレはどうということはないが あの力は磨かずにはおれん」

『暴走はジゼル自身が危ないですしね』

〔じゃあ 早速 術の練習部屋に行きましようか〕

アグリナの家内で火竜家の術部屋に入った

〔術練習をはじめの前に ジゼルが術暴走をしたって聞いたけど

身体は大丈夫？ 術酔いとかしてない？〕

＼ ハドラー様のおかげでだいじょーぶ！ 元氣いっぱい♡ ／

〔でも 術暴走って普通は 術を覚えはじめるころにやるそうだけど

ジゼルはもう術が使えるの？〕

〔ジゼル見せてやれ〕

この術部屋の中なら問題なからうと オレは右手をひらきジゼルに向けた

＼ ハドラー様——♡!! ／

ゴアアアアアアアツ

ジゼルの灼熱の息がオレの右手を僅かに焦がす

「……又……」

ヌフフフツ・・・!!」

思わず笑みがでる 暴走とは違う ジゼルの炎に・・・!

＼ すごい ジゼル・・・ ／

アグリナとヤチが呆然と見入る

「グフフフ・・・」

実に気分がいいが今回の目的はこれではない

「カアアーーーーーッ!!!」

ボワツ

炎を消し飛ばした

「上出来だ」

＼ ハドラー様♡! ／

『お疲れ様ですジゼル』

まだ本題に入っていない内からねぎらうな聖母竜 ジゼルの集中力が切れかねん

「すごいじゃないジゼル! それにハドラーさんも!!」

あんなすごい炎を受け止めて消したりなんて

あたしに教えられることなんて〜」

「いや 火炎系と閃熱系が得意なオレといえどそれを自在に調節 一点に集中などは非

常に難しいのだ

ましてそれを教えるなどは まったく経験がない

・・・おまえが頼りだ」

「よーっし まかせてっ!!」

「ぼくも手伝うよ」

／＼ てっだうーっ

アグリナにハータ ヤチまでやる気になったようだ ジゼルもテンションが高い

この分なら・・・

・・・と思っていたが 調節以前に 熱のみを発する術自体が ジゼルはてこずつて
いた

ジゼルがギラの呪文の契約ができなかった時点でオレにできることはあまりなく
アグリナ達に任せていたのだが 難航しているようだ

「まあ あたしは竜術が使えるようになるまで何日もかかったし

ジゼルは生まれたばかりであんなすごい火が出せるんだから心配いらないわよ」

「そういうえば マシエルに弟子入りしたいとか 練習したいって前にうちにきてたね」

「あ！ そうよ たしかあのととき外で術練習やって火事になったりしたけど」

そんなあたしでも 一人前の竜術士になれたんだから」

『それは 別の意味で心配なんですが・・・』

ハドラー あなたからも何か助言を』

いや オレは今回は口を出さん

うまくいなくてもよいのだ それが その悔しさこそが 再び自分の殻を破るときに必要ななる

このオレの経験だな

それに マシエル以外の竜術士のやりかたを知るいい機会だ

「ねえジゼル はじめて火がだせるようになったときはどうやったの？」

アグリナがジゼルに質問したところ ジゼルの体が震えた そしてオレの方を見ると

アグリナの手をとりオレとは反対側の部屋の隅に移動し耳打ちしている

「珍しいな ジゼルがオレから離れるとは あれではオレには聞き取れん」

『たしかフェルリが助言してから灼熱の息がだせるようになったのでしたね』

そうだったな あの時もオレには聞こえないようにしていたが そこにコツがあるのだろう

かつて竜王竜術士とよばれた幽霊の秘伝・・・ジゼルが学べたのは幸運だったな
〔へー そうなんだ〕

アグリナの声ばかり聞こえるが 術自体は成功してはいないようだ
今日のところは こんなところだろう

〔あつ ハドラーさん とりあえずお昼ごはんにしよー〕
アグリナ達がこちらにやってきた

〔ごめんね ハドラーさん 何も成果が上がらなくて〕

〔また機会もあろう 後は基礎の瞑想（メデイテーション）でもさせる〕
〔メデイ・・・？ なにそれ？〕

〔魔法力を高めるための基礎だ 実際やってみせたほうがはやいか〕
オレはその場であぐらをかき そのまま逆さになる

〔わ 頭だけで逆立ちしてるのに全然ゆらがないし〕
ハドラーさん これどうなってるの？ っていうかしやべれるの？〕

〔ああ 慣れれば問題なくこの状態で話もできる〕

最初の内はこの体勢を維持することだけで精一杯だろうが

魔法を使う上で重要な集中力を身につける効果もある」

「どういうことですか？」

「この体勢を無意識で維持し会話などができるようになるコツは術に集中しながら周囲に気を配る感覚に通じるものがあるからだ」

／？ アグリナわかる？／

「えーと・・・わかるようなわからないような・・・」

「うーん たとえばぼくの話だけ・・・」

術を使えるようになった最初のうちは 目を閉じて術のことだけ考えてやってたけど

今なら術を使いながらほかのこと たとえばこの間みたいに 明かりの術を使いな

がら 遺跡の中を歩いたりができるようになってるから そういうことの練習かな？」

「まあ そんなところだ 術に必要な集中力にはそういうった面もあるのだ」

高レベルともなれば二つの異なる術を同時に使うことや

両手で極大呪文を制御しながら・・・」

瞑想の解説をしながら オレの頭にはあのアバンの仲間の大魔導士が浮かんだ

たかだか100年程度しか生きられん人間があればどの域に到達したのも

基礎の積み重ねがあつてこそだろうが・・・

そして その大魔導士とアバンの弟子ポップ・・・

オレも久しぶりの瞑想で 基礎の重要性を再認識し 宿敵達との戦いの日々を思い

を馳せた

「あたしもやってみようかな・・・ それよりもまずおひるごはん

そしてその後はみんな紙芝居よね！」

＼ ごはんー！ ／

「アグリナのパンー！」

＼ ハドラー様のかみしばいー♡ ／

・・・まあ よかろう

火竜家への出稽古 後編

／＼／＼ ouchiそうさまでした 〃 〃

昼食を終え ここに来たもうひとつの用事を思い出した

「アグリナ ここに頑丈な土鍋があると聞いてな ひとつくれ

かわりに こんなものを用意している」

と 持って来ていたジャムをとり出した

「土鍋？ ってことはメオが作ったやつね

でもマシエルの家にはオヤジが作った立派なお鍋があつたよね？」

「つい力が入ってな 少し曲がったのだ 一応直したが・・・

それに自分用の調理道具も揃えておきたいのでな」

「それはいいですけど メオが作ったのはデザインが・・・

まあ持つて来ますから いるならそのまま持つて帰つてくださいね」

「このゆかいなデザインが持つてきたのは 持ち手やフタがハニワのようなデザインの土鍋だった

「このゆかいなデザインは風竜家に伝わるロツタルク像がモデルなんだつて」

「ほう これがああのロツタルクか なかなか味のある顔をしているではないか
強度もなかなかのものだ 気に入った」

『・・・これがかつての風竜王をモデルにしたとは とても思えないのですが・・・』

／＼ かつこいいー（おナベを真剣にみてるハドラー様がー♡）！ ／＼

「やっぱり男の子には人気ね ジゼルは見てるとこ違うし」

「さて ここでの用事はとりあえず済んだな

この後グイ族の村で紙芝居をする約束がある おまえたちも来るだろう？」

／＼ いくー！ ／

アグリナ達を連れグイ族の村に入ると集会場のような場に案内された

思ったより見物客が多いようだな 暇人どもめ

これほどの人数を前に紙芝居を披露するのははじめてだが

世界を相手に魔王をやったことを考えれば

何人相手にしても変わらんな

・・・

・・・

最前列で紙芝居を見ているジゼル達が一番反応しているのは

魔王編の終盤、オレがかってバルトスのみを連れ

竜の巢穴にドラゴンを配下にするためのダンジョン探索を元にした場面だった
「伝説の武器『シャハルの鏡』を手にいれたがドラゴンの炎には効かん

お前が持つている、と供に渡し ついに最下層に辿り着いた

この熱気 目当て火竜がいるのは間違いないかった」

やはり火竜だけに ジゼル・ハータ・ヤチそれにアグリナの緊張が伝わってきた

「巨体とそれに見合うパワー 鉄よりも硬い肌 その呼吸さえも必殺の力を持つ

まさに地上最強の種族！ だからこそ その力がオレの軍団に必要なのだ!!」

バルトスの剣が弾かれドラゴンの火炎の息をしのぎ洞窟そのものを揺るがした

激しい戦闘シーンに 手に汗を握る最前列だったが面白いのは

オレの闘気を込めた回し蹴りでドラゴンを倒し決着が着いたときの反応が

ジゼルとハータ・ヤチ・アグリナで正反対だったことだ

『ジゼルはこの魔族が かつてのあなたがモデルだと知らないはずですが

何度見ても火竜よりもひいき目で見てますね』

まあ話の主役だから感情移入しやすいのだろう

「竜の目が怪物の目変わったことを確認し

供の地獄の騎士から魔法の筒を受け取り

『イルイル！』と唱えると

あの巨体が小さな魔法の筒におさまった

ここに地上最強の軍団が誕生したことに高揚し 高らかに宣言した

オレはこれより魔王を名乗る！

全世界に宣戦布告をせよ!! 世界征服に乗り出す!!」

昔のオレの行動になんの後悔もないが こうやって何度も口にするのは不思議な感覚だ

まあそれなりに場は盛り上がっているからいいか・・・ この後の勇者編も好評だったようだ

次も書きはじめてはいるが まだ完成には遠い・・・ 今日のところはここまでと場をおさめた

／　／　／　　パチパチパチパチ!!!　／　／　／

人数が多い分拍手も大きく 不思議とオレの気分が高揚した

・・・

これは あの竜を配下にし バルトスからはじめて『魔王様』と呼ばれた時とどこか違う・・・

だが・・・わるくないがな

『素直に嬉しいと思っていいいんですよ』

・・・まあ あなたはある意味とても素直ですが
ハドラーはテンションがあがった』

うるさいぞ聖母竜！

紙芝居後 グイ族から裁縫の手ほどきを受けている・・・

『・・・あの ハドラー たしか布の切れ端を縫い合わせて雑巾をつくるはずでは？

・・・なぜ逆に切れ端が増えていくのですか？』

布の守備力が低いからだ

〔もー！ なんで針に糸通すって こんな大変なのよっつ〕

隣で同じように手ほどきを受けているアグリナも苦戦中のようだ

ジゼルはオレの前で グイ族の着せ替えモデルをしている

ここに来たときに着ていた火竜の赤い服から 視線を移すたびに違う色になっ

た

〔あ、ジゼルその色もかわいいー！ ヤチも違う色の服着てみてよ〕

『ほらあなたも視線上げて 私も見たいです』

うるさいぞ聖母竜 いつそお前も裁縫をやってみるか

『竜の姿の私が針を持てるわけないでしょう』

相変わらず役に立たんなお前は

「ム 針が折れた」

。 あ ハドラーさん 折れた針はこちらの針山に刺してください 後で供養しますから

怪我はしてませんか？

「ああ この程度の針でオレは傷つかん」

。 あの この服も着せてみてもいいですか？ こちらのリボンも！

「・・・好きにしろ」

・・・結局今回の成果は拭いてる間に分解しそうな小さな雑巾ひとつと土鍋か ム？

「ジゼル そのガラスの髪飾りはどうした？」

ジゼルの頭にはいつの間にか髪飾りが装備されていた

＼ アグリナからもりました どうですか？ ／

「守備力は低そうだが・・・ お前にはちょうどよいな」

『一言余計ですよ 大変可愛らしいですよジゼル』

「前にリタが作って女の子に配ってたのだね ジゼルかわいいよ」

＼ ♡♡ ／

・・・帰り道 ジゼルの方向音痴を試すために先頭を歩かせてみた

「ジゼルが迷子にならないように手をつないでいい？」

た
 ハータならともに迷うことはあっても正しい道へ誘導することはあるまいと許可し

／＼・・・こつち・・・かな？／

早速逆方向へ歩き出した・・・まあ努力次第で克服できると火竜家で聞いた
 『ルーラで来たから方角がわかりにくかったのですよ

・・・多分』

／＼いたっ！／

ジゼルが声を上げた どうやら栗のイガを踏んだようだ
 『秋ですからね それより回復呪文を』

ジゼルの足を見たが大したことはない 針が残っているわけでもない

呪文は不要だ

「ごめんジゼル！ 下をよく見てなくて

そうだ！ これを見てジゼル!!」

ジゼルに詫びていたハータが 栗のイガを割り中の実をとりだした

三つともかなり大きいな 皮が割れている

それを両手で握り・・・これは火竜術・熱調節の術か

「これでちよつと待っててね」

ジゼルの注意がハータの両手と術に向かっていた
もうダメージのことなど忘れているだろう

・
・
・
・
・
・

おそらく10分ほどだろう その間 温度にムラがなく常に一定に加熱している
「これはなかなかのものだな」

『そうですね マシエルの教育の賜物でしょうね』

／ ハータおにいちゃんすごい・・・
／
「ほら 食べてみて ジゼル！ ハドラーさんも！」

笑顔で焼いた栗をすすめてくるハータ

ジゼルとオレがそれぞれ一つずつ手に取ったがジゼルはどう食べればいいのかわから
ないようだ

「この黒い皮を剥がして 食べばいい」

黒い皮をはがし 渋皮がついたまま口にいれた

「フム いい焼き具合だ」

面白い これは術の練習に使える

ジゼルも不慣れな手で皮をむいて頬張っている

＼ おいしい♡ ありがとうハータおにいちゃん
ジゼルの笑顔にハータも満足そうだった
／
これは思わぬ収穫だったな

水竜家のお茶会 前編

オレは今、水竜家に来ていた

ジゼルが火竜家で装備した髪飾りを見て マータとタータが装飾品の話で盛り上がり

子竜の中で一番詳しくそうな水竜家も交えて じっくり話し合いたいと言いだしたのがきっかけである

装備品を見る目を養うことは 一朝一夕で できることではない

そういつた経験を早くから積むこともジゼルにとってプラスになる。

それに なかなかキリがつかない紙芝居の新作に水竜術士・エレを巻き込む狙いもある

その思惑からまずは紙芝居を披露していた

今回の見物客はオレが連れてきたジゼル・マータ・タータ

水竜家の水竜術士エレ・子竜リリック・クララ・ラテイ・テイルク

コーセルテルで農業・畜産を担当している獣人ニアキス族の少年オルタ・ジリー・キ

イト達だ

意外なことに水竜家で一番盛り上がったのは

アバンのカール騎士団時代を元にした勇者編だった

・
・
・
・
・
・

「青年は森を出て騎士として 国のため 王女のために仕えることになったが

あえて修業により得た力を見せるようなことはしなかった

ダメメガネをかけ騎士団の公務をぬげだし 知恵を生かすことを選んだ

ドラゴラムの一件から人との距離をおいていた青年にとつて・・・

敬愛する主君に仕え 気のいい友ができ 蓄えてきた知識が国のため人のためになることに

かつてない充足感を感じていた」

《いーなあ王女さま 知的でかつこよくてやさしくてつよい男性がいつしよにいてくれて!》

「クララの前言ってたことと・・・ちょっと変わってる？」

でもそのお姫様の公式行事をほったらかして調理場で笑って料理してるなんて・・・」

《まるでエレの初こ・・・》

「リリック!!」

ゴン!!

エレの拳骨が リリックの脳天に刺さった

／　／　おろろろ　／　／

『・・・これは紙芝居で盛り上がったのとは違うのでは・・・』

知るか

「青年は 騎士団長の友の背中が見えなくなった後に 確信をもって呟く・・・

戦いが近いようだ ・・・ つづく!!」

パチパチパチパチ

「やれやれ・・・」

／　ハドラー様ろろろ　♡　／

とびついてくるジゼルはとりあえず放っておく

今日はマータの青色の古着にサータのバンドナをつけていた

《ジゼル 紙芝居も終わったし水竜家に来た用事に入ろうよ》

〈みんなで色々試してみよう だれの部屋に行く?〉

マータとタータがジゼルを連れて行こうとする

ジゼルは最初は抵抗しオレに張り付いていたが 気が変わったのか
クララやラティイもいっしょについていった

『ジゼルが色々楽しみを おぼえていくのはいい傾向ですね

・・・少し寂しい気もしますが』

その場に残ったのはリリックにティルク、オルタ・ジリー・キイトか
《見事に男の人ばかり残っちゃったね・・・》

ゴンツ!

〔リリック〕 私もいるんだけど

またリリックが失言をしたのか エレに殴られていた

〔うう・・・ お茶の用意してくるよ みんな待っててね〕

〔ちようどよい エレ このつづきの紙芝居を持ってきている

仕上げを手伝ってくれ〕

〔・・・いいわ〕

／ 〳 おく おれらも みたい! つくつてるところ 〳 〳

オルタたちが興味をしましたが

〔ダメだ〕

／ 〳 えくくく!! 〳 〳

『バツサリですね かわいいそうですよ』

知るか

「ここで見てしまうと楽しみが減っちゃうわよ

それに新作はあなたたちが一番乗りよ

コーセルテルでだれよりも最初に楽しめるんだもの

みんなに自慢できるわよ」

〈おれっ いいこでまってるぞー!〉

〈たのしみにしてるっ〉

〈うんうんっ〉

／ ぼくも、リリックのお手伝いしてまってる、

流石水竜術士だな エレの言葉でこうも態度が変わるとは

水竜家のお茶会 後編

＼ ハドラー様♡見て見て♡！

装備が一新されたジゼルが回転している

水竜の青い服だが 来たときに着ていたマータの古着ではなくラテイと同じ物になっ
ており

胸元にはクララと色違いのリボンがつけていた

ガラスの髪飾りも火竜家で身につけたものと同じ花のデザインだが
つけ方が変わり リリックのように髪を後で束ねてつけていた

『よく見れば尻尾にも緑色のカバーがつけてますよ

かわいいおしやれですネ』

「ほう たしかに・・・色々と工夫しているのだな 面白いものだ」
＼ ジゼルこれをもってみて

ティルクがああの味のあるデザインのロツタルク像をもってきた

『これは・・・いいですね！』

ジゼルが像を抱えた姿に聖母竜は何か感動していた よくわからん

ジゼルの服装はもうひとつあるようだが、そのお披露目はこの後ということ、皆を席に着かせた

「では発表する

ドラゴンクエスト 第3章 魔王対勇者 宿命の始まり」

＼ 〳 〳 パチパチパチパチ!!! 〳 〳

ジゼルはそのままの服で最前列に座り期待に目を輝かせていた

エレの協力でついに完成した第3章

オレが魔王として世界中を恐怖のどん底におとし入れていた時代・・・

因縁の地カール王国で宿敵アパンとの初戦をもとにしたものだ

おおまかな流れは

・ ・ 魔王自ら先頭に立ち 作り上げた自慢の怪物軍団をつかい世界中を戦いの時代に巻き込む

・ ・ 魔王の侵略に対してもっとも大きな抵抗をみせた屈強な騎士団を抱える王国があった

・ ・ 自慢の怪物軍団 中でも苦勞の末戦力とした竜のデビュー戦を考えていた魔王が目をつける

・ ・ どうせなら屈強な騎士団の最精鋭に見せつけようと 国を実質的に支える王女に

向けてメッセージを送る

・・〃今宵 姫をいただきに参上する 魔界の神へのいけにえとするために・・魔王!!

・・魔王の脅威に王女含め城中が不安に包まれたとき 一人のメガネの騎士の一言がみんなに勇気を与えた

・・地獄の騎士に留守を任せ 大型の獣系を中心に編成し 竜を加え魔法の筒に入れ出陣する魔王

・・万全の警備体制をととのえたカール城 だがそこにメガネの騎士の姿だけが残った

・・上空に魔王があらわれた そして魔法の筒をいつせいに開放させ城の外で怪物軍団が暴れだした

・・浮き足立ったところで 城内に竜とともに乗り込んだ魔王!!
ここからが 水竜家でもっとも盛り上がったシーン

オレもテンションが上がってくる 紙芝居を持つ手に、声に 力が入る
「姫よ・・・おまえの身柄・・・もらいうけに来てやったぞ

この魔王自らがな ククククツ・・・」

／ うわゝ ぞくぞくするの! ！

『ジゼル……』

〔魔王よ おまえの企みは読めています〕

《エ エレ?!》

〈かつこいいい……〉

〔魔界の神に捧げるいけにえというのは ただの名目……〕

いかなる手段をとつても 私を奪い去り 国民に無力を痛感させ

世界征服を早めようというのが 真の目的でしょう!!!

これがエレに協力を呼びかけた真の目的

おとなしく見ていただけだった子竜たちも自分たちを挟んで急にはじまった舌戦に

呑まれていた

オレも魔王役に入りこみ 一段と盛り上がる

『役って…… そもそもかつてのあなたでしょう』

「……さすが まだ少女とはいえ 一国の主 見ぬいておるなら話は早い

我が下にひざまずくがいい!」

〔断ります!!〕

《エレかつこいいい!》

／ エレ／ ガンバレー!!

「・・・フツ

ならば この場で殺してやっても良いぞ!!

さあツ!! どちらが良いのだ!!!

早く決めるがいいツ!!」

オレに気押されたようにうつむくエレ

不安そうな顔で見る子竜たち

そして顔を上げると そこにはメガネが・・・

「いけませんねえ・・・」

「なんだア 貴様あ!!?」

「・・・魔王さんとやら

女性を誘う時は もう少し優しく声をかけなければダメですよ」

／ 　　／ 　　／
 おおく 流石エレ メガネの騎士もうまい!

「ふざけたことをぬかすなツ

魔王の咆哮をよそに メガネの騎士が竜の顔に小さな袋を投げた」

紙芝居を入れ替える手にさらに力がはいる!

「な・・・なんだ 急に竜が凶暴にツ・・・!!?」

貴様 何を・・・!」

「なあに・・・ちよつと『毒蛾の粉』をかけてやったんですよ!!」

私が調合した特製の秘薬ですよ

これをかけると 怪物たちは正気を失って 同士うちをはじめのんです

外の連中にもふりかけてやりました

これでああなたの怪物軍団も役に立たないわけですね」

「ぬうううッ!!」

城外の怪物軍団も仲間割れをはじめた

力の象徴である竜を・・・

自分が信じ求めてきた力をまとめて無力化された怒りに震える魔王は

混乱した竜を正気に戻すため頭に肘鉄をくらわせ 人間と同じ地に降りた」

もうオレとエレ以外に喋るものはいない・・・

「貴様くくくくくッ!!」

こごかしい猿知恵でこのオレを愚弄しおって!!

許さんぞッ!!!」

「・・・許さない・・・

・・・ですって!?!」

なつ・・・なんだ!?!」

紙芝居の中のメガネの騎士（アバン）だけでなく エレからも・・・闘気が・・・!!?
 「許せないのはこっちのほうよッ!! 魔王ッ!!」

微妙に台詞が違う?

まあ ほとんど原文をよんでいるからいい このままいくか

「おろか者めがッ!!」

まさか このオレに戦いをいどもうと いうのではあるまいなッ!!」

エレはメガネを外しながら台詞をつづける

「戦いは のぞまん・・・

だが!

自らの野望のために 平気で人を! 国土を! 奪おうとする外道を見て

だまっていられるほど・・・

この私は お人好しではないッ!!!」

ギン

この眼光 あの時のアバンにも劣らぬわ

《エレ・・・》

補佐竜のリリックが震えあがりながらも どこか違う理由で泣きそうに見えた

「魔王と勇者 まったく異なる立場 異なる理由で高めた力が 今ぶつかりあう

それはまさに これからの大冒険 宿命の闘いのはじまりのゴングだった!!」

・ ・ ・ その戦いは片腕を失い 軍団が失うのを嫌った魔王がメガネの騎士がとつきに放った

光る剣のドサクサに瞬間移動呪文で全怪物ごと離脱した

・ ・ ・ メガネの騎士は友の騎士団長とともに世界を救うため魔王を倒す旅に出た
王女にメガネを預け必ず魔王を倒して帰る約束とアイテムを交わして ・ ・ ・

「 ・ ・ ・ つづく」

／ ／ パチパチパチパチパチ

激しい拍手がおこったが 今回は半分以上エレの手柄だな

『実際ジゼル以外はエレに向いての拍手ですよね ・ ・ ・ 』

まあオレも楽しんだからいいか

ジゼルがオレの左腕にとびつき 指にかじりつく もう懐かしい感覚だな

『本当にジゼルは気付いてないのでしょうか?』

さあな ・ ・ ・

《エレ 特別武術訓練につきあって》

「リリック ・ ・ ・ わかったわ ビシビシいくわよ」

《え、え ・ ・ ・ 》

《リリックからエレに言うなんてめずらしい》

＼ リリックがんばれ＼

／

紙芝居に感化されたのか リリックが訓練を申し出ていた

ジゼルが少年竜ぐらいに成長すればオレもエレに頼んでみるか・・・

補佐竜の正装

「ジゼル 力を借りるぞ」

／ はい！ハドラー様♡ ／

オレの首にとびつき（こんな術ばかりうまくなるなこいつ・・・）しがみついた
ジゼルから力を借り熱調節の術を使う

ポウ・・・

冷たかった石の感触が 溶岩魔神のような熱をだしはじめた
「いかん！ 火力が強すぎる」

「ぬうう・・・」
ジゼルの力が強すぎるのか ギラで十分なところにベギラマ級の力が流れ続ける

術の制御に集中するなか つい土鍋を強く握ったが割れる様子はない

『メオいい仕事してますね あなたの力でも割れないとか』

「ならばオレも本気をださ?！」

／ ハドラー様!! ／

オレが目的をズレそうになったところで鍋から煙がでてきた

急いでフタをあけると 中には黒く焦げた物体が一つ・・・
ガジリ・・・

「炭だな ほとんど・・・」

＼ ハドラー様 私も私も！ ／

かじりかけの 黒い物体をジゼルによこし

ガジガジ・・・

＼ ハドラー様 まんなかはちゃんとお芋の味がします おいしいですよ ／

「なら成功か」

『失敗です!! ジゼルも焦げたお芋はたべないで！』

せめてまんなかの部分だけを』

(あらあら)

先日 紙芝居を披露したニアキス族の子供たちの親から 大量の芋を差し入れされ
それを利用した術練習をしようと 土鍋で焼き芋を作ろうとしたのだが いきなり
うまくはいかな

「まずジゼルの竜術士としてオレが術を使えねばな・・・」

残った焦げ芋を食べながら 出来を分析する

「やはり火力が強すぎるな 理想は弱い火力で時間をかけた方がいいのだろうか」

だからこそ熱調節の術練習の課題にちょうどいいのだが、それだけ難しいということだ

『いっそ 石釜で芋をいっばい焼いて 中心部の芋だけ食べるとか』

「焼き芋を作ることが最終目的ではないぞ」

『土鍋を割るのが目的でもないですよ』

「ムムム・・・」

／ むむむ・・・ ／

(ハドラーさんの真似をするジゼルもかわいいですね)

地下の術部屋は 今日もあつかった・・・

・・・とりあえず 食べそうな焼き芋が8本できたところで 保温用に温めた石釜に入れ

それを抱えて地上階に上がってみると

／ ー ー わーっ ナータはマシエルとおそろいがいいんだーっ ／ ー

何やら マシエルの子竜たちの歓声が聞こえた 様子を見に行くと

「どうした？ 随分と盛り上がっていたようだが」

「あ ハドラーさん 術練習お疲れ様です その石釜が成果ですか？」

(お またパン?)

石釜をあけて焼き芋を見せると

／＼ わーっ おいしそーっ ／＼

また子竜たちの歓声があがったが、先ほどの歓声より小さい気がする
何があつたのか余計気になってきた

『あなたの負けず嫌いも相当なものですよね・・・』

《・・・数が人数分はないね》

「オレとジゼルは試食でかなり食べたからな

お前たちでひとつずつ食べばよい

結局 先ほどまで何を騒いでいたのだ？」

〔グイ族の族長さんから 先代補佐竜の資料をかりて来たので

それを参考にみんなの補佐竜の正装を考えていたんですよ〕

／＼ ! それっ 私も見たいーっ ／

ジゼルがせがむとマシエルは すぐにその資料を見せ マシエルの子竜たちがその
解説をはじめた

・・・その資料には火竜はオレが知るメオではなく 女の補佐竜が描かれていた

先々代の補佐竜ということらしい

『かわいらしいですね 赤がとっても華やかで・・・』

ジゼルも成長したらこういうった服が似合うようになるのでしょね
今から楽しみですよ』

・・・オレにとつての正装は戦いを前提としたものなのだが そこに描かれていた服
は

それを感じさせないものだった ・・・まあジゼルには似合うかもしれんが

・・・一とおり眺めていたが 暗竜のものはないようだ 黒を基調とした正装は気になつたのだが

ラルカより前の代は長い空白期間があつたらしい

〈ジゼルはどんな感じがいい？〉

「やっぱりこの火竜の女の子みたいなの服？」

《あら こっちの水竜の女の子の正装もいいわよ

きれいなおひめさまみたいで ジゼルにはこんなひらひらが似合うと思うの》

(ひらひらならマントつけようぜ ジゼルはもうとべるし ほらこの木竜みたいにさ)

マータやタータを中心にジゼルの正装の話になりだした

成る程このように盛り上がっていたのだな

「そうだね ジゼルの正装はまだずっと先だろっけど

「どんなのがいい？」

マシエルの問いにジゼルは少し考え・・・

＼ 私もハドラー様とおそろいがいい このピンク色で ／

オレのピンクのエプロンをつかんで答えた

たしかに術練習とはいえ 調理作業ゆえに今はエプロンを装備しているのだが

オレのイメージはピンクなのか・・・

『黒いエプロンも交互に着てるので単純にジゼルの好みなのは？』

ジゼルの発言に一番笑っていたサータに対して 黙々と芋を食っていたナータが

「・・・火竜のジゼルが赤系統の色を望むのは自然なことだろう

だから竜術士のハドラーもピン・・・くっくっ・・・く・・・」

＼ あははははははっ ／

オレがピンク色の正装をしたのを想像したのか ナータまで笑い出したのをきつかけに

部屋中が笑い声にあふれた

『アバンがあなたをダシに笑いを生み出したのを思い出しますね』

ああ あったな そんなことも・・・

補佐竜の正装か このハナタレ小娘がこんな服が似合うようになるのか・・・

『本当に楽しみですね』
「・・・フン」

ハドラーはレベルがあがった

ちからが2あがった

すばやさが1あがった

たいりよくが2あがった

かしこさが3あがった

うんのよさが1あがった

さいだいHPが2あがった

さいだいMPが4あがった

ジゼルはレベルがあがった

ちからが3あがった

すばやさが2あがった

みのまもりが1あがった

たいりよくが2あがった

かしこさが2あがった

うんのよさが3あがった

さいだいHPが 5ふえた！

さいだいMPが 2ふえた！

2Pの スキルポイントを かくとく！

ジゼルドラゴンが スキルアップした！

はげしいほのおをおぼえた

ハドラーが生んだもの

／ 姫よ・・・おまえの身柄・・・もらいうけに来てやったぞ

／ この魔王自らがな　ククククツ・・・

！》 《魔王　あなたの考えはわかってるわ　・・・えーと　世界征服したいだけなんでしょ

／ 〱 おー 〱

・・・どこかで聞いたようなやりとりが聞こえたかと思えば

ジゼルとマータが他のマシエルの子竜たちに　水竜家で披露した

紙芝居の新作を説明していたようだ

／ あ！　ハドラー様♡ 〱

(ハドラーさん　おれたちにも紙芝居をやつてよ)

「それは別にかまわんが・・・」

《あのときのエレさん　かつこよかったー！》

／ ハドラー様の魔王様がすつごい盛り上がったんだから！

「うわー　みたかったー！」

「流石にエレをわざわざ呼ぶわけにはいくまい

勇者役をマシエルにさせるとして・・・」

／ あ！ 魔王様にさらわれるおひめさまやりたい！

「いや さらわれることに乗り気でどうする」

『台詞はおぼえていそうですね』

《私！ 私がおひめさま役やりたい!!》

「まあ妥当なところだろう ジゼルお前は魔王と共に城に乗り込んだ竜の役をやれ」

／ それもおいしい♡ やります！がんばります！

「ではマシエルもいれて打ち合わせをするか

おまえたちはせいぜい楽しみにしている」

／／ はーい

ジゼルとマータを連れてマシエルのところへ行く

／♡

『ジゼル本当に嬉しそうですね』

そうか？ まあいい

すぐにマシエルは見つかり紙芝居の件の快諾も得た

打ち合わせの中で紙芝居の内容も多少変更した

『・・・私も楽しみになってきましたよ』

「フン、ジゼルもずいぶんと乗り気なようだな」

／＼ がんばります！

《マシエルがんばろうね》

「うん マータもお姫様役がんばってね」

そしてマシエルの子竜たちとフェルリ相手に紙芝居をはじめた

・・・

「ようやく我ら魔王軍も 理想に近い形となった

そこで このオレ自らが精鋭を率い人間どもに知らしめてくる」

／＼ 魔王様！ 私も!!

手を上げるジゼルにうなずいてみせる

ここからが新たに導入したシーン

聖母竜はおとなしいが あきららかにテンションが上がっている

「よかろう 今回の遠征は我が軍の威容を誇るだけでなく

新たな戦力を得る目的もある お前には期待しているぞ」

／＼ はい!

「下がって良いぞ」

「何？」

お断りします

打ち合わせと違うぞ 後は返事をして下がるだけで次の場面に移るはずだが・・・

私は魔王様といっしょにいることがいちばんですから！

そういつて抱きついてくるジゼル

「ええい 離せ！」

あゝ いつものジゼルだ

子竜たちの反応・・は さておき ジゼンを引き剥がしさつきと次に進んだ

そして 魔王が城の外に魔法の筒で魔王軍を一斉に展開し

城に乗り込んだ場面に・・・

ジゼンを肩に乗せ（本来と逆だな）まずは ジゼルの台詞が入る

がおく！ 竜のおひめさま むかえにきたよ 私とお友達になろうよ

《あなたも竜なの？》

そう！ 私といっしょに魔王様についていくの！

「ククククツ・・・」

《そんなことを言ってもだまされないわよ 私の水竜の力が目当てなんでしょ！》

「・・・さすが まだ子竜とはいえ 一国の主 見ぬいておるなら話は早い
我が下にひざまずくがいい！」

／ 私の火の力とあなたの水の力で 魔王様の理想の世界をつくるのよ
／ 《お断りよ!!》

「・・・フツ

ならば この場で殺してやっても良いぞ!!

さあッ!! どちらが良いのだ!!!

早く決めるがいいッ!!」

ブン!

バシッ

オレの顔をめがけ 小さな袋が飛んできた

捕まえてみると・・・打ち合わせより早かったが「毒蛾の粉」として

マシエルに預けていた（中身はただの無害な粉だが）ものだ

〔友達づくりが強引だったりするのは それぞれ文化の違いがあつたりするから

仕方ないかもしれないし それがお互いのためになるならがまんするよ

子竜とうしがいいなら 僕は何も言わない

———でも

僕の子竜の力を利用しようとしたり

その命を奪おうなんて 絶対ゆるさないっつゝ

外見はいつものマシエルだが・・・かなりの闘気が・・・!!?

／＼ 魔王様♡♡ アリアハンってどこにあるんですか？

ジゼルが混乱したふりをしてオレの頭にしがみついてくる

『ジゼルはちゃんと演技してますね・・・いつもとあまり変わりませんが』

・・・まあ多少の変更はオレが調整すればいい

「これは正気を失う毒蛾の粉か どうやらオレの軍団が無力化されたようだな」

マシエルが台詞を飛ばした為 適当に解説をいれた

どうやらマシエルは役に入りこみすぎたのか台詞の変化に気付いてないようだ

だが この闘気は使える うまく誘導すれば面白くなりそうだ

ジゼルを引き剥がし子竜たちのもとへ放り投げ台詞を続ける

「クククツ このオレの手で邪悪な心を植えつけてやれば子竜といえど・・・」

「そんなことは・・・絶対に許さないぞ!!」

〈これっていつものマシエルだよね〉

「ナータちゃんまでこわい顔しないで これはお芝居なんだから」

【・・・・・・・・】

・・・・・・・・

どうにか最後は話をまとめて紙芝居は終わった

やはりマシエルは竜の力を借りなくてもかなりの力を秘めていたな

そしてそのカギとなるのは子竜か……

『マシエルも怒るとあんな力があるのですね』

人間は面白いだろう？

『あなたとはじめて相對したアバンも あのような感じでしたか？』

……たしかにあやつを思い出したが どうだかな

紙芝居を終え……テンションを上げすぎて疲れ果てたマシエルの前で

今度は子竜たちが ごっこ遊びをはじめていた

内容は先の紙芝居のものだ 配役はコロコロ変わり台詞も簡単なものだが見ている

面白い

／ この魔王に比べれば まだまだー！ ／

『ジゼルの魔王役もいいですね』

フン このオレに比べればまだまだ幼稚よ

、 実際幼竜ですから、

勇者役をやるアータや姫役をやるタータもなかなか楽しそうだ

「今度はほくもやる〜」

「ぼくもぼくも」

「どうですハドラーさん？ あなたの紙芝居がまた一つの遊びを生みましたよ、
「そのようだな 別に意図したものではないが・・・」

／ ハドラ様♡ 見てくれましたか？

／ ごっこ遊びを終え手を振るジゼル

「ハツハツハツハツ 今日のところは まずほめておいてやろう」

オレの言葉にさらに笑顔になるジゼル それを喜ぶマシエル達

これもオレの経験が生んだものか・・・

ジゼルの目標

マシエル家にまたアグリナとヤチが来ている

・・・今回は手紙を見せに来たということだが、こいつの場合は

来る理由は何でもよく、ただマシエルやハータ達に会いたいだけだろう

《リタからの手紙面白かったね》

（スウも里でがんばってるんだなあ

でも方向音痴の火竜が里々を行き来する使者なんて大丈夫なのか）

〔大丈夫だよ、メオみたいにならなければ方向音痴も治せるみたいだし〕

〈レリさんの婚約はびつくりしたよね〉

〔レリはメオより早く成竜（おとな）になったといつても12歳だからね

まあ婚約だし結婚はまだまだ先みたいよ〕

〈そういえば木竜家の補佐竜同士も卵ちゃんのと看から

里が決めた婚約者だった〕

《でも反対者が多いのは大変だよ》

「知らん名前ばかりだな」

「先代のオヤジのときの火竜家の二番竜がレリ　レリが里に帰ったから

繰り上がって二番竜になったのがリタで　三番竜がマノ　四番竜がスウね

あ　一番竜は前にハドラーさんも会ったことがあるメオよ

今はマノが引退したオヤジと一緒に母さんのお墓がある村で鍛冶屋をやつてて

マノとスウはレリがいる大きな火竜の里にいろの」

「なるほど　それでこの手紙は現況報告といったところか」

『内容盛りだくさんでしたね』

「オレはあまり興味がないが　子竜たちは随分盛り上がっているな」

「みんな　友達がどうしているか気になってましたから

竜の里のことも　みんなよく知らないし」

「アグリナ　もう二番竜が来るんだね　ヤチもお兄ちゃんになるんだね」

／　　／
おにいちゃん！

「ジゼルはお姉ちゃんになるんだね」

／　　／
おねえちゃん♡

妹分ができることに目を輝かせるジゼル

「これはジゼルの成長にもプラスとなりそうだ

『そういうものですか』

ねえハドラー様　こんやくとか　けっこんってなんですか？
 「・・・オレは経験がないからよく知らん」

『私も知らないですね　聖母竜や竜の騎士のそういった概念はないので

バランスは本当に例外でしたし』

「あれ　ハドラーさんと聖母竜さんはご夫婦じゃないんですか？」

「いやちがう　ジゼルの両親ではあるが・・・」

あれは月の精霊とやらの影響で起きた　偶然の産物に近いからな」

『ひとつの奇跡ですよ　結婚のことなどはフェルリに聞いてみるのがよいかと』

「今回ばかりはオレも役に立たんからな　フェルリの知恵を借りてこい」

わかりました

ジゼルはフェルリのいる地下に降りていった　やれやれ・・・

「それでマシエル　レリたちのことなんだけど・・・」

「うん　僕も手紙をだして応援するよ」

それにアグリナも新しい卵ちゃんをむかえる準備大変だろうけど　いつでも協力するよ」

「ぼくもー」

「ありがとう　マシエル　ハータ！」

ヒュウ!!

ジゼルが地下から飛んできた・・・が

ゴツン!

天井に頭を打って墜落した が、ものともせず立ち上がりオレの元へ来た

＼ ハドラー様♡ 私と結婚してください! ／

・・・頭痛がした

「お前はオレの娘なのだが・・・」

フワリ

‘ごめんなさい ハドラーさん

ジゼルちゃんに結婚のことを聞かれたのでお話していたのですが

途中で飛び出しちゃいまして・・・’

「すまんなフェルリ面倒をかけた」

『フェルリこの状況は?』

‘私には夫も子供もいましたが 竜都の時代では

実際に竜と結婚した竜術士は珍しくなかったといったお話をしたあたりで・・・’

「ジゼルが飛び出してこうなったと」

「ええ とても懐かしいです とても昔のこと——とても昔のことを思い出します
私も自分の子竜に同じようなことを言われたことがあります」
『フェルリ・・・』

ハドラー様♡♡

「あまえんぼいいな」

アグリナぼくも

「ハータはもつとお兄ちゃんになるんだから あまえんぼうはしないよね」

「そうそう！ ヤチも リタが選んだ卵ちゃんが来たら」

おにいちゃんになるんだから！

ジゼルにつられるように甘えたがる子竜をなだめるマシエルとアグリナ
なるほどああやってなだめるのか と感心しオレも試してみたが

ジゼルにはきかなかった

やはり 一人前の竜術士のようにはいかな

ハドラー様♡

「考えてみればいつもとあまり変わらない気もしてきたな」

このまま飽きるまで放っておこうかとも思ったが

折角ならこのテンションを利用できないものか

『大丈夫でしょうか？』

「ジゼルよ お前がもしこのオレよりも強くなれば・・・」

／ 結婚してくれるんですね♡！ ／

「いや そういうわけではな」

／ ハドラー様 修業しましょう！ 今すぐに！！ ／

「しまった もう聞いてないな・・・」

『あなたは何をしているのですか・・・』

もしそうだったら私がジゼルと結婚しましょうか』

‘ 聖母竜さんそれもどうかと・・・ ’

まあ こういったやりとりも どこの家でもありましたね・・・’

そういうものか・・・ まあオレがさらに強くなっていけばいいことだ

ジゼルには上には上がいることを教え続けてやらねばな

ハドラーの特訓の巻

／ ハドラー様！ 術練習しましょう！ 術練習！！

ジゼルがずいぶんとやる気だ

『先ほどの結婚の約束のせいでしょうか』

あれか・・・ まあせっかくのハイテンション状態だ

せいぜいうまく利用してやるか

「いいだろう 外へ出るジゼル」

／ はい！ ハドラー様！

《あ、ぼくも見学していいですか》

「ぼくもー」

（おれもおれもー）

「アータにハータにサータか好きにしろ」

『よいのですか？』

別に構わん 禁呪を教えるわけではないしな

・・・外に出たオレは契約の魔方陣を用意した

ルラムーン草があれば成功率が上がるんだが まあオレの娘だ問題なからう
 「これからお前には呪文の契約をさせる

ルーラ（瞬間移動呪文）、トベルーラ（飛翔呪文）、リリルーラ（合流呪文）の三つだ」
 \・・・ハドラー様 あまり強くなる感じがしないんですが？／
 ほう ジゼルがオレの言葉に疑問を持つとは成長したものだな

『そうなのですか？』

ああ オレの言葉にただ妄信するだけでなく

強さを求めることに意識をもった証拠ともいえる

根は愚直なやつだ オレも指導のし甲斐がある

「簡単に説明すると ルーラは目的地をイメージして飛ぶ呪文

トベルーラはその応用で自由に空を飛ぶ呪文

リリルーラは仲間と合流する呪文だ」

《・・・あ！ そうか!!》

「どうやらアータは気付いたようだな

流石 知恵の竜といたところか」

\ ? /

「アータ ジゼルに説明してやれ お前が気付いた範囲でかまわん」

《はい ええとジゼル まず火竜の特性というか 特徴に

その迷子になりやすいっていうのがあって

その術が使えたらすごい便利だなと思ったんだ

・・・ぼくは飛ぶのは苦手だけど》

(ハータも習つといた方がいいんじゃないか?)

おれも習いたい というか使ってみたい)

「すまんがオレの教える術は竜術とは少し違うものでな

下手にお前たちには教えられんだ

・・・まあ呪文の契約をしなればそもそも使えんからな

知識としてそこで聞く分には問題ないだろうが」

『あなたも一応考えているのですね』

「ルーラ系は移動に限らず戦いの中でも応用が効く

具体例はおいおい挙げるとして・・・

竜術の系統ではルーラやトベルーラは風の リルルーラは暗の術に近い

ジゼルの持つ特性を生かし弱点を補う これも強くなるということだ」

／ わかりました！ハドラー様！

ジゼルも大いに納得したようなので 早速呪文の契約を行った

ピカーーーーーッ

ポオッ

「無事に呪文の契約はすんだようだな

だが それだけで呪文が使えるわけではない

訓練により 術を使いこなしてこそはじめて おぼえたといえるのだ」

／＼ はい！ ハドラー様 ／

「ルールは魔法力そのものを体全体から放出し

明確にイメージした目的地に一瞬で飛んでいく呪文だ

それができるようになればその応用で他の2つの呪文も難しくはない」

／ ……？ ／

『ジゼルが言葉の意味をよくわかってないのでは？』

・ ・ ・ むう

(ジゼルはもう風竜術で空を飛べるんだ きつとできる！

まずは飛んでから考えよう)

サータがジゼルの手を取り空へ誘う

たしかにすでに空を飛ぶ術が自力で使えるのはプラスになるかもしれない

まずはサータとジゼルに任せてみるか

「目的地のイメージかー 難しいなー

きれいな花とか まっかなおひさまとか目印にして・・・」

《だからハータ！ 目印にするなら形の変わらない物じゃなきゃ意味ないよ》

「あ そうだった」

ハータが迷子になるわけだな・・・

ハータもアータもジゼルのレベルアップに協力を惜しまないな

『ジゼルのおにいちゃん達ですからね

ジゼルもおねえちゃんになったらこうなっていくのでしょいか？』

どうだかな

空を見上げればジゼルの空の飛び方の質が少しずつ変わっているようだ

どうやらいい成果がでているようだな

トベルーラの方が先に身につきそうだが

・・・結局 今日中に呪文をおぼえる段階まではいかなかったが

それなりに手ごたえはあった ジゼルもそれを感じているようだ

やはり目的地のイメージが難しいようだ 幼竜には敷居が高いか

『あなたから何か伝えられないのですか？』

イメージだから・・・

個体差によるところが大きいだけに助言もしづらいのだ
・・・まあ考えはあるがな

自分の口がニヤつとするのがわかる

実に愉快だ オレの手でジゼルが確実に強くなつて様が
そしてジゼル自身がそれを望んでいる姿が

『その目的はあなたとの結婚ですが・・・』

・・・オレも自分のレベル上げに励まねばな!!

「どうだジゼル

これを使いこなせば たとえお前が世界のどこで迷子になろうとも
一瞬で飛んで帰ることができる

もつとも天井があるところでは使えんがな

今のように術者以外も対象に含むことができることも大きな特長だ

逆にリリルーラ（合流呪文）は術者のみだが空間を直接渡ることにより
場所を選ばず移動が可能だ

前者は目印のイメージに場所を 後者は個人を対象にするのが基本だ」

／ うーん・・・ ／

「お 来たなハドラー」

ジゼルが頭をかかえていたところでランバルスが声をかけてきた

「手紙で伝えた通り 今日には地下書庫を利用したいのだが」

「ああ 待ってたよ 好きに使ってくれ ただし言うまでもないとは思うが
書庫だからな 火竜術は厳禁で頼むぞ

「ここはおぼけがでるからな」

／ おぼけ?! ／

「ほう 面白そうだな 何の危険もない場所かと侮っていたが」

「いやいや あんたが楽しめそうなもんじゃないよ

でもジゼルを一人にさせないようにな」

『大丈夫でしょうか?』

危険はないだろう それにジゼルにちようどいい刺激かもしれない

「これが蔵書リストだ 本当に案内はいらぬのか?」

今日はアータもないみたいだが」

「ああ 折角の機会だ 久しぶりに探検を楽しむでしょう

案内人がいてはつまらぬ」

「ああ それはよくわかる」

キビツ

《師匠(せんせい)！ もう・・・》

ハドラーさん 本を持ち出すときは必ずこちらで記録をお願いします

あの どんな本をお探しか聞いてもよろしいですか?》

「裁縫と料理の本だ」

《でしたら このリストのこちらがオススメです

私もよく読んで参考にしましたから

ジゼルは何か読みたい本ある?》

「お前はまだ字が読めんだろう」

《まあ だつたら・・・》

リストのこのあたりの本は竜の花嫁衣裳や結婚式の本で

絵が多いから楽しめると思うわ》

「へえー 流石ユイシイ面白いチョイスだな」

カ~~~~つ

補佐竜のユイシイがランバラスの声で真つ赤になつていた

『どうしましたあなた？ ニヤニヤして』

聖母竜はオレの考えがわかるはずだが やはり理解ができないようだな

「ではいくぞ ジゼル」

「ああ ハドラー 夕方になつても帰らなかつたら探しにいくぞ

俺も含めてみんな紙芝居の続きが気になるからな」

「ああ これが わかつた

邪魔になるから預けておくぞ 先に読んでも構わんが」

「そんなもつたいたいことしないさ

言つたら俺も楽しみにしてるんだ 先に読んだら楽しみがへるだろう？」

「そうか」

紙芝居を受け取ったランバルスの答えで 今回はオレ一人でやる事が決まった
まあそれも一興か オレはリストを借り受け地下書庫に向かった

／ じゃあ いってきまーす！ ／

ジゼルもすぐ後について歩いてきた

地下一階に下りたところで・・・

「ジゼルよ ランバルスも言っていたがここでは火竜術は禁止だ

火竜術はな・・・」

『・・・』

オレはジゼルに念を押した

オレの考えを読みとった聖母竜はあえて何も言わない

この地下書庫で本を読むことと もうひとつのねらい・・・

／ うわーっ ／

見渡す限りの本棚 圧倒するような本の量に まぬけに口をあけているジゼル

「この地下一階は先代の地竜術士の書庫だそうだ

そしてその下の階はさらにその先代の書庫と代々の竜術士の書庫を

竜術で地下に下ろしているらしい

なかなか面白い作りだ」

リレミト（迷宮脱出呪文）ですぐに出れるとはいえ

時間の感覚がわかりにくいこの地下書庫で

本を読みだしたら夕方などすぐだろう

「この料理本も気になるな・・・コーセルテルの食材を使ったレシピ集か」

ジゼルも気になる本を手にとって見ている

いくらか歩き 本を読む それを繰り返し・・・

地下3階でジゼルは今 竜の花嫁衣裳の絵が載った本に夢中になっていた

そろそろよいか・・・

オレは気配を消し ジゼルから見えないように本棚の陰に隠れた

しばらくすると オレの姿が見えないことに気付いたジゼル

＼ ハドラー様?! ハドラーさまー!!

オレの名を呼んでいるが オレはそれに応えず そのままジゼルを見ていた

本をその場に置き オレを呼びながら探しはじめたジゼル

いきなりオレのいる場所とは逆方向に歩き出した

気配殺しながら後をつけ 置いていった本は元の場所に戻した

＼ ハドラーさまー ハドラーさまー

ジゼルがオレを呼ぶ声に力が無くなってきたところで ふと立ち止まった

『ジゼル・・・』

／ そうだ！ ハドラー様は火竜術を使つてはいけないと言つたけど！
／
気付いたか？

／ ハドラー様はこんなときのためにあの術を・・・ リリルラー（合流呪文）！
／
ジゼルはリリルラーをとなえた！

しかし なにもおきなかった

『あなたの思惑どうりとはいきませんか』

オレもいきなりうまくいくとは 思つておらん まあ見ていろ

／ リリルラー！ リリルラーラー！！／

しかし なにもおきなかった しかし なにもおきなかった

地下書庫に大した術防止の術はかかつていない

術がうまくいかないのはジゼルの集中力が足りんだだけだ

／ はあ・・・ はあ・・・ はあ・・・／

息をきらし座り込んだジゼル

どうやら腹が減つたようだ 手持ちのパンを食べ始めた

「一息ついたようだな そういえばもうそんな時間か」

この位置からでは表情が読み取れんがまだあきらめてはいないはずだ
 ・ ・ ・ 食べ終わったのか顔を上げたジゼルがまた声を上げた

／ おかあさまー！ー！ ／

『ここですジゼル!!』

いかん!!

オレは気配を消したまま走り出しその場を離れた

つく そうきたか ・ ・ ・

台無しになるところだったぞ聖母竜

『あなたこそ これだけ離れてはジゼルの様子がわかりません！

すぐに戻ってください!』

やれやれまったく過保護なやつだ

心配せずとも 場所は忘れておらん

聖母竜をある程度落ち着かせ 先の場所にもどったが

「おらんな ジゼル ・ ・ ・」

『 ・ ・ ・ いませんね』

どうやら聖母竜の返事に気付いたのか探しに行ったのだろう

・ ・ ・ 見当違いの方向に

『どうするんですかー！これでは何かあったときに?!』

まったく・・・ オレの耳は並ではない

この階なら 声や足音ですぐに場所が特定できる

・・・はずなのだが まったくわからんな

気配までしないとほ妙だな

『本当にどうしたのでしょうか？ まさか例のおばけに?!』

ジゼルに害があるようなものなら ランバルスやユイシイが

許可をだすはずがないだろうが

『ハドラー!!』

まったく うるさくてかなわんな・・・

まあジゼルの探検はこれぐらいにして

オレのリリルーラで合流してお・・・？

フッ

なんとジゼルがあらわれた

しかしジゼルはねむっている

いきなりオレの胸元にジゼルがくっついてきた 寝ながら・・・

「今のはリリルルーラ・・・ どうやら成功したようだな眠りながら」
 『ジゼルの顔に涙のあとがありますか 笑顔ですね』

「どうやら空腹を満たしことと疲労感から眠りだしたジゼルが
 術を成功させたのだろう」

夢の中でかえって集中し オレか聖母竜をイメージできたということか？
 寝ていたから足音もせず 気配も感じなかったと

＼ z z z /

フツフツフツ それにつけてもジゼルめ・・・

早くもリリルルーラのコツをつかんだか

まさかこれほどうまくいくとはな

『眠った状態で・・・とは 流石にあなたも想像してなかったようですね』

まったく・・・ 子供というものは つくづく驚くことばかりだな

「まあ今回は ほめてやろう」

ジゼルを抱いたまま起こさない程度に顔を拭いてやり オレはリレミトをとなえた

ハドラーはレベルがあがった

ちからが1あがった

すばやさが3あがった

たいりよくが2あがった

かしこさが3あがった

うんのよさが1あがった

さいだいHPが3あがった

さいだいMPが4あがった

しのびあしをおぼえた

ジゼルはレベルがあがった

ちからが1あがった

すばやさが3あがった

みのまもりが2あがった

たいりよくが2あがった

かしこさが1あがった

うんのよさが3あがった

さいだいHPが2ふえた！

さいだいMPが1ふえた！

ジゼルダイブ・改をおぼえた

リリルーラをおぼえた

1Pの スキルポイントを かくとく！

ジゼルのじゅもんが スキルアップした！

トベルーラをおぼえた

ジゼルのかくとうが スキルアップした！

ハートブレイクをおぼえた

伝えるのは父の魂!!の巻

「こっ……こうなったらイオラで 充分!!」

まとめて 灰にしてやるわツ!!!

片腕を失った魔王は怒りのままにもう一方の腕で呪文を放ち

よくも……よくも 私の友を……!!

許さあんツ!!!!

メガネの騎士も剣に怒りを込めて振るつた

それはとつさに繰り出したものだったが イオラの威力に相殺されながらも……

なっ……なにイツ!!!?

なんだ!!? この閃光はあツ!!!?

あああああ………ツ!!!」

今日一番の声をだす

『今回は一人で紙芝居を進行しているのにそんな絶叫して大丈夫ですか?』

フン! 知ったことか!

「光に包まれながら 頭が冷えた魔王はこれ以上の戦力の消耗を嫌い

撤収を決断 城外の全怪物と気絶した竜を含め移動呪文を使った

魔王の襲撃をしのぎ歓喜にわく城内の人間たち

だが 魔王とメガネの騎士・・・いや勇者との宿命の戦いはこれがはじまりだった」

地竜家の連中は反応が薄いが 集中して紙芝居を観ているのがわかる

子竜たちはみな行儀がいいだけに 一番楽しんで観ているのは

竜術士のランバルスのように見えた

・・・この後の勇者として旅立つアバンとフローラのアイテム交換の方が

子竜たちの反応が顕著だったのが不思議だったが

紙芝居を終えたあととは子竜たちが内容について熱く語り合っていた

ジゼルもその輪の中で言葉はつたないながらも参加していた

「こころなしか・・・ だんだんジゼルの語彙が増えているようだな」

『女の子にとっておしゃべりは 色々と大事なものだそうですよ

フェルリから聞いたことです』

・・・そうか それはオレだけではどうにもならんな

やはりこのコーセルテルという地はオレだけでなくジゼルにとつても

レベル上げに最適のようだな

／やっぱり今回のお話は みんなでやったほうがいいと思うの!／

《それもおもしろそうだけど・・・ どうやってたの?》

／ ハドラー様が魔王様役をやってその肩に私が乗って!／

『ジゼルがそれをやりたいだけでしょ』

ハツ!?ジゼルが魔王役を 私が竜の役をすれば肩に乗せるとか!』

おまえも大概だな・・・ やはり親子か

『そう! 親ですから!!』

「この地竜家なら メガネの騎士をランバルス 王女をユイシイがやればいいだろう」

オレも会話に加わった

アバンやフローラのイメージに一番合いそうなのは この地竜家だしな

《ええっ!! そんな!?師匠(せんせい)が騎士で

わた・・・しが おひ、めさま?!》

ユイシイが真っ赤になってこんらんしていた

「キビツとした姫を飄々と助ける騎士 絵になると思うぞ」

オレの言葉でユイシイの熱量がさらに上がった まるで火竜のようだな

「いやいや ここはロービィとエリーゼがやった方がいいだろう

いい思い出になるぞ」

あらすじとしては・・・」

オレはランバルスに おおまかな流れを話した

・ ・ ・ 次回の主役は魔王のオレや勇者アバンではない

オレの最初の配下であり 禁呪によって生み出した最初の子

ジゼルにとっては長兄と言える存在 ・ ・ ・ 地獄の騎士バルトスだ

・ ・ ・ さらなる力を得るために魔術についての研究をしていた魔族の男は伝説の禁呪法というものを見つけた

・ ・ ・ 自分とは違うタイプのスピードと手数求めた6本の腕を持った骸骨、不死身の地獄の騎士を生み出した

・ ・ ・ 初めての部下を得て新たな力の境地を見出した魔族の男は 自ら軍を興し 魔王への道を歩みだした

・ ・ ・ 地獄の騎士は魔王の第一の配下として戦う日々過ごす

・ ・ ・ 魔王は拠点を得てからも自ら最前線に出続けるので 城の防衛を任せられるようになった地獄の騎士

・ ・ ・ 拠点のある大陸、魔王軍の攻撃により焼かれた町の中で 地獄の騎士は人間の赤子を拾った

・ ・ ・ 魔王にとっては自軍最弱のスライムよりも無力な赤子に興味はなく 魔王軍最強

である地獄の騎士の酔狂、赤子を育てることを許した

・世界を恐怖で覆う魔王の邪悪な気配が最も濃い城の中 赤子は何の疑問を持たず大きくなっていく

・地獄の騎士は父として赤子を少年に育て上げ 少年は父を慕い手作りの勲章を贈った

・地獄の騎士はまた強くなった 父として 騎士として・・・

・・・これがほぼ事実なのだからバルトス有能過ぎるだろう
子育てレベルで言えばオレはいまだにバルトスに遠く及ばん

「・・・なあ ハドラー、すごくいい話だとは思うんだが

これ 多分このままで終われないんだろう？」

「ああ この親子にはお前が考えているよりも残酷かもしれん別れがある

子竜向けを考えれば紙芝居でやる必要はないか・・・」

「たしかにユイシイはともかく うちのちび達には 少し重いかもしれないな

だが あんたはジゼルにはそれを見せるつもりでいると」

「そのとおりだ 紙芝居の流れからして すぐ、とは言わんが」

やはり こいつは話のわかるやつだ

『バルトス・・・ジゼルにとって一番のおにいちゃんですか

その最期まで伝えるのですか?』

そうだ ジゼルにとって いや何よりオレにとっても大事なことだからな

オレは握り締めた拳を見る

フン! 後悔はない だからこそ伝えねばならんだ・・・

父となつた日

オレは地竜術士ランバルスの助言を受け 新作の紙芝居にとりかかっていた
今回は特に絵に力をいれているだけに 地竜家だけでは終わらず

未完成のまま持ち帰り 家事が終わった後 術部屋にて徹夜で仕上げている

「フェルリ おまえが寝ているジゼルを見てくれるのは非常にありがたい」

「いえいえ ジゼルちゃんがぐっすり眠れるのは

ハドラーさんが背中を貸してあげてるからですよ」

たしかにジゼルはオレの背中で寝ているが それだけだ

紙芝居が完成するまで ジゼルや他の子竜に中身を見られるわけにはいかん

結果 仕上がるまでジゼルから目が離れるのだが

その間フェルリが面倒を見ているから 作業に集中できるわけだ

『私は残念ながらハドラーの目に映るものしか見えないですからね』

まったく 役に立たんな

『フェルリは幽霊とはいえ生前に 母として 竜術士として

二人も立派に育てていたのですから 頼りになりますね』

「まったくくだな」

‘いえ そんな’

聖母竜がフェルリと会話している間もオレは作業を続けていた

こやつらはよく毎晩毎晩 話が続くものだ

・紙芝居がほぼ完成した 地下にいたのでわかりにくいが そろそろ夜が明ける頃だろう

「朝食の支度がある フェルリ その間 絵の出来をみてもらえるか？」

‘ええ よろこんで ジゼルちゃんも背負ったままですか？’

「ああ これもレベル上げの一環だからな」

オレは出来上がった紙芝居をひろげたまま台所へむかった

・

・朝食を終え 紙芝居の披露となった

ジゼルや他の子竜たちも行儀良く座って待っている間に 紙芝居をとり地下の術

部屋へもどった

「フェルリよ どうだ？」

‘ハドラーさん 素晴らしかったです 今までのどの絵よりもあたたかい感じですよ’

「登場しているのは ほとんどが人間とはかけ離れた姿の怪物たちだぞ」

紙芝居に書いてある文字は魔族言語にしてあるので話の内容はわからないはずだが

‘ふふ おはなしの中身はまだわかりませんが みなさんいいお顔ですよ、’

‘・・・絵だけを褒められているわけではないような感覚だ

「これからこいつのお披露目だ 見に来るか？」

‘ええ ご一緒いたします 子竜ちゃんたちの隣で楽しませてもらいます、’

「魔族の男は魔道を学ぶうち ひとつの術に出会った

それは核となる無生物に命を与え自らの子を生み出す伝説の禁呪法

子は術者の精神的影響を受け その魔力により生き続けることができる

男はさらなる力を求める一環として その術に手をだした

自らの強さとは違うタイプとして その姿は・・・

力よりも速さを求め軽くし 軽さを補うために手数を増やし

更に武器を持たせるために手を魔族や人間に似せた

・・・ここでおまえたちに想像してもらいたい

このとき生まれたこの子はどんな姿をしていたかを」

オレはいったん 紙芝居の進行を止め 皆に考える時間を作った

この時点で 子の姿を知っているのはフェルリだけ 皆色々な想像をしていた

適当な頃合を見て 次の一枚を出した

ドン

ざわ・・・

子竜たちの顔から驚きと恐怖が見える

オレにとって最初の子 バルトスの姿に圧倒されているようだ

「その姿は軽さを求め皮も肉もなく骨のみ

六本の腕と握られた武器が敵を圧倒する

核となった頭の骨を守る為の兜 唯一命を感じさせる大きな目

この後 魔王軍の最強の門番となる 地獄の騎士の誕生である」

その異形な姿に子竜たちが凍りつく

バルトスはオレの子の中でも最も長く生きオレに仕えていたことから

その姿を正確に再現することはたやすく 子供向けの絵本とは一味違う

誇張なく描いたその一枚を見る子竜たち おそらく想像とはかけ離れていたのだろ

う

あのナータですら表情が暗い

『ナータは元々あのような表情では?』

たしかにな・・・ジゼルも多少は驚いているようだがあまり怖がつてはいないか

その後は主にバルトス視点でオレが魔王として勢力を伸ばしていく過程の内容だ
魔王軍が大きくなるにつれ紙芝居を彩る怪物たちも増えていった

オークやギガンテス がいこつ剣士 ボストロールと新顔を出すたびに子竜たちや
マシエルが

ビクッ ひっ わッ

と反応するのが面白い フェルリは笑顔を絶やさないがな

そして バルトスにとつて 後々はオレにとつても重大な出会いをむかえた

「魔王軍の攻撃により焼かれた町の中に 人間の赤子の声がひびく

それは殺気立った怪物たちを刺激し その小さな命も消える寸前だった

だが それを見た地獄の騎士は武器をはなし手で赤子を抱き上げた

．．．親に見捨てられたか．．．哀れな．．．

地獄の騎士に拾われた赤子そのまま魔王の城で育てられた

魔王にとつて自軍最弱のスライムよりも弱い人間の赤子に興味などなく

魔王軍最強の騎士の酔狂として城から出さないことを条件にそれを許した．．．

子竜たちの表情が変わった いや見る目が変わったというべきか

「武器を持つはずだった六本の腕 そしてその手で赤子を抱き

部下に命令を下していた声で子に名前をつけその名を呼んだ

冷たい骨だけの身体が確かに赤子に父としてのぬくもりを与えていた

世界を覆う邪悪な魔王の気配 そのもつとも濃厚な城内の一室

魔王軍の最精鋭が集う中 赤子がむける笑顔に その子をあやそうと必死な最強の騎士に

他の怪物たちも笑顔になっていった」

子竜だけではなく マシエルもフェルリも 紙芝居に見入っていた
バルトスを含め怪物たちの絵自体にはあまり変わりはないはずだが
だれもその顔に 恐怖の色は感じない

「かつて魔界を牛耳ったという伝説の剣豪の名前をつけられた赤子は

何の疑問も抱かず大きくなっていった

少年となったその手をはじめ握った刃物が生み出したもの・・・

それは父への贈り物 星型の首飾りだった

おお これをワシにか？

少年の手により父の首にかけられた

おおウ ワシがもらったはじめの勲章じゃ

それは 紙と布で作られた 何の守備力も持たない装備品だった

だがそれは 地獄の騎士にとってどんな武器や防具よりも価値があるものだった

地獄の騎士はレベルが上がった・・・」

今回の紙芝居はこれで終わりだ オレの最初の子バルトス そしてその子後に宿敵アバンの使徒として オレの心臓をも貫いた戦士ヒュンケル・・・

『あなたよりよつぽど 父親をやっていますね』

ああ大したやつだ 今なら心からそう思う・・・

その後 マシエル家をはじめとして この紙芝居を披露した家では 竜術士や親に手作りの贈り物をするのが流行した

ジゼルもその例に漏れず・・・

＼ はい！ハドラー様♡ これを食べてください!! ／

アグリナの家で焼いてきたらしいパンをもってきた

「ほう 星型か」

とりあえず一口で半分ほど食ってみた

「・・・うむ 悪くない」

まあ味はアグリナの手柄だろうが パンを焼くときにはジゼルも火竜の力を貸したらしい

ジゼルがオレ以外の竜術士に力を貸すとはこれも成長ということか・・・

『ハドラー 私も是非食べたいのですが!!』

「やれやれ・・・ドラゴラム」

術部屋の中で竜化した分 本来よりは小さいものの 竜の姿では食べにくい聖母竜
に

フェルリに耳打ちされたジゼルが食べさせてやっていた

バルトスよ・・・ 見ているか・・・ オレはお前に近づけているだろうか

まよいみち ジゼルとびこむ みずのおと

火竜の特性 それはよくもわるくもジゼルにもあてはまる

基礎竜術の本で知ってはいたが ときにこれがなかなか厄介なこともある

／ 晴れたーooooooooooooo♡ ／

『ジゼルはご機嫌ですね』

昨日は雨が降っていたせいか 明らかにテンションが低かったからな

朝食を終え 外に出たジゼルに声をかけた

「ジゼルよ 今日はお前の力を試す まずはどこでもいい

目的地を定めそこに歩け オレは後からついていく」

／ はい！ハドラー様！ じゃあ火竜家にいきます！ ／

「よかろう」

火竜家か コーセルテルならどこからでも見えるクランガ山の中腹にある

方向音痴の火竜への配慮らしいが・・・ハータはそれでも迷うと聞く

・・・

結果から言えば 迷った・・・

ジゼルは一応山を目指していたようだが

やたらと後を振り返るばかりでまっすぐ前に進めていない

『振り返るのはあなたを見ているのでしょう』

やれやれ・・・

気がつくくと少し開けたところについた はじめて着た場所だ

「ほう あの木の葉は以前アバンが言っていた茶葉に似ているな」

味見を試してみようと ジゼルからわずかに目を離し手を伸ばしたところで

どっぼーん！！

ジゼルが池に落ちた

昨日の雨のせいかな かなり深いようだ 完全に頭まで沈んでいる

「ふんー」

バシヤ!!

池の淵から手を伸ばしジゼルを拾い抱きかかえた

泣くかと思つたが 呆然とした顔をしている

『濡れてパチクリする顔 いいですね!』

聖母竜は放つておいて・・・ たしか火竜は水だけでなく寒さにも弱いはず

濡れた状態はまずいか

「ルーラ!!」

ビューーン

行き着く先は帰るのではなく本来の目的地

ドーン!!

火竜家に到着した

〔何!今の音?! あ ハドラーさんにジゼル!! どうしたのびつしよりよ?!〕

ルーラの着地音に驚いたのか アグリナが飛び出してきた

音の正体もわからずにでてくるとは無用心な・・・まあわかるが

「ジゼルが池に落ちてな 服を乾かす火竜術があれば使ってくれるか?」

〔たしかに火竜術にも水竜術にもありませんけど〕

まずはジゼルをあつためて服は洗濯しないと

ヤチ部屋をあつためて お風呂を沸かすから力を貸して」

／ うん! ／

アグリナ達の火竜術で室温が上がった この術も面白いな

火の力の多様性 これを実感できるのはやはり火竜家だな

『あなたそれが目当てですか』

まあな

「ハドラーさん ジゼルの服を脱がせてこのタオルで身体をふいてあげてください
お風呂はすぐに用意できますから」

「ああ わかった」

アグリナからタオルを受け取り ジゼルの濡れた服を脱がせド口に塗れた体を拭く

うろ／＼

火竜にとつて 濡れた身体に秋風は沁みるものがあつただろうが

どうやら元氣そうだな

『一安心ですね』

別に心配などしておらん . . . とりあえず目立つ汚れは落ちたようだな

そうこうしている内にアグリナがやってきた

「じゃあ ジゼルをお風呂にいれるのはあたしたちに任せて お洗濯お願いできますか
?」

グイ族のところに行けばハドラーさんの着替えもありますし

洗濯道具もうちより揃ってますから」

「オレの着替え?」

「ハドラーさん ジゼルの抱っこしてたから 前泥だらけですよ」

言われてみて気付いていたが オレの服も前側だけだがびしょ濡れになっていた
「むう…… わかった グイ族のところに行ってくる」

ジゼルを抱きかかえたアグリナが風呂に行き

オレはジゼルの服を小脇に抱え火竜家を出たところで……

ふええっ わあああんっ

ジゼルの泣き声が聞こえた

『ジゼルッ!』

放っておけ聖母竜 アグリナに任せておけばいい 若くとも一人前の竜術士だ

わあああああんっ

「ええ?! なんでヤチまで泣きだすの?!」

『……本当に大丈夫ですか?』

……アグリナにとっても二番竜を迎える前の いい経験になるだろう
オレはグイ族から手ほどきを受けながら服を洗濯した

流石コーセルテルの仕立てを担当する連中だ 洗濯にもこだわりが違う

力の入れ加減 水質・水温の調整など どれも役に立つ貴重な情報だ

ジゼルが池に落ちたことがきっかけで 色々と得るものがあるものだな

『いや落ちたことは!』

わかっている あれはオレの落ち度でもある

・・・これがきつかけでジゼルが水が苦手になってもいかな
いずれはあの池でジゼルに水練でもさせせるか

『それでは余計悪化するのでは?』

だれのことを言っている オレの子だぞ

『・・・まあ 私も自分の子を信じましょうか

あ、そこに泥の染みがありますよ』

やれやれ うるさいやつだ

。ハドラーさんのお着替えはこちらです どうぞ

ハドラーさんほど大きい方はコーセルテルでは珍しいですから

服は作り甲斐があります 丁度いくつか作っていたところでした。

「ああ ありがとう」

。ハドラーさんの手 大きくて強そうなのに すごく丁寧です

もうお洗濯のコツをつかんだようですね。

「フン」

洗濯の手を止め グイ族から服を受け取り 着替えた

すばやさぎが2あがった

たいりよくが2あがった

かしこさが2あがった

うんのよさが3あがった

さいだいHPが2あがった

さいだいMPが3あがった

ジゼルはレベルがあがった

ちからが1あがった

すばやさぎが2あがった

みのまもりが3あがった

たいりよくが1あがった

かしこさが1あがった

うんのよさが1あがった

さいだいHPが3ふえた！

さいだいMPが3ふえた！

1Pのスキルポイントを

かくとく！

ジゼルのメイドが スキルアップした！
エプロン系のそうびで守備力+15

ぬのいちまいで すぐにわすれる

予定外ではあったが、グイ族のところまで世話になったついでに

以前から頼んでいた裁縫の手ほどきを、グイ族の村長から受けることになった

。ハドラーさん、ジゼルちゃんのエプロンを作るのが目標ということですか？

「ああ、とりあえずは、そんなところだ」

装備品を自分で作る、これが実現できれば面白いことになる

。わかりました、では・・・

お料理で使うことも踏まえまして

三角巾、手袋、作っていくことで段階的に色々勉強していきましょう

そしてそのまとめとして、エプロンを作るという流れで。

「わかった、いいだろう」

。ではハドラーさん、まずはこれでジゼルちゃんの頭を採寸してください。

「採寸？」

紐を渡されたが、何をするのかがわからなかった

。ジゼルちゃんのサイズを調べて それを元に布を裁断します。
 「なるほど たしかに重要だな こいジゼル」

＼ ーはい ハドラー様♡ ／

オレの呼びかけに応え よつてきたジゼルを椅子に座らせ頭をつかむ
 「少し濡れているな そういえば風呂上りだったな」

。ハドラーさん 頭をふいた後にクシでとかしてからにしましょう。
 タオルと櫛を渡されたが・・・

「タオルはともかく クシは使ったことがないぞ」

。ハドラーさんも綺麗な髪ですけど お手入れしてないのですか？

では 私がハドラーさんの髪をとかしますから

それを参考にしてジゼルちゃんにやってあげてください。

スウー・・・

オレの髪を村長がとかす

「・・・なかなかよい気分だ」

＼ ー！ あ・・・ あー！ ／

「おい じたばたするなジゼル」

足をバタつかせだしたジゼルをおさえ クシを使い髪をとかしてみた

スー スー、

あー♡・・・♪

ジゼルは髪をとかすと 急におとなしくなったので 頭のサイズをはかる
「思ったよりも頭は大きいな それに意外とデコボコしているのだな
角も不思議な感触がある」

ええ 直接触って測ることはじめてわかることも多いですから
ではその採寸記録から布を裁断しましょう 色はどうしますか？。

／ はい ピンク！ 〵

『ピンク好きですな』

「まあそれでいい あるか？」

ジゼルが手を上げた主張を採用した

。 ありますよ 火竜ですからやっぱり赤系になると思っていましたから。
用意されたピンクの布に印をつけ ハサミで切る

スパーツ

。 思い切りがいいですね しかもとても綺麗な切り口です

ハサミは慣れてますか？。

「いや そうではないが ハサミの手入れがいいのだろう」

これで もうほぼ完成しているように見えるが

。では 最後に端がほつれないように縫っていきましょう。

「まかせろ」

チクチクチクチクチクチク……

。……ハドラーさん お上手ですね。

前に雑巾を縫ったときは初心者だとおっしやっついていましたが。

「ああ だからヒマさえあれば古布から雑巾を量産していたからな」

「それだけでこんなに上手になるの?!」

村長もアグリナも大げさに驚いている

このオレが弱点をそのままにするわけがないだろうが

「武術だろうと魔術だろうと基礎の上達には地道な反復練習だ」

『マシエルの家には古布がたくさんあったのが幸いでしたね』

「子竜が八人もいるのだ 雑巾はいくらあってもいいだろう」

／　じー……　／

「ジゼル 退屈ならアグリナやヤチと遊んでいてもいいぞ」

まだロクに針が持てないジゼルは正直もうやることがない

ぶんぶん！

「ふん・・・」

ハドラー様を見てる！

チクチクチクチクチク・・・

。ハドラーさん 運針中でも姿勢がいいですよね

猫背にならずに いつもキビツとしてて。

「オレは目も耳も人間とは出来が違う

・・・それよりできたぞ 見てくれ」

縫い終わった三角巾を村長にわたした

・・・大丈夫ですね

ではハドラーさん ジゼルちゃんにつけて見せてください。

ジゼルは さんかくきんを 装備させてもらった

守備力が4あがった

♡！ ♪♪

三角巾を頭につけたままのジゼルが小躍りしている
髪の毛や角がしっかりと隠れ ほどける様子はない

。素晴らしい出来ですね 使い続ければもつと馴染んでいきますよ。

「わあゝ いいなあ あたしも作れるようになるかな？」

／＼ アグリナつくってつくって！

ヤチがアグリナに自分の分をせがんでいた

まあ それはさておき

「どうだ村長 とりあえず及第点と見ていいか？」

。ええ 勿論です 次の機会には手袋を作れるように準備しておきますね。

ジゼルはまだ小躍りしていた 今日には迷子になったり 池に落ちたりと

散々な目にあつたはずだが 装備品ひとつでここまで喜ばれると・・・

『いいものですね 私にも作れたらいいのですが』

お前には無理だ 少なくとも針糸が持てん

『・・・そうなのですが』

オレは裁縫道具を片付けながら まだくるくる回っているジゼルを見て
自分の口元がほころびるのを感じた

太陽と王 〔前編〕

「今日もよく晴れているな」

洗濯物を干し終え 朝の家事が一段落ついた

「秋の太陽か・・・」

／＼ ハドラー様？ ／

まだ役には立たないが オレについてきたジゼルが同じように太陽を見上げる

やはり火竜だけあり 太陽がまぶしいという様子はない

ただ太陽を眺めていたオレを不思議に感じたのか 首をかしげた

「・・・太陽には色々と思うところがあつてな」

太陽・・・

オレ達魔族の故郷 魔界にはその光は届かない

・・・ダイ、大魔王バーン、アバン、凍れる時間の秘法・・・

太陽を通じて オレはかつての戦いの日々を 因縁を思い出していた

いずれは紙芝居を通じて ジゼルも知ることになるだろう

「・・・ジゼルよ これから この日を浴びながら瞑想をする まずはやってみろ」

「今日の余の心は実に晴れやかだ・・・」

この闇の世界に入り込んだ 秋の太陽のように・・・」

「あああああつ・・・!!!」

オレは知っている この声を！

「・・・どうした？ 余を忘れたわけではあるまい・・・？」

この姿を!!

「あつ・・・ あなた様はっ・・・!!?」

その存在を!!!

「そうだ・・・余はバーン

今の余は肩書きを持たぬ身だ、好きに呼ぶと良い」

大魔王バーン!!!!

ビクッ

たしかにかつてのような いやそれ以上の威圧感はある・・・

だが・・・ あの方はダイに敗れ死んだ筈

まあオレが言うのもなんだが 死んだはずの者が生きていた例などいくらでもある

が

だがおかしい・・・

今オレの前にいる姿はかつて対していたものと同様ご老体のもの
違いといえは首に巻いている赤いスカーフぐらいだ

ダイとの戦いで全盛期の若い姿にもどり、さらに鬼眼王なる禁断の魔獣となつたと聞
く

それに 明らかに纏う空気が違う！

長年畏怖してきた 魔界の神と名乗ってきた者が纏うものではない！

「……ふふふつ よい よい……」

以前の余しか知らぬおまえには 疑問しかもたぬであろう

最近のおまえが変わつたように、ダイとの戦いの後余にも変化があつた

だが お前から覇気と強さを信じる心が失われてはおらぬように

余にも変わらぬものがある 余は紛れもなく バーンだ」

「……どうやら そのようですね

何があつたのか お聞きしてもよろしいですか？」

すでに決別し刃すら向けた相手ではあるが 憎む心が湧くわけではない

しかし長年畏怖の対象だつたせいかな 自然と言葉がかたくなる

「……ふむ 話せば長くなるが

あえて端的に言えば 余は念願であつた太陽を手に入れた」

「太陽……」

「そして余は太陽となった……それが今の余だ」

……成る程

「ところでハドラーよ、今おまえは 実に興味深いことに

かつての戦いの歴史を紙芝居という形で遺そうとしているようだな

そこで 全知全能たるこの余がおまえに知恵をくれてやろう

“凍れる時間の秘法”をはじめとする秘術や 魔界のことなどを語ることで 余以

上の者は存在せぬ」

!!!!

「……なかなか魅力的なご提案ですが

既に太陽を得たという今のあなたが 今のこのオレに力を貸す真意は？」

「………んっふっふっふ……」

余の真意、望みか…… ハドラーよ ふたたび余の片腕となれ」

太陽と王

（後編）

「……んっふっふっふ……」

余の真意、望みか……ハドラーよ ふたたび余の片腕となれ」

＜はい

いいえ

……オレはかつて魔王として勇者アバンに敗れた死の瞬間

このお方から同じようなことを言われ 「はい」と答えたことで

命を救われ 以前よりも若く 強靱な肉体を授かった

……同時にとんでもないものも授かったが

その時の選択に一片の後悔もないが 今は状況が違ふ

それに気になることがある

「どういう意味ですか？」

「おまえの描いた紙芝居を通じて あの戦いを

余の強さ 恐ろしさを語りつぐのだ」

……一見 筋が通っているように聞こえるが おそらくその真意は

「お言葉ですが 仮にあなたの助言で完成度の高い作品が出来上がったとしても……奥方様にお渡しする手段がございません」

「……!!!」

「どうやら オレの読みはあたったようだ」

「見抜いたかハドラー 別に隠していたわけでもないが」

「何故わかった？」

「あなたが 太陽を得たと語った際に」

「バランが自分の最愛の妻と息子を太陽と表現したことを思い出したもので」

「それに あなたはあの戦いを伝えたいとおっしゃった……」

「あの戦いは あなたの強さだけではなく敗北さえも伝えてしまうもの」

「ダイとの決戦では敗北よりも二度と戻れぬ魔獣となることを選んだあなたが」

「それでも伝えたい相手がいる……ということでは？」

「……素晴らしいぞ ハドラー」

「余は既に肉体を失った身 余の右腕となり あの日々を形に遺す」

「やはりおまえ以外にこれを任せられる者はおらぬ」

「紙芝居の内容については おまえが描くものを実名にするだけでよい」

「それをもうひとつ作って置いておけば 後はどうにかなるであろう」

・・・かなり肝心な部分だと思うが いいのかそれで？

「・・・オレはこのコーセルテルの地に入った際に

『他者をコーセルテルに連れてこない』

という条件を呑みました

あなたとの接触はその約定に抵触する可能性がある」

「・・・フツ その心配も無用だ

余は太陽となった とも語ったはずだ

太陽は直接近づかずともその光は大地を照らしている そういうことだ

おまえが今のようには太陽の下で瞑想をすればこのとおり会話が可能となる」

「・・・まあ いいのか

「最後にひとつだけ お答えいただきたいことがございます

・・・あのオレとダイとの最終決戦の決着がついた際の死神の姑息な罫

あれはあなたの差し金ですか？

何人たりとも手出し無用っ!!!

寄らば生命が無いと思っていただけききたいっ!!!!

と言ったのが聞こえなかったとは 言わせませんで」

あれは我らがハドラー親衛騎団の誇りと生命を賭けた勝負・・・

この答え次第では・・・!!

右拳に力が入る・・・

「おまえとの・・・真竜の闘いをも乗り越え

レベルアップを果たした勇者ダイの力に驚愕したのは事実だ

あの戦いで消耗しきつた最大のチャンスに暗殺 大いに結構・・・」

・・・!!!

「そしてあの勇者アバンが生きていたとわかったときは即暗殺を命じた

かつて おまえに命じたように・・・!

奴・・・アバンには力を越えた何かがある・・・!

余が信じる強さとは 全く異質の強さを感じる男・・・

それがアバンだ!」

・・・

「あの頭脳 地上一の切れ者がダイに合流する

余の最大の障害 アバンの使徒の力が異常に増幅されると感じたからだ」

・・・何ということだ オレの宿敵たちが あの大魔王に それほど・・・

—————
それがこれほど嬉しいとは!!

オレの気持ちは固まった

「……もう一度 この手をお貸しいたしましょう あなたの叡智を借りる為に
オレは右手を差し出した

「………」

命が尽きかけ その身が崩れながらも アバンの暗殺を防いだあの一撃

……余は正直見とれた

叛旗をひるがえしたとはいえ おまえへの敬意は変わらんがあれは別格だった
余が肉体を失ったときも同じように身体が灰となつていったが

あの状況下でさえ 尽きぬおまえの覇気 痛恨の一撃

それを生み出した右腕の力を借りる これほど頼もしいことはない」

!!?

なんだ!?!この湧き上がる 熱いものは!?

………やはりかなわぬか このお方には……

更に器が大きくなつておられる……!

………だが!

「折角の機会 奥方との馴れ初めなどお聞きしたいところですが」

ハドラーのこうげき

「……ふふふつ よい よい……」

我らには最早 時間に大した意味はない じっくり話すとしよう

兵士ヒムがヒュンケルとの一戦で起こした奇跡・・・などもあるぞ」

「!詳しい話を聞きましょう」

バーンはうけながした

「・・・では 作り上げようぞ最高の紙芝居を 余とおまえで

互いの『太陽』の為に・・・!」

・・・

＼ Z z z z z Z z z z z く ろ ・ ・ ・ ／

オレのひぎの上ではジゼルがぬくぬくと寝ていた

また寝ながら飛び込んできたか

『あなたも寝ていたのでは?』

・・・いいところだったのだが

聖母竜 瞑想中に何かあったか?

『いいえ 特には』

夢・・・ではなかったようだな 太陽が雲に隠れたのか

雨ではなさそうだ

「・・・フツ　いくぞジゼル　昼食の準備がある」

寝たままのジゼルを抱き上げ　家に帰る

ジゼルから太陽のにおいがする

『どのようなのにおいなのですか？』

「さあな　・・・まあわるくはないぞ」

元魔王のよろこび

チク チク チク チク チク・・・
「・・・こんなところか」

。すごいですねハドラーさん この作業用手袋に使っている素材は火竜向けの火にも水にも強い分 縫うのにとっても力があるので大変だと思いましたが これでいいですよ。

オレが縫った手袋を見たグイ族の長の言葉に 気分がよくなる
「あとはこれを裏返すだけか こいジゼル」

ジゼルは さぎょうようてぶくろを 装備させてもらった
守備力が7あがった

「どうだジゼル？ 少しきついのではないか」

＼ ♪♪！ ♪♪!! ／

ジゼルは手袋を頬にあて笑うばかりで 出来についての感想がない
『ジゼルが喜んでるからいいではないですか』

おまえはそれでいいだろうが

。ちゃんと寸法をはかっていますし 使っているうちにのびて手にぴったりと馴染みますよ

これなら手袋をはめたままでも作業に支障がでないほどになりますよ。
「なるほど それはよいことを聞いた」

。ではこちらをお渡しますので また縫っておいて

ローテーションして使えば長持ちしますし 予備にもなりますよ。

手袋を作る過程でオレが作った型紙と素材を渡された

ああ型紙を作っておけばまた寸法をとらなくても済むのか

「それは助かるが いいのか？」

。ええ 実はですね・・・

こちらを見てください！。

長が嬉しそうな顔でとりだしたものを見せてきた

「・・・これは星の勲章？」

かつてヒュンケルがバルトスに贈った勲章に似た布製の首飾りのようだ

「これが どうした？」

。ハドラーさんの紙芝居をご覧になったニアキス族の子供達が

いつものお礼と言ってくれさったんです。

「ああ それでおまえたちが作ったにしては不恰好に見えたのか」

。 たしかに技術的な面でいえばそうですけど 一針一針心のこもった
とてもいいものです。

「そんなことまでわかるのか？」

。 ええ 縫い目のクセから3人で作ったこともわかります

ハドラーさんも縫い物に慣れればわかるようになりますよ

私たちグイ族はコーセルテルで服屋を担当しているので

他の獣人の方から手縫いのものを贈られたことがあまりないので

心のこもった縫い物が嬉しくて・・・。

この長の顔・・・ たしかにあのときのバルトスを思い出すな

。 これもハドラーさんの紙芝居のおかげです。

「そうか お前たちの日頃の仕事の成果だと思いが・・・

まあ 素直にこの素材は受け取っておこう」

＼ ♡♡♡!! ♪♡♪! ／

ジゼルはまだ喜んでいた

「礼、というわけではないが・・・

ちようどその星の勳章がでる内容の紙芝居を持ってきている

「ここで披露するでしょう」

最近は大魔王様の依頼で作成している紙芝居の分

新作が滞っている・・・というより手をつけていないせいだが

ちようどよかつたかもな

『本当に大魔王バーンが・・・』

もう大魔王ではなく肉体もないから実害はないようだぞ

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

・・・・・・・・聖母竜よ いざとなれば オレが戦う

『・・・・わかりました まあその件はいいでしょう』

ジゼルも楽しみにしていますし 紙芝居をはじめましょう

／ ハドラー様！アグリナとヤチおにいちちゃんもいっしょにいいですか

「ほう・・・ そうだな火竜家はすぐ近く この山を少し下るだけだ

いかにやつらでも迷わず来れるはずだ

ジゼル おまえ一人でリリルーラ（合流呪文）を使いやつらをよんでこい」

／ はい！

『!?!』

「ただし リリルーラは一人用だ

アグリナ達と合流した後は他の手段でここまで戻ってこい」

「はい！ 戻ってきます ハドラー様！ んくくく リリルーラ！！／
フツ

『いってきます．．．ですか どこか寂しいのですが』

「ジゼルが成長している証拠だろう．．．慣れろ」

．．．
．．．

『ジゼル戻ってきますね．．．』

「．．．そういえば アグリナとヤチ、ハータの三人は

火竜家の中で迷子になった挙句に地竜家にたどりついたことがあったらしいな」

『．．．その情報は不安しかないのですが』

もしくはアグリナ達が家にいなかったのだろう

ジゼルがルーラをおぼえていれば問題ないが．．．

『ジゼルにヤチ 保護者がアグリナ．．．』

．．．聖母竜よ 心配と過保護が過ぎるぞ

『しかし！』

もしリリルーラを使った先が崖で

そのままクランガ山を転げ落ちたりしているかも!？」

「……まあ絶対ないとは言わんが、ジゼルは一人でも飛べるぞ

『とつさに飛べるとは限らないでしょう!』

やれやれ……

まあ最初から強くなんでもこなせるならオレも苦労せんか……

『では!』

「あくまで様子を……む!？」

外から竜術の力を感じる　これは火ではないな　風か

外に様子を見に出てみると　折りたたんだ紙が落ちていた

これは風竜術で飛ばした手紙か

『……いっしょにいくよ　だけですか　どういう意味でしょう?』

。これは風竜術士さんの字ですね。

ということば　マシエルの兄のミリュウからの手紙か

さては迷子の末　風竜家に辿りついたな

しかし　なんだこの手紙は……

『言葉が足りない気がします』

キラン!　ギューーーン!

ハドラー……さま……♡！

ドン！！

ジゼルがトベルーラでオレの胸に突撃してきた

やはりまだルーラは使えんか

すぐ後には風竜家と火竜家の連中が飛んできていた

『おかえりなさい』

／ ただいま ハドラーさま！お母さま！

「おそかったな

ジゼルが風竜家の世話になったようだな」

「ごめんねハドラーさん いっしょに迷子になっちゃって

グレイス達に出会えなかったら もっと遅くなってたよ」

謝るアグリナだったが グレイスやフアナら風竜家はあいかわすの笑顔で

（おかげでハドラーさんの紙芝居が見れるからオレたちはラッキーだったな）

「おー ジゼルのとーちゃん紙芝居おもしろーもんなん〜」

と、どいつも本当に楽しそうだった

火竜家と風竜家 竜術士に竜を合わせて8人も増えて急に にぎやかになってきた

な

まあ人数が多くなっても紙芝居を読む手間が増えるわけでもない
 ・・・・グイ族には　また多少迷惑をかけるがな

やはりバルトスとヒュンケルの話は食いつきがいい

地底魔城戦の内容になったらこいつらどう反応するのか・・・

／＼／＼　パチパチパチパチパチパチパチパチ!!!　／　／　／

今回は一段と大きい拍手だ　やはり大勢を相手にするのはなかなか心地よい
 これを聞くと　新作の意欲も湧いてくる

その点だけはジゼルの手柄といえるな

『流石元魔王　やはり目立つのが好きなのですか?』

・・・かもしれんな　折角作った物だ

どうせなら　できるだけ披露したい

自分の口元がニヤリとするのがわかる

希望への前進!!?の巻

「ジゼル、マータ、ハータ 準備はいいか」

／＼／＼ はーい!!! ／＼／
(ちえー いいなー おれも行きたかったな)

《サータも水が苦手でしょ いっしょに行つてどうするの?》

(その苦手をなくす特訓をするんだろ)

ハドラーさんがジゼルにどんなことをさせるのか気になるじゃないか)

「流石に今日一日で克服できるとはオレも考えてはおらん

たやすく克服できない 火竜特有の弱点らしいからな

他の者まで面倒をみきれんのだ」

水竜のマータと火竜のハータには 水から上がつてからの補助を頼んでいる

「では いつてくる」

「いつてらっしゃい 子竜たちをよろしくお願いしますねハドラーさん」

ジゼルを肩に乗せ しゃがみこんでマータとハータの手をとる

「ルーラー！」

ドヒュツ!!

ビュワツ

目的地はあのとときの池

ドーン!!

「着いたぞ」

マータらと手を離すと

／
・
・
・
・
・
／

ジゼルの背中に不安の表れである暗竜の翼がでていることに気付いた
オレにくつついているときはまず見えることはないが
やはり一度溺れた場所だけに苦手意識があるようだ

「では特訓の説明をする

ジゼルはオレの肩に乗ったままでよい

このままオレがこの池に入る

マータとハータは水から上がったときにジゼルの服を乾かし

暖めるようにしておけ」

『あなたのことですから 池にジゼルを放り込んで「さあ泳げ」

とか言うのかと思ってました』

ジゼルが水に浮くかも怪しいのにそんなことができるか

《ハドラーさん 竜術で濡れないようにしたり

池の水の冷たさを感じないようにできますよ》

「今回は泳ぐことが目的ではない 水への苦手意識をとることが目的だ

あらかじめ水は無害化させたのでは克服したとはいえん」

「そうかー ぼくも水は苦手だけど ジゼルががんばってね

水からでたらすぐにあつたためるからね」

コクコク

ジゼルがうなずき返すが この池に着いてから一度も言葉を発していない
ジゼルの緊張がオレにも伝わってくる

こんなことはこいつが生まれてから はじめてかもしれないな

『そうですね』

「ではいくぞ」

ドボオン

．．．ぷかあつ

池は意外と深いがジゼルを抱えたまま顔が出せる程度に浮いた状態を維持

／ ぷはあ ．．．はあつ はあつ はつ ．．．／

「ジゼル まずは呼吸を整えろオレに合わせてもいい そうすれば落ち着く」

オレはそれだけ言って ジゼルが落ち着くのを待った

・
・
・
・
・
・

ジゼルの呼吸は落ち着いてきたが顔色が悪い

／ つめた・い・・・ぎ・ぎむい・・・
／

水をつめたさで弱ってきているな

「一度上がるか・・・」

ザアアアツ

池から地面に上がるとすぐに寄ってきた子竜たちにジゼルを預けた

ポウ・・・ パアアア・・・

二人同時に術を使っている マシエルの子竜たちが得意な同調術だな

ずぶ濡れだったジゼルがあつというまに乾き顔色もみるみる回復していた

ポウ!

オレも火の玉を生み出し自分の身体を乾かしていると

＼ ハドラーさま、私の力を使ってください
／

すっかり回復したジゼルがやってきた

「よし、力を貸せジゼル、オレの火竜術をみせてやろう」

ポワア・・・

服が傷まない温度で乾くまで維持するのは呪文より竜術の方がむいていたが
やはり火の力は制御が難しい・・・が

『子竜たちの手前 ミスはできませんね』

火や熱は昔からオレのもっとも得意とする術法だ

失敗など・・・

・・・とりあえず髪以外は大体乾いたな

どうせまた池に入って濡れるのだからこんなものでいいだろう

『・・・池に入る前に ドラゴラムで私に代わって下さい』

どうするつもりだ？

『実は私 泳げるのです!!』

「なっ・・・ なんだとっ・・・!!?」

『私は竜の騎士の生と死を司る神の使い

竜の騎士が命を落としたとき 例え火の中 水の中

迎えに行くことができるのですよ』

「・・・ホウ」

『ジゼルを肩に乗せて池に入れば ジゼルが私を頼りに』

「・・・残念だが お前が入れるほどの池は大きくないぞ」

『……………』

「……………もう一度池に入るぞジゼル」

＼ はい！ハドラー様♡ ／

即ジゼルダイブで肩に乗ってきた 同時に背中の羽が消えた

「こんな術ばかり上達しているな」

＼ ! /

ドボン

やはり水に入るとジゼルに羽が生えていた

『でも先ほどより落ち着いているようですね』

この調子なら 案外早く水を克服できるのでは？』

もう聖母竜が復活していた

いや それよりも ジゼルのまわりがどうも生温かくなってきた

……………これはもしかや

……………火竜術か!?

「………オレは最初 小便でも漏らしたのかと思ったが
『……実は私も』」

今まで熱調節の火竜術はうまくいかなかったが これはいい傾向だな
『ですが、これで水の克服という本来の目的が果たせるのですか?』

「水の脅威に対して自力で対処することができれば苦手意識克服につながる
それは 水泳でも竜術でもよいのだ」
だが

ガクウン

ジゼルの顔が急に蒼白になりオレに寄りかかる

『ど…… どうしたのですか ジゼル!!?』

「……魔法力がつきたのだ……」

無理もあるまい 使い慣れん術 しかも火の術を制御しつづけるのは
今のジゼルでは負担が大きすぎる」

『……今の ですか?』

そう 今の……だ

「とりあえず池から上るぞ マーター! ハーター!」

池から上がり オレはジゼルを抱いたまま座り込み

ジゼルに乾燥保温の同調術を受けさせると同時に
オレもホイミ（回復呪文）をかけた

ホイミで魔法力は回復しないが 水中で消耗した体力はもどるはずだ

パアアアア

ジゼルの顔色がよくなってきた

「収穫はあった 今日のところはこれで帰るぞ」

＼＼＼ はい!!!／／

マータとハータはオレに抱かれているジゼルの手を握った

『ジゼルの顔がよりやすらかになりましたね』

そうか

「ルーラ!!!」

ビュン!!

なんと 茶葉になりそうな葉をてにいれた

『あなたいつのまに・・・』

ジゼルはレベルがあがった

ちからが2あがった

すばやさも2あがった

みのまもりも3あがった

たいりよくも2あがった

かしこさも2あがった

うんのよさも1あがった

さいだいHPが 2ふえた!

さいだいMPが 5ふえた!

熱調節の術をおぼえた!

2Pの スキルポイントを かくとく!

ジゼルのドラゴンが スキルアップした!

ツノのつやも3あがった

いなすまをおぼえた!

いっばいの水

＼ ハドラーさま♡ ／

ジゼルはオレの髪に巻きついて寝ている

‘ハドラーさんの熱調節の術も上手になりましたね

ジゼルちゃん術暴走の余波がほとんどでてません’

『ジゼルまで熱調節の術が使えるようになりましたから

同じ術で遅れをとるわけにはいけませんからね』

「余計なことは言わんでいい 聖母竜」

髪に巻きついて寝ているジゼルはフェルリに任せて

オレは紙芝居にとりかかっている

『あなたがジゼルの方を向いてくれないと

私がジゼルを見れないのですが』

「それはおまえの都合だろうが

今日はジゼルの世話ということで家事から外れているからな
この機会に新作を仕上げておきたい」

今回は勇者視点のシーンが多い。じっくり描けるこの機は逃せん

‘ジゼルちゃんの様子は私が常におはなしますから

今日はずっとおしゃべりしましょう’

『・・・そうですね。これもよい機会でしょう

私も少し過保護が過ぎてるでしょうし』

「少し?」

『あなたも余計なことを言わなくていいです』

カリカリカリ・・・

ペタペタペタ・・・

／　ウフフフ・・・　ハドラーさま♡　／

ジゼルは相変わらず熱気を出しながら寝言を言っている

‘ハドラーさん。紙芝居の作業をしながら術のコントロールが

まったく揺らぎませんね。すごいです

ジゼルちゃんも本当に安心した顔で。見てる方も笑顔になります’

『フェルリはいつも笑顔ですけどね』

たしかにな

「術の扱いには年季が入っているからな

「コツさえおぼえればこの程度は造作もない」

『以前の術暴走のときは物理的に手を焼いてましたが・・・』

「・・・フン」

「・・・ム 誰かこの術部屋に向かつてきているぞ」

‘あらマータちゃんにヤチちゃん、’

マシエルとアグリナの子竜か

かきかけの紙芝居を子竜たちの目にふれないように伏せ

顔を向けるとマータが水の入ったコップを差し出した

《どうぞ》

「手間をかけたな 飲めジゼル」

コップを受け取りジゼンを起こし飲ませた

ぐくぐくぐく・・・

ジゼルがノドを鳴らせる

「いい飲みっぷりだ よいタイミングだったようだなマータ

む どうした？」

いつものまにか 周りからジゼルではなく

オレに笑顔が向けられていることに気付いた

「ふふ マータちゃん だれに水をとほ言つてないのに

ハドラーさんがジゼルちゃんに自然に水をあげたから、

《火竜家に二番竜がきたらヤチがお兄ちゃんになるから

そのお手本を見にきたんだって

だからいいお姉ちゃんを見せようと思つてお水を持ってきたら

いいお父さんが見れちゃった》

／ ね♡ ／

『ふふふ』

／ ハドラーさまがのませてくれたおみず おいしいです♡ ／

なんだこの居心地のわるさは・・・

特に考えることもなく水を飲ませただけだが

たまらず 空になったコップをマータに返し

「オレにもいっぱいよこせ」

《はーい！》

フアアア・・・

その場でマータが水竜術で水をつくっている

けっこう難しい術だと聞いていたが一人で難なくやってみせている

＼ マータおねえちゃんすごーい！ ／

ヤチの前で面目も果たせているようだ

その水を一息で飲む

ウム、わるくない

「便利な術だな火竜術でも同じようなことが出来ると聞くが？」

‘ ええ火竜術でもできます 勿論火竜にもできるということですが

まるつきり水竜と同じようにとは難しいですけど、

《さつきもナータが地竜術みたいなことやってたものね》

＼ ナータおにいちゃんもすごかった！ ／

まあ今のジゼルならオレがヒヤドでつくった水を

熱調節で融かすぐらいが精々だろう

・・・だがオレは 水を飲んで一段と上機嫌なジゼルに

更なる可能性を期待せずにはいられなかった

ハドラーはレベルがあがった

ちからが1あがった

すばやさも2あがった

たいりよくが1あがった
かしこさが3あがった
うんのよさが1あがった
さいだいHPが2あがった
さいだいMPが4あがった

戦いの歴史 チームワークの勝利

＼ ハドラーさま〜・・・ ／

秋の長雨と曇り空で ぬるい日がつづき

火竜の身にはこたえるのか グロツキーな声をだしている

「情けない声をだすなジゼル」

朝食を終え 後始末の手を止めず適当に返す

『せめて振り向いてください！』

あなたが直接見ないとジゼルの様子がわかりませんよ』

ナータたちに任せておけ聖母竜 つまらん心配をするな

「ジゼル あったかいミルクをどうぞ」

＼ うん コクコク・・・ ぶく ごちそうさま ／

少しはマシになったようだが

「・・・ジゼルよ 今日には新作の紙芝居を披露するはずだったが

おまえは下で寝てい」

＼ハドラーさま！わたしみんなといっしょに楽しみにまっています！！／

たったったっ……

ジゼルが元気よく走っていく足音が聞こえる

『……元気になりましたね』

そんなものだ

／＼ わっわ!! ／＼

カチャ……

子竜たちの歓声が聞こえたところで ちょうど洗い物が終わった

……やれやれ 仕上げを急がねばならんな

『完成も発表も明日の予定だったのでは?』

余計なことを言うな聖母竜

あのまま放っておけばマシエルが際限なく甘やかしそうだったからだ

……

……

……

／＼ ごちそうさまでした〜! ／＼

〔ティータイムの後はみんなお待ちかねのハドラーさんの紙芝居だよ!〕

《おやつを食べながら ずっと気になってたんだ》

(先に昼寝もすませたし！)

へさつきのお茶で目も覚めたしね

たしかに 子竜たちの目に眠気は感じられんが・・・

『みんな 期待で目がキラキラしてますね』

これを恐怖と絶望に変えてやりたいところだが・・・

残念ながら今回は勇者編、

勇者アバン 戦士ロカ 僧侶レイラ 魔法使いマトリフ達の話がメインだ

何度も恐怖と絶望をひっくり返してきた 恨み重なるあやつらのな

『でも あなたはどこか楽しそうですね』

・・・でははじめるか

・ ・ ・ 魔王打倒のために騎士団長の友と二人で母国を旅立った勇者

・ ・ ・ その行く先々で魔王の野望の種を打ち砕いていった

・ ・ ・ 多くの闘いを経てレベルアップを繰り返していく勇者たち

・ ・ ・ 女僧侶と老魔法使いを加え さらに戦力を増強していったのだが

・ ・ ・ 快進撃をつづける勇者パーティーは常にある問題を抱えていた

・ ・ ・ 内輪もめ いわゆるケンカだ

・ ・ ・ 元々友人同士の二人でもケンカは絶えなかったが仲間が増えたことで内容が多様

化した

・そんなとき 魔王が力を求めた研究の成果のひとつの形

・地上最強の金属（オリハルコンは除く）の装甲と武器を持ち魔王の魔力で動く

・勇者抹殺を目的に造られた殺人機械（キラーマシン）が完成した

「呪文をはじき 同じ素材で作った剣に遠距離用のボウガン

大王イカ以上のパワー・・・こんなところか

いくつか問題点もあるが今の勇者どもを始末するには十分だろう」と、

魔王は完成した3体のうち実働試験を終えた1体を勇者一向に送り込んだ」

（なんでひとつだけ？ 3つもあるのに）

《サータ！ お話の途中で聞かないの！》

「気にするなアータ もっともな質問だからな 理由は簡単だ

一度に操作できるのが一体だけだからだ

魔法力による遠隔操作で魔王は動かなくてもいいが

キラーマシンのいくつかある問題点のひとつだ

ではつづきにくぞ・・・」

・勇者一行は 褒美として借り受けた舟で旅を続けていた

・その舟は聖水を流しながら航海をしているため怪物を寄せ付けけない

ここで手を緩めれば勇者たちは必ず対策を練つてくると
操作に更なる魔法力を注ぎ込む!!」

紙芝居を握る手にも力がこもりそうになるが・・・どうにかおさえた
かわりと言つてはなんだが 子竜たちのこぶしがプルプルしていた
「キラーマシーンの攻撃が激化するなか

魔法使いは最後の魔法力を絞り出しひとつの呪文を唱えた

・・・ 天空に散らばるあまたの精霊たちよ・・・

我が声に耳を傾けたまえ・・・ ラナリオン!!

カアツ と魔法の光が空に届いた」

「これって精霊術つてことかな?」

「魔法使いの唱えた呪文は攻撃呪文ではない

空は雲に覆われ 戦場に雨が降り出した」

〈なんで雨?〉

《金属だから錆に弱いのかも?》

《でも今までも海の近くだったよね?》

(わかった! みんなのどが渴いたんだ!)

「それだよサータ! すごーい!」

【・・・いや おそらくそれは違うだろう】

〔じゃあどうしてかなあ?〕

子竜たちがそれぞれ色々な考えを巡らせるなか

ジゼルは紙芝居をじつとみいつていた

「魔王は不穏なものを感じ 先に魔法使いに狙いを定めたが・・・

マヌーサ（幻惑呪文）!!

僧侶の唱えた呪文で魔法使いが無数にいるように見えた

キラーマシーンからの視界に異常が発生したのだ

キラーマシーンの装甲をもつても呪文による魔法の霧は防ぎようがなかった

こうなれば狙いなどさだめようがない 剣を振り回すしかない

掲げた剣に・・・

ライデイン（電撃呪文）!

ドガーン!!!

／＼ うわあ!!? ／＼

いきなりだったオレの大声に子竜たちも大層驚いたようだ

・・・ちよつと楽しいかもしれん

『大人気ないですよ』

「勇者が雨雲から呼び出した稲妻がキラーマシーンに直撃した！

ぐっ!! 動けキラーマシーン! くっ!

魔王が魔法力を送るがキラーマシーンが動かない」

バチバチと光をまとい動きを止めたキラーマシーンの絵は

今回もつとも力をいれたところだけに子竜たちの反応が気になる

「キラーマシーンの体に内臓してある『キメラの翼』による撤退を

魔王が決断したまさにその瞬間!!

うおおおおおおおおお!!!

ズガァン!!!!

キラーマシーンが落とした自分の体よりも大きな剛剣を手にした

戦士の会心の一撃がキラーマシーンをまっぶたつにした!」

バツ!!!

／＼ うわあ!!? ／／

この一枚の絵のみ切れ目をいれており

台詞に合わせて絵が割れる仕掛けに子竜たちが驚いていた

あのナータですら目をひらき息をのみ

ジゼルもマータと抱き合ってひっくり返りそうになっていた

「すでにピクリとも動かなくなったキラーマシーンを通じ

魔王の耳に勇者たちの声が聞こえてくる

まったく今日ほどおまえのバカ力をすげえと思ったことはないぜ

おれも今日ほどおまえが頼りになると思ったことはねえよ

いやー 今回もなんとかまりましたねー

本当に・・・ 舟の上でもあんなにケンカしてたのに・・・

ライデインができたってことはおまえが勇者だつて天も認めたってこつたな

そいつはすげえな！

いいいえ みんながいてこそですよ 今回の勝利もあの呪文も！

勇者さま とりあえず一休みしましょう みんなな消耗しきってますから

そうですね せつかくの港ですからとびっきりの魚料理をふるましましょう

おおっ 期待してるぞ！

こればかりはおまえにしかできねえ せいぜい楽しみにしてやるぜ

・・・魔王にとって人間はとるに足りない存在だった

勇者一行ですらあくまでうつとうしい程度の力を持つという認識だったが

まさにこのとき 勇者一行の見せたチームワークという魔族にとって

異質な『力』をはつきりと感じたのだった・・・

つづく・・・」

／＼ パチパチパチパチパチパチ！！！！
／／

今回も好評だったが オレにとっては今回の内容は

負け戦に等しい過去だったからな 正直複雑なものがある

『でも大まかな流れは変えていないのですよね？』

・・・そうだ だからこそ 意味があるのだ

それぞれ太陽

『おきのどくですが 冒険の書が 消えてしまいました』

「なんだ唐突に・・・」

ジゼルの術練習で消耗した魔法力の回復のために久しぶりに眠り起きたところでの聖母竜のこの言葉に頭がまだついていけない

『あなたが寝ている間に 紙芝居の一部が消えてしまったのです』

・・・なんだと？

たしかに 数が少ないようだな

‘ほんの少し目を離れた瞬間 本当に消えてしまったようなのです’

「フェルリもその瞬間をみていないのか？」

‘ええ ごめんなさい’

確認したところ 消えたのはバーン様に依頼され書き直した

新しい紙芝居のみか・・・ もしやこれは

「朝食の後にでも 心当たりをあたってみる 気にするなフェルリよ」

消失いたしました

あくまで序章・・・ではございますが」

「・・・ハドラーよ・・・」

その消失した紙芝居は他のものと明確に違うところはあるか？」

「・・・紙芝居の最後に【著・ハドラー 協力・バーン】と書き足しております

他にもいくつか書き足してはいますが 共通する点はそのみです」

「・・・ふふふつ 気にやむことはない

余に心あたりがある・・・今頃幻想の先にある友の手元にある」

!?

首もとのスカーフをなでながら ニヤリとするその表情

見覚えがある 確信があるのだろう

やはりそういうことか

「ひとつ懸念が 特に指定がなかったもので紙芝居の文字は

魔族言語ですが問題ありませんか？」

「よいよい・・・ たとえどのような言語であろうと余の友には

それを読み取れる者もいる」

【友】か・・・

「奥方だけでなく友までいるのですか その幻想の先に……」

「……ハドラーよ 知っておるか【悪魔にも友情はある】」

余が生まれるよりも前の時代 魔界を支配した恐怖の将の配下

伝説の悪魔騎士の首領がのこした言葉だ」

「……それは私も知っております」

力と勝利が全ての魔界において伝説となるほどの力を持った悪魔とは

結びつきそうもないあまりにも異質なその言葉……」

「……まさかそれを実感するときがこようとは

全知全能たる余ですら想像していなかった……」

【太陽の輝き】という名の男だったと伝わるが……」

ふっふっふ……」

「かつて クロコダインやヒュンケルが魔王軍を離れたように

バランが竜の騎士の歴史を変えたように

アバンが学者から勇者に変わったように

その生き方も 死に方さえも変えてしまう存在【太陽】……」

「余はかつて太陽こそ 唯一の存在であり

最も孤高な存在だと思ひ それを手にすることこそ念願であったが……」

太陽こそが友を求め 必要とし 尊ぶ・・・ それもまた一興よ」

「・・・ふふふ・・・ふはははは!!!」

どちらともなく笑い出した かつて誰よりも魔族らしく生きた魔王と大魔王が太陽を肴に 新たに情報を交わした

「余はおまえに全幅の信頼を置いておる

期待しているぞ」

「お互いの太陽のために ですな」

オレがニヤリと口元をゆがめてこたえると

「・・・」

ニマリと返された

互いにかつての立場を捨て このお方の寛大さから考えれば 以前のようにへりくだる必要はないが

かつてはこのお方こそオレにとって太陽と呼ぶべき存在だった

あのアバンストラッシュで死の淵と絶望に落ちた際 さらに深い闇からの声が、力が！オレを救い出した

死をも超越した まさに不死鳥たるお方・・・

その力に畏怖し憧れ　いつかはそれさえもと野望を秘めた日々
そして人間どもの　いや地上の太陽とも呼ぶべき

ダイやポツプらアバンの使徒たちに出会い　その闘いの中で
オレや　おそらくこのお方も変わったのだ・・・

今は遠い地で大冒険を再開しているだろうあの勇者たちに
ほんのひととき・・・

自慢の・・・

昼のおやつを食べた子竜たちは日の当たる別の部屋で昼寝をし

オレとマシエル　そして木竜のタータでおやつの後片付けをしていた

カチャ　カチャ・・・

「タータもみんなといっしょに昼寝しててもいいのに」

「今日のお手伝いは私だもん　ちやんとやるわ」

「大した手間ではないがな」

「あの・・・ハドラーさん　聞いてもいいでしょうか？」

「何だマシエル」

「ジゼル以外にハドラーさんにお子さんっていますか？」

「子・・・か」

「今も生きている者だけで言えば　ジゼル以外に

息子が一人いるぞ」

『ヒムですね』

「ええ!?!いるのハドラーさん?!」

ジゼルにもそんなお兄ちゃんが!?

「あっ!? 『今も生きています』ってことは・・・」

マシエルは気付いたようだな

「ああ 他の子はみな戦死している

・・・なんだその顔は?」

「いえあの すみませんごめんなさい!

こんな時にいきなり聞いてしまったて」

「そっういえば今までそんなお話って

したことがなかったっけ?」

「最近ランバルスさんの娘さんが生きてることがわかって

地竜の里と気まぎれになったことがあったそうで・・・

ハドラーさんのこともちゃんと聞いておこうかと思ひまして

コーセルテルには ここで育つ子竜たちを守るために

竜が決めた決まりごとが色々ありますから」

「ああそっういえばコーセルテルに来た時にいくつか約束をしたな

あの約束をまだ特に反故にしたことはないが・・・

その時も何も隠すつもりはなかったが聞かれなかったからな

あやつらとはコーセルテルに来てから一度も連絡をしていない

ジゼルが生まれたことも知らんし ジゼルも知らん」

へねえねえハドラーさん

どんな子なの？ジゼルのお兄ちゃんたちは？

「ターター！ それは?!」

「聞きたいかターターよ？長いぞ

とても片付けの片手間でおさまるものではない

みな目的のためには死を恐れるものは一人もおらん

・・・オレの自慢の子たちだ」

バルトス フレイザード アルピナスらも自分の目的に殉じていった

そしてただひとり生き残ったヒムは生きる目的を自分で見つけたのだ

「それわかります ハドラーさん！

僕も子竜のことを何も知らない人に

ターターたちのことを知ってもらおうとしたら

七日七晩かけても伝えきれそうにないですから！」

この子竜バカが・・・ それは付き合う方も

『大変ですね・・・』

「いずれ時間をかけ じっくり教えてやろう
・・・ジゼルも交えて」

すでにバルトスは紙芝居に登場している

「オレの子や・・・孫たちのことをな」

／＼ ええ！孫も!?! ／＼

『ダイとヒュンケルのことですね』

・・・フン

ぬくもり

「今日は光竜家に行くつもりだが ジゼルはここに残れ」

ガシツ

無言でしがみついてくるジゼル

力づくでひきはがすのはたやすいが 放っておけば

リリルーラですぐについてくる

「紙芝居のためだ お前に見られたくはない」

フルフル

しがみついたまま首を振るジゼル どうやら諦める気はなさそうだ

これ以上の言葉は面倒なだけだ

「すまんがカータ お前も同行してくれ こいつの相手を頼むことになる」

「はい いいよー」

「オレが手土産を用意している間に行く準備をしてこい」

／＼ ハーイ！ ／＼

・
・
・

手土産の菓子ができたとこゝろでジゼルとカータがやつてきた

カータと揃いの黄色を基調とした服を着たジゼル

『やはり明るい色も似合います　カータと並ぶと更にいいですね』

服の違いはジゼルは太陽をモチーフとした前掛けがあり

カータは胸に太陽をモチーフにしたプレートを下げている

「準備はできているようだな　では手をつなげ」

「ハドラーさん　このスケッチブックをどうぞ使ってください」

「ああ　ありがとう　次の紙芝居を楽しみにしておけ　ではいぐぞ

ルーラー！」

（いってきまーす）

／＼　いってらっしやーい！　／／

ギューーン

ドオン

（とうちやーく！）

／　ハドラー様　これいつか使えるようになるの？　／

「お前次第だ」

「あら　ハドラーさん　ジゼル　カータ　いらっしやいませ」

「すまんな光竜術士モーリン　今日はオレの紙芝居の為に

お前の娘レオノラの絵を何枚か描かせてもらいに来た」

「そうですねか よろしいですよ レオノラは今寝ていますけれど

夫のラスエルが見てますので 静かにしていただければ」

「そうか 好都合だ 父と赤子の構図が描きたいからな」

人間の赤子と異種族の父親の組み合わせはコーセルテルでは貴重だ

／＼ 地獄の騎士のおはなし 大好きです！ ／

（ぼくもー！）

『バルトス大人気ですね』

なんとも誇らしいことだ 今回は主役ではないがな

．．．

「．．．邪魔するぞ ラスエル レオノラ」

（いらつしやい ハドラーさん ジゼル カータ）

部屋には父親で成竜の光竜ラスエルと娘（人間）のレオノラがいた

（あ やつぱりレオノラまだ寝てる

ぼくたちはあつちのセウルたちの所にいこうよジゼル）

「光竜家の子竜たちと土産の菓子でもつまんでいろ」

／＼ はーい．．．／

カータに連れられていくジゼル 連れてきた甲斐があつたな

カリカリカリ・・・

すー・・・ すー・・・

静かな部屋にデッサンの音とレオノラの寝息だけがひびく

「フム」

ペラッ

ふ・・・ ふええつ

レオノラがスケッチブックをめくった音に反応したのか

少しむずがりでした

「よしよし レオノラ」

ラスエルがレオノラを抱き上げあやしめました

いい構図だ これは筆がのる

カリカリカリカリ・・・！

『いつにもまして筆が速いですね』

これを描きに来たようなものだからな

「・・・ふう こんなどころか」

一気に描き上げたスケッチをじっくりと見る

『いいですね 少し涙目になったレオノラを
やさしく抱きしめながらなだめるラスエル』

ベリッ

このスケッチをラスエルにも見せ そのまま渡す

（わああ レオノラ かわいい かわいいー かわいいー！）

絵と抱いている実物のレオノラを何度も見比べ喜色満面のラスエル

「今日の礼だ それはお前にやろう」

（ええっ！ いいんですか 折角描いたのに）

「ああ 一度描けば ある程度応用が効かせられる

問題ない それに・・・

人間の成長は早い 魔族や竜とは比べ物にならない

今のこの姿もすぐ変わる・・・

こういうった形で残すのも一興よ とっておくがいい」

（ありがとうございます ハドラーさん！

そうだ ハドラーさんもレオノラを抱いてみますか？

間近で見るとそのかわいさといったらもう！）

「そうか では折角の機会だ」

オレはレオノラを預かり抱きかかえる

（ハドラーさん抱っこ上手ですね

レオノラがまったく動揺してません）

「ジゼルが生まれる前に少しな」

『ダイの時の経験が生きましたね』

バランと共に天界での悪戦苦闘の日々だったからな・・・

ダイは赤子でも手強すぎた バランは寝かしつけるのが下手で

聖母竜は役に立たず オレも指を舐めさせるしか手がらない中

バルトスがヒュンケルにやっていたことを思い出しながらな

ギユツ

いつのまにかジゼルがオレのズボンをつかんでいた

「なんだジゼル？ お前も抱いてみたいのか？」

（ジゼルちゃんにはまだ少し難しいかな

こうみえても結構重いし コツもいるんだよ）

「こうすれば問題あるまい」

オレはレオノラをラスエルに返し床に座り 胡坐をかき

そのヒザの上にジゼルを誘った

そしてジゼルがレオノラを抱きオレはジゼルの背中ごしから
レオノラを抱き支えた

〔成る程 その手がありましたか〕

今度ほくもやってみようかな　うちの子竜たちもレオノラを
抱っこしたがるけど我慢させてしまってるから〕

／＼　♡　・・・あつたかい　／

「・・・そうか」

バルトスよ　お前から一字を受け継いだお前の妹が

今　お前と同じように『ぬくもり』を感じているぞ・・・

『私も混ざりたい・・・』

お前には無理だ

『・・・つく　竜の体ではアンバランスすぎてだつこがむずかしい』

そもそもオレが変身することになればオレが手を貸せんからな

せめて六本の腕でもあれば

・・・六本の腕?!

「ラスエル　後ひとつだけ描きたい絵がある　頼む」

〔はい　なんですか?〕

.....

「これでどうですか ハドラーさん？」

「セウウル重くない？」

＼ レオノラのにーにだもんつ ／

ラスエルの上に幼童のセウウルを抱いたモーリンが乗り

三人が六本の腕でレオノラの

頭を 首を 腰を 尻を 足を支え 手を握り 抱きあげている

「これだ！ そうか六本の腕をこう使えばいいのか」

カリカリカリカリカリ!!

今まで以上に筆が走る

一気に書き上げた光竜家の一枚

我ながら会心の出来だ

「うわあ！」

「まあ！」

「ああっ いいなあ！ 私も書いてほしい」

「とつてもステキです！」

／＼ ぼくもレオノラもいるっ
 ／＼ ハドラーさま すごーい♡

『高評価ですね まあモデルがいいですから』

六本腕の実働の姿が見れたのは思わぬ収穫だった

・
 ・
 ・

その後 レオノラの授乳時間直前まで子竜が交替しもう3枚描き上げ
 描いたスケッチはそのまま光竜家に渡しオレ達は帰ることにした

〔ハドラーさん 今度暗竜術士のティムさんの呼びかけで

幼竜のプレアに同じ年頃の友達ができるように

各家の幼竜を集めてお茶会をやりましょうっておはなしがあるのですが

ジゼルも是非参加してください

私やセウウルも参加します〕

「ほう それは面白そうだな ジゼルにとってもいい機会だ

詳しい場所と日時はわかるかマリエル？」

〔木竜のお花畑でリリックさんが段取りをするそうです

詳しいことがきまればマシエルさんのおうちにすぐ連絡がいきます

楽しみにしててねジゼル」

／＼・・・うん／

ジゼルがどこか不安げな顔を見せる

・・・どうやら一人で参加させたほうが面白くなりそうだな

「では帰るぞ カータ ジゼル」

「描いた絵みーんな あげちゃってよかったの？」

「ああ 見ていろ」

オレは一見白紙のスケッチブックのページに軽く木炭でこすった

「あつ 絵がでてきた！」

／＼ すごいおもしろいつ どうなってるの？ハドラーさま？

「固めのペンや鉛筆で絵を描けば下のページに跡が残るからな

それをこうすれば浮き出てくるといふ仕組みだ

後は帰ってからお前たちで楽しめばいい

これはカータ お前の物だ」

元々マシエルのものであるからな 今日の同行の礼にはこれが最上だろう

スケッチブックを手に喜ぶカータと

それを羨ましそうに見るジゼルを抱き上げルーラを唱えた

お茶会にむけて

「ではジゼルよ 幼竜の茶会に備えるとしよう」

／ はい！ハドラーさま！／

「すでに他の幼竜との顔見せはすませているが

これはいい機会だ 術以外のものをな」

『ジゼルに何をさせる気ですか？』

「木竜の花畑で幼竜の茶会となれば おそらく竜術士と

少年竜の補佐竜も何人かといった面子だろう

そこで 茶会にだすパンをつくる」

『火竜術士アグリナの得意分野ですね

おそらくいっばいつくつてきますよ』

「・・・ただのパンではない茶葉の入ったパンだ」

／ お茶パン？／

『お茶は水竜術士エレの得意分野ですから

用意しているでしょうね』

「・・・そうだ だからこそ比較しやすく

ジゼルを腕を見せるのに都合よい」

『ジゼルがつくるのですか?』

「そうだ マシエルの子竜たちの力を借りてな」

『なぜわざわざ?』

あなたとジゼルの二人だけでパンぐらいつくれるでしょう?』

「それはジゼルが自分で気付けばよい」

／ わかりました ハドラーさま! ／

まずは地竜アータと木竜タータを連れてジゼルとパンに入れる茶葉の採取だ

《この木から茶葉がとれるなんて知らなかった》

〈結構高いところにハツパがあるけど どうやってとるの?〉

サータもよんだほうがよかったかな?〉

「必要ない、ジゼル この採取カゴに半分だけ集めてこい

地面に落ちた葉ではなく 枝についたものを直接だ」

／ はい!ハドラーさま! ／

ヒュウウウー

ジゼルが風を操り空を飛び葉をとりに行ったが・・・

ひらり

ジゼルの起こした風に煽られたのか 葉が散り離れていく

／ あっ?! ／

空を舞う葉に気をとられ 体勢を崩し失速したジゼルを

《あぶないっ!》

ポウ

がしっ

《大丈夫ジゼル?》

／ ありがとう アータおにいちちゃん ／

〈さすがアータ 地竜術でジゼルのゆっくりおろしてから

そのままだきとめたね

ジゼルこつちの木の方が葉っぱがしっかりついてるから採りやすいよ〉

／ うん わかった ／

アータがカゴをもってジゼルの追いかけてタータが採取しやすい木を探す

〈ジゼル採りすぎちゃダメよ〉

《必要な量まであと少しだよ》

／ うん! ／

『無事終わりそうですね』

「採取だけで終わりではないがな

ご苦労だったな アータ タータ

《へジゼルをちゃんとほめてあげて!》

「・・・ああ 上出来だジゼル」

／ ハイ!ハドラーさま♡

『ジゼルのこの笑顔があればいいのでは?』

それはお前だけだ

このパン作りもレベルアップにつながるのだ

・・・

・・・

マシエルの家に帰り協力者の子竜は水竜マータ光竜カータに交代した

「ではこれより茶葉を加工する

まずはジゼル試しにこの葉をそのまま味見してみろ」

／ はい あん・・・

（ぼくも がじ・・・）

／ うえええ・・・ まずい・・・

《ああ やっぱり》

「・・・ククク ハハハハハ

これを加工してマシにするためにお前たちの力を借りたい
まずはこの葉を手で小さくちぎる」

／＼ はーい！ ／＼

びりびりびり・・・

ちぎった葉がある程度できたところでいったん手を止めた

「マータ 水竜術でこのちぎった葉の水分を飛ばしてくれ」

《はーい》

ブワン！

みるみる葉から水分が抜かれ 乾き小さくなったところで

葉をテーブルに広げた

「カータ今度はお前が光竜術でこの葉に光をあてろ

洗濯物を早く乾かす感覚でオレがよいと言うまでだ」

（うん！）

パアア・・・

フアアア・・・

光を浴びた葉がその色を変えていく

いつのまにか ジゼルとマータの目の前に闇で覆いがしてあった
これはナータの暗竜術か？

オレは平気だがジゼルたちには少し強すぎる光だったか

少し離れたところでナータがマシエルの手伝いをしながらこちらを見ていた

『思わぬナータの好フオローでしたね』

「カータ」までいい

もう一度 香りと味を試してみろ」

今度はマータも混ざり全員で味見した

／＼ あ ちゃんとおいしい ／＼

「上出来だ この要領で残りも加工しておくがいい

オレはこの茶葉で茶を淹れてこよう」

／＼ はーい！ ／＼

『子竜たちだけに任せるのですか？』

ああ 茶の支度だけではない 次の仕込みもある それに・・

ジゼルがオレから離れ他の子竜と協力することこそ重要なのだ

『親離れにはまだ早すぎると思いますが・・』

おまえはかつて竜の騎士を生んだ後は

完全に人任せだったと聞くが・・・

『それはそれとして・・・』

言っておくがジゼルの親離れだけが目的ではない

これも幼竜の茶会への備えのひとつだ

『そうですか』

茶葉の加工が終わり茶を試飲した後 マータ、カータ組を

風竜のサータと火竜のハータと交代させた

「ここに すでにパンのタネを用意してある

あとはこれを適当にコネて 形をつくり焼けばパンが出来上がるが・・・」

ここで先に作った茶葉をだし

「これを砕き混ぜこみ焼く ここをお前たちがやるのだ」

／＼ はーい 〳〵

(ジゼル はっぱどれくらいいれる?)

「サータ 先にはっぱを小さく砕かないと」

／ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー 〳〵

ハータが茶葉を乳鉢で砕き

サータとジゼルがパンのタネをこねくりまわしている

「とりあえず茶葉をこれくらい入れてみよう」

(よし！ ジゼル、カータ早速火竜術で焼いてみよう！)

「まて 小麦粉が舞っているこの状態で火を使えば

面白いことになるが片づけが面倒になる

サータよ 風竜術で舞っている小麦粉を集めることができるか？」

(面白いことが気になる・・・)

前にマシエルと一緒にほこりをそつと風で一か所にまとめる術

やったことあるけど ちいさい術つてむずかしいもんなー

けど)

横にいるジゼルとハータをみて

(うん!!)

気合をいれたサータが風竜術をつかった

ふわさ・・・

さっ

ひゅううう・・・

「ほう・・・」

さわわっ

テーブルの上に風竜術で集めた小麦粉があらわれた

(ふうっ)

「あらかたとれたようだな」

「すごいねサータ 風を小さく制御するのって本当に難しいのに」

／ サータおにいちゃんすごい 粉がこんもり♪ ／

(がんばった！)

「よしジゼル 今度はほくらががんばろー」

／ うん！ ／

ポウ・・・

ジゼルがパンのタネのひとつに手をかざし火竜術を使い

ハータはその横からそっと手を添えた

ジゼルのおぼえたてのムラのある熱をハータが制御する

先のサータの術と同じようなものだな

ただ力を出すよりも難しいはずだが マシエルの子竜たちは

この手の術のレベルが高い やはりここは興味深い

『ここにはあなたの子守りレベルを上げるために来たはずですが

・・・ジセルのためになるならいいでしょう』

それでいいのか神の使い・・・

術の出力でいえば魔族や竜の方が強いが

制御することに関しては人間の方が適正が高いからな

アバン、マトリフ、ポップ オレの知る強敵どもがその最たる例だ
大魔王バーンのようにどちらも規格外の例外もいるがな

パアア・・・

ぶくくく

ほどよく焼けてきたのかパンがふくらんできた

あ♪

「ジゼル！ いい調子だから術に集中して」

うん！

(おいしそう)

オレが言うことがないな

どれ オレもパンを焼いてみるか

パンのタネをひとつ手にとり焼き始める

「ギラ」

ボオオ・・・

あ！ハドラーさま！！
 「ジゼル余所見しちゃだめ！」

シュウウ・・・

ボフツ！！

ケホツ ケホツ あうく・・・

ジゼルが術に失敗し小規模な爆発が起きた
 子竜どもに大したダメージはないが・・・

「パンこげちやったね・・・」

こげこげ・・・

(もくらしい)

こげたパンをサータがひとくちで食った

(んく これはこれでおもしろい味かな

ジゼルどんだん焼いてみて

まだパンのタネはいっぱいあるし)

「アグリナも最初は失敗してたつてメオが言つてたし

何度もやつてればできるようになるよ」

『子竜たちは心配いらないうですな』

「ところ先ほどは何が爆発したのですか？」

あれは小麦粉だ

サータが浮遊したものをすでに粗方回収していたから

あの程度ですんだがな

『なるほど ところであなたは失敗しないのですか？』

するか オレは初心者ではないぞ

ジリジリジリ・・・

「こんなところか・・・ 味は・・・

まあ食えるな」

「よし ジゼル ハドラーさんのお手本にもう一度やってみよう」

／ うん！ 見ててハドラーさま♡ ／

「よかろう」

『ジゼルがんばってください』

・・・

・・・

・・・どうにかひとつ焼けたな

すこしこげたがこの程度なら問題なかろう

「じゃあ ぼくが分けるよ」

ハータ器用にパンを3等分し

わずかに大きいものをジゼルにわたした

／ ハドラーさまは？

「オレは自分で焼いたのを食ったからいい」

／ じゃあ！ いただきまーす！

ジゼルたちはHPが10回復した

満腹度が20%回復した

ジゼルはレベルがあがった

ちからが2あがった

すばやさが2あがった

みのまもりが1あがった

たいりよくが3あがった

かしこさが3あがった

うんのよさが2あがった

さいだいHPが2ふえた！

さいだいMPが3ふえた！

2Pの スキルポイントを かくとく！
ジゼルのじゅもんがスキルアップした！
バギをおぼえた！
ジゼルのかくとうがスキルアップした！
とびひざげりをおぼえた！

幼竜のお茶会

「邪魔するぞ」

＼ こんにちは ／

すでに子竜たちが集まっているが・・・

幼竜の数に対して少年竜の補佐竜が少ない

それに竜術士もない

「どうした？」

もう各家の幼竜が揃っているのに

少年竜は水竜家のリリックと光竜家のマリエルだけか？」

・・・火竜術士アグリナと暗竜術士タイムが遠くから様子を見ているがな

《はい 木竜家と風竜家では竜術士さんが寝込んで

補佐竜たちは帰りました うちのエレはその看病に行つてます

地竜家は地竜術士の娘さんをお迎えする準備があるそうで

暗竜家のラルカは郵便組合の受験勉強があるからと・・・》

「だいじょうぶですよハドラーさん！」

リリックさんがいますし！ 私もいつしよにいますから!!」

リリックとマリエルにテンシヨンの差を感じるが・・・

まあこの二人なら大丈夫だろう

・・・それにオレがいるのは野暮というものだろう

「ではジゼルを任せただぞ」

／ ハドラーさま?!

『ちよつとあなた!!』

「オレは新作の紙芝居を仕上げてくる

お前を迎えにきたときにここで披露してやろう」

／ わー！ かみしばい！

ほかの幼竜どもも期待の歓声をあげた

／ うー ハドラーさま・・・

テンシヨン底辺のジゼルを任せオレは呪文を唱えた

「ルーラー！」

ドン！

ギューーン！

「あれ ハドラーさん もうおかえりですか？」

「ああ ジゼルは残してきた 後で迎えに行く」

オレは未完成の紙芝居と道具を手にし 呪文を唱えた

「リリルーラ」

フツ

「どうだ？」

「うわあ!!」

「ハ、ハドラーさん!?!」

オレは離れて様子を見ていたアグリナとティムの背後にあらわれたのだが

思いのほか驚いているようだ 少し気分がいい

「あまり声をだすと子竜達にバレるぞ」

「そうだった ハドラーさんもここから見守るんですか？」

「オレは紙芝居の仕上げをするだけだ

後はどこでやっても変わらんからな」

『そう! どこでやっても同じなら

たまたまジゼルが視界に入るような所でも問題ありません!』

・・・お前の声は竜術士たちには聞こえてないがな

〔ハドラーさん ジゼルさんの様子が・・・〕

〔あ ちよつと表情が暗い・・・かな?〕

〔気にするな あやつはオレのそばを離れると笑顔が曇るのだ
背中に不安をあらわす暗竜の羽がでていようだろう〕

あれはオレのそばにいるときはほとんど見せないからな

〔あ ホントだ でもどうして暗竜のプレアにはない暗竜の羽が
火竜のジゼルにはあるの?〕

〔私のプレアに羽が見られないのは『人化の術』に特化した変種
ということらしいのですが ジゼルさんはその逆・・・では?〕

〔つまり プレアは竜の力を抑えることに長けた竜であり

ジゼルは竜の力が有り余っている竜ということか?〕

その分制御にてこずりそうだな 暴走しやすいとも言える
『あなたがジゼルの命名の時にかけた

竜人化術が未熟だったのでは?』

〔あくまで仮定でできる要素があるというもので・・・〕

私は術士の経験がまったくないものですから確証はとても

そのタイムのかけた命名の術の方が上手かったとも思えんが

「こうやって距離をとってはじめてわかることもあるから

このお茶会楽しみだったのよね」

「そうか・・・」

オレは紙芝居の作業にとりかかり時折子竜たちの様子を見ていた

『ああ!! ジゼル表情がかたい！

いつもはあんなにいい笑顔ができるのに！』

折角の特技も持ち腐れだな

まあこれもジゼルにとっては経験だ お前も黙ってみていろ

〔あっ!!〕

アグリナがいきなり声を上げたことでオレも紙芝居から

子竜たちに視線を移した

・・・どうやらアグリナの子竜ヤチがタイムの子竜プレアを殴ったようだ

だがなぜ殴った方のヤチが大泣きしている？

しかも隣にいるジゼルもつられて泣きそうだ

ゴアッ!!

さらにヤチが発火した これは術暴走か

流石に我慢しきれなくなったアグリナとティムが

駆けつけたが オレは様子をみているだけだ

『あなたはいかないのですか』

ああ

『ですが先ほどのお話からすると

ジゼルも泣き出してしまおうとそのまま術暴走するのでは？』

まあ ここは黙って見ていろ

水竜リリックが炎の延焼と燃え盛るヤチに近づこうとするアグリナを止め

ティムとブレアが暗竜術で術暴走の炎を消した

「ティムもやるものだな あれは中級竜術のはず

とても生まれればかりの幼竜と素人術士とは思えん連係だ」

『ティムは元・天文学者と聞いていますね

アバンもそうですけどが学者というものは術に適正が高いのでしょうか？』

どうだかな しかしジゼルは混乱するばかりで役にたつてないな

『それどころか 暴走寸前ですよ！ あなたもはやく！』

だがアグリナがいち早く気付き マリエルやロットたちが

ジゼルにとりつき安心させている

ヤチもアグリナが落ち着かせ 事態は収まった

少々花畑が燃えたが木竜の花畑はこの程度は回復するらしい

『みんな無事でしたね ジゼルも今の一件で他の子竜たちと

馴染めたようですね 楽しそうにしています』

そうだな ジゼルに笑顔がもどっている

アグリナ達はそのまま子竜らと遊んでいる

オレのことは話していいようだ

プレアとヤチも仲直りし子竜たちの輪の中で花輪などをつくっている

ジゼルがつくってきた薬草パンも好評のようだ

「まさか ここまでうまくいくとはな」

『もしあなたがあの時行っていれば結果が変わっていた、と』

・・・それはわからんが トラブルに助けられることもある、

オレの・・・経験だ

だが ジゼルは役に立たなかったな おまえに似たか

『精神的動揺に弱かったのはむしろあなたに似たのでしょうか』

おまえもほざくようになったな

この茶会に参加した火竜ヤチ 暗竜プレア

水竜リリック ラテイ テイルク 光竜マリエル セユウル

風竜ゼイン 地竜クレット 木竜ロツト

火竜術士アグリナ 暗竜術士ティムらはジゼルにとってマシエル家以外で

はじめてオレを挟まずに接触したものだ

『こーやって色々な出会いや交流でジゼルが成長していくのですね

もちろん嬉しいのですが 少し・・・寂しい気もします』

兵どもが夢の跡

幼竜たちの茶会はパンを食べ終え

花の香りや陽気につられたのか

みな眠りについていた

『ジゼルもみんなに馴染めたようだなによりですね

暗竜の翼も消えてあんなにいい寝顔・・・は

ちよつとよく見えないですね』

今のオレはアグリナ達といた時よりもさらに離れている

あやつらがわざわざ口にするとも思えんが

隠し事ができるほど器用でもなさそうだからな

『どうせなら空から見てみましょうよ

花に囲まれて寝ているジゼル・・・是非!』

やれやれ・・・

まあよいわ・・・もう紙芝居は完成し やつらも寝ている今

このまま潜むような真似をする必要もない

ゆつくりとこのコーセルテルを空から眺めるのもよからう

「トベルーラ」

.....

花畑の中寝ている幼竜たちを見下ろし

「この季節感のない花畑 その一角に残る焦げ跡

延焼を防いだ水壁 炎を一瞬で消した暗闇の力

みな《竜の力》によるものか・・・」

『様々な可能性を感じる力ですね

火竜術でもその応用で大体実現できると聞きますし』

「そうだな 竜が秘める力 それを十二分に引き出す人間の竜術士

かつてはこのコーセルテルには竜の都があったと聞く

今よりも多くの竜が住み その竜一体に竜術士が一人

竜術を秘めた術道具も開発され その影響力は全世界に及んでいたと」

『フェルリが生きていた時代ですね』

「だが三千年前にその都は滅び一度は更地となった」

『フェルリが亡くなった時・・・らしいですね』

「今やその痕跡は地下や一部の遺跡に残すのみ

地上に広がる人間の目から隠れるように点在し住む……
まさに兵どもが夢の跡……か」

『そのようなですね 私も詳しくは知りませんが』

「……強さとは空しいものだ」

『それでもあなたはさらなる強さを求め

ジゼルにも強くなってほしいと願う』

「そうだ」

『……少なくとも私は

今あなたを通して見るこの光景が空しいものとは思えません

ここで出会ったフェルリからも』

多くの精霊が宿る森 山 空 湖

獣人たちの住む小さな里 点在する子竜と竜術士の家

今の景色か……

「この地に住む強大な力を持ったものは竜だけではない

あのジゼルが生まれた日に感じた

大魔王バーンに匹敵する力を持つ

眠る月の精霊コーセルテル

いずれ直接会ってみたいものだな」

『ええ 私も……』

ジゼルが生まれたきっかけとなる力を与えてくれたことに感謝を』

そうだな それもまた 力だったのだな

『ですが 今は眠る月よりも

眠る私達の太陽を迎えにいきましょう』

「………わかった………この新作の紙芝居を披露してやるか」

相変わらず足下で寝ているジゼルの元に降り立った

賢者への道

「ではこれより 紙芝居 ドラゴンクエストの新作

魔王の両輪をはじめる」

／＼ わーい！ ／＼

子竜たちの歓声と拍手を受けて紙芝居の読み聞かせを行った
今回はこの後につながる非常に重要な内容ではあるが
オレが当時実際に見ていたのはほんの一部で

後に手に入れた日記が非常に役にたった

「魔王軍最強の戦士である地獄の騎士がかつてない窮地にいた

人間の赤子を拾い地底魔城で育てはじめ間もないころ

まだ歯も生えていない赤子に何を与えればよいのか苦心の末
城にいる魔物の中で一番飲みやすく栄養がありそうな

魔物の乳を飲ませ続けていたのだが それが裏目となる事態が起きたのだ」

それまでバルトスの6本の腕の中で笑っていた赤子の顔が

紙をめぐり青色に変わった絵になったところで

以前の紙芝居でヒュンケルが成長しバルトスに星型の勲章を渡すといったことをやったため助かることはわかっているはずだが意外にもかなり緊張した様子で見ている子竜たち

「たしかにその魔物の乳には魔物にとっても人間にとっても

十分な栄養があつたが人間に対しては毒にもなりえたのだ

赤子の顔色や体温の変化により異常に気付いたが治療は困難だった
毒消し草はあつたが齒もなく飲み込む力も弱い赤子には使えず
また地獄の騎士にはその強力な力の代償として魔法が使えない
力が強く術も強いものは魔王のようなごく一部の例外だけだ」

『いっついでいっつそり自慢をもってこないでくださいよ』

「だが地獄の騎士はあきらめなかつた

赤子を抱え城の魔物手当たり次第に協力を仰いだが

魔王軍には攻撃魔法を得意なものが多いが

回復魔法の使い手は少なく更に解毒呪文を使えるものはいなかつた

これには魔王も例外ではなく攻撃・回復の両方を使える者は

更に限られてくる 人間では勇者や賢者とよばれるほどのな」

『そう考えるとそれら全てを兼ね揃えた

大魔王バーンはとんでもない存在ですね』

竜の騎士もそうだろうが

『もつとほめてもいいんですよ』

ダイは魔法が苦手だったがな

「だが、子の為に駆け回る地獄の騎士に心を動かされた魔物がいた

それがこの鬼面道士だ」

ドン！

／＼ うわっ！！ ／＼

鬼面道士の姿に驚く子竜たち

『ついにできましたね』

「上位の回復呪文を使い補助呪文も使える術者が

治療に名乗りでた

そして新たに解毒呪文キアリーの習得に成功したのだ

手に持った杖から放たれた光に包まれた赤子からは

みるみる毒が抜けていった」

子竜たちがあきらかにほっとしたところで・・・

「だが!!」

／＼ びくっ!!!
／＼

あまりに素直な反応に笑いをこらえながら続けた

「まだ赤子は持ち直してはいなかった

地獄の騎士の腕のなかでその体温がまだ戻っていないのだ

たしかに解毒は成功したが もうあと一押しが足りない

地獄の騎士はせめてあたためようとするが骸の体には血も肉もなく

人間のようなぬくもりを与えることができなかった

やけつく息を吐けるが赤子には刺激が強すぎる

もちろん他の魔物が使う火の息も同様である

地獄の騎士は途方に暮れそうになるがあきらめる気はなかった

その瞳には赤子しかうつっていないなかったのだ

焦る心をうつすかのように顔には汗がにじみ瞳には・・・

そんな姿にまた心と体が動かされるものがいた」

／＼
・・・
／＼

「戦場では阿修羅のような戦士が目の前で父として必死な姿に

鬼面道士はまた新たな一步を踏みだしたのだ

それは炎の呪文メラの習得である」

／＼ あっ・・・

「回復呪文を得意とし攻撃呪文が使えなかった鬼面道士だったが

その限界を超え おぼえたての呪文を必死に制御した

ただ目の前の親子の力になりたかった その一心で」

そんな鬼面道士を恐がるように見るような目はもうなかった

「赤子の顔に赤みがもどり 平穏がもどった

世界を恐怖に包む魔王軍の中枢地底魔城でおきた小さな奇跡

それに気付いたものがいた 城の主 魔王である

回復呪文だけではなく攻撃呪文も習得するという

自らの限界を超えた配下に興味をもったのだ」

『ああ そつちなのですか まあ あなたのことですからね』

「魔王はその鬼面道士に名前を与えた

自分と地獄の騎士の名から一文字ずつをとり命名した」

『それで ブラス となるのですね』

そういうことだ バルトスも自分と同じ一字をもつ伝説の剣豪の名

ヒュンケルと名付けているからな

「こうして魔王から命名された鬼面道士は魔王軍の中で地位を上げ
いつしか武の地獄の騎士 魔の鬼面道士として

戦場では部下を率いることができるほどの存在になっていった」

多くの怪物たちをしたがえ杖をふる鬼面道士の絵
結構な力作だったのだが 反応がいまひとつだな

「だが城にもどれば赤子用の食べ物の用意を

地獄の騎士と共に苦心する毎日だった」

『さすがですね 本当にあなたの部下とは思えません』

オレが信じるのは力だけだ 普段の行いまでは興味がない

「そんな姿に周りの魔物たちもほだされたように 赤子に笑顔を向け

その子育てに積極的にかかわるようになっていった・・・

というところで 今回はここまでだ」

パチパチパチパチ!!

／ わー いつのまにか手に汗びっしょり ／

「あ ほんとだ つい力はいつちやった」

／ あかちゃんぶじでよかつた ／

／ あのだったこの絵 リオノラをだっこしたときの絵とそっくり／

／＼ハドラーさま 鬼面道士はなんてお名前になったんですか？／
「そこはあえて書いていない．．．なぜなら

名付けというものは力がある おまえたちにもそれぞれ
命名の術というものがかけられているようにな

たしかにここで名前をだした方が自然でわかりやすい

だがオレはこの紙芝居をおまえたちにとつて

できるだけ身近なものに感じてほしいからだ」

／＼？／

『どうもあまりよくわかってないようですね』

「あえて名前を明かささないのは その方が面白いからですよ

たとえばこの一人一人を自分や身近な方と置き換えて想像してみたり

紙芝居ごっこをするときにそのまま自分たちの名前で遊んだりできますから

そういうった自由な遊びの妨げにならないようにという配慮ですよ」

〔流石タイムさん！〕

なんかあたしにもわかった気がする

うん たしかにその方が楽しそう！」

竜術士二人が同調したことで子竜たちも納得したように見える

「・・・とりあえず今回のところは名付けのときに

文字を継がせ繋がりをつくった　ということだけ憶えておけ」

まあ匿名は紙芝居上の演出のひとつということもある

そもそも実名では魔王がオレであることもわかる為

仕方がない面もある

『ジゼルたちが紙芝居を楽しめたのなら何よりです

今も紙芝居の感想や内容を話題に盛り上がってますし』

・・・だが見てみる聖母竜　この小さな頭で考える子竜たちを

この行為がやつらのレベルアップにかかわってくるのだ

『自分の限界を超えたプラス老のように　ですな』

フフフツ・・・　こいつめ・・・

く幼竜のお茶会のその後く

幼竜たちの茶会が終わり オレ達は参加者の幼竜・風竜のゼインを
風竜家に送りとどけに来たのだが

「見慣れぬ風竜がいるな

しかも成竜とはコーセルテルでは珍しい

・・・エプロン姿の竜は珍しくないが」

(パン粥と言えばハチミツたっぷりだろう!!)

＼ なにそれ おいしそう♡ ／

(今はさっぱりした味のほうが師匠の好みなの!!)

『あちらは風竜家の補佐竜のジエンですね

補佐竜よりも年上の竜ということは先代の風竜でしょうか？

寝込んでいる風竜術士ミリユウのための料理中なのですが・・・』

(師匠おなかすいたっていつてるよー！)

(なんかよく来るねシオリアさん)

「ほう あの成竜はシオリアという名か 中々強い力を感じる

グレイスよ これは茶会で残ったパンだ とりあえずこれを持って行け

(うわあ ありがとうハドラーさん！)

(あの二人は放っておいても大丈夫ですから師匠のお見舞いしますか？)

「ほう よいのか？」

補佐竜がケンカしては竜術士も落ち着かんだろう」

(あれでも里の決めた婚約者同士ですし)

外で暴風を起こしていたときに比べればおとなしいものですから)

「ジゼルもあんちゃんの見舞いするか？」

ちびっこお茶会のはなし聞きたいぞ」

「いやこの後木竜のロツトを送る予定がある

食欲があり 人手もあるなら問題ない

ジゼルは残るか？」

「いえハドラーさまといっしょに ファナ、ゼインおにいちやんまたね／

＼／パンありがとう！またねく！！／／

・
・
・
・
・

今度はロツトを連れて木竜家にやってきたが・・・

〔お・・・お粥くらい私も作れるわよー・・・〕

〈エレさんは看病だけしてて下さい〉

先に木竜術士の看病に来ていた水竜術士のエレと

木竜の補佐竜の二人 ノイとロイが面白そうなりとりをしている

〔リリックが小さい頃なんかよく――〕

〈聞いてます

だからエレさんは看病だけしてて下さい〉

『たしかエレに来てほしいと言ってたのはロイでしたよね

すこし扱いが辛辣なのは？』

フフフ だからおもしろいのだ

エレの補佐竜リリックからあやつの武勇伝を聞いているはずだ

カディオの補佐竜からすれば料理がうまくできるかは運だ！などと

言ってるようなやつをつくるものを食わせられんのだろう

それにお前やジゼルにはまだわからんだろうが

木竜術士カディオと水竜術士エレ なかなか楽しめそうではないか

『そういうものですかね？』

へカディオ また熱が上がつてるよ――・・・

「このまま放っておいたほうが面白そうだが・・・

キーニよ マシエルはどうした？

たしかロツタルクが呼びに言ったはずだが」

へマシエルさんならカディオに薬を渡した後

いったん家に帰ってからミリユウさんのところにも行くと言っていました」

『ちようど入れ違いになったようですね』

カディオの熱が上がったのは体調のせいだけではなからう

どうせならこのまま見ていききたいが・・・！

「・・・フツ！ 無粋!!」

／ ハドラーさま？

「いや 気にするな それよりもパンを渡して帰るぞ

お前の土産話をサータ達も楽しみにしているだろう」

／ はい！ハドラー様 ロツトおにいちやんまたねく!!／

／ ぼくもカディオに今日のこといっぱいおはなしするよ!／

／ 今度はゆつくり遊びに来てね ジゼル!!

／ 幼竜たちの茶会は ジゼルを含め幼竜たちにとつても

補佐竜たちにとつても その竜術士にとつても

得るものの大きなものとなったな

『それがまさか次の日にあんなことになろうとは・・・』

お前・・・どこでそんな言葉を覚えてきた？

『私も成長していますから まあ明日何があるかなんてわかりませんが』

・・・お前の成長はそれでいいのか？

～夢物語～

とある朝食

〔夢?〕

（うん ちつちやいころの夢を見たの

みんなで遊んで楽しかった）

光竜らしく朝からテンションの高いカータのこの発言から

食卓は夢の話題で盛り上がった

「夢か・・・」

オレは瞑想中に大魔王バーンに会った事があるが・・・

あれは夢といえるのか？

『どうでしょう?』

私はあなたよりも睡眠を必要としないので夢というものを

見たことないですし』

「ジゼル お前はどんな夢を見ている?」

／ 夢ってなんですか? ／

そこからか・・・

ジゼルに適当に説明してやったところ

／ いつでもハドラーさまといっしょですよ！

『・・・あの ジゼル 私のことは？』

／ ・・・お母様は 見たことない・・・かも

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

沈むな聖母竜よ うつとおしい

《マシエルさーんっ》

「この声は 地竜家のロービィか」

「ロービィ!？」

家の外から聞こえた声にマシエル達が出迎え行く

オレとジゼルは食事を続けているが外の会話は聞いている

地竜術士ランバルスの娘ヴィアンカがコーセルテルに

やって来る日が決まったらしい

「七日後か・・・ 意外と早かったな」

『離れ離れだった親子が多くの障害を越えてついに再会・・・』

是非とも見逃せませんね』

「地竜家からマシエルたちに何かを頼むことがあるようだ

同行するのはたやすいだろう

・・・オレも興味がある」

／ サラダおいしいです ／

・・・・・

それから二日ほどたつたマシエル家

〔ナータ！ 正直に言つて!!〕

やっぱりどこか具合が悪いんじゃないの？

顔色もよくないし」

マシエルがナータに問い詰められている

大王イカのような まっ白い顔をしていては当然だろう

「具合が悪いというよりも ナータはここ数日

消耗した体力や魔力が回復してないようだが」

《ナータ

よく眠れてないんじゃないの？

夜時々寝言 言ってるよ》

流石ナータ おそらくそれが当たりだろう

竜とはいえ 睡眠による回復は重要だ

トントン カチャ

〔こんには マシエル君〕

〔ミリユウさん〕

ナータの話が核心に触れそうなところで来客か

・
・

風竜術士ミリユウの用件は地竜術士親子の再会時に立会い

一騒動がおこった際に その見届け人としてやって来る

地竜の里の守長が止めに入らないように止めてほしいと

〔守長の方を止めるんですか!?!〕

〔ヴィアンカさんは大丈夫!〕

考えなしな事はしない人だからね

〔その立会い オレとジゼルも同行してもよいか?〕

〔ハドラーさん ありがとうございます〕

そうしてもらえれば助かります

頭が固い人を止めるならハドラーさんにもいてほしいですから

・
・
・さてどうなることか

『あなた・・・ひとつ提案がありました』

地竜術士の親子とは直接関係ありませんが』

・・・

聖母竜の提案は夜ジゼルが寝るときのことだ

「・・・ド・ラ・ゴ・ラ・ム!! (竜変化呪文)」

ドドオオオン!!

『この姿も久しぶりですね』

どうですか? ジゼル フェルリ』

／ハドラーさまがお母さまに変身するとハドラーさまはどこへ?／

‘ちゃんと聖母竜さんの中にいますよ、’

「このとおりな」

『では 早速はじめましょうか』

ジゼルこちらにいらつしやい

今日は私があなたを抱っこして いっしょに寝ましょう』

‘まあ! 素敵ですね、’

『子守唄もおぼえました 是非聞いてください』

・・・これなら私もジゼルの夢にでられるかも』

・ ・ ・ お前　そこまで気にしてたのか

ジゼルと抱き合った聖母竜が以前他家の子竜たちから聞いた
子守唄をうたいはじめた

『おやすみおやすみ　かわいいよい子

夢のお国へ行つておいでね』

ドラゴラムにより実体化した聖母竜の声が地下の術部屋に響く
いつもの念話のようなごく限られた者にしか聞こえない声ではなく
またオレの声とも違う聖母竜自身の声が・ ・ ・

『おやすみおやすみ　かわいいよい子

夢のお国で遊ぼうね』

・ ・ ・ そういえば　以前オレが昼寝のときにこの子守唄を
うたつたときはだれ一人眠らなかつたな

別に気にはしていないが・ ・ ・

『お星はきらきら光る　風もお花もきらきら歌う

きつとそんな場所だから』

じつと聖母竜を見上げるジゼルの瞳が・ ・ ・

『行つておいでねかわいいよい子

夢のお国でいっしょに遊ぼう』

ゆっくり閉じていく・・・

『夢のともだち 夢のおはなし

起きたらいつぱい 聞かせてね』

・・・ふと思いついたことがある

オレがこのまま寝た場合変身が解けるのか

それとも魔力が尽きるまで聖母竜のままなのか

魔法力が回復するのか・・・などなど

それを試すために・・・

『おやすみおやすみ かわいいよい子

夢のお国へ行っておいで』

オレは眠りについた・・・

・・・

・・・

“よかった！ ようやく会えました

お話しをしましょう

お話ししましょう”

「・・・だれだ？」

オレは眠りについたはずだが
目の前には見知らぬ女がいた
はじめて見る顔と声だ

少なくとも聖母竜やジゼルではないな

“私はこの地に眠る月の精霊コーセルテル

あなたはハドラーさんですね

ナータさんの妹ジゼルさんのお父さん”

「いかにもそうだが・・・」

おまえはなぜここに？　ここはオレの夢ではないのか？」

“そう　ここはあなたの夢の中

私は夢を渡る術でああなたの夢におじやましております

先ほどまでナータさんの夢でお話していました”

「ナータの不眠の原因はおまえか」

“ええ　夢でお話することがそんなにくたびれることになるなんて

先ほどマシエルさんに叱られるまで知らなかったもので

もうしわけないことをしました”

「マシエルは気づいたのか

そして夢の中まで子竜を守りに行ったと

流石 コーセルテルで一番の竜術士と行ったところか」

“はい それでマシエルさんに夢の外の世界で

精霊の姿でお話することができると聞きました

その方法を探しにきました”

「ほう それでこのオレのところ」

“はい ナータさんに ハドラーさんなら

夢におじやましても大丈夫そうと聞いていましたが

あまり眠らないようなので今まで機会がなかったのです”

あやつ 自分の竜術士と弟妹のためなら容赦ないな

“それにハドラーさんは竜術以外の術に精通していると

聞いてますので 外に行く術も知っているかと・・・”

「たしかに心当たりはある

この術を応用すれば

体の一部を切り離し会話をしたり

遠隔操作でキラーマシーンを操作

自らの映像を送り会話をすることもできる

おまえの望みにもっとも近いのは後者だな」

「素晴らしいですハドラーさん

是非！是非!!お話ししましょう!!!”

・・・・目の前にいるのはただのおしゃべり好きの女のようだが

こやつはあの大魔王バーン級の力をもった月の精霊だ

興味深い存在であり向こうから接触してきたこの機会

生かすのも面白かろう それに・・・

「おまえやその片割れの寝ぼけた行動が

ジゼルの誕生の一因だったからな

その礼 ということにしてやろう」

「まあ！ お子さんの誕生に私達が関わっていたのですか!?

そのお話しも ぜひしましょう!!”

・・・

それから一晩中 こやつと話をしたわけだが・・・

本当によくしゃべるし よく聞いてくる

この調子で何日もつきあえばナータの顔色が

大王イカになるのも当然だろう

「ああ！ ごめんなさい！」

ついたのしくて いっぱいお話ししてしまいましたけど

ハドラーさんお疲れでは？

私ったらマシエルさんに注意されたばかりなのに・・・

「このオレを見くびるな 子竜や人間とは出来が違う」

それにおまえが外に出てくるのを待っている者がいるのだろうか？」

「はい ハドラーさんのおかげでできそうです」

またお話ししましょう 今度は外の世界で」

「オレも待っているぞ いつでもな」

外ならば 話し相手を聖母竜に押し付けられる

・・・

・・・

オレは目をさました

姿はオレにもどっているが魔法力が空だ フェルリに聞いたところ

どうやら聖母竜はオレの魔力が尽きるまでジゼルを抱いていたようだ

今ジゼルはオレの腕の中で寝ている

『結局 ジゼルの夢に私がでたかは本人にしかわからないのですね』
「当然だろう」

「・・・いやあのコーセルテルのように夢を渡る術を使えば
そうでもないのか？」

『それは興味深いですね』

「興味があるなら おまえが直接聞くのだな

せいぜい楽しみにするがいい クククツ」

せいぼりゆうはレベルがあがった

かしこさが2あがった

うんのよさが3あがった

かつこよさが1あがった

こもりうたをおぼえた

父と娘の戦い??の巻

ついに地竜術士ランバルスの娘がこのコーセルテルにやってくる

「準備万端 細工は流々・・・」

『あなたは歓迎の余興の準備しかしてませんが』

おまえはまったく役にたつてないがな

『・・・いつもどおりですね』

・・・こいつも強くなったものだ

だが当面の問題はさつきから一人で騒いでいるこの・・・

《何か良からぬ事でもたくらんでいるんじゃないのか!?!》

地竜族守長トウレン

わざわざ外の地竜の里から今回の客人を見極めにきたという

以前ミリユウが マシエルに頼みに来たのは

こいつを止める ということだったか・・・

〔コーセルテルにも竜たちにも

害になるような人ではけつして——〕

《そもそもなぜ あなたたちがここにいる!?

竜術士マシエル!! 神の使いハドラー殿!!!》

「ほう マシエルの説得が効かないばかり

オレにも飛び火してきた」

『珍しい展開ですね』

おそらくこやつにとって見極めする客人の中には

オレも含まれているのだろう

『なるほど ですが今更ですよね・・・』

・・・遅すぎるぐらいだろう

以前に会った火竜族族長候補のメオが

よほどうまく里に報告したのか

それとも竜術士たちへの信頼のあらわれか

『その割にはトウレンの態度が

刺々しいですね』

ふん この程度ぬるすぎるわ

あの言動は守長の立場によるものだ

大した問題ではない

それよりもそれに刺激された・・・

《やつと師匠とヴィアンカさんを

会わせてあげられるというのに

——もし 邪魔をするなら

たとえ守長でもゆるしません》

キビツ

《ユイシイ!?!》

そして無言でマシエルの元へ行くナータ

竜術士優先の補佐竜どもが暴走する方が

・・・おもしろくなりそうだ

それよりも 一番の当事者の地竜術士ランバルスだ

『いつも豪放磊落な風情のランバルスが

今日はずっと不安そうですね

無事に親子対面できればいいのですが

ダイとバルンのような不幸な再会だけは避けなければ・・・

そもそもなぜあんなにこじれたのですか?』

ダイとバルンか・・・ あれはたしか

フレイザードがダイ達に敗れ魔王軍の戦力が半減した頃
カール王国を滅ぼし戻ってきたバランスがダイと戦うと宣言

その時のオレはそれを止めようとしたがあの時は

蘇生されたばかりだったが生きた心地がしなかったな

11年探し渴望していた息子との再会の手がかりを見つけ

自ら剣を振るうほどの激戦だったカール王国攻略で上がった戦意

ダイの正体を隠し続けていたオレへの怒り、

などと色々条件が重なったバランスが・・・

『それ　ほとんどあなたのせいですよね・・・』

・・・ダイと再会したそばから戦闘になり力づくで

連れ帰ろうとした結果　散々抵抗された挙句

クロコダインの加勢で手傷を負い警戒し

ダイの記憶を抹消するという強硬手段にでたあたりが決定的だな

『あなたのせいですよね』

・・・あのときのオレは保身と野心しか頭になかった

ただでさえ魔王軍最強のバランスがダイを連れ帰ろうものなら

オレの地位がとぶと容易に想像でき　大魔王も明言した

ダイがバランを倒すことをひそかに願ったものだ

『・・・その結果 本当にダイがバランを退けたものの

その後結局あなたはダイとバラン二人と同時に戦った上で

竜魔人化したバランに一方的に敗れたのでしたね』

因果とは恐ろしいものだな 竜の逆鱗に触れた報いだ

しかもオレの体に埋め込まれていた黒のコアがバランの命を奪った

『やっぱりあなたのせいですよね』

まあそれはさておき 今はランバルス親子だ

あのときのバランとは事情が違う 参考にはならんかもな

そもそもオレはあやつらの事情をよく知らんが

・・・あの表情 色々と抱え込んでいるようだな

やはり余興の準備は無駄にはならんな

『そのようですね・・・』

あ!?!』

来たようだな

空のかなたから風竜術士ミリユウとともに

飛んでくる女が一人

ヒュウウウ・・・

すどん

〔ヴィ・・・〕

直接出迎えたランバルスに対し着地した女が抜刀し一閃

〔!?!?〕

ふみこみが浅く　ランバルスにはあたっていないが

場の空気は一変した　顔の面影に太刀筋　あれがやつ娘か

そして顔面蒼白し後退するランバルスに剣を振りながら

接近していく娘

『あなた!!　すぐに止めてください!!!』

ブン　　ブン

・・・あれではダメだ

〔!?!〕

あの程度ではランバルスの服すら斬れん

動揺するマシエルや子竜たちもトウレンに止められている

・・・そもそもマシエルはトウレンを止めに来たはずだが

「まっつてくれ ヴィーカ」

キンッ

ランバルスが鞘に納まったままの小刀で娘の剣を止めた

「いまだ絶望の中にいらつしやるのではと心配してました・・・が・・・私の剣を止めて下さった・・・ 生きる力をとりもどしておられる

本当に良かった」

涙を浮かべる娘

「生きていて下さって良かった

また・・・会えて —— 本当に・・・」

「俺も・・・ずっと 会いたかった ヴィーカ」

「お父様」

抱き合う親子を前に 聖母竜もようやくおとなしくなった

『ああ・・・本当に良かった』

あの時のような悲劇が繰り返されなくて』

守長トウレンと風竜術士ミリュウ以外は剣劇の意図に気付かず

あつけにとられていたが ランバルス達がこつちに来て

「はじめまして グランレイック・ランバルスの娘

ヴィアンカ・リオティールです

あこがれの竜都に呼んで下さり ありがとうございます

まさかこの地で父と再会できるなんて思ってもみませんでしたわ

自己紹介をはじめたことで ようやく正気を取り戻したようだ

《私は地竜術士ランバルスの一番竜ユイシイです

ようこそおこし下さいました》

「ユイシイ?」

《こっちは師匠（せんせい）の元で一緒に育つ兄弟竜で——》

「ちよつと待って

もしかしてお名前は『ロービィ』『ドリス』『リド』『クレット』『マルティ』……」

《ロービィです!》

《リドです》

／＼クレット／

関係ない名前もあつたが初対面のはずの子竜たちの名前を

いいあてたヴィアンカ

「どれもお母様が好きだった著名人の名よ」

「なるほどそういうことか」

／ ハドラーさま 私の名前はどのような意味ですか? ／

ジゼルが今の話に興味を持ったのか聞いてきた

『あなたのお名前は 次世代への希望をこめて

ジゼ と名付けようと私が提案して』

「お前の長兄と長姉に共通する一文字 ル を

オレが足し ジゼル と名付けた」

／いちばんおにいちやんと おねえちゃん・ ・ ・ ル・ ・ ・? ／

まだバルトスとアルピナスのことを直接教えていないため

よくわかっていないようだな

／ナ・ー・タ・ ・ ・ あれ・ ・ ・? ・ ・ ・あっ!! ／

『?』

／ マシエ『ル』! フェ『ル』リ! ／

「『あっ!』」

そつちか ジゼルにとって兄妹は身近な年長者だからな

『そういえば偶然ですが一致しますね

どうしますあなた? 訂正しますか?』

・ ・ ・ いや好都合かもしれん 少なくともこの地にいる間は

あの二人を兄妹として見習うことはジゼルの

レベルアップにつながるはずだ

しばらくこのままにしておこう

「名前につながりを持たせるのは

それだけ期待を込めている」ということでもある

その名に恥じぬ成長をな」

／＼ はい！ハドラー様♡／

応えるジゼルの顔に オレの子バルトス達だけでなく

ダイ達アバンの使徒の面影も感じていた

そして互いの自己紹介を終え トウレンをあっさり攻略し

周囲とも馴染んだヴィアンカだったが宿泊先を風竜家にすると

ミリユウが言ったあたりからまた風向きが変わった

「お父様 私……」

お父様が元気で生きていて下さってうれしいし

会えて本当に良かったと思ってますが

置き去りにした事は ゆるしてませんから」

再び顔面蒼白となるランバルスと地竜家の子竜たち

『ええええー！！』

と うるさい聖母竜

どうやら ただなごやかには済みそうにない

まだまだ楽しめそうだ

オレは期待をしながら余興の支度をはじめた

地竜家のターン

現地竜家の補佐竜ユイシイ

今回のランバルスとヴィアンカの親子再会に最も尽力し望んでいたはずなのだがその表情は冴えない

ヴィアンカの発言に随分と振り回されているようだ

・ ・ ・ ここまでは完全にヴィアンカのペースだが

風竜術士ミリユウやマシエルたちも家に帰りここからは地竜家の中でのこと ・ ・ ・ そしてオレも動く

現在地竜家の中にいるのは住人である地竜術士ランバルスその子竜たち 先代地竜家補佐竜ノーセ

地竜の里の守長トウレン ヴィアンカ

そしてオレとジゼル

『私もういますよ』

おまえは数に入らない

ユイシイのいれた茶を飲み 一息ついた後

オレが用意した紙芝居を披露するときがきた

本来ならコーセルテルの里の外にある古代の竜の遺跡調査を

ヴィアンカに任せるに足るか 資質を試す予定だったが

その前にくり上げる形となった

トウレンやノーセもオレを見極める材料になると判断したのか

おとなしく見ているようだ 知恵の竜の好奇心かもしれないがな

内容は序盤の一〜三話 魔王と勇者の最初の話と城での

直接初対決のみだが 今回だけは内容を一部改変し

魔王編は竜を配下にするところを遺跡で卵を拾い孵したことにし

さらに勇者編の内容を大きく変更した

・
・
・

・
・
・
・
・
・

「ついに我が軍に竜の配下ができ まさに最強の軍団となった

オレはこれより魔王を名乗る!

全世界に宣戦布告をせよ!! 世界征服に乗り出す!!!

つづく!」

パチパチパチ!!

オレが魔王編一話を読み終え客席からの拍手がおこる
初披露だったヴィアンカたちからの反応はまずまずか

・・・さてここからだ

ヴィアンカの隣でじつと聞いていたランバルスが立ち上がる

「あとは任せただぞ」

〔・・・ああ〕

勇者編の紙芝居の読み聞かせをランバルスと交代した

今回は勇者の設定を大きく変えた

・ 竜学者の青年が探検した遺跡で竜化術と人化術を発見した
・ 竜化術をその場で試し遺跡は崩壊 人化術で元に戻る

・ その罪で人間の社会ではお尋ね者となり逃避行をしながら
他の竜の遺跡を調査する日々を送っていた

・ そんなとき人里から遠く離れた竜の遺跡で出会った少女

それは溢れる好奇心を抑えきれず単身で遺跡の調査にきた

人化術で人の姿をした竜の都の姫だった

・ ともに遺跡を調査するうちに意気投合し青年は学者として

竜の都に招かれる

といった内容だ

元々アバンの過去を子竜向けに脚色したものだだったが

コーセルテルで得た知識を下敷きにさらに踏み込んだ物にした
ランバルスがこのコーセルテルに来た顛末は知らんが

似たような経緯があつたとしても不思議ではないというほどに
『上手ですね ランバルスの読み聞かせ』

軽妙にして 重いシーンの演出も巧みです』

まったくだ オレも参考にする部分が多い

僅かな指導で魔族言語の解読もこなし練習以上の出来だ

流石竜術士としてマシエル以上の古株であり

4人の子竜と娘を持つ男

オレの隣のヴィアンカも童心に帰ったかのような

ぼわつとした目で紙芝居に引き込まれていた

『ランバルスも紙芝居を挟んで娘に相對しているせいか

いつもの調子をとりもどしているのでしょうか』

かもしれないが やはりオレとは経験が違うのだろう

さて そろそろ・・・

子竜たちに合図をだし 紙芝居にキリがつく前に
オレは次の用意にとりかかった

パチパチパチ!!!

ちようど準備を終えた頃

オレのとき以上の拍手が聞こえた

＼ ハドラー様♡ ♪

ジゼルを含む子竜たちがやってきた
「来たか こちらの準備は済んだ」

ユイシイはさつさと一張羅に着替え

他の子竜たちは配置につけ

本番はここからだ」

＼＼ はい! ♪

『キビつとした よいお返事ですな』

特にユイシイは練習のときよりもよいテンションですな』

ああ ヴイアンカを意識してのことだろう

・
・
・

.....

魔王対勇者の初対決の三話目は紙芝居ではなく演劇仕様だ

配役は 魔王がオレ 勇者をランバルス そして

《またせんせいはいないんですか!?!》

騎士団長を二番竜で守長候補見習いのロービィ

《いいですよロービィ》

《よくないですよ! せんせいのいるところはわかってるんです

ぼくが呼んできます姫!》

姫役をユイシィがやっている

一張羅に着替えいつもの地竜の深緑の服ではなく

シンプルだが明るい色調とガラスの髪飾りは姫を表現する

衣装としてちょうどよかった

『あの衣装はジゼルにも似合いそうですね』

サイズがまるで合わん 流石にまだオレには作れんぞ

オレは火竜の服を着たジゼルとともに出番を待つ

リドとクレットと遊ぶランバルスに

騎士団長役としてロービィがやってきた

《せんせいは姫の護衛と教育のために招かれたんですよ

ちやんと仕事をしてください!》

〔護衛なら守長であるおまえさんがいるだろう

文武両道、劍の腕も国一番でオレよりしつかりしてるんだ

オレはこうやってちびたちと遊んでた方が国のためになるさ〕

《姫はこの国の病氣の王様に代わって魔王との戦いの

矢面に立ってるんです!

子守よりも姫の側にいてください!》

〔その言いかたはちびたちに失礼だぞ

おまえさんも いずれ嫁さんができて子供が生まれて

その世話をするようになるんだ〕

《ぼ、ぼくはまだエリーゼとそこまでの約束は?!》

ロービイの顔が真っ赤だ

あやつ練習のときから同じようにからかわれているな

『かわいいからいいではないですか』

たしかに面白いし ヴィアンカにもウケているようだ

〔それに王の子だから次の王にならなければならない

なんてことはないぞ 危険なことなら尚更だ

なりたいものになり 行きたいところに行けばいいんだ」

む？ 予定にない台詞だ

『そうですね 練習でもなかつたはずです』

ランバルスの目線はあくまでロービーに向き頭をなでているが

それを見ているヴィアンカが明らかに動揺している

『親として伝えたいこと……ですか』

「……私のなりたいもの 行きたいところ

……一緒に いつか——」

ヴィアンカのささやくような声が聞こえる

どうやら肝心の相手にも届いているようだな

『あなたの耳は本当に便利ですね』

そして場面は変わる……

《……ロービー せんせいはどうしたのです？》

《魔王の襲撃予告がありましたから

城外の安全な場所にリドとクレットを送りに行きました》

《城外に？》

オレが部屋の外で待機しているリドとクレットに合図を送る
 ／ うわああああ モンスターの軍団だツ!!! ／

《ええっ! いったいどこから?!》

ロービーが声のした側のドアに向かったのを見計らい

その逆 ユイシイの近くのドアに手をかける

さてオレの出番

．．．いや オレ達の出番だ

「いくぞでジゼル」

／ ハイ! ハドラー様 ♡ ／

オレは暗幕に少し手を加えて間に合わせた

黒のローブをまといジゼルの肩に乗せ登場した

ガラツ!!

《ああっ!?!》

「動くな小僧 姫の命が惜しければな．．．

さて．．．姫よ．．．魔界の神へのいけにえとするため

この魔王みずから来てやったぞ ククククツ」

《魔王よ あなたの企みは読めています

私を奪うことで竜たちの動揺を誘い

世界征服を早めようというのが目的でしょう!」

「見抜いておるとはな　．．．さすが　まだ子竜とはいえ

力と知恵を兼ね備えた地竜の国の主よ

ならば貴様にはこの言葉を贈ろう．．．

地竜の姫ユイシイよ　このオレの部下になれ!

我が片腕となればこの世界の半分を与えてやるぞ．．．!!」

客席がざわつくのを感じた

「このジゼルは生まれたばかりの幼竜でありながら

かなりの力を秘めている　貴様ら竜にはそれだけの価値がある」

オレの肩の上で胸を張るジゼル

「世界の半分　貴様らの好きにすればよい

人化術などという半端なもので人間の目から隠れ

このような猫の額のような土地で暮らすことはない

竜の力と姿を　竜として生きていけるぞ」

ここが今回の見せ場のひとつだ

『練習のときにユイシイに与えた宿題

魔王の誘いに どう答えるか

フローラ姫や勇者アバンではなく

地竜家の一番竜 補佐竜ユイシイとしての答え・・・

楽しみですね』

《お断りします!!》

キビツ とした声で答えるユイシイ

《人化術は 人から隠れるための術ではありません

人と共に生きるための術です!

同じ家に住み留守を守り “おかえりなさい” をいつてあげる

私の知恵と力はそのためのもの

人を傷つけ奪うだけの魔王軍に従うつもりはありません!!》

「・・・フツ なかなかの答えだ

竜の力 従わぬとなれば何よりの脅威となる

ならばこの場で・・・!!」

「そこまでだ 魔王さんとやら

うちの子たちを誘うってんなら もつと優しくしないと

・・・それと外の怪物たちはもう皆のびちまってるぜ」

ランバルスがロービーのいるドアからあらわれた

「なんだア 貴様あ 人間か!!？」

ランバルスが踏み込み 一瞬でオレとの距離を詰め

大剣を模した術杖を一閃！

奇しくも 先にヴィアンカがランバルスとの再会に見せたものと

同じ太刀筋だった やはり親子だな

オレは後ろに避けユイシイから離れその間にランバルスが入った

「おろか者めがッ!!」

まさかこのオレに戦いをいどもうというのではあるまいなッ!!!」

「うちの子が気合みせてんだ 俺だってたまには本気になるさ」

ランバルスは鉢巻をしめ戦闘態勢にはいる

『やはりランバルスにはメガネを使うより

この方が似合いますね』

地竜術士の正装にあった鉢巻と術杖をもってきたユイシイたちの

眼力のたしかさよ

「さがれジゼル！」

オレはジゼルをつかみ客席に放り投げた・・・が

＼ ジゼルダイブ ♡ ／
 ブーメランのような軌道をえがきもどってきたジゼルが
 オレに体当たりをしてきた

ボスッ！

『先ほどのヴィアンカとランバルスが抱き合っていたのを見て

感化されたのでしょうか？』

いつもとどう違う？！

「えーい！ ならばジゼルよ おまえに命じる

外でのびてる部下どもをつれて地底魔城に帰り手当てをしろ

オレはこやつら片付けてから帰る」

オレはジゼルをひき剥がし もう一度客席に投げる

＼ ハイイ！ ハドラーさまー♡ ／

ガシッ と客席のノーセがジゼルを受け止めたのを確認し

ランバルスに視線をもどす

オレはランバルスが振るう剣術を紙一重でかわしつつづけるが・・・

こやつ 練習のときよりも太刀筋がするどい

練習から大して日がたったわけでもないはずだが

『やはり娘が見ているとはりきるのでしょうか』

たしかに客席からヴィアンカからの　ぽわっとした

熱い視線がランバルスに注がれていた

意外と現金なやつだ

オレは少し距離をとり

「なかなかやるが……」

しよせんは人間の力！

魔王の力にくらべれば……　まだまだ幼稚!!」

この台詞を合図にロービィが後から

スツ　　バスツ!!

オレの腕に木剣で会心の一撃を加えた

「いの——」

オレはロービィの腕をつかみジゼルするときよりも勢いよく

客席のトウレンに向かって投げつけた

「ロービィ!!」

練習ではうけとめる相手がないため

軽くランバルスの元に転がしてただけだったから

ランバルスも動揺して 緊張感のあるいい声をだしている
がっしりとトウレンが難なくロービィをキャッチしていた
さすがは現役の地竜の里の守長 口だけではなかったな
ロービィはあの跡継ぎと期待されているそうだが・・・
むっ!?

オレがみがまえるより はやく

ランバルスは おそいかかってきた

ダッ!! ブオン!!!

練習ではここでランバルスがアバンストラツシユの構えで

オレに斬りつけ オレがそれをよけ退却する流れだったが

今はランバルスの一段と速い踏み込みと予定外の剣筋に

対応が一瞬遅れ 避けきれそうにない

片手ではじけば大剣の形をしているだけの杖など簡単に折れる!

「くっ!?」

バシィィ!!

「見事! まさか人間がこのオレに防御で

両手を使わせるとはな・・・!!」

オレは両手でつかみ止めた術杖から手をはなし

大きく距離をとった

「今の剣と 姫の啖呵 それにその騎士の一撃に免じ

今日のところは まず退いといてやろう

だがこのくらいの力ではオレは倒せん！ 絶対になッ!!

フハハハハハッ!!」

オレは退場し 最後の場面 勇者の旅立ちとなる

オレも客席でジゼルやリド、クレットらと共に見ることにした

《せんせいが魔王を倒し世界を救うその日まで

私はここで待っています せんせいはこれからどこへ?》

〔世界中にある 竜の遺跡を調べてみようと思う〕

魔王があれだけ警戒する竜の力・・・

そこにきつと魔王を倒すヒントがある

それに魔王にそれを悪用されるわけにもいかないからな》

《できるだけ遺跡を壊さないでくださいね》

〔そんな もつたいないことは最後の手段だ

せつかくの貴重なもの まあ俺が言っても説得力ないか

はっはっは　なるべく早く帰ってくるさ
じゃあ　いつてくる」

笑いながら旅立つランバルスと

《はい　いつてらっしゃい　せんせい》

いつものように送り出すユイシイ　そして・・・

《ぼくはせんせいと一緒にいきますよ

せんせいが本当に大変なことをやろうとしているなら

ぼくはこの大地の上ならどこへだつてついて行きます》

「あの魔王に勝てるとは限らないぞ」

《ぼくはあの魔王がひるんだあの剣に希望を見ました！

それにせつかく竜の術をおぼえても

竜がいなければ使えないでしょ？》

「まったく　俺よりしつかりした　たよりになる子ばかりだな」

ロービイの頭に　ぽんと手を乗せ

そして旅立つ二人　その背中への客席トウレン達の拍手に

われに返つたヴィアンカ　どうやらすつかり見入っていたようだ

初期の内容から随分と改変したがランバルスや

ユイシイたちの熱演は だれよりもこの娘に響いたようだ

『これでこの親子は大丈夫でしょうか？』

そんなことはわからん・・・だがこの家には野暮なことであろう

ハドラーの・・・??の巻

(中)

こんなはずじゃ・・・

こんなはずじゃなかった・・・

私はただ「あの方」を守りたかった

生きていて欲しかった！

そのために自分の全てを引き換えにしても・・・!!

そして・・・全てを闇に飲まれた・・・

その結果 倒すべきものは倒した だが・・・

守るはずだった「あの方」までも

闇に飲まれた自分の手で滅ぼしたのだ！

その目はつぶろうとしてもそらそうとしても

その結末を見せつけた・・・

体も記憶も失った・・・

だが・・・

ひとつだけのこったものがあつた

「あの方」にあいたい!

そのおもいだけが 全てが滅びた闇の中にあいつづけた

どんなかたちでもいい

「あの方」の名も顔も忘れた

自分の中の「あの方」との思い出もない

声もわからない

それでも!

探し続けた!

自分が歩いているのか 走っているのか

飛んでいるのかもわからない

あてもない 何故探しているのかもわからない

どれほどそうしていたのかもわからない

そんなとき・・・ なにかによばれた気がした

ひかれるようにすすみ続けたその先で

何かにぶつかった!

壁? 今までそんなものはなかった

そんな疑問を感じた矢先

コンコン

壁ごと揺れた

コンコン!

カンカン!

ガンガン!!

ガンガンガン!!! ピシイ・・・

その揺れは音と衝撃とともに強くなっていく

「……………は……………か!?!」

!?

声!?!こんな闇の中で

それもこの声は!?!

わからないことだらけの現状に希望の光が差した

「……………だと……………?」

『……………いま……………』

知っている声と知らない声が交互に聞こえてくる

自分を取りまくものが変わった

かわった・・・ような気がする

＼＼　　—　ボワツ!!!　—／／

・・・

今まで感じたことのない異質な力

そして

「・・・ド・・・ゴ・・・!!」

『メ・・・の・・・を・・・に』

!?! 壁がかわった?

どこか広くなったような?

壁を通して外をより強く感じる

ならこちらのことでも伝わっているのかも?!

この壁の先にいるのが「あの方」なのかはわからない

だけど・・・

・・・

・・・

「名・・・」

『私にひと・・・があ・・・す　　というの・・・でしょうか?』

「一文・・・て・・・とい・・・どうだ？」

!!!

よばれた・・・?!

今「この方」によばれた?!

・・・この「わたし」が!?

喜び・・・!全てを失った自分に

喜びが・・・もどった・・・!

・・・

・・・

このままでいいと思っていた

この壁の外に行く気はなかった

外にいるのは「あの方」ではないかもしれない

あの声向けられているのはぬくもりの先は

自分ではなくこの壁に対してもものかもしれない

ここにいれば・・・

・・・けど

・・・あいたい!

「あの方」ではないかもしれない。「この方」に

このぬくもりを与え続けてくれる。「この方」に

よびかけてくれる。「この方」に

あいたい！ この壁を越えて!!

「オ……の保護……」

お……り育……として

お……付ける——

お前……

……」

見てほしい 「私を」!!!

……

……

かたい……この壁すごいかたい……

どうにもならなくてくじけそう……

そんなことを何度も繰り返し返していたら

「この……を割……たい……」

?! 「この方」も同じようなことを考えている？

この壁をとおして力を感じる・・・!!

「なるほ・・・ば・・・へ・・・エー!!」

外から感じる「この方」の力・・・

このときしかない!!

あいたい! あえる!! この壁のむこうに!!!

パリ・・・

「この方」に!!!!!!

「起きたか・・・」

＼?／

「涙をうかべ 鼻水をたらし よだれがもれた上に

寝小便か・・・」

‘寝汗もすごいわ お水と着替えをお願いしますね、’

「ああ頼む」

『あなたのひぎの上でのこととはいえ

怒らないであげてくださいね

これも 生きている証なんですから』

「幼竜の寝ているときの不始末を

とがめるつもりはない

．．．どうした？」

／ 夢をみていました．．． ／

「夢？ああ前にそんな話をしたせいかもしれんな

どのようなものだ」

／ よくわかりませんがなにかをさがしていました ／

『なにか？』

／ なにをさがしているのか なぜさがしているのか ／

「．．．．」

／ わからないまま ただたださがしました．．． ／

ぎゅ．．．

「さがしものは見つかったか ジゼルよ？」

／ はい！ハドラーさま ♡ ／

親子の一日がはじまる。

く目指すところ 目指す未来く

「さて では行くぞ ジゼル ハータ」

＼＼はーい／／

今日はハータが火竜家に行くというので

ジゼルとともに同行することにした

ジゼルはハータのお下がりの火竜の赤い服に着替え

ハータも用意はできたようだ

他の子竜たちは 今日はいつもより暑いということだ

家にいるらしい

ここコーセルテルは暑さに弱い村人が多いため

夏の精霊との約束を交わし

夏でもおだやかな気候だが今日は比較的暑い

オレや火竜にはどうということはないが

水竜のマータや木竜のタータなどは日向にでようともしない

『あまりにも涼しい日が続くからってつきり

とつづくに秋になっているとあなたが勘違いするほどでしたのに
急に暑くなるなんて どうしたのでしょうか？」

天気などそんなものだろう 夏に暑い日があるのは
なんらおかしいものでもあるまい

「ではいつてくる」

／＼いつてきまーす！／＼

「はい いつてらっしやい アグリナやヤチによろしく」

火竜たちが迷子になると面倒だな

「ルーラー！」

ギューーーーーーん

じやーーーーん

と 火竜家では ヤチの初作品展示会をおこなっていた

「このクッキー ヤチが作ったの？」

とつてもおいしいよっ」

／＼おいしい／

／うん アグリナといっしょにつくった／

「う〜ん」

笑顔でクツキーをほうばる子竜たちのむかひの席で

火竜術士アグリナがクツキーと陶芸作品を見比べながら

なにやら うなっている

「どうしたアグリナ？」

「うう〜ん 竜術士の欲目じゃないですけど

ヤチはとつても器用だと思っくんですよ

このお花のクツキーなんて型を使わずにヤチが

自分の手で作っただんですよ」

『ジゼルと同じ小さくて短いおてで よくできましたね』

「まあ そうだな」

「う．．．うん そうだね」

「それがどうして陶芸やガラス細工だところなるのかなって．．．」

どうやらクツキーと陶芸・ガラス作品の出来に

ムラがあるのが気になるようだ

そもそもあの陶芸が何を作ろうとしたのかわからんが．．．

『これはこれで素朴で味があると思っくんが』

「えっとね アグリナはお菓子作るの好きでしょ？」

「え？うん」

「ヤチもお菓子作り大好きでしょ？」

／＼すきーっ／

「陶芸は好き？」

／＼う．．．／

「わかりやすい反応だな」

「ヤチはあんまり工房仕事が好きじゃないみたい」

「ええ!?火竜ってみんな工房が好きになるんじゃないの!？」

「どんな種族だ」

「みんなって事はないと思うよ」

「でもこれから火竜術の勉強いっぱいしてかなきゃ

いけないんだし やっぱり私が何か工房仕事できるように

なった方がいいのかな」

「お前 たしかパン作りで火竜術を磨いたと言ってなかったか？」

「ぼくもはじめは台所で火竜術の練習をしたよ

おナベのスープをちょうどいいあったかさにあたためるの

「すぐくむずかしかったけど 上手にできるようになったら
うれしかったよ」

「火の力は制御が難しいからな

適温の管理は特に経験が生きる

オレもおぼえがある」

「ナータは今でも家事で術練習してるみたいだけど」

「そう言えばっ」

「やっていたな たしかに」

「——あのね

これはぼくが思ってるだけなんだけど

コーセルテルで一番料理上手な補佐竜はナータだと思う」

「ええ!? ユイシィやリリックじゃなくて!？」

「／＼ほおーっ!／／」

『さすがコーセルテルの竜術士の一番竜ですな』

「マシエルがコーセルテルの料理上手と聞くからな

そもそもオレがコーセルテルでやつのに住んでる理由のひとつだ」

『マシエルとアバン どちらの方が料理上手ですか?』

食糧事情が違うから味で判断はできんが・・・
作れる料理の種類は世界を旅していたアバン

一つ一つの料理の完成度はマシエルに分がある

〔はあーっ たしかに・・・〕

それなら一番って言われてもわかる気がする」

＼いちばん・・・ すごいなー いちばんっ／

『ヤチの目が輝きましたね』

アグリナも気付いたようだな

〔じゃあ ヤチも目指してみる？〕

お料理上手の補佐竜」

ヤチのテンションがあがった

＼うんっ いちばんになる!!／

〔よしっ じゃあさっそくマシエルん家へ行こう！〕

〔え!?!〕

「オレたちは今 そこから来たばかりだぞ」

〔だってヤチに教えるなら私だって上達しなきゃ

工房仕事よりずっとがんばれるっ〕

「もうおまえがとつとマシエルに嫁入りした方が早くないか」

「ヨメ!？」

／＼／＼おーっ!／＼

／ハドラーさまっ!わたしはハドラーさまにヨメリたいです!／

「そんなことより おまえも料理をおぼえろ

ほぼ同時期に生まれたヤチに遅れるなよ」

／はい!ハドラーさまっ!!／

「ならオレはこの上のグイ族のところまで

エプロンを完成させてくるか」

「あ・あのハドラーさん!なんで あの!？」

「ことあるごとにマシエルに会いに来ておきながら

マシエルに対する好意を気付かれないと思っていたのか？

・・・マシエル自身はともかく」

「あー・・・ あの ハドラーさん

私マシエルとこのコーセルテルで出会ってから

2年くらいしかたつてないんだけど・・・

それぐらいでこんなこと考えるのっておかしいかな？

オヤジ・・・父さんと母さんは昔からのご近所で

今の私よりも小さい頃にはプロポーズみたいなきことを

言われたこともあるって母さんは言ってたけど・・・」

「参考にはならんだろうが オレが知る夫婦で言えば・・・

好き合ってから結婚するまで20年かかったやつがいた」

『アバンのことですね』

「ほかには・・・出会ってから1年ほどで子供をつくって

駆け落ちしたやつもいたな」

『・・・バランのことですね』

「ええ・・・なんでそんな極端な・・・」

「二人ともそれぞれ惚れた女が特別な身分でな

人間の世界はいろいろと面倒なことが多い

一組は賢すぎるほどに賢い二人だったから だれからも

求められ 祝福される状態になるまで時間がかかった」

『あなたのせいでは?』

いやむしろオレや大魔王との戦いがあつたからこそ

学者出身の騎士のアバンと希望の女神王女フローラとの結婚

までに20年程度ですんだといえる

「逆に・・・もう一組は純粹すぎ、また世間を知らなすぎた

互いに惹かれあうままに結ばれたが為に

周囲からの反発を招き 親子で逃げることになった」

『これはあなたのせいでは?』

バランが魔物と疑われ追放されたのは

人間どものよくあるお家騒動に過ぎん

王族の、国という面倒なものの中で理由などなんでも作れる

『・・・むしろバランの育児放棄していた私が悪い気がしてきました』

・・・おまえがいたところで役に立つとは思えんが

〔・・・・・・・・〕

「オレは どちらが正しいとは言わん」

バランがアバンと同じ行動をとっていれば

未だにダイが生まれていない事態もありうる

アバンが終戦まで生きていたのは多くの奇跡の積み重ねだ

オレに殺されそうになっただけでも一度や二度ではない

「おまえとマシエルの未来がどうなるかは

オレの知ったことではないが・・・

おまえの望む未来があるなら武運を祈ってやろう

・・・分が悪そうだからな

「う、うん

・・・じゃあまずはお料理とヤチのエプロン作りを習いに

マシエルの家に行ってきました!!」

「そうか ハータとヤチはそっちについていくか

ジゼルは・・・」

／＼ハドラーさまといっしょに!!／

『聞くまでもなかったですね』

これでジゼルにも同じ土俵で腕を競う相手ができたか

面白くなってきた

ニヤリと笑うオレにジゼルが抱きついてきた

くある日の夏模様く

カッ

夏も終わろうかというある日

いつもはぬるい気候のコーセルテルが

突然の熱波に襲われた

「といってもオレや火竜のジゼルにとつては

どうということはないが・・・」

「コーセルテルに住む大多数の獣人たちは

この暑さにまっています

ハドラーさん オルタといっしょに先に獣人の村へ

行ってもらえますか！僕もすぐにいきますが

こちらも子竜たちと対策をとりますので

村で保冷石を配ったり色々とお願ひします」

「任せておけ いくぞジゼル オルタ つかまれ」

／＼———はい！／／

ジゼルと獣人の小僧オルタをつかみ呪文を唱えた
「ルーラ!!」

「行くよっ みんなっ!!」

／＼／＼おーっ／／

————ドーン!!

「・・・さて獣人のニアキス族の村についたか」

へうわ 速かった! すごいな紙芝居のおじさん!!」

『・・・紙芝居のおじさんですか』

この土地でのオレの認識などそんなものだろう

そんなことよりオレは村を見回しオレより少し大きい

手ごろな岩を見つけ ヘルズクローで2つに割り

切断面の上に転がし 熱波が来る方向を指差した

「ジゼルよ おまえは熱波を集めこの岩へ流し続けろ

それで村の温度上昇は落ち着く

オルタ おまえは族長の息子だったな

保冷石を配りながら動けるやつに今日料理予定の食材を

ここに持つてくるように伝えろ

オレはここでジゼルが熱した岩でその食材で料理をする」

〈紙芝居のおじさんそんなことできるの?!〉

「まかせておけ

あと 調理道具はこちらでどうとでもしておくが

食器は自分たちで用意するように言っておけ

塩とミルクを忘れるなよ」

〈はい!〉

／はい!ハドラーさま!!／

「よし いけ!」

／／おーっ／／

オレは岩を右手に左手を熱波に向けてかざし

ジゼルに軽く術の手本を見せてやる

ポウ ゴオオッ

「左手に熱を集め右手で岩を焼く

やってみろ」

／はいっ! うーっん!!!／

『・・・うまくいきませんね』

「まあ 練習したこともないからな

岩を熱するだけなら可能だろうが 熱し続けるには

熱波を利用できねばすぐに力尽きる

・・・体勢をかえてみるか

両手を岩にあて背中を熱波に向ける」

／はい！／

「背中の中の暗竜の羽で熱波を受け止め両手で岩を熱しろ」

／はい！！ うーん！！／

・・・

『・・・どうですか？』

うまくいかんな 術はイメージと集中力が必要だが

特に最初はイメージがつかめんことには・・・

ジゼルが力を含める岩を触れてみたが

元々日差しを受けて熱くなっていた岩の表面部分と

切断面の温度差がありすぎてこのままでは料理に使えん

『ジゼルは熱くないのでしょうか?』

「こやつは幼くとも火竜だ

どんなに熱くなってもどうということはない……

！ 逆に考えれば」

オレは ジゼルが熱する岩とは別の片割れの岩を

ヘルズクロードで切断面からくりぬき大きめな鍋のような形にし

その中に入るように……

「ヒャド（氷結呪文）！」

呪文で氷塊を生み出した

「ジゼル それはもうよい この氷に両手で触れろ」

／はーい ……つめた!!?／

「いいかよくきけ 熱とは熱い方から冷たい方へ流れる

おまえが『冷たい』と感じたのはおまえの手から

この氷へ熱が流れた と思え」

ジゼルがうなずくのを確認し話をすすめる

「その流れをもっと広げ 熱を背中から体を通して

手から氷へ流し続けるイメージだ」

／＼はいく．．．　うく．．．／

「この氷はオレがつくりだしたものでそう簡単には溶けん
 そして氷はそこにあるだけで周りから熱を集め続ける
 これでジゼルは周囲から熱を集める手間を省き
 熱の流れを感じやすくするはずだが．．．」

／＼はく．．．　うく．．．／

『ジゼルがっらそうですが．．．』

火竜は冷えが苦手だろうからな

．．．だが成果はあったようだ

「見ろ．．．！　溶けは始めている．．．!!」

／＼おく!!!／

ジゼルの手のまわりの氷が溶けはじめ

岩鍋に少しずつ水が溜まっていく．．．

その確かな成果を目の当たりにし

ジゼルのテンションがあがった

『でもジゼルのおててが．．．』

体でおぼえるとは口で言うのはたやすいが

痛みをとまなうことだ

その痛みがこやつ自身の経験となる

・・・しかし考えてみれば熱気を集めることと

その熱を氷に注ぐのは別の技術だったな

いきなり同時に行うのは高等技術すぎて

そもそも無理があつたか・・・

『だつたらやらせないでください』

オレは氷が溶けるのを横目にもう片割れの岩の

切断面を熱し料理の支度にかかる

・・・

ジゼルが溶かした氷の水が鍋の3分の1ほど満たしたところで

オルタが食料を抱えた数人の獣人を連れてきた

〈紙芝居のおじさん 保冷石配り終わって

動ける人連れて来たよ!!〉

「ご苦労 ジゼルおまえも一度手を止め

オルタたちといっしょにその水を飲んでみる」

チャプ・・・

／＼つめた!?!／／

ゴクゴク・・・

／＼うわ 飲むと一段と冷たい!!／／

「持ってきたミルクは缶ごとそこにつっこんでおけ」

／＼ハドラーさま 力が湧いてきます!／

「・・・もとがオレの魔法力でできた氷のせいか」

『飲みすぎると おなかをこわしませんか?』

「ほどほどにしておけ では野菜を・・・む」

〈あー! マシエルさんたちだ!〉

「おまたせしました!」

マシエルとナータ、サータ、ハータが飛んできた

「ご苦労 オルタが保冷石を配り終え

ジゼルがオレのつくった氷を溶かしていたところだ

どうやら熱波がおさまりつつあるようだな

後は術で村に残る熱気を集めこの岩鍋で調理しつつ

その氷水の冷気を適当にばら撒けばしのげるだろう」

「なるほど それでは」

／ハックシユン！／

「ジゼル!？」

ハドラーさん 術は僕達で全てまかなうので

ジゼルを休ませてあげてください!!」

「そ、そうか」

『マシエル・・・こわいですね 今日には武装もしてますし』

武装といつても杖を一本持つてるだけだろう

だが たしかなかなかの闘気だ

子竜ならばオレの子でも過保護なのが

この子竜バカの困ったところだ

「ジゼルよ おまえはオレの背で休憩しているろ

そしてマシエルたちの術やオレの料理を特等席から盗め」

／はい・・・ あ!ハドラーさまの背中あつ・・・くシユン!／

たら・・・

(あ、ジゼル鼻水たれてる ハドラーさんとおそろい)

／おそろい!／

「さてサータ 別に今のオレは鼻水垂れていないだろう」

背中で嬉しそうな声をあげたジゼルは放っておき
サータをたしなめる

(じゃあこうすれば)

ピッ

ピト

サータがとぼした やや大き目の水滴が

料理で手がふさがっているオレの鼻の下にひつついた

(おそろい!)

／＼おそろい!／

「やめんか!」

くっ これは容易な術ではないぞ

「そうだよサータ!」

竜術をいたずらにつかっちゃ めっ!!

「オレが叱っているのはそこではないぞマシエル!

このままではオレの呼び名が『紙芝居のおじさん』から

『鼻水オヤジ』になってしまうだろうが!!」

『あなたが怒ってるのはそっちですか?』

名誉の問題だからな・・・

おまえとてジゼルが『鼻水親子』と呼ばれるのは嫌だろうが
『たしかにその呼ばれ方だと・・・』

私だけが含まれない感じがして嫌ですわね』

おまえにとつて重要なのはそれか・・・

『もちろんです』

ジゼルは鼻水をたらしても可愛いですから』

〔夏の精霊さんの話では熱波はもうおさまるそうだから

この村に残る熱気をおさえればもう大丈夫なはず

ナータ、サータ、ハータ同調術でいくよっ!!〕

／＼おーっ／

暗竜・風竜・火竜の3種3竜による同時同調術が

獣人の里中の熱気を根こそぎかき集め

オレの作った氷をみるみる溶かしだし

オレが調理に使っている岩が一段と熱くなった・・・が

「どうしたマシエル・・・」

あとはその氷から生み出した冷気を村中に送れば

それでケリがつきそうなものだが」

「いえハドラーさん カディオさんから聞いたのですが
こういった場合急に環境を変えるのはかえって体に悪いそうで
特にニアキス族は全身厚い毛皮に覆われていますから
暑さに弱つているところを急激に冷やすようなことは
避けるようにと・・・」

「さすがだな あの木竜術士・・・」

たしかにニアキス族はどちらかといえば

オレの知る獣人の中では リカントに近いタイプだ

その対処は適正といえる

逆に地底湖に住む水棲獣人ハイネリ族は

クロコグダインやマーマンに近い連中だった

所変わっても やはりどこか似るものだ

／＼やっぱりおにいちゃんたちもすごい・・・／

「たしかに同時に三種の術を扱い 使いこなしている

あれは今のオレでも無理だ

しかもあやつはその気になれば七種七竜同時同調術も使える」

〈竜術祭りで見たとあるよ マシエルさんたちの

七竜同時同調術！すごかったよ夜に花がこうぶわつと〜

「ほう それは面白そうだな」

『竜術祭り・・・たしか子竜の術の発表会でしたか？』

「いつかはジゼルもそれをするときがくる

・・・まだ「みせる術」がないがな」

！?／

へうわ それ楽しみ 絶対に見に行くよ〜

／がんばる！つくしゅん!!!あ・・・ごめんなさい・・・・・・・・／

「よさんか！ジゼル!!」

『ジゼルの鼻水はあなたのせいですが』

それはそうだが食材に鼻水で汚すわけには・・・!!

・・・この際 オレの背中への被弾はやむなしか

この鼻水爆弾が竜術祭りで一芸を披露できるときを

『待っていますよ!!』

一刻も早く来いっ!!

ジゼルはレベルがあがった

ちからが2あがった

すばやさも2あがった

みのまもりも2あがった

たいりよくも1あがった

かしこさも1あがった

うんのよさも3あがった

さいだいHPが1ふえた！

さいだいMPが2ふえた！

1Pの スキルポイントを かくとく！

ジゼルのドラゴンがスキルアップした！

やけつくいきをおぼえた！

ジゼルのメイドがスキルアップした！

いやしの雨をおぼえた！

そだてるもの

／うゝゝゝゝ・・・／

今日は武術訓練の日 いつもどうり
サータとナータが出掛けて行ったが

オレとジゼルは家に残っている

まだジゼルは剣を握ることもできない為

行ってもできることは少ないが いつもなら

オレたちも同行しているところだが

‘ジゼルちゃん具合どう？ 気持ち悪くない？’

／そんなでも・・・ない／

オレたちは地下の術部屋でフェルリと共にいる

コーセルテルが熱波に襲われたあの日から

ジゼルの体温がどうもおかしい

急に高くなったり低くなったりを繰り返すが

以前の術暴走のような魔法力を感じない

原因として考えられるのは 慣れない術を使ったせいか
水に触れていたことが火竜の体には負担が大きかったのか
体温調節機能に支障がおこったようだ

・・・もしくはジゼルが火竜の「変種」が原因か？

同じく暗竜の変種であるプレアが術練習をするたびに
熱をだしている症状にも似ているものがある

『・・・結局のところ特定はできないのですか？』

‘そうね 特定は難しいと思うわ

・・・変種については木竜の里でも調べているから

いずれ里から情報が来ると思うけど

それよりもいまのジゼルちゃんに必要なのは

ハドラーさんたちの看病ですから、

／ んゝ ふふふ♡ ／

オレのひぎの上で寝っころがって笑っている

ジゼルの顔をつついてやる

「熱がやや高いが火竜にとっては問題なからう」

『低くなるのが問題なのですか？』

「どちらかといえど変動の負担が厄介なのだろう

自力で制御できればよいが・・・

今下手に術による制御をさせるのは逆効果かもしれない」

『ふふふ・・・』

「何がおかしい？」

『あなたの頭の中がジゼルのことです。いっばいですから』

・・・それはおまえも同じだろうが

「・・・・・・・・それはジゼルが弱いからだろう」

『・・・・・・・・そうきますか』

「ジゼルは竜とはいえ、火がだせることを除けば

力も経験も足りんガキに過ぎん

・・・かつてバルトスやブラスがヒュンケルやダイを育てるために

心血を注ぎ、自らの力を高めてきたのは

か弱い命を相手にしていたからだ

昔のオレは強い力同士だけが互いに力を高めあうものだ

と弱いものに価値などないと信じていたものだった

今のジゼルを見て、ふとそんなことを思い出した

まあそれはさておき これからどうするか

マシエルが果物の砂糖漬けを用意してくるとは聞いているが
ジゼルをひぎの上でただ寝かせるだけでは芸がない」

‘そういうことでしたら、’

『私の出番でしようか』

「おまえが役に立つ・・・と」

『ええ フェルリ直伝のとおつておきがあります』

「・・・面白いつ 見せてみる そのとおつておきとやら

ドラゴラム（竜変化呪文）!!」

オレは呪文を唱え聖母竜の姿となり体を貸した

＼ お母様？ ／

聖母竜がジゼルを抱きかかえ自身の腹の上に寝かせた

『ジゼル あなたをこれから幸せオーラに包んでみせましょう』

ほう 大きく出たな

『これから私は あなたをイメージという夢の世界へ

誘いましょう 自由な心で感じてください』

＼ はーい？ ／

「わかってないだろ」

‘大丈夫ですよ 聖母竜さんのお腹でそのまま
寝てしまってもいいのですから’

『それでは かるく 目をとじてください』

・
・
・

『大きくゆ〜つくり 深呼吸です

お鼻から吸つて〜 お口から吐いて〜

はいて〜・・・ すつて〜・・・』

／ ハーーーー・・・ スーーーー・・・／

／ ハーーーー・・・ スーーーー・・・／

『ひと息をすることに あなたの体の中から

いらぬものがでていきます

さあ はいてー・・・ すつてー・・・』

／ ハーーーー・・・ スーーーー・・・／

／ ハーーーー・・・ スーーーー・・・／

暗示か・・・

『さあ あなたの体が少しずつあたたかくなっていきます

ツノの先から・・・ おでこ・・・ ほつぺた・・・ おはな・・・
 おくち・・・ くび・・・ むね・・・ おなか・・・』

／ スーリー・・・ ハーリー・・・ ／
 「ほう・・・」

たしかにジゼルの体温が落ち着いてきた

言うだけのことはあつたか」

『あなたのしつぽの先まで ゆつたりと・・・』

ぽかぽかにく』

／ ぽかぽかく・・・ ／

・・・いうほど発熱はしていないが 効果はあるようだな

オレにも使えないだろうか？

『どうでしょうか？』

私もフェルリに教わって実践したのはこれがはじめてですし』
 まあ今回はおまえの手並みを見るとしよう

／ スーリー・・・ ハーリー・・・ ／

『どんどん力が抜けて ゆつたりとしていきます

・・・いまあなたはとも落ち着いています

そのあたたかくゆつたりとした気持ちをしつくりと
味わってください。』

／ スー…… スー……

『あなたがその気になれば……』

その静かで幸せな心がいつでもあなたのものになります』

／ スー…… スー……

／ ハドラー様と…… お母様のおい……

『!?!』

落ち着け…… おまえが心を固くしてどうする

今のジゼルが纏う気質 闘気ではない

それとはまったく逆の静かだがたしかに感じる気……

『……ジゼル また深呼吸をしましょう

さあ…… 吐いて……

吸って……』

／ ハー…… スー…… z z z ……

……どうやらねむってしまったか

‘ジゼルちゃん 落ち着いた よい寝顔ですね

お疲れ様です 聖母竜さん、

『フェルリのおかげですよ ハドラー、あなたも・・・』

ああ ご苦労

おまえも成長するのだな

『ええ ジゼルやダイのためでしたら

・・・私も強くなりたいですから』

・・・こういった分野ではオレもまだまだ弱者に過ぎん

バルトス・・・ ブラス・・・

おまえたちのレベルに達するのはまだまだ先のようだな

せいぼりゆうはレベルがあがった！

おしやべりがあがった

たてがみがすこしながくなった

おなかがすこしやわらかくなった

暗示法をおぼえた

めぐる名前

ジゼルの体調が回復しマシエル達とのいつもの朝食を終え

ジゼルを子竜たちに任せ昼食の準備をする

『こうやってあなたが家事をするのが

久しぶりな気がしますね』

ジゼルの看病をしている間は食事や着替えの用意は任せ放しだったからな

「マシエルよ

昼食はオレに任せて子竜たちの勉強を見てやってもいいのだぞ」

「いえ 勉強はアータが見てくれますから

子竜だけで任せられることはできるだけ任せしてみたいですから」

へあつ ねえ お勉強終わったら

みんなでリンテの家に行かない？

（リンテの家!? 行こう!!）

／＼わあっ／＼

「いきなり脱線しているぞ」

「大丈夫・・・ですよ」

（ジゼルも行くだろ！）

《ジゼルは回復したばっかりだよ！

今日は家でゆっくりしたほうがいいよ！》

「いいぞ 連れて行ってやれ

地下で寝てばかりでは治るものも治らん」

／＼わかりました ハドラーさま！／

（よしっ 行こう!!）

《だから!!お勉強終わってからだって!!》

「アータの負担が大きすぎかな・・・あれ？

ナータ もうお勉強終わったの？」

【・・・終わった マシエル 出かけるのは ————いつ?】

「お昼の用意できたらね」

【・・・手伝う】

どうやら家に残るのはオレひとりか

『お留守番ですね』

「ちよūdい ジゼルの看病の間は世話になった

今日のところはオレに任せろ」

〔では水竜家での竜術士の寄り合いが長くなったら

夕飯もおねがいしますね

子竜たちがおなかをすかせないように〕

「もちろんだ」

わらわらと出て行った子竜らを見送り

急に静かになったマシエル家の家事にとりかかる

子竜たちには昼おやつを持たせた

みなが帰ってくるのは夕方ごろだろう

それまでにひととおりやっておくか

ジゼルの看病の間は常に着替えも寝具も清潔に保たれていたが

逆にそれ以外のところにわずかにしわ寄せがでていた

マシエルのフォローにより、そう目立つほどではないが

子竜たちに任せるだけではまだまだなのだろうが

手を抜いているわけではあるまい

あくまでコーセルテルの竜術士・マシエルと比べて

未熟というだけだ

「さて　まずは洗濯か」

やはり武術訓練を受けているナータとサータの服が目立つな

「これはやりがいがありそうだ・・・」

洗濯と地上階の掃除を終え

地下の術部屋、ほぼオレたちのねぐらとなつているが

ここも掃除は必要だが　その前に・・・

‘あら　ハドラーさん　聖母竜さん

めずらしいですね　この時間にこちらにいらつしやるのは、

『ええ　フェルリ　あなたのおかげでジゼルは回復し

元気にみなさんとおでかけしました

ありがとうございます』

‘いえ　そんな　ジゼルちゃんが元気になったのは

聖母竜さんとハドラーさんの甲斐甲斐しい看病と

マシエルちゃんと子竜ちゃんたちが　がんばったおかげで

私にできたのは聖母竜さんに暗示のほどきをしたぐらいですよ、

『それです！』

それがなければ私は今回も何の役にも立てなかったでしょう』

「そして もしそれがなければ今回もオレたちは

マシエルたちの厚意を甘受していただけになつていた

・・・そんな無力さが許せぬからここいるというのに、な」

だが 現実問題として急に燃え盛る可能性さえある

不調のジゼルをこの術部屋から出すわけにはいかず

目や手を離すわけにもいかなかった

その間 料理や洗濯に手が回らない点は課題だ

‘ジゼルちゃんにとっては私も『お姉さん』のようですから

元気になつてもらえれば何よりですよ’

「姉か・・・

ジゼ『ル』の1字がおまえからもらつたものと

思っているようだから・・・

わざわざ否定するようなことでもないと放つておいたが」

‘いえ 私が死んでから3000年もたった今

私の名とつながりあると思つてもらふことは

「なんだか・・・うれしい、ことみたいですが、」

「3000年か・・・魔族にとつても長い時間だ」

「その頃のことを知る精霊はまだいるが」

「夫も、子も、子竜も既に亡くした竜王竜術士の幽霊フェルリ」

「おまえ自身が求めるものはないのか？」

「私ですか？そうですね・・・」

「！ ハドラーさんとおしやべりしてみたいです！」

「オレとか？オレは聖母竜のような話好きではないぞ」

「ハドラーさんのお子さん・・・」

「ジゼルちゃんに一文字をあげたお兄さんやお姉さんなど」

「聞いてみたいことはたくさんありますよ、」

「・・・まあ掃除の片手間程度で話してやろう」

「オレもかつてここにいた魔族の幽霊、」

「ロズ・アルバだったか その者のことを聞いてみたい」

『ふふ それも楽しそうですね』

・・・

おそらく外は夕方 すっかり話し込んでしまったが
いい加減 夕飯の支度に・・・

「む、子竜たちが帰ってきたが・・・

知らぬ気配が混ざっているな

どうにも とらえどころのない奇妙なものが

‘あら あたらしいお友達かしら?’

『とりあえずジゼル達を出迎えましょう』

「・・・よかろう」

外に出ると子竜たちの中に同じ背格好の見知らぬ顔の・・・

いや知った顔で小さくなった精霊が一人いた

／＼／＼／＼／＼／＼

「ああ おかえり

どうやら術は成功したようだな」

“はい おかげさまで このとおりお友達が増えました”

「・・・そうか」

《ハドラーさん わかるの?!》

〈会ったことあるの?〉

「うむ 夢でだがな 直接顔をあわせるのは はじめてだ
 そういう存在であろう」

《すごい ちゃんとわかるんだ》

(あつ マシエルだつ ナータも)

『思ったより早いお帰りでしたね』

／＼／＼おかえりーっ／／

「みんな —— あれ？」

あの子……

眠る月の精霊コーセルテル かい？」

／＼え!／／

《なんで すぐわかるのマシエルもっ》

〈おどろかそうと思ってたのにつ〉

「けつきよく だれもおどろかなかったね」

(ちえー)

む、ナータのようすが

「約束通り来てくれたんだね」

“はい でも違います”

「ほう？」

“私の名前は『コーナ』”

起きた月の精霊 コーナです

みんなにすてきな名前をもらったんです”

「いらっしやいコーナ

これから夕飯だから 一緒に食べよう

お話しながら」

“はい”

／＼わーいっ／＼

あれ ナータおにいやんどうしたの？そんなうしろで／

【・・・・・・・・】

視線をそらし無言のナータ

『ナータは元々寡黙ですが・・・』

「コー『ナ』だ

コーセルテルからとった名前だけではない

もう1字はどうやら 最初の友からとったのではないか？」

【・・・・・・・・】

くくく やはりこやつも気付いているな

この日は おしやべり好きで新たな名を得た精霊と
おしやべり好きでお節介な幽霊をまじえ・・・

『ごっぴいお話しました』

／とさ♪／

ジゼルはレベルがあがった

ちからが2あがった

すばやさが1あがった

みのまもりが3あがった

たいりよくが1あがった

かしこさが3あがった

うんのよさが3あがった

さいだいHPが 1ふえた！

さいだいMPが 3ふえた！

2Pの スキルポイントを かくとく！

ジゼルのじゅもんが スキルアップした！

ときどきMP回復をおぼえた

くカータと絵本日記く

＼ ハドラーさまく♡／

オレの右腕にしがみついてくるジゼル

地下の術部屋で就寝の支度を済ませたことで

ようやく手が空き 新作の紙芝居を書こうとしたところだったが

「邪魔だジゼル」

＼ ハスイ♡／

パツ パタパタ ピト

右腕から離れてすぐに左腕にとりついてきた

オレの技術を盗もうと熱心なのはよいが

紙芝居の作成など見てもな・・・

「さっさと・・・」

寝ろ と言うのは容易いが ただこのまま寝るよりは

眠くなるまで術書でも読ませるか

『ジゼルはまだ文字がまともに読めないはずですよ』

そうだったか　せめて竜言語だけでもそろそろ教えねば・・・

何か自主的に学べるような本があれば上達が早いが

『ここにはないですね　あなたの紙芝居は魔族言語ですし

適当な本をマシエルから借りた方がよいのでは』

「そうするか」

ブラウン

立ち上がったてもジゼルが左腕にしがみついたままだったが

まあ　マシエルの部屋へ行くだけだ　放っておこう

・・・

マシエルの部屋の前でカータにでくわした

「あ　ジゼル　ハドラーさん　マシエルに用事？　いつしよに入る？」

「うむ」

トン　トン

カチャ

カータがノックをしてマシエルの部屋に入りオレ達もつづいた

「マシエル　絵日記持って来たよ」

「ありがとう　読ませてもらうよカータ

ハドラーさんとジゼルは何のご用事ですか？」

「ジゼルひとりで竜言語に馴染めるような

読み易い本を借りようかと思つてな」

〔竜言語つてなに?〕

「お前たちが使つている言語のことだ

オレは他にも魔族言語と人間語が使えるが

ジゼルにはまず竜言語を教えようかと思つてな」

「そうですか ここでは特に竜言語という言い方はしてないですが

そうですね やつぱり絵本がいいと思います

・・・この本棚にある絵本どれでも持つていつてもいいですよ」

「そうか では見させてもらおう」

〔じゃあ僕はカータの絵日記を・・・〕

ぺら・・・ ペら・・・

ふむ 絵本か・・・ たしかに絵から内容が推察しやすい分

文字をおぼえやすいかもしれない・・・

『・・・これは怪物でしょうか?』

イルカのプープ・・・と書いてあるな

『イルカ・・・海の生物ですか

ジゼルはまだ海を見たことありませんし

もっと馴染みのある内容の方がよいのでは？」

贅沢をいってはキリがないぞ

「ふふっ カータはとつても絵がうまいね

字も文も読みやすいし まるで絵本を読んでいるみたいだよ」

絵本？

「カータ オレにもその絵日記 読ませてくれぬか？」

／＼ カータおにいちゃん見せて〜！

（うん いいよ）

ぺら・・・

「ほう たしかに読み易いか・・・」

オレの紙芝居の絵とはタイプが違うがこういった絵も味があるな

／＼ あ これ朝の〜！

『ジゼルにはこれがちょうどよいのでは

さつきの絵本より楽しそうですよ』

「ふむ すまないがほかの絵日記もみせてもらえるか？」

「・・・カータがよければカータの分だけなら」

「いいよ」

「じゃあ たしかここに・・・」

ガタ スツ

「はい とりあえず最近のだけですが」

／ わゝい ありがとうカータおにいちゃん！ ／

ぺら

／ あ これハドラー様だ！ ／

ジゼルが指さした一際大きな人物の絵

『これは たしかにあなたですね』

なるほど 特徴をよく捉えている

『直接文字が読めなくてもジゼルは楽しそうです』

これを 借りませんか？』

「マシエル カータ もしよければしばらくこの絵日記を借りたい

ジゼルが文字に親しむのに丁度よさそうだ

術部屋でフェルリに読み聞かせを頼むこともできる」

「ジゼルが読みたいなら・・・いいよ

でもその日記帳まだ少し書くところ残ってるけど」

「——あ そうだ」

ガタツ パタン がさがさ

「はい 絵日記用のノート と色えんぴつの予備

たくさん用意してたのにもうみんなほとんど書かなくなっちゃたから

あまつてたんだ」

「もらつていいの!?!ぜんぶ!?!」

「うん いっぱい絵日記書いてね」

「うんっ」

／＼ カータおにいちゃん書いたら見せてね ／

「うむ 思わぬところにちようどいい絵本作家がいたか」

『あなたは紙芝居作家ですね』

過去の経験を読み物にするところも共通だな

「カータ 何か必要なことがあればオレも手を貸そう

お前の絵日記にはそれだけの価値がある」

「ありがとう ハドラーさん!」

「でも今日はもうおそいから早く寝るんだよ」

「はーい」

マシエルの子竜の中でも七番竜であり末っ子気質が強い印象だったが

『あれは逆に自分より小さい子竜の前でよいお兄ちゃんとして

はりきっている顔ですね』

ああ なるほど そういうことか ならば・・・

・・・

・・・

コンコン ガチャ

（あ ハドラーさん）

「おやつだ 今日はお前とジゼルに分だけだからな

直接もってきた」

（わく ありがとうハドラーさん

これ お団子？）

「ああ 朝食後の食器に残っていたパンくずを元にこさえたものだ

マシエルなら子竜たちには食べさせないだろうが どうだ」

ぱくっ

（おいしい ぼく好きな味かも）

「そうか もつともまったく同じ味はもう再現できんが

足りぬなら ジゼルの分も食うか？」

（それはジゼルにもちゃんとあげてよ

そういうえばジゼルはどうしたの？

いつもはハドラーさんといっしょなのに）

「地下の術部屋で昨日借りた絵日記をよんでいるはずだ

フェルリに読み聞かせを任せている

二人とも随分と楽しんでたぞ」

ばあああ

『いい顔ですね 光竜らしい輝くような笑顔』

本当に光ってないか？

（ごちそうさま ハドラーさん！

あの・・・ ハドラーさん ちよつときいてもいい？

光を絵で描くのが難しいんだけど どうしよう？）

「光竜に光のことを聞かれるとはな・・・

たとえば だが・・・ オレがギラ（閃熱呪文）を

使っている絵を描こうとした場合

凝縮し 穴を空けるように撃つときの絵をこう・・・

拡散させ 広範囲に放ったときはこう・・・」

「適当にサラサラと描いてみせるとカータが食い入るように見てくる
同じ拡散して放つとしても マキに火を点けようとするのと」

洗濯物を乾かそうとするのでも こう描き方に違いが・・・」

「そっか! こうすると光がやさしくなるんだ!」

光が優しい? さすが光竜面白いことを言う

「ありがとう! ハドラーさん!!」

「・・・フツツ 甲斐があつたようだな 待つているぞ」

一段と輝いた笑顔のカータへ自然と期待が高まる

そして少しずつ描かれていくカータの絵日記

カータが描く子童たちの日常がやがてはジゼルの血となり肉となる

・・・愉快なことだ

かつてアバンの使徒たちは 「アバンの書」を通じ

はげまされ 技を学び 道を示され 世界も動かしたと聞く

『そういえば ダイがかつて 「おれがちゃんと字を全部読めてたら

アバンの書をもらつてすぐにアバンストラッシュXが完成してたかも」

と言つてましたね』

・ ・ ・ そうだったな

さあ大いに学べ ジゼル
そして強くなれ！

くお手紙でつながるものく

コーセルテルにいた夏の精霊は夏の国とやらに帰り

この地は秋を迎えた

秋の晴れた日 夏の暑さが苦手だった木竜や水竜にとつては

すごしやすくなつたせいかな 今日には外にムシ口を敷き茶を飲むそうだ

その茶菓子を任されたが・・・

食事のときに半端に余つた小麦粉があるな

これをつかつて適當につまめるものにするか

「ジゼル 卵を割ってみろ」

＼ はい ハドラーさま！ ／

卵を片手でつかんだジゼルが見よう見まねで割ろうとする

片手割りなど10年早いが・・・

コン コン

そもそも卵にヒビすら入っておらん

力加減がわからず とまどっているのだろうか……

『教えてあげないのですか？』

失敗を繰り返して自分でコツをつかむいい機会だ

割るのに少々失敗したところで 中身は使える

『……そういえば 卵を割っているとジゼルが生まれたときのことを

思い出しませんか？』

ああ あのときは異常に硬い卵だと思ったらしいの間にか

竜の卵になっていたからな そうそう忘れはせんぞ

『あれも 月の精霊コーセルテル いえ コーナのおかげでしょうか？』

「そのようだな 本人に自覚はないようだが

あれほどの魔力の持ち主だ 無自覚で何かやらかすこともある

……それはジゼルにも言えることだがな」

『！ それでジゼルに卵を割ることで 加減をおぼえさせようど』

いや これはただの手伝いだ

カツン!? ゲチャ……

／ ハドラーさま……／

「かまわん 中身をこの粉と混ぜ込み 殻は別にわけておけばいい

加工はオレがやる」

／ はい！ハドラーさま！／

かちや かちや

／うーん カラにぶよぶよしたのがくつついてとれない・・・／

ジゼルが割れた殻に固まりこびりついた白身にてこずっていた

どうやら卵をにぎりしめていた間に 体温で半端に固まったようだ

『これは たしかに加減をおぼえないと色々大変そうですね』

いかに強力な竜の力を秘めていても所詮は幼竜

制御を身につけるには地道な経験の積み重ねだ

さて さつさと 菓子をこさえて持っていくか

・・・

大皿に菓子をのせて マシエルたちが待つ外に出た

茶の支度は水竜のマータが用意していた

・・・オレも水竜術を使いこなせるようになれば

何もないところでも水や湯が生み出せる

『便利そうですね』

／ いただきまーす／

子竜たちが円座になり茶を飲みながら菓子に手を伸ばす

卵の都合で少々予定とは変わったものにしたが

子竜たちの評判はいいようだ

／ おいしいです！ハドラーさま！／

「そうか」

「じゃあみんな そのままでいいから ロズおじさんからの

みんな宛のお手紙読むね」

／／ はーい ／／

．．．．．

ロズ・アルバ . . . オレがコーセルテルに来る少し前まで

マシエル家の地下にいた魔族の幽霊

『フェルリから聞いた話では . . .

フェルリが生きていた頃 コーセルテルが竜都だった時代

この地に侵略にきた魔族の兵士であり戦の中でこの地で没し

.その後 色々あつて子竜たちと仲良しになり

今は私達が住んでいる地下の術部屋で

ときにフェルリの話し相手となり . . .

ときにささやかな対立を楽しんだりしていたそうですよ』
生前の経歴からすればとても仲良くなれそうにはないな
『今は 幽霊から手紙の精霊に生まれ変わり

同属の魔族たちが住む里へお引越して

こうしてお手紙のやりとりをしていると・・・』

異世界の魔族か・・・ やはり興味があるな

手紙の内容からは秋の祭を楽しみに待つ平和な様子だが

〔マシエルーーーーッ〕

みんなーーーーッ

こんにちはーーーーッ

／ こんにちはーッ

〔アグリナ ヤチ

いらっしやい ふたりとも〕

／ いらっしやーいッ

火竜家が来たか あいつらは本当によく来る

『あの家は二人しかいませんからね』

アグリナがマシエルに気があるせいでもあるが

『・・・あなたは意外とそういうことに気がつきますよね』

あいつは わかりやすいだろ

・・・マシエルは子竜しか見ていないようで気づいてないが

「あれ？」

もうお茶してたの!？」

「ああ」

／ ？ 〳

「おやつもう食べちゃった!？」

／ うん！ハドラー様のおやつ おいしい〳 〳

／ えーっつ 〳

『おしくも食べそびれましたね ジゼルのお手製』

ジゼルは卵を割っただけだが

「——実は

これ ヤチが作ったひとくちケーキ

すっつごくおいしくできたから

みんなに食べてほしかつただけど・・・」

「ほう！ ヤチが」

〈ええ!?これヤチが作ったの!?〉

《上手……》

「おいしそう」

／ えへっ アグリナといっしょにだけどっ／

『ヤチはジゼルとほぼ同じ時期に生まれたのはずなのに

もう これほどのものが作れるのですか!?!』

ケーキからわずかに感じる火の気配はたしかにヤチのものだ

間違いなからうが…… カゴいっぱい分量、

一つ一つの造形 焼け具合 なかなかの出来だ

『……………』

ここはひとつジゼルを軽く煽るか

『よそはよそ うちはうちです!』

焦らなくても ジゼルにも出来るようになりますから!』

……今日のところは まず おいといてやろう

その後は ヤチのケーキをつまみながらアグリナが持ってきた

精霊術士クレリアからの手紙の読み聞かせが行われた

『クレリア…… ジゼルのお友達コーナが

かつて月の精霊コーセルテルだったときの半身

旅の月の精霊イルベック　今はエトワスとなった方の相方ですね』

ジセルの卵が生まれたときにこの地に来ていたようだが

オレはその娘とは直接会っていない

あの時はそれどころではなかったが・・・

『月の精霊に見込まれ加護をうけているということとは

世界によっては勇者とよばれるかもしれないね』

そういえばマシエルや木竜術士カディオが術士として

抜きん出た力をもっているのもその旅の月の加護を受けたことが

大きいと聞く　勇者というのも大げさではあるまい

あのヴィアンカの旅の仲間でもあると聞く

どこかで魔王と闘うかもしれんぞ

アグリナが読むクレリアからの手紙では

海沿いを旅し　故郷へ向かう途中で恩師と再会し

今　コーセルテルにいるヴィアンカからの手紙で近況を聞き

旅を続けることと　いずれはこの地で再会したいこと

またの便りを送る言葉でしめられた

／＼ わい わい ／＼

すっかり聞き入っていた子竜たちは各々感想を言い合っていた
〔よし!! 帰ったらそうお返事書こう!!〕

〔ぼ・・・ぼくも書こうかなお手紙〕

《ぼくらはまずロズおじさんに書かなきゃ》

(魔族の里も行ってみたいなあー)

「ロズ、魔族の里か・・・」

ジゼル

おまえもロズ・アルバ宛に手紙を書け」

／＼ はい! ハドラーさま! ／＼

『ジゼルはまだ文字を習い始めたばかりですよ』

「簡単な挨拶程度いい おまえが直接手書きさえすれば

ほかにだれの手を借りてもよい

相手は手紙の精霊 しかも子竜好きと聞く

おまえのこれからの成長を見せる相手としてはちようどいい」

『これから・・・ですか』

一度きりではなく何度も書けと』

手紙というものは面白い文化だ

オレも鏡を使った通信呪文は使ったことがあるが

こういった手紙のやりとりなどはあまり経験がない

今日のロズやクレリアだけではない

最近ではマータへ手紙を持ってきた夏の精霊のアクタエオンや

竜術士が里への報告に使うのも手紙だったはずだ

この世界では竜・人・精霊・魔族さえもつなぐものとして機能している手紙
ジゼルにとってこの経験がどう生きていくか・・・

楽しいなことだ

竜とともに生きる(1)

マシエル家に先代木竜術士の補佐竜クルヤと

現役木竜術士の補佐竜ノイがたずねて来た

オレとジゼル　そして現役暗竜術士ティムと補佐竜ブレアに

木竜の里で調べた　竜の変種についての情報を持つてきたとのことだ

情報を公開するなら手間が一度で済むようにと

共に暗竜家に行くことになった

・・・道中　普段はコーセルテルの外　木竜の里に住む

先代木竜術士の補佐竜クルヤと　オレたち親子は

今まで接点がなかった分　色々と話をしたが・・・

『表情こそ笑顔ですがこちらを警戒する色を隠そうとしませんね』

そもそもオレを平気で受け入れる方が異常だ

最初にオレを出迎えたときこそ竜術士が勢ぞろいしていたが

実力があるとはいえず普段は無警戒そのもののマシエル一人に

オレを任せている現状に不満を持つこのクルヤの方がまともだ

『……まあジゼルに実害がなければ疑われるくらいは別に

そういえば ルーラで暗竜家に行かないのですか？』

ジゼルが歩く機会はあつたほうがいい

それにこうしてクルヤと会話をして得られる情報は興味深い

＼ ハドラー様 あそこに！ ／

ジゼルが指差した先には暗竜家とその竜術士タイム

そして……

〔あーーーーーっつ〕

こちらを指差す火竜家の術士と補佐竜がいた

『アグリナとヤチですか』

あの子たちも暗竜家にご用事でしようか』

アグリナから聞いた話によると……

ヤチが焼いたクツキーのお裾分けに来て 今から帰るそうだ

焼き加減に気をつけて次はよりよいものを作ると燃えていた

『この向上心はジゼルも見習ってほしいですね

……ほどほどでよいのですが』

タイムはオレたちの来訪を嬉々として歓迎しプレアを呼びに行ったあの様子ではやはり竜の変種の情報を随分とまち望んでいたようだ。自らも地下書庫で調べてはいたようだが……

『ジゼルもプレアも術練習の後 調子を崩すことが多いですから心配が絶えませんよ……』

そんなところか……む？

タイムがプレアを抱えてもうやってきたか

クルヤが遅くなった分変種について色々と調べてきたと言うと二人とも期待に目を輝かせていた

その後から 暗竜のラルカもやってきた

その姿は ここにいる竜たちのような竜人ではなく

角や翼を消し竜の気配さえ消して まるで人間のようだった。かなり人化術の腕をあげているようだ

どうやら郵便組合の特殊配達員になるためであり 実地訓練のため人間の町に行く予定もあるらしい

この世界では 人間社会に竜の存在を知られると面倒が多いと聞くがこの出来であれば オレですら竜だと見抜くのは容易ではない

既に配達員を務めている兄が同行するのであれば・・・

『クルヤも町の場所を確認すると問題はなさそうと答えましたね』

その油断がもつとも危険なのだが・・・

これも経験だ あえて何も言うまい

それよりもここでも郵便の話か

利用するだけではなく その間に立つのも

魔族、竜、人間、精霊が関わっている やはり面白いな

／ そんな話しに来たんじゃないだろっ!! ／

〔プ・・・プレア〕

本題からそれる話題にプレアが割り込んだ

『まあ 怒りますよね 待ちに待っていたのですから』

／ 早くおれの変種治す方法おしえて!! ／

↑——え? ↓

む クルヤの表情が変わった

／ 暗竜の力で おれは宇宙へ・・・ 空向こうへ行くんだ!! ／

／ おっさんと!! ／

∧・・・∨

クルヤが言いにくそうな顔になってきた

〔詳しい話は 家の中でゆっくりうかがいましょう〕

ハドラーさんたちもいらっしやいますし〕

タイムもそれに気がついたのか家の中へ促され

オレたちは家に入ったがノイは外でラルカと話を続けた後に

〈じゃあ 帰るわ デートの話も聞かせてね!!〉

【実地・・・訓練・・・】

もう用はすんだのか帰っていった

はじめての人間の町がそんな楽しいものになるか

何かあったらあったで あの二人なら面白いことになりそうだが

『私も少し興味がありますね』

〔ハドラーさんこちらの部屋へどうぞ〕

部屋へ招かれ席に着いた

プレアもジゼルと同じように竜術士の膝の上に座って話を聞くのか

〈竜術の変種 知つての通り それは突然変異で生まれる

特化した能力をひとつだけ持った竜です

その特化した力以外の術を使おうとすれば

めまいがしたり熱が上がったりはげしく疲労し倒れてしまう事もある

「やはりジゼルがたびたび寝込み 術暴走を起こすのはそれか」

「中には住む場所さえ限定されてしまう事もー．．．」

『なぜ住む場所が？』

「昔 木竜の中で海草に特化した竜が出たそうです」

「それは．．． マーマンやしびれくらげが喜びそうな能力だな」

「ええ 生涯水竜の里で暮らしたそうです」

「．．．なんと」

「人化に特化した者にも 似た状態におかれる者もいる」

ビク

『プレアの顔色が悪いですね』

空のむこう 暗竜の里への帰還を目的とするプレアにとって

一見 貧弱な人の体になる術の適正など邪魔でしかない

．．．．．誤解しても不思議ではない

『誤解．．．ですか？』

「人間はあなどれんぞ プレア」

『ふふつ 実験ですか』

そう思いたければそう思うがいい オレはあえて否定はせん

↑——ですが 人化に特化した竜はその力を極める事で

竜の力を持ったまま完全に人間になる事ができます

つまり竜の力をあやつる力をもった人間

竜術士になれるのです

「ほう・・・」

／ りゅ・・・竜術士・・・／

〈竜術士となった竜の記録はいくつもあります

竜都が滅びた後 しばらくの間 人化に特化した竜が多く出たそうです

／ で・・・でも 竜術士になったら どうなるって言うんだ？／

コクコク

プレアもジゼルもピンときていない 無理もないが

〈竜術士は竜の力を安定させ時には竜より上手に竜術を使える

だからこそ竜は竜術士に子竜をあずけ術を習わせ育ててもらうんですよ

「えっ・・・と」

「つまり 本来変種による力の不安定さというデメリットが解消され

逆に他の竜以上に力を使いこなせる適性があると言う事だ

あくまで適正であっておまえたちの努力次第だが」

へええ その通りです

これは正直 月の力を持つよりすごい事だと ぼくは思ったよ

／ じゃあ おれは 宇宙に行けるんだな!! /

／ 行けるんだっ宇宙に!! 帰れるんだっ 暗竜の里に!! /

／ 約束どおりおっさんと一緒に!! /

〔一緒に行きましよう プレア〕

その後は 暗竜術士ティムに対して暗竜の成長が遅いことや

術の習得のために実現するまでに年単位

人間のティムにとつてかなりの時間がかかることなどが

伝えられたが ティムはしっかりと答えた

〔私はこの子と一緒に宇宙へ行く〕

そのために暗竜術士になったんです

たとえ何年かかっても〕

↑———そうですか

そんな話をしているなかでオレはひそかに思ったことがあった

竜の力をもったまま人となることで竜以上の力を持った存在となる

『・・・私も同じこと考えていました』

『竜の騎士』

『・・・まさかこの地で出会うことになるとは思いませんでした』

多少の違いはあるが、紙芝居の竜の騎士はこれに合わせた方が子竜向けにはよさそうだな

『たしかにそうですね。 balan は私の子なのでこの設定を生かし

ダイは人間の母から産まれたので最初から人間として

竜の力を持っているとした方がいいでしょう

それよりももっと重要なことを聞いてくださいよ

ジゼルの変種のことを』

わかっている

「クルヤ プレアが人化の術に特化しているのは分かったが

ジゼルは何の術に特化しているかは分かるか？」

「・・・いえ、少なくとも今のジゼルの容姿

プレアとは逆に火竜でありながら暗竜の翼が見えることから

人化術に特化しているとは考えにくいです

あくまで無理のない範囲で色々な術を使うことでその特性を

慎重に把握していくことが結局は近道だと思います

そのとき注意した方がいいのは 一口に火竜術といつても

直接火に関係するものではない可能性もあります

一般的な竜でも星の五竜（風・地・火・水・木）のあやつる術は

この種にしかできないという限られたものは少ないですから

意外な術に特化していることも十分考えられます」

「たしかに火竜術にも冷やす術や空を飛ぶ術もある

幸いマシエルの家は手本となる竜に恵まれている

焦らずとも経験を積んでいけばいづれ判明するか・・・」

「何しろ父母ともに前例がないタイプですから

ジゼルについては ぼくなりに調べただけでは

はつきりしたことが言えなくて申し訳ないのですが・・・」

「いや ご苦労 思ったよりも収穫はあった

・・・ありがとう」

「え!? い いえ そ それよりも、ですわね

次の話をしましょう 今日持ってきた薬類なんですわが——・・・」

植物をあやつる木竜が薬草をさらに加工した薬か

これも興味深いな

『回復呪文は万能ではないですからね　しつかり聞いておきましょう』

・・・だがジゼルやプレアには少々退屈な話題だったのか

その興味は薬の入ったカゴから　その横の袋へ

／　ハドラーさま　これ　／

「——ああ　ヤチくんがくれたクツキーですね

食べますか？」

へヤチ？　ああアグリナさんの一番竜の——・・・

【お茶つ　お茶・・・持ってきた】

【これは　ありがとうラルカさん】

「ただこう」

／　ありがとう!!　／

【クルヤ】

へえ？

【プレアは火竜の友達がいる

——から大丈夫・・・】

「ほう」

【ケンカして・・・仲間おり はげましたり競ったり・・・

一緒に・・・大きくなっていく 友達・・・が・・・いる

・・・から 大丈夫】

／ なっ・・・ あんなやつ・・・ ／

【ヤチのクツキー・・・おいしそう】

／ うっ ／

ぱくっ もぐもぐ ぱくぱくっ

／ 味はともかくコゲてる!!こんなのまだまだだなっ／

悪態をつきながらクツキーを食する手が止まらないプレア

〈あ・・・ ああ！なるほど〉

【プレアは・・・ ヤチが先に歩き出すのをー・・・見て

負けじと・・・歩き出した】

〈そいつはすごいな〉

「——ああっ

そう言えばヤチくんのために大きな術を使った事ありましたね

あの時は熱が出なかった」

「あつたな そんなことも プレアはあのととき成長していたが

ジゼルは混乱するばかりで役にたつてなかった」

『それも経験でしょう』

〔一緒に 元気に！ 行きましようね宇宙に!!〕

タイムの力強い言葉にわけがわからないといいながら
何か感じるところがあつた様子のプレア

ダイの急成長も 師や戦にめぐまれただけではない
ポップ達 仲間の存在が大きいのとは間違いない

『あなたもそうでしたから 実感が違いますね』

アバンは敵だ！

『あら 私はアバンだと言つたおぼえはありませんよ』

・ ・ ・ オレも口にだしたおぼえはない

『それはさておき ぱくぱくとたべてるジゼルがかわいいです！

さあもつとしっかり見てください!!』

音だけでガマンしておけ

『いえ あなたのヒザの上で食べてますよね

すぐ下を向けばいいだけですよね！

あなたが見てくれないと私にもよくわからないのですから』

近すぎて髪と角しか見えん 残念だったな グハハハ
『あなたはたまにやたらと器が小さいときがありますね・・・』

地竜術士の憂鬱

〔ハドラー 今夜酒に付き合ってくれないか？〕

カディオオから果実酒の新作がきたんだ〕

「よかろう ジゼルはマシエルかフェルリに預ければいい」

／＼え!?ハドラー様!／

地竜術士ランバルスが酒に誘いにきた

珍しいことだな

『昨日娘さんが旅立ったことで寂しいのでしょうか』

／＼その日の夜／

竜術士の家ではなく無人の遺跡の家で飲み会をすることになった

「なぜ わざわざこんなところにな？」

〔相談したいことがあつてな〕

／＼ここなら会話を聞かれることもない

まあ まずは一杯〕

「ほう ならばこのグラスを使おう」

火竜のハータが作ったものだ」

「へー いい出来じゃないか

よし じゃあこれに」

トクトクトク・・・

「ほう・・・

琥珀色の酒がグラスを通して

さらに深みを感じさせるな

これが火竜術で作れるとは中々興味深い」

〔ガラス細工も火竜家のお家芸だからな

そういえばハータが代替わり前の火竜家に通つて

色々習っていると聞いたことがある

そんじゃ 乾杯」

グイ・・・

ふむ出来立ての物足りん味だ

口当たりはいいがな

・・・しばらくは大した会話もなく飲んでいたが

酒瓶が半分ほどになったあたりで

「若い味、か　　はあああああゝ・・・」

なあ　ハドラー　娘にたよりにされる父になるには
どうすればいいだろうか」

「それが本題か

——たよりに、か

ジゼルは依存に近いが・・・」

『昨日旅立った娘さんとなにかあつたのでしょうか？』

この男　普段は飄々としているが

かなりの闇を抱えているな

今はただのしよぼくれた親父だ

『娘さんにこの姿を見られたら頼りにはされないでしょうね

アバンさんもこんな姿をするのでしょうか？』

あやつが敵であるオレの前で弱みをさらすことはあるまい

『・・・そういうものですか』

「お前の娘がコーセルテルを旅立つときはオレも見送りに行ったが

ああ　そういえば娘を送りに来た風竜術士ミリユウがああ場で

プロポーズじみたことを言っていたな」

ピク!

ゴクゴクゴク! カアン!

どうやらこれか

『そんなこともありませんね』

「あのときはいきなりのことで呆気にとられた上

聞いただそうにもユイシイに『だまってて』って言われた挙句

すぐに飛び立って行かれちゃった

もう何が何だかわからねえ……」

「お前のところの補佐竜はある程度事情を分かっていたようだがな」

「そうなんだよな……だがユイシイに聞いても

『帰って来られたら聞きましょう』と笑うだけで教えてくれないし

はあ……もう若い娘たちの考えることがわからねえ……」

「ああ そつちの娘にも頼りにされてない、と」

「ぐっ……はあ……」

『ミリユウとヴィーカのことはお昼に来た

風竜家補佐竜のジェンが持ってきた話のことですよね?』

ああ 風竜術士としての進退に関わる話だと言っていたな

マシエルはやつらが一番望む幸せを応援すると言っていたが
この男はそのときにもいなかった

「どうやらこの件に関してまったく話を聞いていないようだな
『どうしましょうか?』」

まあ 見ているがいい

「ランバルスよ この酒を見ろ」

ズズズ・・・

「ん? なんだ 琥珀色がだんだん黒くなっていくぞ」

「これは今おまえがためいきとともに吐き出した悪感情だ

オレの魔術でとりこみ酒に溶かし込んだ」

グイ

「ククク

お前の中で熟成された悪感情が酒の味に深みをもたらすのだ

さあ存分に吐き出すがいい

まだまだ酒はある」

「へー 魔族にはそんな術があるのか

じゃあ遠慮なく聞いてもらおうか」

空になったグラスにランバルスが酒を注ぐ

「カップか・・・」

俺がかつて盗賊だったのは言ったか？」

「ああ 聞いたような

そういえばお前や娘の足運びは遺跡を傷つけのを嫌う学者か
気配を隠す盗賊のしのびあしかと思っていたが・・・

後者だったか」

『【知恵の竜】の地竜術士ですから学者よりなのでは？』

【学者は俺の妻の方だな

あいつは元々領主の娘なんだが

遺跡の調査のために当時そこを根城にしていた盗賊団の長

つまり俺のところに押しかけ女房してきたんだ」

「それはなかなかの胆力だな

なんという名前だ？」

【妻の名はウィンシーダ

最初は反対していた盗賊仲間ともうまく付き合い

ヴィーカが生まれてからもみんなで楽しくやってたんだ

娘は仲間の人気者アイドルだったな」

いかにも楽し気に話すランバルスだったが

その声に含まれる闇はますます濃くなっていく

新しく注いだオレの酒もたちどころに黒く染まりまた飲み干した

カン トクトクトク・・・

ランバルスも飲み干したグラスにさらに注ぎ足した

今日は竜術士の寄り合いの時よりも飲むペースがかなり速い

「こうやって楽しい思い出を語っていても

娘の笑顔を見ながら飲んでいるときですら

頭に浮かぶのは・・・あの最期の日の悲しみばかり」

「ここだ！

『話の核心ですか？』

ああ ひとつのもつとも弱いところ

娘に頼られない根幹に関わる部分だろう

『ここまで来るのに随分飲みましたね

持ってきたお酒、残り少ししかありませんよ』

「カップ・・・か、」

ハータがつくつたグラスを見ていたランバルスが齒を食いしばり口が歪む
〔祖父 大盗賊ランバルスの名を継ぎながら

はじめて自分で盗みを働いたのは盗賊団を解散し逃亡中のときだった〕

『それって 本当に盗賊だったのですか？』

盗賊職は盗むばかりが能ではない

オレの前に立つた盗賊にも腕の立つやつがいた

〔盗み出したのはたった一つのカップ

流行り病に苦しむ妻にきれいな水を飲ませてやりたい一心だった

だがその一杯の水をくんでいる間に・・・〕

〔手遅れだったか〕

〔ああ 妻の最期の瞬間に俺はいてやれなかった

今でも鮮明に思い出すのさ

妻に泣いてすぎる娘の顔が 息を引き取った妻の顔が

最期まで俺と一緒にいたいと願った妻の顔が！

一方的に娘を妻の実家に置いていき

川に飛び込んだときの俺を呼ぶ娘の声が!!〕

後悔と悲しみの念・・・か

『これはどうにかなるのですか?』

どうにもならん たとえ娘が許しても

自分が自分を許すことはあるまい

グイ

新月の夜よりも黒く染まつた酒を飲みながら

ランバルスの昔語りを黙って聞く

〔俺は果報者だ・・・〕

あんなことがあつて病の身で半ば自暴自棄になりながら

このコーセルテルに辿り着いた

妻の望んだ光景に近いところで死にたいだけだったんだがな

それが竜術士になつて・・・

今になつて娘に再会できて・・・

俺なんかを・・・」

!?

『今 ランバルスの顔がこころなしか穏やかになつたような』

言葉を口に出していると ふと何かを思い出すのはよくあることだ

互いに最後の一杯を飲み干す

〔面白いな あんたの術は

酒を酌み交わすたびに 不思議と何かこう、
うまくいえないが・・・〕

「・・・そうか」

ランバルスの表情がまた変わる

『あら この顔でしたら 娘さんも頼りにしたのでは?』

さて どうだろうか

「お前たち夫婦によく似た娘が風竜術士ミリュウと組めば

好奇心旺盛な虎に翼が生えるようなものだ

いったいどれほどの大冒険をすることか

ククク 見ものだな」

〔うっ!?!〕

「今のおまえならば

大盗賊の名を継がせたおまえの親の思いも

そんな盗賊に娘が嫁いでいった親の思いも少しはわかるだろう

ククク これはますます酒がすすみそうだ」

〔あー・・・〕

ぐう………」

『余計に悩んでしまったのでは?』

勘違いするな聖母竜よ

こいつを支えるのはオレではない

こいつの子竜ユイシイやロービイの役割だ

やつらなら喜んでやるだろう

オレはこいつを肴に酒をのむだけだ

『でもその術 ただの染色魔法で

悪感情を味付けにすることなんてできないのでしょう?』

ククク たしかに悪感情云々は嘘だが

他人事を面白がりながら飲む酒がうまいのは事実だ

こやつもいつもならこんなニセ魔術すぐに見抜いただろうが

それに気づかぬようではまだまだ楽しめそうだ

『悪い趣味ですね 流石二元魔王』

「つまみはまだあるぞ

酔いつぶれた顔ではユイシイにしめ出されるのではないか?」

「あー、どうだろう

流石にそれは困るなあ・・・

もうちよつとおちつくまで食っていくか」

たとえどれほど重く辛くてもこいつの過去は変えようがない

『竜術で忘れることはできるかもしれないよ』

そんなことをすればこいつはこいつでなくなる

だが多少成り行きによるものもあるが 周りの協力もあり

こいつが自分で娘に会い語り合うことができ

ミリユウとの仲という新しい問題もできた

もうこいつがここまで飲みつぶれた姿を見せることはないかもしれない

『あなたは見せてくれないのですか?』

・・・ お前と出会ってからも何度か醜態をさらしたはずだが

『?あなたが醜態をさらしたことなどなかったですが』

・・・ そうか

〔そういえばヴィーカは高いところが苦手だと言ってたのに

コーセルテルを旅立つときは空を飛ぶのに不安そうな顔をしてなかった

そんなにミリユウを信頼してることか!?)

「あの娘、風竜家に一泊したこともあったな」

「あああー!!?」

「ククク　フハハハハハッ」

結局ランバルスをしばらくからかった後解散し　やつは歩いて帰った

しかし存外楽しめたものだ　これはほかの竜術士も誘って、

いやそれよりも竜術士の寄合の後の宴会に参加してみるか

『あまりジゼルを置いてお酒の席に行くのはどうかと・・・』

竜の都と竜王竜術士①

【・・・・・・・・】

(どうしたのナータ)

ナータとサータと共に武術訓練に向かう途中

ナータが立ち止まり振り返った

(はっ まさかまたマシエルに何かあったの!?)

書庫回廊が崩れたとか!?)

【・・・・・・・・違う】

(へ!?!じゃあ何!?)

ナータがあさつての方向を見てにらむのつて

マシエルに何かあった時でしょ!?)

／ そうなの? ナータお兄ちゃん? ／

【・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・】

ふう・・・・・・・・何か嫌なかんじがした——・・・・・・が

マシエルに・・・・・・・・じゃない】

「あの方角 何かあったか？」

『あなた、今神託がくだりました すぐにナータの視線の先、

私たちがこの地に来たときに使った旅の扉跡に行ってください』

何だと あそこは既に塞がったはずだが

『痕跡を使つて何者かがここにこようとしているようです

竜の神からの神託です』

いいだろう

「ナータ サータ、オレが様子を見てくる

おまえたちはこのまま武術訓練に行け

ジゼルはオレが連れていく 何事もなければすぐに合流する

少々心当たりがある」

【・・・わかった】

(ジゼルも行くならおれも！)

「サータ おまえたちは武術訓練を優先しろ

マシエルに余計な心配を増やすこともあるまい

行くぞジゼル」

／はい！ハドラー様！／

ドン!

オレにしがみついてきたジゼルを小脇に抱え

ルーラで旅の扉跡に向かって飛んだ

ぐにや~~~~

旅の扉跡はたしかに空間が歪んでいる 何かが起きる前兆のようだ

空間を操る暗竜のナータだから異変に気づいたのだろう

あれからお前に神託はないのか?

『あれからは一度も・・・』

／＼ハドラー様!穴が!／

ジゼルが指さした先には旅の扉が徐々に開き

そこから一人の男がでてきた

*・・・どうやら着いたようだな

小癪な呪いを感じられるが わしには効かんゾ

ふむ 出迎えご苦労じゃ*

「何だ・・・?」

外見は幼竜を成長ではなく膨らませたような丸みのある姿

気配から竜の男だろうがその属性は見当もつかないが

昔オレが着ていたようなローブと竜をかたどった杖を装備していた
おそらくこの世界の存在ではない

オレ達の世界かそれに近い世界からの闖入者のようだが

強いのか弱いのかすら感じ取れない

こんなつかみどころのないやつははじめた

「オレはこの地住む男ハドラー

おまえはいつたい何者だ」

*ほう・・・

わしは名を持たぬが この姿のときは竜ちゃん、

と呼ばれておった*

「リュウ・チャン?この姿?」

では お前も術でその姿になっているということか」

＼ハートみたいなお頭におわんみたいなお目々／

*ワシはいくつもの世界をまたにかけ

そのたびにその世界に適応した姿になることができる

竜族には違いないがな

ところでここは竜都コーセルテルで間違いないか?*

「たしかにコーセルテルだが・・・」

竜都とよばれていたのは3000年以上も前のことだぞ」

*なんと・・・

竜と人間が協力し世界を支配していたと聞いていたが・・・

だがこの地にはまだ竜も人間もいるようじやな*

「たしかにしていることはいるが猫の額のような集落しかない

この世界での竜の天下はすでに過去の栄光

長居せず帰ることをすすめるが・・・」

*折角きたのだ わしは竜都の末路に興味がある

ハドラーよ 詳しい話を聞かせてほしい

無論報酬は考えてやるゾ どーだ？*

「そうは言うが・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

?どうした聖母竜よ お前が言う神託とやらは

この男のことなのだろう?

『それは間違いないと思いますが

・・・この御方はどなたなのでしょう?』

知っているような気もするのですが

思い出せそうな　　そうでもないような・・・？』

長生きしすぎて思い出せんか

そういうえばジゼルもどこかおとなしいな

やはりこの男ただものではないのか

ナータの懸念もある

コーセルテルにとつては長居されるのはまずいかもしれんな

『ですが目を離してはいけません

ナータの心配もあります

わざわざ神託がくだるほどです

ひよつとすると竜の神族かもしれません

ここは望み通り竜都の歴史にふれていただき

納得の上で帰ってもらいましょう』

「そうか　リユウ・チャンよ

自分の世界に自力で帰ることはできるのか？」

当然だ　瞬間移動魔法マジックですぐにでも帰れるゾ

「ルーラ？」

「ということはやはりオレ達の世界か 近い世界の出身か」
『そのようですね』

*ハドラーよ 竜都の末路について知ることができれば
わしはすぐに帰ることを約束してもよい*

「そうは言ってもオレもこの歴史に詳しいわけではないぞ
地竜家の書庫に案内するか

当時の幽霊であるフェルリに聞くか・・・」

*ほう 当時の幽霊がいるのか

それは好都合じゃ わしは幽霊との会話は問題なくできる
必要なら仮初の肉体を与えてやってもよい*

「幽霊に仮初の肉体だど!？」

それはオレも使えるが禁呪法ではないか!」

／＼きんじゅほうー?／

『たしかにフェルリに使われるのは困りますね

怪物化して戻れなくなるかもしれません

そもそもそんなことをしなくても普通に話せますが』

*ならば話が早いな神竜の眷族よ

わしを案内せよ*

『やはり私に気づいていましたか

それに素性も知られてますね

どこかでお会いしましたか?』

*いや 初対面だ

で ハドラーよ どうする?*

「……………いいだろう ついてこい

だが おまえ自身のこともある程度話してもらおうぞリユウ・チャン」

*よかろう

こうやってわしをそう呼び 話をするのも「あやつ」以来よ*

マシエル家への帰路でリユウ・チャンとの会話から

こやつの口から語られた素性は……

・親の顔を知らずに育った

・竜の中でもかなり長生きをしている

・いくつもの世界を渡り歩いた

・人間とは時に戦い 時に共闘し 人間の弟子もいた

・時折口にする「あやつ」と呼ぶ特別な人間がいる

・今は楽隠居状態である

大体こんなところまで聞いたあたりでマシエルの家に着いた
できれば遠回りをして情報を集めたかったが

下手な駆け引きができる相手ではなかった

*ここに例の幽霊がいるのか

たしかにそんな気配があるナ*

「ここ」の地下にいる」

マシエル達はまだ留守のようだ

その方が都合がいいか

案内ご苦労

『いえ・・・フェルリは私にとって大切な友人です

直接紹介いたします リユウ・チャン殿』

? あの方角からも幽霊の気配があるぞ

「なんだと・・・」

たしかに希薄だが何か気配がある

これはフェルリではないな

今日 地竜家に行ったはずのマシエル達がこちらに帰っているようだが

その後ろについてくるように幽霊が近づいてくる」

* なかなか年期的に入った幽霊のようだな

しかもこの気配 精霊化しているとみた

・ ・ ・ ハドラーよ 地下の幽霊はいつでも会えるのだな？

この近づいてくる精霊に興味がある*

「たしかに・・・」

マシエル達の後を追うように近づいてくるのも妙だ

先にそちらに接触するか

いくぞジゼル」

／＼はい ハドラー様！／

オレ達は今度は新たにあらわれた幽霊いや精霊か、

マシエル達が向かった地竜家への道を歩き出した

折角の機会だ リユウ・チャンのことをもう少し聞き出そう

今度は話題を限定して深く探るとしよう

『何のお話ですか？』

ここは 先程での会話でこの男がもつとも感情的になった

「【あやつ】とはどのようなやつなのだ？

人間、なのだろう？」

*【あやつ】、か．．．．．そうだな

——わしが長く生きてきた中で

もつとも苦手とする男だ*

「ほう」

あやつとはその先祖の代から長く深い因縁があつてな

「敵だったのか」

*敵ではあつたが

わずかな間 手を組むこともあつた

なれ合うことはなかったが

かつては拠点に近いこともあつてどうにも意識せずにはいられなかつた*

『ご近所トラブルでもありましたか？』

*あれをご近所トラブル扱いされるとむなしなものがあるが

．．．あながち間違つてるとはいいきれぬか*

「いったい何があつた」

*何が．．．何が．．．か．．．

あやつと．．．．．*

『すごく苦悩しているようですね』

「口にしづらいのか 思い出すのも嫌なのか」

『でもあの顔……』

あなたがアバンのことを語るときの顔に似てますよ』

「グ……」

／ハドラー様 アータお兄ちゃん達が帰ってきましたよ！／

ジゼルが指さした先にマシエル達と

その後ろにふらふらとついてきた弱々しく希薄な精霊が

ゆら……

「むー」

ゆらー…… ぶわっ！

、魔族——……竜——……滅べ!!!

精霊がマシエル達を一気に追い抜き

大きくなってオレ達に襲い掛かってきた！

「!!」

『ジゼルさがつて!!』

……

ギン!!

ブオオオ

とりあえず反射的に闘気を込めた眼力をぶつけると
精霊が動きをとめ人間の大人の男の姿になった

、フエ・・・ルリ　ラシエ・・・

うばわれた・・・　父も・・・母も・・・

故郷も——・・・　竜に　魔族に！　滅べ!!

精霊が剣を構えて再び襲い掛かろうとしてきた！

「ぬおおおッ!!!」

バツ　　ゴアアアアツツ

左手から魔炎気を出し精霊にぶつけた

、あ・・・　う・・・　うあ・・・

うあああああつ!!

＼子供になった!?!／

「しかも泣きながら逃げたか」

『今　フェルリと言いませんでしたか!?!』

*竜と魔族に滅ぼされた人間の幽霊が

精霊 いや黒精霊となつたか・・・*

黒精霊 怪物化の一步手前だつたな

・・・オレは久しぶりに自分に向けられたむき出しの敵意に反応し闘気で反撃したが隣にいたりユウ・チャンはまったく反応しなかつた

いや まるで動揺しなかつた

何が半隠居だ

オレには黒精霊よりも 力の底を全く見せないこの男の方がよっぽど脅威だ